

平成6年度 家庭教育充実事業報告書

福岡県における中学生の意識・行動と父親・母親の
養育態度・行動の実態調査に関するまとめ

福岡県立社会教育総合センター

はじめに

家庭は、子どもにとって生活の中心的な場であり、親の影響を受けながら基本的な生活習慣や社会性を身につけるなど、子どもの人間形成の場として重要な役割を担っていることはいまでもありません。

ところが、現代社会の急激な変化は、家庭を取り巻く環境や生活をも変化させ、核家族化・少子化が進行する中で、子育てに不安を持つ親を増加させるとともに、家庭の教育力の低下の一因ともなっています。

こうした状況のなかで、次代を担う子どものすこやかな成長と健全な育成を図るためには、家庭の教育機能の回復が極めて重要な課題であります。

そこで、県立社会教育総合センターでは、子どもの健全な成長を促す家庭教育の充実振興を図るために、「家庭教育充実事業」として、乳幼児を持つ親等を対象とした育児のための啓発冊子の作成・配布をはじめ、子育ての悩みに応える電話相談事業、家庭教育指導者研究協議会の開催、家庭教育番組「子育てひろば」のテレビ放映等、各種の事業を実施してまいりました。

特に本年度は、昨年度県下6中学校の中学生とその保護者を対象に実施した「中学生の意識・行動と父親・母親の養育態度・行動の実態」の調査結果に基づいて、各質問間のクロス分析・評価を加え家庭教育指導資料（本報告書）としてまとめました。

さらに、この調査研究を基にした保護者向けの啓発冊子「あなたの子育てのために」も作成したところです。

なお、この報告書は、市町村教育委員会関係者や関係機関・団体において家庭教育関係事業等の参考資料として活用いただければ幸いです。

最後に、本事業を実施するにあたり、御尽力いただきました企画推進委員及び各部会委員の諸先生方、並びに関係の方々に心からお礼申し上げます。

平成7年3月

福岡県立社会教育総合センター

所長 大神俊明

も く じ

はじめに

家庭教育充実事業概要

I 平成6年度開設要綱	1
II 平成6年度企画推進委員・部会委員	3
III 事業の展開	4
1 企画推進委員会・部会の開催	4
2 パンフレット等の作成・配布	4
3 テレビ放送	4
4 家庭教育指導資料の作成・配布	7
5 家庭教育指導者研究協議会	7
6 電話相談員の養成・研修	9
7 電話による相談事業	10

福岡県における中学生の意識・行動と父親・母親の養育態度・行動の実態調査のまとめ

序 章 調査の概要

1 調査の目的	13
2 調査の方法	14
3 分析の基本的視点	18

第I章 中学生の意識・行動の実態

1 学校生活

(1) 勉強のやる気は、どういう行動から生まれるか?	21
(2) 勉強が分かるためには、どうすればよいか?	23
(3) 勉強の目的は、どういう場面から見つけられるか?	23
(4) 自分意識は、どういう友人関係から育つか?	24
(5) 友人関係の持ち方は、関心を左右するか?	25
(6) 親友は、どういう状況で得られるか?	26
(7) 異性の友人は、どういう状況で得られるか?	27

2 親子交流

(8) 親への信頼は、どういう交流から生まれるか?	28
(9) 信頼されている親は、子どもにはどう見えているか?	29
(10) 甘い親は、どういう交流の結果なのか?	30
(11) 親を信頼することは、子どもをどのように変えるか?	31
(12) 親のイメージは、どのように形成されていくか?	32
(13) 子どもに家を出たいと思わせる誘因は、どういうものなのか?	33

3	家庭生活	
(14)	家庭生活への満足は、どういう暮らしから得られるか？	35
(15)	勉強時間のやりくりは、どのようになされているか？	36
(16)	テレビをつい見てしまうということは、どういうことか？	37
(17)	遅刻をしてしまうということは、どういうことか？	38
4	地域生活	
(18)	異性への関心は、どういう場面に現れるか？	39
(19)	明日への期待は、どういう状況から生まれるか？	40
(20)	学校が楽しいということは、どういうことか？	41
5	自己評価	
(21)	自主性・積極性・忍耐力は、どういうことから身につくか？	42
(22)	悩みは、どういうことから生まれるか？	44
(23)	不登校に誘うような要因は、どこに潜んでいるか？	45
(24)	安心する場は、どのように選ばれているか？	46
(25)	相談相手は、どのように選ばれているか？	47
6	まとめ	

第Ⅱ章 父親・母親の養育態度・行動の実態

1	養育行動	
(1)	起こさないためには、どういうことが必要か？	51
(2)	後始末の注意をするためには、どういうことが必要か？	52
(3)	言葉遣いの注意はどういうことと相関しているか？	53
(4)	勉強へ駆り立てるとはどういうことか？	54
2	親子交流	
(5)	将来の話、人生の話をする準備として、日常対話が生かされているか？	56
(6)	家の相談を持ちかけるためには、どういうことが必要か？	57
(7)	子どもをほめることができるためにはどういうことが必要か？	58
3	子ども評価	
(8)	子どもの自主性は、どのように見えてくるのか？	59
(9)	子どもの積極性は、どのように見えてくるのか？	60
(10)	子どもの忍耐力は、どのように見えてくるのか？	61
(11)	殴りたくなるのは、どういうことと相関しているか？	62
(12)	子どもの気持ちが分からなくなるのはどうしてか？	63
(13)	子どもの悩みはどのようにして感じ取られているか？	65
4	養育意識	
(14)	親の充実感に子どもはどのように関与しているか？	66
(15)	子どもが生きがいから外れるのは、どういうことからか？	67
(16)	しつけの自信がつくのは、どういうことからか？	68
(17)	甘いと分かるのは、どういうことからか？	69

(18) 世話をしている方と思うのは、どういうことからか？	70
(19) 信頼されていると思えるのは、どういうことからか？	70
(20) しつげを学ぶ気にさせるのは、どういうことか？	71

5 まとめ

第Ⅲ章 中学生の意識・行動と親の養育行動の相互評価

1 親子による自己評価と相互評価

(1) 子どもに自主性があると思うか？	77
(2) 子どもに積極性があると思うか？	78
(3) 子どもに忍耐力があると思うか？	79
(4) 子どもに信頼されていると思うか？	79
(5) 子どもの悩みが分かっているか？	80
(6) 親のしつげは甘いか？	81
(7) テレビのことなどについて話しているか？	82
(8) 学校生活のことについて話しているか？	83
(9) 将来や人生のことについて話しているか？	84
(10) 性のことについて話しているか？	85

2 子どもによる親の評価

(11) どういう親が子どもに信頼されているか？	86
(12) どういう親が、子どもにどんな顔を見せているのか？	88
(13) どういう親が子どもにどうイメージされているのか？	89
(14) どういう親が子どもに甘いと思われているのか？	90
(15) どういう親が子どもに家を出たいと思わせているか？	91
(16) どういう親が子どもに家庭生活の満足を与えているか？	92
(17) どんな親が子どもに学校に行かないと思わせているのか？	94
(18) どんな親が子どもの安心の場を決めているか？	95

3 親による子どもの評価

(19) どういう子どもが自主性があると思われているのか？	96
(20) どういう子どもが積極性があると思われているのか？	97
(21) どういう子どもが忍耐力があると思われているのか？	99
(22) どういう子どもが殴りたいと思われているのか？	100

4 まとめ

第Ⅳ章 まとめと今後の課題 105

資料 調査表のクロス集計結果 115

家庭教育充実事業概要

I 平成6年度開設要綱

1. 事業の趣旨

家庭の教育機能を高めるため、子どもを持つ親等を対象に家庭教育に関する情報や資料の提供、電話相談等の相談体制の整備、家庭教育指導者の確保等を図り、生涯学習の基礎となる家庭教育の充実振興に努める。

2. 事業の対象

事業の対象者は、乳幼児期から少年期（小・中学生）までの子どもを持つ親等とする。

3. 企画推進委員会・部会

- (1) 本事業全般の企画運営の充実を図るため、家庭教育に関する学識経験者（教育学、心理学、社会学、医学等の専門分野）、社会教育関係者、保育・学校教育関係者、マスコミ関係者、関係行政担当者等幅広い分野から委員を選出し、企画推進委員会及び部会を設置する。
- (2) 企画推進委員会・部会は、事業の基本方針と実施要項を策定し、その運営について審議するとともに、事業の成果を評価する。
- (3) 企画推進委員会に、委員長・副委員長各1名を置く。
- (4) 企画推進委員会は、年3回程度開催する。
- (5) 部会は、パンフレット等作成部会・テレビ放送部会・指導資料作成部会の3部会とし、それぞれ年4回程度開催する。
- (6) 各部会に、部会長・副部会長各1名を置く。

4. 事業の内容

- (1) 電話による相談事業
学識経験者や電話相談員養成講座・研修会修了者等を相談員に委嘱し、家庭教育に関する親等からの相談（子育てに関する悩み等）に応ずる。
- (2) 電話相談員の養成・研修
電話相談に係わる職員の資質の向上を図るとともに、電話相談員の養成確保に努めるため、家庭教育に関する専門知識やカウンセリングに関する知識・技術等を修得するための養成講座・研修会を実施する。
- (3) パンフレット等の作成・配布
家庭教育に関する冊子を作成し、親や関係機関・団体に配布することにより、家庭教育に関する普及・啓発活動を推進する。
- (4) テレビ放送
電話相談等における相談内容を踏まえ、家庭教育の課題に応えうるような番組を制作し、提供する。
- (5) 家庭教育指導資料等の作成・配布
家庭教育の活性化に資するために家庭教育に関する各種の調査研究等を行い、その研究の成果

をまとめた指導資料等を作成して、関係機関・団体に配布する。

(6) 家庭教育指導者研究協議会の開催

社会教育・学校教育関係者及び社会教育関係団体のリーダーや地域における家庭教育の指導的立場にある者等を対象に、各地域の実情を踏まえながら、今日の家庭教育の課題に対処する具体的実践方策等について研究協議を行うとともに、家庭教育指導者の資質の向上を図る。

Ⅱ 平成6年度企画推進委員・部会委員

企画推進委員

氏名	所属・職名	備考
光安 文夫	福岡教育大学 名誉教授	委員長
森 紘	九州大学 助教授	副委員長
田中 敏明	福岡教育大学 教授	
矢野 静枝	元北九州市立保育所 所長	
高良 竹美	中村学園大学 講師	
平野 寿秀	RKB毎日放送 制作部副部長	10月退職
浅田 奈緒美	RKB毎日放送 制作部	平野氏後任
藤波 紀彦	県教育庁社会教育課 主任社会教育主事	

部会委員

部会	氏名	所属・職名	備考
パ ン 成 レ ット 部 ト 等 会	田中 敏明	福岡教育大学 教授	部会長
	矢野 静枝	元北九州市立保育所 所長	副部会長
	松本 壽通	松本小児科医院 院長	
	門田 智恵	県教育庁義務教育課 指導主事	
テ レ ビ 放 送 部 会	高良 竹美	中村学園大学 講師	部会長
	平野 寿秀	RKB毎日放送 制作部副部長	副部会長
	浅田 奈緒美	RKB毎日放送 制作部	平野氏後任
	川原 弘之	福岡県立大学 教授	
	天野 恭子	福岡市立和白幼稚園 園長	
指 導 資 料 作 成 部 会	森 紘	九州大学 助教授	部会長
	藤波 紀彦	県教育庁社会教育課 主任社会教育主事	副部会長
	井上 豊久	福岡教育大学 助教授	
	黒瀬 敏明	篠栗町立幼稚園 園長	
	佐々木 基成	県教育庁義務教育課 指導主事	
	井無田 浩二	県教育センター 研究主事	
	高橋 孝徳	県教育庁筑豊教育事務所 社会教育主事	

Ⅲ 事業の展開

1. 企画推進委員会・部会の開催

(1) 実施状況

第1回企画推進委員会	5月17日(火)
・委員長・副委員長選出	
・平成6年度事業内容並びに各部会の事業についての審議	
第1回パンフレット等作成部会	6月2日(木)
第1回テレビ放送部会	6月7日(火)
第2回テレビ放送部会	6月28日(火)
第1回指導資料作成部会	7月4日(月)
第2回指導資料作成部会	8月9日(火)
第2回パンフレット等作成部会	9月13日(火)
第3回テレビ放送部会	9月16日(金)
第3回パンフレット等作成部会	10月17日(月)
第3回指導資料作成部会	10月18日(火)
第4回指導資料作成部会	11月7日(月)
第5回指導資料作成部会	12月26日(月)
第6回指導資料作成部会	1月26日(木)
第4回テレビ放送部会	1月26日(木)
第4回パンフレット等作成部会	2月2日(木)
第7回指導資料作成部会	2月27日(月)
第2回企画推進委員会	3月14日(火)
・本年度事業の評価・反省並びに来年度事業の取組みについての審議	
・事業実施報告書の作成	3月

2. パンフレット等の作成・配布

育児のための小冊子「いたずらざかり」「わんぱくざかり」の作成

- ・「いたずらざかり」(B6版64ページ)、乳幼児(0～2歳)対象に市町村母子保健主管課・医師会を通して母子手帳交付の際配布。
- ・「わんぱくざかり」(B6版64ページ)、幼児(3～6歳)対象に保健所・医師会を通して3歳児健診の際配布。

3. テレビ放送

(1) 番組企画

ア 番組名	「子育てひろば」
イ 放送時間	毎週金曜日 午前9時55分から10時10分まで
ウ 放送期間	平成6年10月7日から平成7年3月31日まで

- エ 放送の条件 15分、24回放送
 オ 放送の形式 スタジオ構成及びVTR・ENG構成の併用
 カ 番組の広報 番組案内チラシ等で広報
 キ 制作と放送 RKB毎日放送(株)に委託

(2) 番組の内容

回	放送日	テーマ	内 容	出 演 者
1	10/7	親の役割	父親の役割、母親の役割について改めて考える	九州大学助教授 森 紘
2	14	しつけに自信を	自信がもてず悩んでいるお母さんのために、しつけについて考える	福岡教育大学教授 田 中 敏 明
3	21	乳幼児期の病気	乳幼児期によくみられる病気のあれこれについてわかりやすく説明し、その対処法を示す	県小児科医会会長 田 中 一
4	28	健診のすすめ	乳幼児期に行われる健診の内容と意義について話してもらう	県小児科医会理事 松 本 壽 通
5	11/4	三つ子の魂、百まで	幼児期の大切さについて考える	中村学園大学講師 高 良 竹 美
6	11	自我のめばえ	過保護過干渉になりがちな親の養育態度について考える	福岡教育大学名誉教授 光 安 文 夫
7	18	友だちづくり	成長する過程において重要な役割を果たす友だちについて、その意義や付き合い方を考える	第一保育短期大学助教授 徳 安 敦
8	25	遊びから学ぶもの	子どもが成長する過程で遊び、とりわけ体を使ってする遊びがいかに大切かを考える	福岡教育大学講師 西 村 哲 雄
9	12/2	ことばを育てる	人とのコミュニケーションがうまくできない子どもが増えている。聞く力、表現力を身につけるために何が大切かを考える	福岡教育大学教授 横 山 正 幸
10	9	本とのすてきな出会い	幼児期、小学校時期の子どもにとっての本の意義、本とのすてきな出会いについて考える	県立図書館司書 河 井 律 子
11	16	子どもの事故が増えている	子どもが起こしやすい事故の具体例等を知り、その防止策について考える	久留米聖マリア病院 医師 橋 本 信 男
12	23	むし歯をつくらないために	むし歯のないじょうぶな歯をつくるために必要なことを学ぶ	毛利小児歯科 毛 利 元 治
13	1/13	目を大切に	健康な目にするために必要なことを学ぶ	県眼科医会医師 岡 義 祐
14	20	怖い子どもの成人病	ガンや心臓病等、子どもに起こる成人病を知り、その防止策について考える	福岡市立こども病院院長 本 田 恵

回	放送日	テ ー マ	内 容	出 演 者
15	27	心の危険信号	表情や態度に表れる子どもの心の危険信号について考える	教育センター教育相談研究室長 牛 島 カズミ
16	2 / 3	いじめっこ、いじめられっこ	いじめっこ、いじめられっこにしないための育て方について考える	福岡市立和白幼稚園園長 天 野 恭 子
17	10	行きたくない!	保育園や学校に行きたがらない子、休みがちな子をもつ親の態度について考える	教育センター生徒指導研究室研究主事 井 上 正 明
18	17	子育てお国事情	外国における子育ての様子を知り、自分たちの子育てについて考える	福岡県立大学教授 川 原 弘 之
19	24	子どもは疲れていませんか	現代っ子のほとんどが何らかの塾や習い事に行っているという現実をどう受け止め、対処していけばよいかを考える	福岡教育大学教授 田 中 敏 明
20	3 / 3	学校週5日制・学校での取組	学校週5日制のはじまりで、学校が今どんなふうに変ろうとしているかを学ぶ	義務教育課指導主事 久 野 篤 子
21	10	開かれた学校	変わりつつある学校の中で、子育てや教育を地域と一体になって取り組んでいる学校から学ぶ	二丈町立一貫山小学校
22	17	これからの子育て	めまぐるしく変貌する社会においては子育てについてもこれまでのやり方では通用しないことが多い。これからの子育てについて考える	福岡教育大学助教授 秦 政 春
23	24	再放送	健診のすすめ	松 本 壽 通
24	31	おじいちゃん、おばあちゃん	今後ますます増える高齢者、核家族化の中で、どのように高齢者と交流していけばよいかを考える	中村学園大学講師 高 良 竹 美

(3) テレビモニターの委嘱

ア 趣 旨

家庭教育充実事業に係わるテレビ放送「子育てひろば」の効果的な運営を図るため、広く県民からモニターを公募して意見を聴取するとともに、家庭教育に関する学習グループの育成に努める。

イ 募集方法

一般公募

ウ 対 象

個人またはグループ（3人程度）の小学生までの子どもを持つ親等

エ 委嘱の期間

平成6年10月1日から平成7年3月31日までの6か月間

オ 内 容

(ア) テレビ放送「子育てひろば」（RKB毎日放送）を視聴してその内容についてのモニター報告書を月ごとに作成し、福岡県立社会教育総合センターに提出する。

- (イ) 毎月のモニター報告書の郵便料金は、福岡県立社会教育総合センターで負担する。
- (ウ) モニターは、モニター交流会やその他家庭教育関係事業に積極的に参加し、地域における家庭教育の啓発・普及に努める。

カ 委嘱の状況

- (ア) グループモニター
5グループ 22名に委嘱
- (イ) 個人モニター
28名に委嘱

4. 家庭教育指導資料の作成・配布

家庭教育活性化のために「福岡県における中学生及び中学生を持つ親の養育態度・行動の実態」について、県下6校の中学生及び中学生を持つ親を対象にアンケート調査を実施した。それを昭和57年度と同調査と比較検討するとともに、分析結果を加え、家庭教育指導資料（本報告書P13～P114）として作成し関係機関・団体に配布。

5. 家庭教育指導者研究協議会

子どもの教育を考えるセミナー

(1) 趣 旨

生涯学習の視点から家庭及び地域の教育力を見直し、学校教育と社会教育の連携により、調和のとれた人間形成をめざす子どもの教育について研修する。

(2) 主 催

福岡県教育センター
福岡県立社会教育総合センター

(3) 期 日

平成6年8月17(水)～18(木)（2日間）

(4) 会 場

福岡県立社会教育総合センター 2階 第4研修室
811-24 粕屋郡篠栗町金出3350-2 TEL 092-947-3512 FAX 092-947-8029

(5) 対象者

- ・市町村教育委員会社会教育主事、社会教育・生涯学習担当職員等
- ・県教育庁教育事務所社会教育主事等
- ・県立社会教育施設社会教育主事等

(6) 日程・内容

	9 : 30	12 : 00	13 : 00	16 : 00
8月17日 (水)	受 付	①〔講義〕 生涯学習社会における学 校教育と社会教育	昼 食	②〔講義〕 ③〔協議〕 生涯学習社会における新たな教 育（学習）の視点 ～親の養育態度・行動の実態調 査を通して～

- ①生涯学習社会における学校教育と社会教育 (講師) 九州大学教授 南里悦史
 ②生涯学習社会における新たな教育（学習）の視点 (講師) 九州大学助教授 森 紘
 ③学校と家庭教育、学校と地域社会
 ～親の養育態度・行動の実態調査を通して～ (司会) 県立社会教育総合センター職員

	9 : 30	12 : 00	13 : 00	16 : 00
8月18日 (木)		④〔実践発表・協議〕 生涯学習社会における新 たな教育（学習）の視点	昼 食	⑤〔協議〕 これからの社会を担う 子どもの教育を考える ～生涯学習の視点から～

- ④生涯学習社会における新たな教育（学習）の視点〔実践発表〕
 学校教育と社会教育の連携 飯塚市人材派遣事業事務局長 高橋孝則
 ～学校外活動・世代間交流・ボランティア活動を通して～ 二丈町立一貴山小学校教諭 高橋 茂
 県指導第二部社会教育課 主任社会教育主事 藤波紀彦
 ⑤これからの社会を担う子どもの教育を考える (司会) 県立社会教育総合センター職員
 ～生涯学習の視点から～

(7) 参加者 53名

みんなで語ろう 子育てひろば

(1) 趣 旨

家庭教育の今日的課題に対処する具体的実践方策等について研究協議を行い、家庭教育指導者の資質の向上を図る。

(2) 主 催

福岡県教育委員会

(3) 主 管

福岡県立社会教育総合センター

(4) 期日及び会場

平成6年12月6日(火)

福岡県立社会教育総合センター

〒811-24 糟屋郡篠栗町金出3350-2

(5) 対象者

- ・市町村教育委員会社会教育主事・公民館主事・社会教育指導員等
- ・市町村教育委員会生涯学習・社会教育関係職員等
- ・社会教育関係団体の指導者（PTA・婦人団体・青少年団体の役員）等
- ・家庭教育学級の指導者及び学級生
- ・その他家庭教育に関心のある人

(6) 日程・内容

時 間	研 修 内 容
9：45～10：15	受 付
10：15～10：30	開会行事
10：30～12：00	講演 「家族は いま」 ～家族の現状と課題～ 福岡市女性センターアミカス館長 梁 井 迪 子
12：00～13：00	昼 食
13：00～15：30	シンポジウム 「豊かに育て 21世紀の子どもたち」 ～大人たちの提言～ シンポジスト 中村学園大学 講師 高 良 竹 美 那珂川町家庭教育学級生 怡 土 純 子 田川市大藪小学校前PTA会長 山 本 三 司 遊び塾・ありギリス事務局長 小田切 直 人 コーディネーター 県立社会教育総合センター 社会教育主事 浦 本 陽 子

(7) 参加者 98名

6. 電話相談員の養成・研修

(1) 期 日 平成6年6月30(木)～7月1日(金) 1泊2日

平成6年7月21(木)～ 20日(金) 1泊2日

(2) 会 場 福岡県立社会教育総合センター

(3) 対 象

ア 教育委員会関係者

- ・ 教育ホットラインや家庭教育110番、ヤングテレホン及び児童生徒相談室で、電話相談業務に従事している職員（非常勤も含む）
- ・ 市町村教育委員会で電話相談業務に従事している職員（非常勤も含む）

イ その他

- ・ 県内の相談機関で電話相談業務に従事している職員（非常勤も含む）
- ・ これから電話相談業務に従事しようとする者及び青少年健全育成等のボランティア活動を行っているもの。

(4) 内容と講師

- ・ (講義) 現代社会における電話相談の意義とその必要性
講師 福岡教育大学教授 秋山 俊夫
- ・ (事例研究) 実践事例から
事例発表者 京築教育事務所相談員 田島 保伸
県警少年課婦人補導員 吉田 豊子
助言者 福岡教育大学教授 田中 敏明
- ・ (研究協議) 電話相談員の悩みと喜び
- ・ (事例研究) 実践事例から
事例発表者 大野城市少年相談センター 竹中 清次
助言者 筑紫女学園大学教授 林 幹男
- ・ (講義・演習) カウンセリングの理論と実際
～積極的な傾聴とロールプレイング～
講師 福岡県教育センター教育相談研究室研究主事 長家 昭
- ・ (事例研究) 家庭教育相談員の相談事例から
事例発表者 福岡県立社会教育総合センター相談員 熊谷登司夫
助言者 元北九州市保育所長 矢野 静枝
- ・ (講義) 子どもの心と健康 ～親の養育態度と子どもの健康～
講師 三田医院小児科医師 三田 佳子
- ・ (講義) 電話相談と子どもの権利条約
講師 西南学院大学教授 門田見昌明
- ・ (公開講座) 現代社会のモラルと性教育
講師 青山学院大学文学部教授 稲生 勁吾

(5) 参加者 75名

7. 電話による相談事業

- (1) 専用電話「家庭教育110番」(092) 947-3515を設置
- (2) 開設曜日及び時間は、月曜から土曜までの8時30分から17時まで
- (3) 電話相談の内容及び件数

福岡県立社会教育総合センター「家庭教育110番」

平成6年度 家庭教育電話相談件数一覧

月 別		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
相 談 件 数		40	30	30	31	20	36	35	31	37	22	30	35	377
相 談 者	母	36	13	28	26	18	29	26	28	34	17	24	24	320
	父	2	0	1	0	0	2	3	1	0	1	1	1	12
	その他	2	0	1	5	2	5	6	2	3	4	5	10	45
対 象 者	乳 幼 児	22	13	8	11	11	11	11	10	13	9	9	13	141
	小 学 生	9	12	12	8	4	9	6	10	13	5	6	4	98
	中 学 生	3	3	4	2	1	4	7	4	4	3	6	10	51
	高 校 生	5	2	5	6	3	5	5	3	2	2	7	4	49
そ の 他		1	0	1	4	1	7	6	4	5	3	2	3	38
地 区	福 岡 市	7	3	9	8	8	10	8	6	16	9	8	11	103
	北 九 州 市	6	1	1	4	2	4	1	1	3	1	4	2	30
	福 岡 地 区	8	8	6	5	5	5	6	7	8	7	7	10	82
	北 九 州 地 区	2	2	0	2	0	0	4	1	0	0	1	1	13
	筑 豊 地 区	5	4	2	3	0	4	5	1	3	2	5	3	37
	京 築 地 区	0	0	1	2	0	0	0	0	1	0	0	1	5
	筑 後 地 区	11	8	10	7	5	9	7	13	5	3	3	6	87
そ の 他		1	4	1	0	0	4	4	2	1	0	2	1	20
相 談 内 容	排 便 の し つ け	3	0	0	1	0	0	0	3	0	0	0	0	7
	赤 ち ゃ ん 返 り	0	0	1	3	2	0	1	0	0	0	2	1	10
	こ と ば の 発 達	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	3
	発 達 の お く れ	0	1	1	0	1	0	0	0	1	2	2	1	9
	友 だ ち	1	1	1	0	0	0	2	0	0	0	1	2	8
	い じ め	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2
	こ と ば の 障 害	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3
	登 園 拒 否	4	0	0	1	3	3	2	1	2	1	0	1	18
	入 園 準 備	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	1	4
	園 と の か か わ り	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	指 し しゃ ぶ り	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	性 格 ・ 情 緒 障 害	5	1	1	1	2	1	1	2	2	2	1	1	20
	医 療	1	3	2	1	0	1	2	3	4	3	2	2	24
	祖 父 母 と の 関 係	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
親 子 関 係	1	1	0	0	0	1	1	0	1	0	1	2	8	
そ の 他	4	3	2	4	1	3	0	1	2	0	0	1	21	
小 計		22	13	8	11	11	11	11	10	13	9	9	13	141
事 項	登 校 拒 否	2	2	4	1	0	2	4	3	0	2	6	2	28
	学 業 行 動	3	0	2	4	2	9	7	4	7	1	3	4	46
	非 行 行 動	0	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	3	4
	問 題 行 動	5	1	2	4	1	2	1	1	2	3	2	2	26
	性 格 ・ 情 緒 障 害	1	2	1	1	1	1	1	2	6	1	4	4	25
	性 格 性	0	0	0	2	1	0	0	0	1	2	1	4	11
	友 人 関 係	2	7	6	4	0	0	4	2	2	0	2	0	29
	弱 者 い じ め													
	し つ け ・ 生 活	3	1	6	1	3	2	2	4	0	0	2	0	24
	身 体	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
そ の 他	2	4	0	3	1	8	5	5	5	3	1	5	42	
小 計		18	17	22	20	9	25	24	21	24	13	21	22	236
合 計		40	30	30	31	20	36	35	31	37	22	30	35	377
備 考														

福岡県における中学生の意識・行動と
父親・母親の養育態度・行動の実態調査
のまとめ

序章 調査の概要

1. 調査の目的

最近の家庭教育に関する調査を概観してみよう。家庭と地域の教育力に関する調査（平成元年度総理府）によると、63%の人が「しつけや教育力が低下している」と感じており、それは「忍耐強さの不足」に現れていると思っている。家庭教育に関する調査（平成2年度総理府）によると、55%の親が「しつけに悩んで」おり、10年間で11ポイント増えてきている。平成2年の青少年白書（総務庁）によると、子どもたちの「遊び方は室内、小人数、受動的」になっており、「友達関係も表面的に」つきあう段階に留まっている。青少年の意識調査（平成3年度総務庁）によると、子どもたちの83%が「自分の生活に満足」しているが、「社会に満足」しているものは47%である。平成3年の青少年白書（総務庁）でも、「家庭生活には満足」しているが、「学校生活には不満」で、「社会への貢献より趣味に合った暮らし方」を優先していることが指摘された。また3人中2人が「早く大人になりたいとは思わない」ために、子どもたちは進学希望だけが先行し「将来像は持てない」でいる。平成4年の青少年白書（総務庁）によると子どもたちの余暇時間は増えてゆとりが拡大しているが「社会的活動への参加は低く」、持ち物が豊かになった反面「適正な金銭感覚」に欠けている。親の意識に関する調査（平成4年度総理府）によると、親は子どもに「道徳心や公共心、思いやりの心や寛容性」を身につけてほしいと願っている。平成5年の青少年白書（総務庁）によると、家族の「触れ合い」が減りそれぞれ自分だけの生活に閉じこもっている。

これらの調査で現れてきた忍耐強さ、豊かな友人関係、社会への貢献、将来像、金銭感覚、思いやり、触れ合いというキーワードは、人間関係に関わるものである。子どもたちは大人たちの世界を真似て「子どもたちの世界」を作ったり、家族という温かい関係をともに支え合う暮らしの中で、社会性の基礎訓練を体験するはずである。しかしながら、今子どもの世界と大人の世界は完全に分離し、子どもは大人の世界にある社会性を知らないままに放置されている。

福岡県の家庭教育についてはどのようなことが分かっているのでしょうか。本事業が平成3年度に実施した「小学生を持つ親の養育態度の調査」では次の4つの特徴が明らかになった。

- (1) 養育態度の保護的な側面は「選択的過保護」になっている。

学校生活への適応に向けた過保護が定着し、生活習慣への過保護は沈静化しつつある。

- (2) 養育態度の育成的な側面は「選択的しつけ」になっている。

注意をするといった口頭によるしつけが主になって、行動をともにして指導するしつけが欠けている。

- (3) 養育意識は「耐性なき養育」になっている。

親が育てねばという気持ちを強く持ち過ぎて、子どもが育つのをじっと待つ親の耐性が持てないでいる。

- (4) 子どもの認識は「学習なき成長」になっている。

未熟さを自覚することが学習過程のスタートであるが、失敗させまいとする親の先回り養育で子どもの学習の芽を摘んでいる。

学校週五日制が導入された目標は子どもの体験を復活させようということである。その背景には子ども自身が行動を通して自分の能力の限界を知り、学び、新しい能力を身につけていく育ちのプロセスを完成させるという意図がある。そこには親の養育態度や意識が、子どもの育ちを脇に置き去りにしてきたという反省がある。調査の結果は正にその点に集約することができる。

では、中学生を持つ親の養育態度はどうであろうか。考察の流れは自然にそういう方向に向かっていき、今年度の調査につながる。ところで、昭和57年度に本事業の前身である家庭教育総合セミナー事業が「福岡県における中学生の意識・行動と父親・母親の養育態度・行動の実態調査」（以後「前回調査」と呼ぶ）を実施し、次のような点が明らかにされている。

(1) 子どもについては

子どもの大半は家庭生活や学校生活に満足しているが、学年が進むにつれて勉強や成績及び進路について悩む子どもが増加する傾向にある。したがって、学年が進むにつれて勉強時間が長くなり、自由時間の過ごし方はあまり活動的ではない。ただ手伝いはかなりしており、特に女子の方がよくしている。

(2) 親については

親のしつけは勉強に関することに集中する傾向があり、悩みは成績や進学のことである。学年が進むにつれて全体的に親の悩みや心配の種が増えていく傾向である。特に子どもの自立性や忍耐力についてはかなりの親が「ない」と認め、母親の評価が厳しくなっている。親の生きがいは子どもであり、そのためしつけにはかなり自信を持ってはいるものの甘いと考える親と甘くないと考える親は半々である。また子どもの気持ちが分からないという親も多い。中学生にとって身近になる性教育については、大半の親が回避したり無視する傾向がある。

以上のような現状認識の段階で言えることは、家庭教育の目的が曖昧になる一方で、一極集中し始めているということである。とりあえずはその動きに気づくことが先決である。本調査では、家庭教育の目的を親と子の共同作業による「明日の家庭」づくりとみなし、「子育て」と「子育て」のマッチング、あるいは中学生にとって必要な大人の世界とのドッキングへの目安を総合的に提示することを目標とする。その過程で一極集中の実状が明らかになるはずである。考察を立体的に進めるために、親の養育態度を調査するだけでなく、中学生の生活実態の調査も合わせて行い、中学生の声に親の声が調和しているかどうかを試すことにした。どのようなハーモニーが聴こえるか、それが家庭教育の充実を目指す本調査の当面の目標である。

2. 調査の方法

(1) 調査対象

本調査は福岡県下6地区、6校の中学生1,273名とその父親1,180名、母親1,224名を対象として実施された。回収数は中学生1,206サンプル、父親1,050サンプル、母親1,145サンプルで、回収率はそれぞれ94.7%、89.0%、93.5%であった。実際の集計に当たっては、記入者が父親、母親以外か不明なものは除外された。

サンプルの内訳を中学生の学年、性別という条件で分類すると表1、2、3となり、中学生のきょうだいの有無、きょうだいの位置、学年という条件で分類すると表4、5の通りである。親のきょうだいの有無、きょうだいの位置、在住年数、学年という条件で分類すると表6、7、8の通りである。また、親を年代別に分類したものが表9である。

表1 中学生の学年・性別サンプル数

		1	2	3	計
男	子	220	207	207	634
女	子	187	195	190	572
合	計	407	402	397	1,206

表2 父親の学年・性別サンプル数

		1	2	3	計
男	子	194	189	182	565
女	子	165	167	153	485
合	計	359	356	335	1,050

表3 母親の学年・性別サンプル数

		1	2	3	計
男	子	209	190	188	587
女	子	183	190	185	558
合	計	392	380	373	1,145

表4 中学生のきょうだいの有無・学年別サンプル数

区分		学年	1	2	3	計
男 子	ひとり		11	11	19	41
	きょうだい有		209	196	188	593
	小計		220	207	207	634
女 子	ひとり		16	13	9	38
	きょうだい有		171	182	181	534
	小計		187	195	190	572
計			407	402	397	1,206

表5 中学生のきょうだいの位置・学年別サンプル数

区分		学年	1	2	3	計
男 子	長	子	108	88	111	307
	長	子以外	112	119	96	327
	小	計	220	207	207	634
女 子	長	子	95	100	99	294
	長	子以外	92	95	91	278
	小	計	187	195	190	572
計			407	402	397	1,206

表6 親のきょうだいの有無・学年別サンプル数

区分		学年	1	2	3	計
父 親	ひ	とり	11	11	19	41
	き	ょうだい有	209	196	188	593
	小	計	220	207	207	634
母 親	ひ	とり	16	13	9	38
	き	ょうだい有	171	182	181	534
	小	計	187	195	190	572
計			407	402	397	1,206

表7 親のきょうだいの位置・学年別サンプル数

区分		学年	1	2	3	計
父 親	長	子	108	88	111	307
	長	子以外	112	119	96	327
	小	計	220	207	207	634
母 親	長	子	95	100	99	294
	長	子以外	92	95	91	278
	小	計	187	195	190	572
計			407	402	397	1,206

表8 親の在住年数・学年別サンプル数

区 分		学 年			
		1	2	3	計
父	1 年 未 満	16	15	12	43
	1年以上～3年未満	32	26	19	77
	3年以上～5年未満	28	24	23	75
	5年以上～10年未満	80	70	44	194
親	10 年 未 満	203	221	237	661
	小 計	359	356	335	1,050
母	1 年 未 満	22	14	12	48
	1年以上～3年未満	35	38	23	96
	3年以上～5年未満	34	29	27	90
	5年以上～10年未満	74	76	55	205
親	10 年 未 満	227	223	256	706
	小 計	392	380	373	1,145
計		751	736	708	2,195

表9 親の年代別サンプル数

	父親	母親
10 代	2	4
20 代	3	3
30 代	130	321
40 代	816	791
50 代	92	19
60 以上	7	7
計	1,050	1,145

(2) 調査の方法

本調査は、質問総数50項目からなる調査表「中学生の生活実態についてのアンケート」（中学生用）と質問総数50項目からなる「中学生のしつけについてのアンケート」（保護者用）によって、無記名で行われた。なお保護者用の調査表は男性用と女性用を作成し、質問の構成と内容は全く同一のものであった。これらの調査票の構成は次の通りである。

① 中学生の生活実態についてのアンケート

中学生の生活領域を家庭、学校および地域に分けて、それぞれの領域で主な事項と考えられることについて質問している。学校生活では勉強、友人関係、クラス活動について、家庭生活では基本的な生活習慣、家庭学習、テレビ視聴および親子の交流について質問している。ここで、特に親子交流は家庭教育の根幹であるので別項としてさらに日常対話、親のイメージ、親の養育態度に分けて取り上げている。家庭と学校以外の生活を地域での生活とみなして、自由時間の過ごし方、関心について質問し、最後に中学生自身の自己評価と悩みについて問いかけている。中学生がどのような環境に置かれているのかを中学生に語ってもらえるように、5つの部分からなる質問が用意されている。

② 中学生のしつけについてのアンケート

親の養育態度を養育行動と親子交流に分け、さらにそれらを背後から支えているものとして子どもの評価と養育意識を取り上げて、あわせて4つの領域で調査票は構成されている。養育行動の領域では基本的な生活習慣、言葉遣い、勉強へのしつけについて、一方親子交流の領域では日常対話、食事、交流を通しての指導について取り上げている。

養育は子どもの正確な把握を必要条件とするので、子ども評価の領域では子どもの性格、接し方、悩みについて問いかけている。また養育者としての自分を親が自覚することが養育への十分条件であるので、養育意識の領域では親の生活、充実感、自己評価、養育情報、しつけの目標について質問している。過保護や過干渉あるいは勉強に偏向しがちな養育を修正するために、人を育てるという養育の全体像を基盤に置いて、その上で実態の位置を明らかにしようとい意図されている。

これらの結果と前回の調査結果を数量的に比較することによって変化の情報が得られるので、前回調査の項目の中から特徴的なものを選び出し、今回の調査との重複を図っている。(なお前回調査での質問の表現および選択肢を一部変更したのものがある。) また小学生から中学生への推移が予想できるものを、小学生の親に対する調査項目から選択して加えてある。さらに親と中学生の両方からの回答を突き合わせることができるよう質問項目も新設されている。

これらの質問項目の構成を表10に示している。具体的な質問内容と回答結果は、本文中ならびに本報告書の最後に付してある。

(3) 調査の実施方法と時期

調査の実施にあたっては、調査票を直接協力校に持参し、学校を通じて家庭に配布し記入をしてもらった。回収は各中学生とその保護者の回答を一組として、配布の逆のルートを経由して行った。

調査の実施時期は、平成5年9月。調査協力校の6中学校は前回調査校と同一である。なお調査結果の集計のためのコンピューター処理については、福岡県教育センターのご協力をいただいた。

3. 分析の基本的視点

調査結果の分析は、基本的に次頁に掲げる質問間クロス分析に沿って行った。本報告書では、中学生への質問間クロス、親への質問間クロス、親と中学生の質問間クロス(親子ペアでの比較分析)の傾向と特徴に説明を加えている。個別集計の調査結果については、昨年度の報告書を参照されたい。

クロス集計のグラフについて、集計結果については本報告書の最後に付してあるが、分析については、さらに傾向と特徴を明確にするために回答項目ごとに割合を出し分析を行った。グラフ上の数値と文中の数値が異なるのはこのためである。具体的には、A、B二つの質問間のクロスで、Bの回答選択肢で「ある」と回答したAのそれぞれの値を各選択肢ごとに割合を出し、グラフからは分かりにくい傾向と特徴を明確にしている。

表10 調査票の構成

〈中学生への質問項目〉

〔1〕 学校生活 (11問)

(1) 勉強 8なぜ勉強, 26勉強分らぬ, 27勉強やる気 46やり直し
(2) 友人関係 20友人グループ, 21グループ話題, 22親友 23異性友人, 41友の目
(3) クラス活動 9当番取組み, 10活動参加

〔2〕 親子交流 (12問)

(1) 日常対話 34TVSP, 35将来人生, 36学校生活話す 50性の話
(2) 親のイメージ 37父母の顔, 38父母の信頼, 40父母像
(3) 親の養育態度 39先生不満, 43感謝, 47叱られる 48甘い 49家を出る

〔3〕 家庭生活 (11問)

(1) 基本的な生活習慣 1遅刻, 2小遣貰い方, 3小遣平均額 28生活満足, 29薬服用, 30手伝い
(2) 家庭学習 5勉強時間, 7塾・家庭教師
(3) テレビ・ラジオの視聴 4TV視聴時間, 6深夜放送, 18TV番組は

〔4〕 地域生活 (9問)

(1) 自由時間の過ごし方 11楽は学内外, 12休日の過ごし方, 44大人と交流
(2) 関心 17異性, 19音楽, 31服装髪型, 32性 33流行が気に, 45明日期待

〔5〕 自己評価 (7問)

(1) 自己評価 14自主性, 15積極性, 16忍耐力
(2) 悩み 13不登校, 24悩みは何, 25相談相手 42安心の場

〈親への質問項目〉

〔1〕 家庭生活 (12問)

(1) 基本的な生活習慣 1起床, 2持物注意, 4小遣使いみち 7服装髪型, 10宿題手伝い忘れ, 11後始末
(2) 言葉遣い 6親への言葉, 8挨拶注意, 17乱暴な言方
(3) 勉強 3テスト夜食, 9勉強注意, 24成績要因

〔2〕 親子交流 (10問)

(1) 日常対話 12TVSP, 13社会出来事, 14性指導 15将来人生, 16学校生活
(2) 食事 19夕食揃う
(3) 交流 5手伝い回数, 18家の相談, 20交友関係 27ほめる

〔3〕 子ども評価 (9問)

(1) 子どもの性格 32自主性, 33積極性, 34忍耐力
(2) 接し方 22比較, 23男女, 25殴りたく, 26子の気持
(3) 悩み 21子への悩み, 40子の悩み

〔4〕 養育意識 (19問)

(1) 親の生活 28TV視聴時間, 29規則生活
(2) 充実感 30充実感, 31生きがい
(3) 自己評価 35しつけ自信, 36甘い, 37世話を 38母(父)のしつけ, 39子から信頼
(4) 養育情報 41先生相談, 48しつけ学習, 49参観説明会
(5) しつけの目標 42プライド, 43子の存在, 44子へ礼 45先に挨拶, 46親に似る, 47心配症 50しつけの重点

第 I 章 中学生の意識・行動の実態

第 I 章 中学生の意識・行動の実態

中学生になると、自分の心の世界を持ち、自分で考え、自分で判断し、自分で行動しようとするようになってくる。いわゆる親離れしつつある時期で「心の離乳期」ともいわれる。中学生を持つ親から、「何を考えているのか分からない」、「どう対処してよいか分からない」と戸惑う声を耳にする。

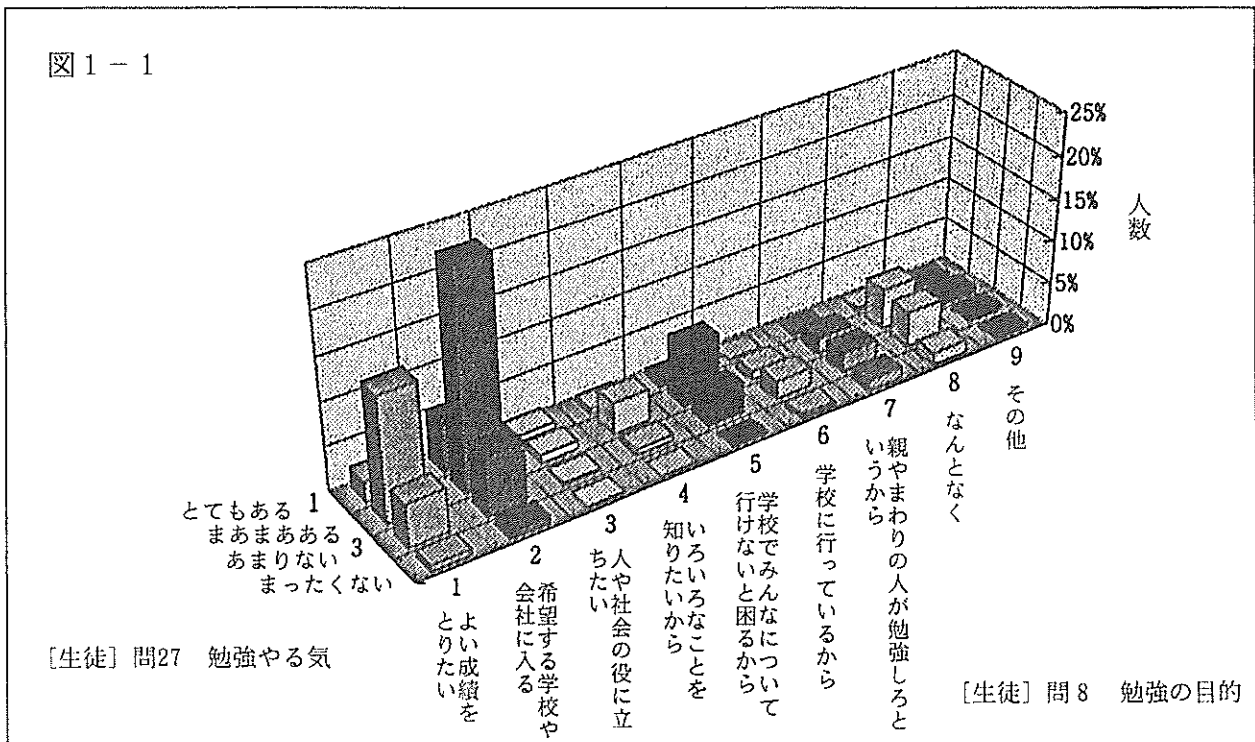
しかし、親離れといっても、それはまだ完全なものでない。反抗したり、理屈を言ったりしても心のどこかに親の支えを求めて甘えている部分がある。この矛盾した状態が中学生の心の最も大きな特徴だといえる。この章では、学校・家庭・地域・自己評価等について中学生の意識・行動を調査結果から明らかにしたい。

1. 学校生活

この節では、学校生活についての意識・行動をクロス集計した結果をもとに述べる。

(1) 勉強のやる気は、どういう行動から生まれるか？

勉強については、70%近くの中学生在が勉強への意欲があると答えている。しかし、そうした意識を持っているわりには理解度は十分でなく、試験の間違いのやり直しをしていない中学生が半数近くもいる。勉強に対しての意欲はどこから生まれるものなのであろうか。「あなたは、学校の勉強についてどう感じていますか」という勉強に対するやる気についての問と、「あなたが、ふだん勉強するのはどうしてですか」という勉強の目的についての問とのクロス集計を図1-1に示す。



個別集計について見ると、勉強の目的は、「よい成績をとりたい、希望する学校や会社に入りたい、人や社会の役に立ちたい、いろいろなことを知りたい」などの積極的意思にもとづくものが67%、「みんなについていけないと困る、学校に行っているから、周りの人が勉強しろという

から、何となく」などの消極的意識によるものが、31%であった。クロス集計についてみると「とても、まあまあやる気がある」と回答したものは積極的な目的意識を持っているもののうち78%であった。勉強の目的で「よい成績をとりたいたから」、「希望する学校や会社に入りたいから」の2つの項目に絞ってみると、「とても、まあまあやる気がある」と回答したものは、「よい成績をとりたいたから」と回答したもののうち73%、「希望する学校や会社に入りたいから」と回答したものは79%であった。逆に、勉強の目的が消極的意識によるもののうち「とても、まあまあやる気がある」と回答したものは53%にすぎない。このことから、勉強に対する積極的な目的意識を持つことが、やる気につながる事が分かる。

勉強のやる気は、勉強時間とも大きく関係している。「あなたは、ふだん家庭で平均して1日どのくらい勉強していますか」という問とのクロスでは、「とても、まあまあやる気がある」と回答したものは、「30分～1時間程度」と回答したもののうち69%、「1時間30分～2時間程度」では85%、「2時間30分以上」では90%となった。勉強時間の長さとともに、やる気があると回答した割合が高くなっている。

「あなたは、試験で間違えたところを後でやり直してみますか」という問とのクロスでは、「とても、まあまあやる気がある」と回答したものは「いつも・ときどきする」と回答したもののうち81%で、逆に、「あまり・まったくしない」と回答したもののうち「とても、まあまあやる気がある」が56%と少ない。

これらのことから、勉強に対しての目的意識をはっきりと持ち、時間をかけてじっくりと間違い直しをすることが、勉強に対する意欲に結びつくことが分かる。しかし、勉強することにはっきりとした目的がもてず、やる気をなくしている中学生も多いことが分かる。なぜ、勉強しなければならないのか、自分自身とどう関わるのか等と悩んでいる中学生に対して、まわりがまずその悩みを受止めてやるべきである。その上でただやみくもに勉強を強いるだけでなく、じっくり時間をかけて話し合う場も大切である。

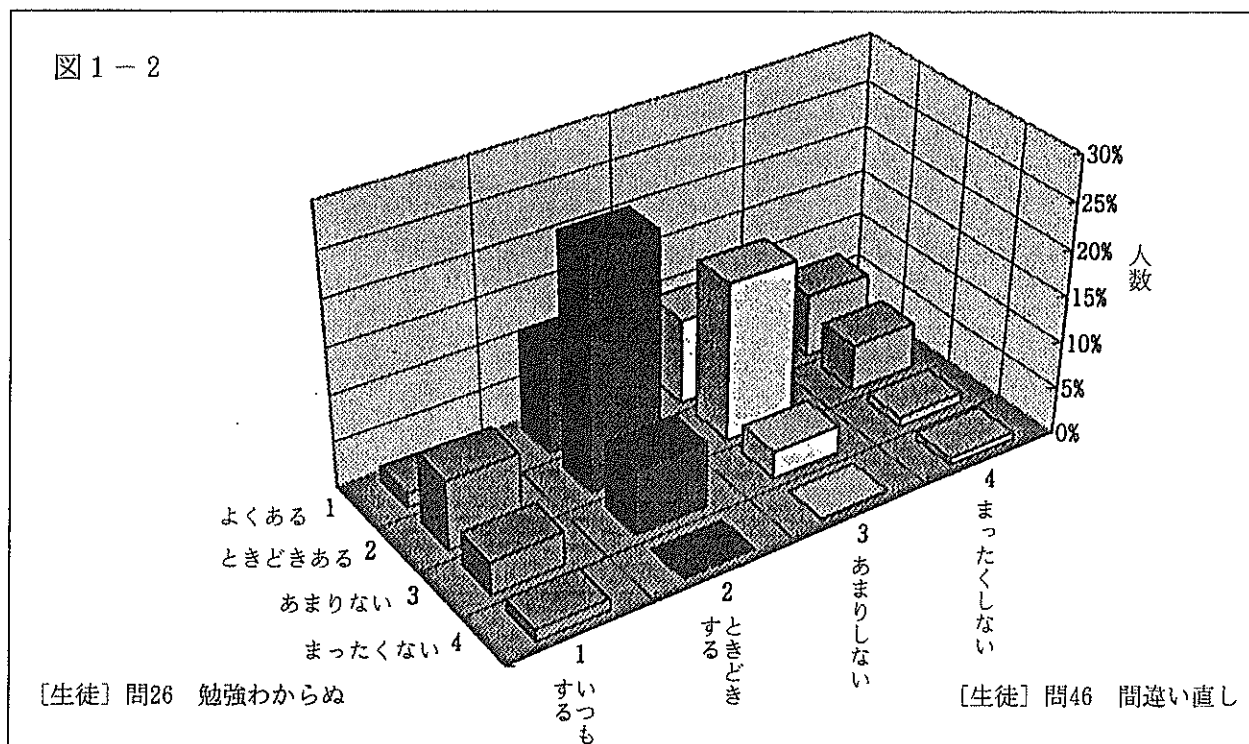
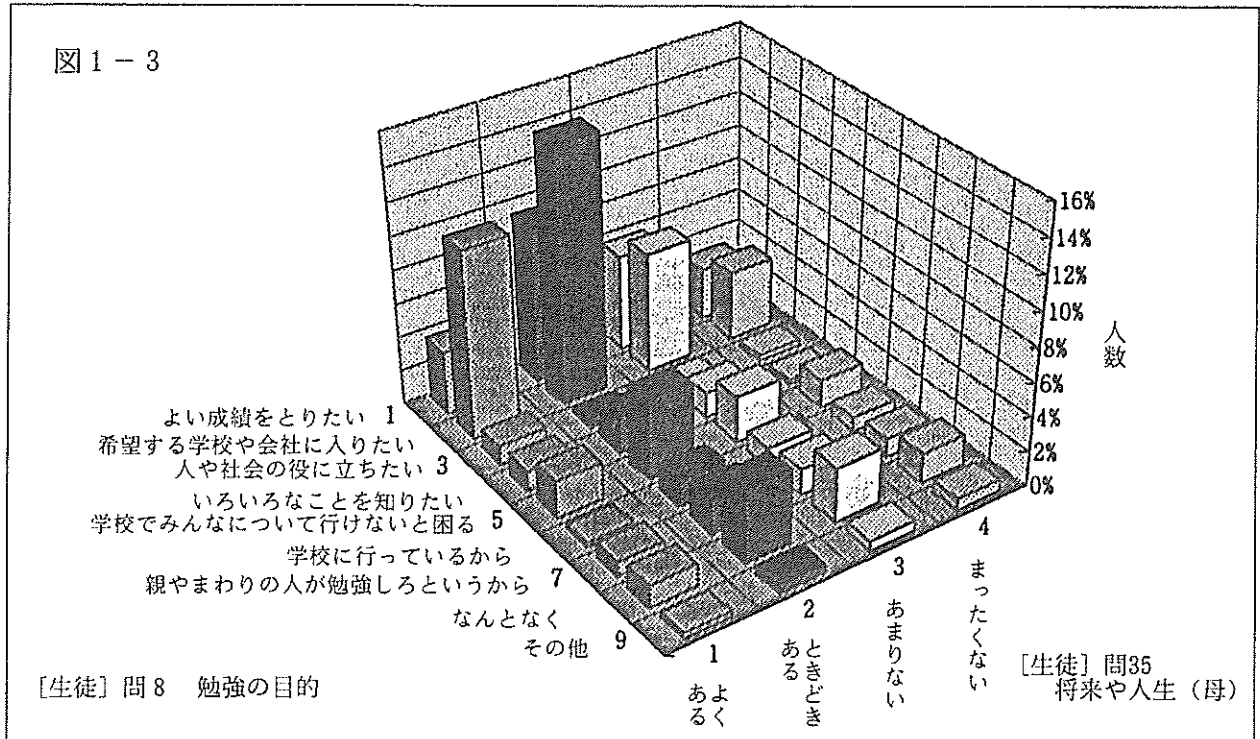


図1-3



て「関心があまり、まったく」ないもの場合は66%で、あまり差はみられない。しかし、勉強の目的を「よい成績を取りたい」、「希望する学校や会社に入りたい」の2項目に絞ってみると、よい成績を取りたいが、異性に関心があると回答したもので22%、希望する学校や会社に入りたい41%、異性に関心がないと回答したものでは、それぞれ21%、33%であった。異性に関心がある中学生のほうが、ただ単に成績のことよりも進学先や就職等のより現実的な目標を持っているといえる。

(4) 自己意識は、どういう友人関係から育つか？

中学生になると、自己の存在を意識しはじめ、自分のことがとても気になってくる。友人関係も小学生の頃とは違って来る。まわりの目を気にし、どのように思われているのか大変気にするようになる。

「あなたは、友だちがあなたのことをどう思っているか気にしますか」という問と「あなたは、掃除当番やクラスの決められた仕事をどのようにしていますか」という問とのクロス集計結果を図1-4に示す。

友だちがどう思っているか「とても、まあまあ」気にするが、当番や仕事を「まじめに責任をもって、仕方がないから」と回答したもののうち70%であった。友だちがどう思っているか「とても、まあまあ」気にするが、逆に、当番や仕事を「人にまかせてさぼる、まったく」しないと回答したものでは74%であった。

「あなたは、おたがいに理解し、心をうちあけて話せる『親友』がいますか」という問とのクロスでは、友の目を「とても、まあまあ」気にするものが、今親友がいると回答したもののうち68%であった。今親友がいないと回答したものでは67%とその差は認められない。

このことから、当番や仕事をしない中学生ほど友だちがどう思っているのかを気にしている。どちらかといえば、大人は人目を気にして行動することが多いが、中学生は自分がしたことに対

(2) 勉強が分かるためには、どうすればよいか？

中学生にとって勉強は大きな関心事である。勉強に不安を抱き、試験の結果に一喜一憂し、成績がちょっと下がっただけで世の中が真っ暗になったように感じたりする年ごろである。「あなたは、学校の勉強でわからないことがありますか」という質問と「あなたは、試験で間違えたところを後でやり直してみますか」という質問のクロス集計を図1-2に示す。

個別集計をみると、学校の勉強が分からないことが「よく、ときどき」とあると答えた中学生は83%と多い。クロス集計について見ると、学校の勉強が分からないことが「よく、ときどき」あるものが、間違い直しを「あまり、まったく」しないと回答したもののうち88%であり、間違い直しを「いつも、ときどき」するものでは80%である。間違い直しをきちんとしている中学生ほど、学習の理解が進んでいる。間違い直し等の復習をしないで、分からないことを分からないままにしている中学生が43%もいることは、問題であろう。

勉強時間とのクロス集計では、学校の勉強が分からないことが「よく、ときどき」とあるというものが、勉強時間が1時間以内の中学生で87%、1時間～2時間の中学生で80%、2時間30分以上の中学生で83%という結果であった。

試験のやり直しをしない中学生は、勉強が分からないことが多いという結果が出ている。学校における授業で分からなかったことはそのままにせず、復習することの大切さを早く理解させることが必要である。

今学習塾に通っているかとの問とのクロスでは、学校の勉強が分からないことが「よく、ときどき」とあるものが、学習塾に通っているもので78%、学習塾、家庭教師ともしていないものが88%と塾に通っているほうが少ない。

(3) 勉強の目的は、どういう場面から見つけれられるか？

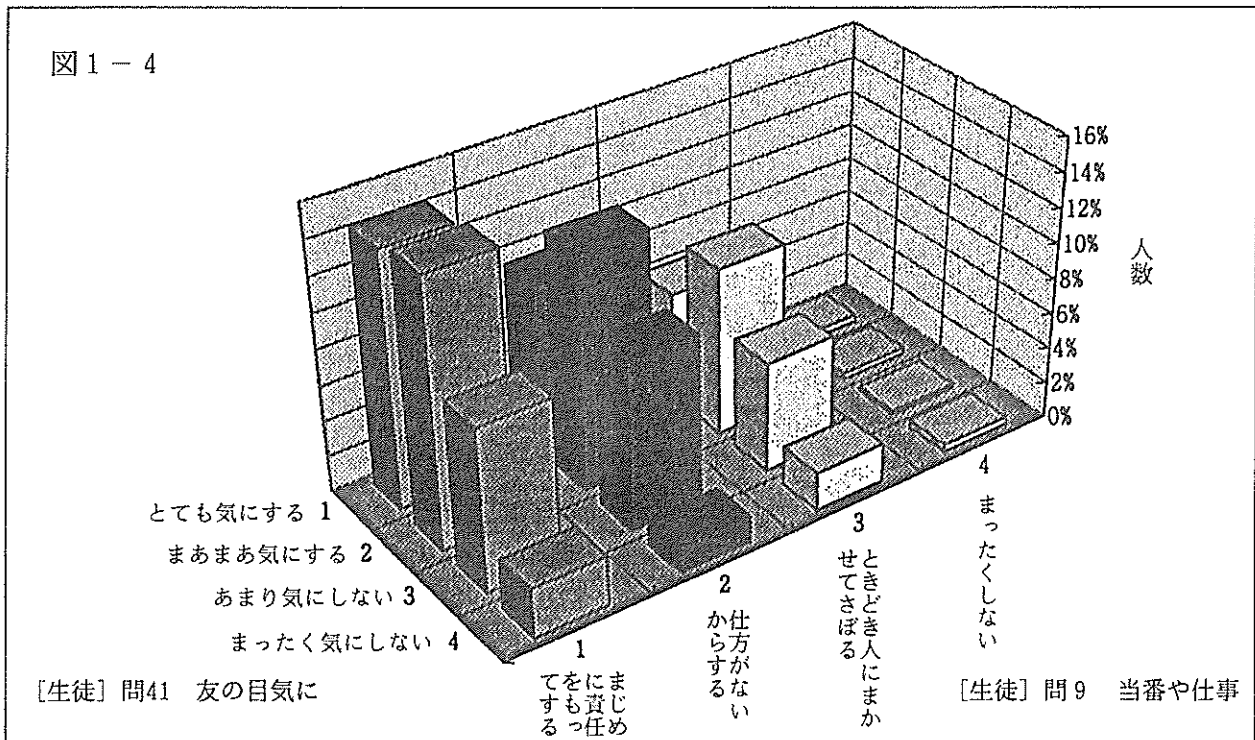
中学生になると、学年が進むにつれ自己の将来のことを考え、自分なりの進路設計を描き始める。また、勉強に対してもなぜ勉強するのかなど、いろいろと思い悩む時期でもある。目的を持って行動することが向上につながるということは、いうまでもない。では、勉強の目的を持つには、どのようにすればよいのだろうか。

「あなたが、ふだん勉強するのはどうしてですか」という問と「あなたは、家族の人と将来や人生のことについて話すことがありますか」という問とのクロス集計を図1-3に示す。

「よい成績を取りたい」「希望する学校や会社に入りたい」「人や社会の役に立ちたい」「いろいろなことを知りたい」等、勉強に対して積極的な目的意識を持つものは、将来や人生のことについて母親と話すことが「よく、ときどき」とあると回答したもののうち73%、将来や人生のことについて話すことがないと回答したもののうちで57%であった。同様に父親の場合では、積極的な目的意識を持つものは、将来や人生の話をするもので72%、話をしないものでは64%であった。親と将来や人生のことについて話し合っている中学生のほうが、自分自身の勉強の目的をしっかりと持っていることがわかる。前項で述べたように、勉強の理解度は勉強の目的と相関する。ただ口やかましく勉強の督促をするのではなく、子どもと将来や人生のことについてもっと話し合う場面を持つことが必要である。

「あなたは、異性に興味がありますか」という問とのクロスでは、積極的な目的意識を持つものは「関心がとても、まあまあ」とあると回答しているもののうち68%である。逆に、異性に関し

図 1 - 4



してとても他人の目を気にする。中学生の自分意識は、客観的に自己把握ができていないため、自分の行った行動に対して他人の目をとても気にするのである。

(5) 友人関係の持ち方は、関心を左右するか？

友人によって服装や話題、流行など関心のあるものがかわってくるのだろうか。「あなたは、おたがいに理解し、心をうちあけて話せる『親友』がいますか」という問と「あなたは、服装や髪型などファッションに関心がありますか」という問のクロス集計を図1-5に示す。

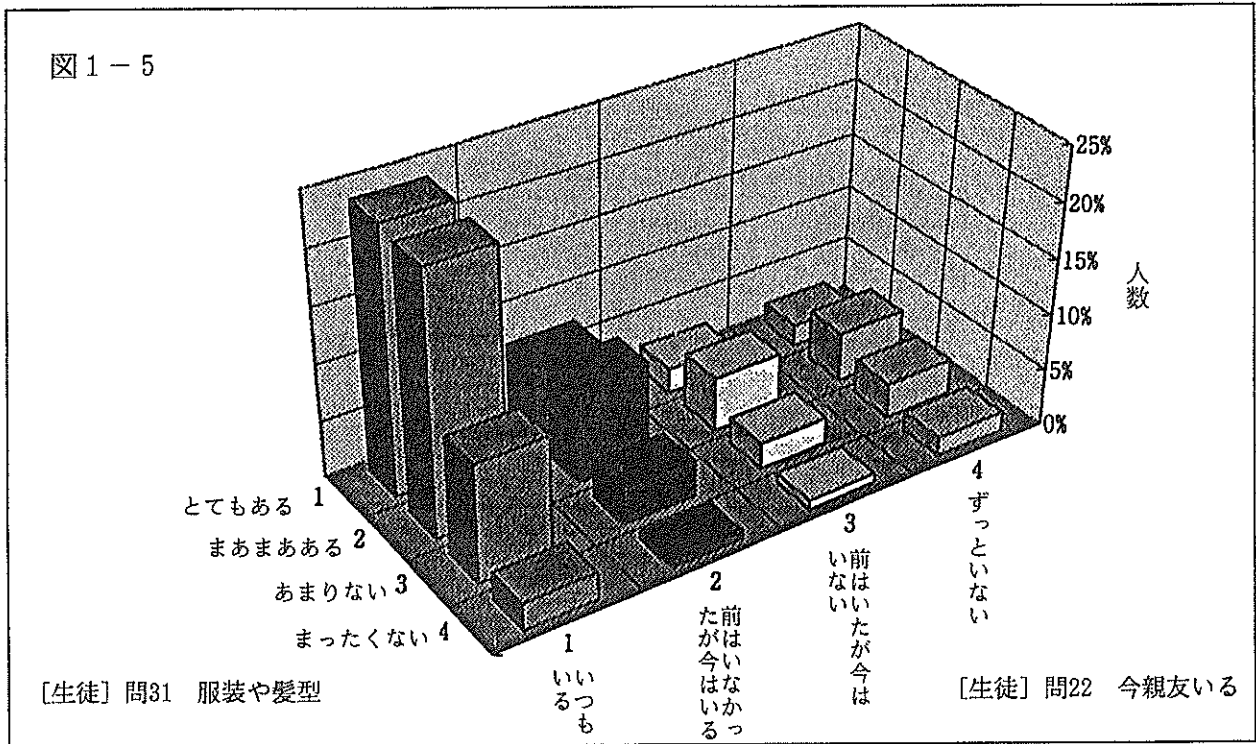
個別集計についてみると、親友が「いつも、前はいなかったが今は」と答えた中学生は、79%になっている。また、ファッションに関心が「とても、まあまあ」ある中学生は、75%となっている。クロス集計についてみると、ファッションに関心があるものが、親友がいると回答したもののうち80%、親友がいないと回答したもので62%であった。

また、「あなたは、特定の、異性の友だちがいますか」という問と「あなたは、流行を気にするほうですか」という問とのクロスでは、異性の友だちがいると回答したもので、流行を気にするが72%、いないと回答したもので流行を気にするが61%という結果が出ている。

友だちがいる中学生のほうが、服装や髪型などのファッションに関心が高く、異性の友だちがいるほうが、流行を気にする割合が高い。また、異性の友人と友だちとの話題のクロス結果から、異性の友人がいる中学生のほうが、友だちとの話題として異性のことを多くあげている。

これらのことから友人関係の持ち方は、同性・異性の友だち双方とも自己の関心に大きく作用していることがわかる。よい友人関係をつくりあげることは、自分自身の成長と大きくかかわってくる。友だちを大切に、お互いが切磋琢磨するような関係をつくりあげてほしい。

図 1 - 5



(6) 親友は、どういう状況で得られるか？

親友と呼べる友人関係の大切さは前項で述べたが、どのような状況で得られるものなのだろうか。「あなたは、おたがいに理解し、心をうちあけて話せる『親友』がいますか」という問と「あなたが、今最も悩んでいること、困っていることを選んでください」という問とのクロス集計の結果を図1-6に示す。

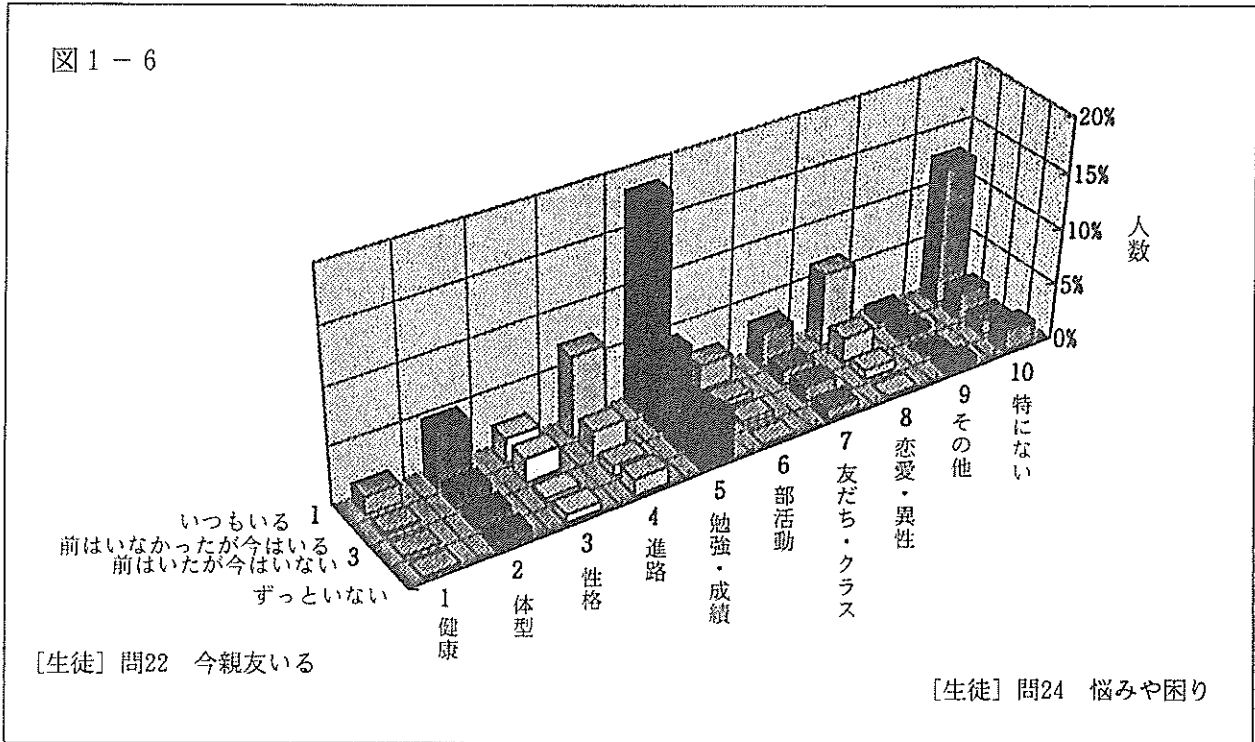
個別集計で見ると、悩んだり困ったりしていることとして「健康、体型、性格」等、自分のことをあげたものが16%、「進路、勉強・成績」等が45%、「部活動、友だち・クラス、恋愛・異性」等が20%、特にないが18%であった。一方、親友がいると答えたものが79%、いないが21%であった。クロス集計では、親友がいると答えたものが「健康、体型、性格」等と回答したもののうち80%、「進路、勉強・成績」等では77%、「部活動、友だち・クラス、恋愛・異性」等では82%、「特にない」では83%であった。進路や勉強・成績等を思い悩み、まわりをライバル視しては親友と呼べる友人関係はできない。

「あなたは、どこにいる時に楽しいと感じますか」という問とのクロスでは、親友がいると答えたものが、楽しい場所を学校と回答したもののうち86%、家庭と回答したもののうちでは73%、友だちの家では76%という結果になった。

「あなたは、特定の異性の友だちがいますか」という問とのクロスでは、親友がいると答えたものが、異性の友人がいると回答したもののうち93%、異性の友人がいないもののうち親友がいるものは73%であった。

学校を勉強する所、まわりの友人を競争相手としてみては、親友と呼べる友人関係はできない。同性だけでなく、異性の友人をもつような幅広い友人関係の中から親友と呼べる友だちができてくるといえるだろう。

図 1 - 6



(7) 異性の友人は、どういふ状況で得られるか？

中学生になると、体も性的に成熟し、異性に対して強い興味と関心を持つようになってくる。意識するあまり、思いとは反対の行動となってあらわれ、逆に険悪な関係となったりする事もある。

「あなたは、特定の異性の友だちがいますか」という問と「あなたは、異性に関心がありますか」という問とのクロス集計結果を示したのが、図 1 - 7 である。

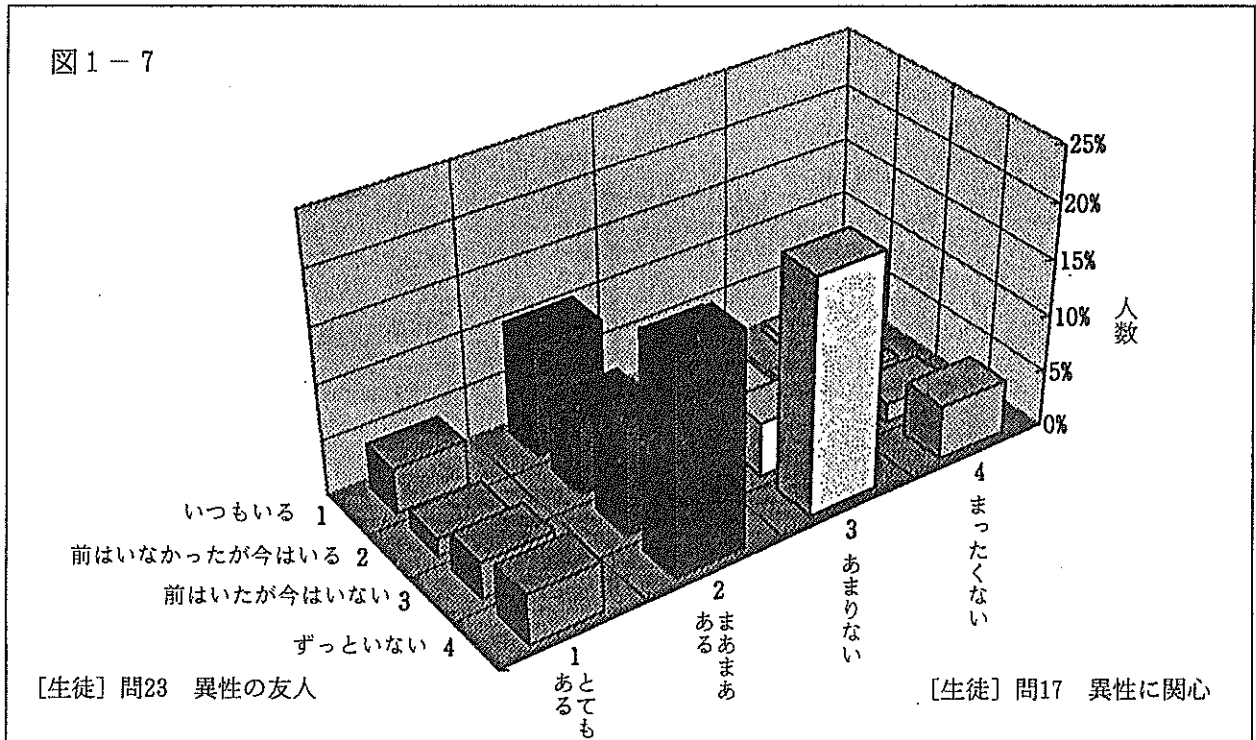
個別集計でみると、異性の友人がいると答えたものが32%、いない68%、異性に関心がある58%、関心がない42%という結果が出ている。クロス集計では、異性の友人がいるものは、異性に関心があると回答したもののうち39%、異性に関心がないと回答したもののうち21%であった。異性の友人を得るには、異性を意識しないとできない。

「あなたは、特定の異性の友だちがいますか」という問と「あなたは、性について関心がありますか」という問とのクロス集計では、異性の友人がいるものは、性について関心があると回答したもののうち38%、性について関心がないと回答したもののうち25%であった。

こうしてみると、異性に対して関心があったり、性について関心があるものは異性の友人をもっていることになる。

異性の友人をもつことは、悪い事ではない。これまでの調査結果からも分かるように、勉強の目的や友人関係においてもよい結果をもたらす。勉強には異性の友人をもつことがマイナスになると考えたり、異性への関心をおし殺したりすることは、性に対する考えをねじ曲げ、人格形成にも良くない影響を及ぼすことになる。

図1-7



2. 親子交流

社会の変化によって子どもたちを取り巻く環境も大きく変わってきた。家庭においても家族間のふれあいやゆとりの時間が減少し、人間関係の稀薄化が問題とされている。

ここでは、親子交流についてどのような意識を持っているかについて調査してみた。

(8) 親への信頼は、どういう交流から生まれるか？

「あなたは、家族のことをどう思っていますか」という家族に対する意識についての問と、「あなたは、家の手伝いをしていますか」という問とのクロス集計を図1-8に示す。

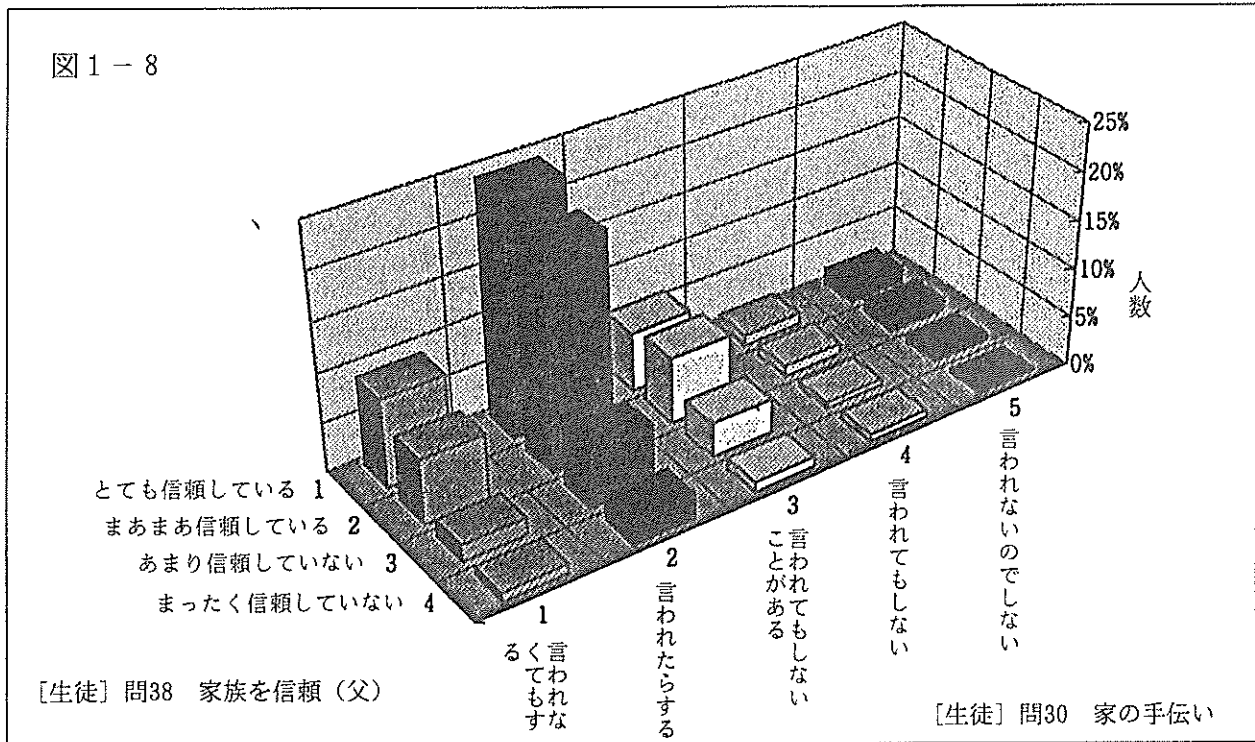
個別集計についてみると、父親を「とても、まあまあ」信頼していると回答したものが81%、母親を「とても、まあまあ」信頼しているが86%で、家の手伝いを「言われなくても」するものが19%、「言われたら」する56%、「しないことがある・しない」が21%であった。

クロス集計についてみると、父親を「とても、まあまあ」信頼しているものが、「言われなくても」すると回答したもののうち84%、母親の場合は89%であった。「言われたら」すると回答したもののうちでは父親で84%、母親の場合は89%であった。「しないことがある・しない」と回答したものでは、父親を「とても、まあまあ」信頼しているものが71%、母親は77%であった。家の手伝いをする中学生ほど、親子の信頼関係ができています。

「あなたは、家族の人と将来や人生のことについて話すことがありますか」という問とのクロスでは、父親を「とても、まあまあ」信頼しているものが、父親と話すことが「よく、ときどき」とあると回答したもののうち90%、母親の場合は94%であった。話すことがないものでは、信頼している割合は父親、母親ともに76%と少ない。

「あなたは、家族の人にきびしくしかられたり、注意されたりするのはどのような事ですか」という問とのクロスでは、父親を「とても、まあまあ」信頼しているものが、父親から「勉強や

図1-8



成績のこと」で叱られたり、注意されたりすると回答したもののうち85%、母親の場合は88%。「きょうだいケンカ等、家業や家事の手伝い」と回答したもののうち、父親で88%、母親の場合は88%。「テレビの見過ぎ、食べ物の好き嫌い、むだ使いやお金のこと」など生活習慣に関するものと回答したもののうち、父親を信頼しているものが79%、母親の場合は81%。「言葉遣い」と回答したもののうち、父親を信頼しているものが75%、母親の場合は91%。厳しく叱られたり、注意されたりすることがないと回答したものでは、父親を信頼しているものが81%、母親の場合は80%であった。

これらのことから、厳しく叱られたり注意されたりすることで親への信頼が薄らぐということではなく、むしろ厳しく叱られることで親の信頼を確認する場合もある。ただ、勉強・成績のことやきょうだいケンカなどに関しては、自分のことを思ってくれていると感じられるが、父親については、テレビの時間や食べ物の好き嫌い、言葉遣いなどの基本的な生活習慣に関することについては、自分でも十分わかっていっていることなのでうるさくいわないでほしいと思っているようだ。

親への信頼を得るには、子ども自身が自分のことを考えてくれていると感じられるか否かで決まってくる。同じ行為であっても、全く反対の結果となることもある。子どもが自分のことを考えてくれていると感じることができる親子の交流が大切である。

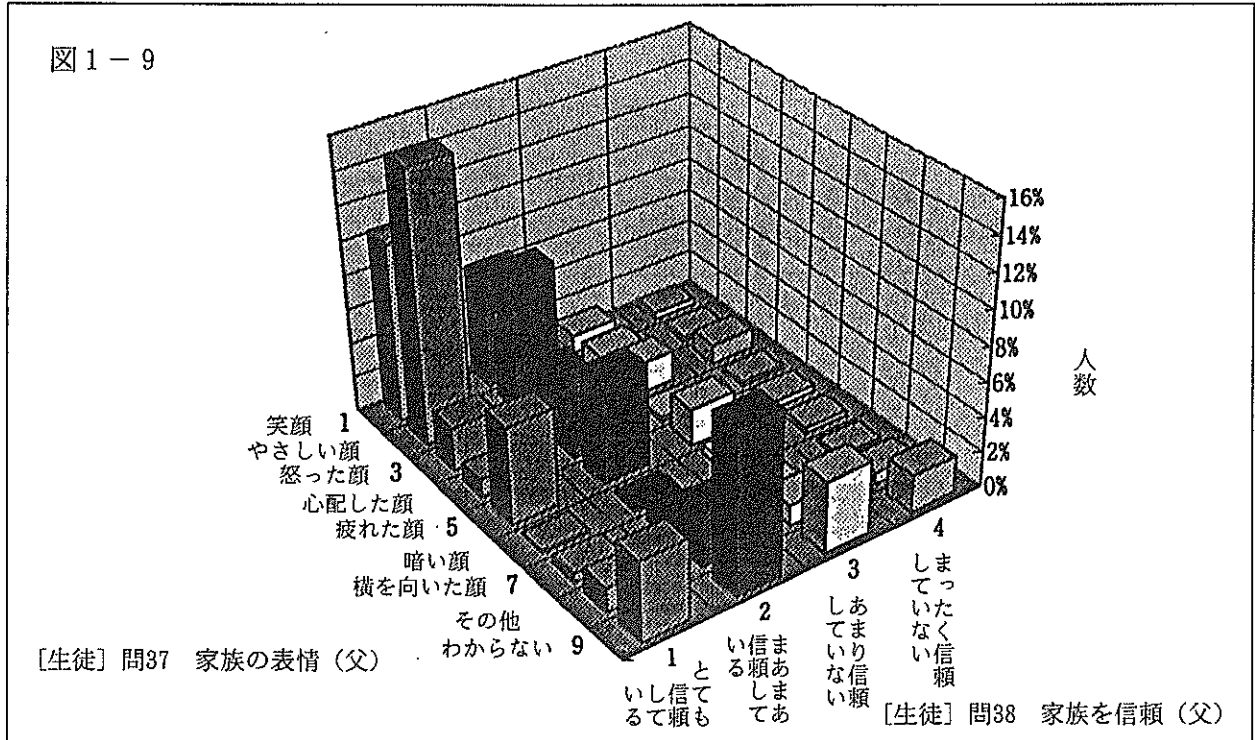
(9) 信頼されている親は、子どもにはどう見えているのか？

子どもから信頼されていると感じている親は少なくない。では、子どもには親の姿はどう見えているのであろうか。

「あなたの家族の顔を思い浮かべてください。どんな表情をしていますか」という問と「あなたは、家族のことをどう思っていますか」という問とのクロス集計を図1-9に示す。

個別集計では、父親の顔を「笑顔、やさしい顔」44%、「怒った顔、心配した顔、疲れた顔」

図1-9



26%、「暗い顔、横を向いた顔、その他」10%、「わからない」21%であった。母親の顔は、「笑顔、やさしい顔」54%、「怒った顔、心配した顔、疲れた顔」24%、「暗い顔、横を向いた顔、その他」6%、「わからない」16%であった。

クロス集計では、父親を「とても、まあまあ」信頼していると回答したもののうち、父親の顔を「笑顔、やさしい顔」と回答したものは51%、母親の場合は60%。「怒った顔、心配した顔、疲れた顔」が信頼している父親で24%、母親で22%だが、信頼していない父親で31%、母親で42%と多い。「わからない」と回答したものが信頼している父親で18%、母親で13%、信頼していない親では、父親38%、母親33%と多い。

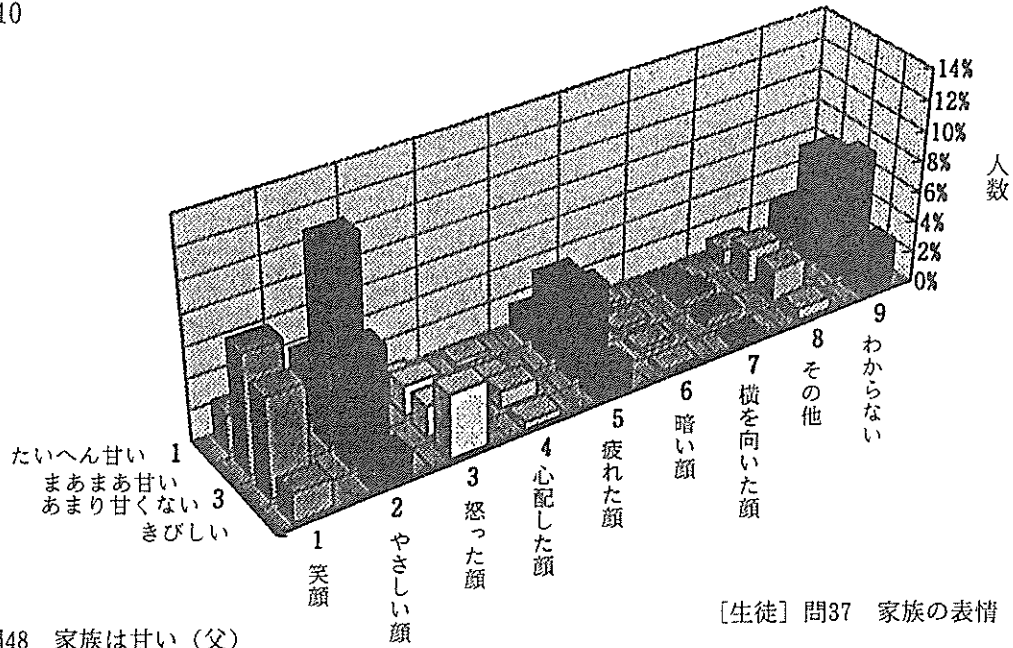
やはり、子どもに対する親の笑顔やさしい顔は、信頼の象徴であるといえる。

「あなたにとって、家族の人はどのような存在ですか」という親のイメージとのクロスでは、父親を信頼していると回答したもののうち、「尊敬でき、たよりになる人・理解のある人」50%、「友達のような親しみのもてる人・いろいろ教え指導してくれる人」26%、「自分勝手に無責任な人・口うるさい人」8%、「生活費を稼いでくれる人・放任で甘い人」13%となった。反対に、信頼していないと回答したものでは、「尊敬でき、たよりになる人・理解のある人」6%、「友達のような親しみのもてる人・いろいろ教え指導してくれる人」6%、「自分勝手に無責任な人・口うるさい人」41%、「生活費を稼いでくれる人・放任で甘い人」35%とまったく逆の結果となった。母親についてもほぼ同じ結果となっている。

(10) 甘い親は、どういう交流の結果なのか？

親の養育態度について甘いと思っている中学生は父親で52%、母親で46%であるが、10年前の調査に比べ父親・母親とも10ポイント強も増えている。中学生がうちの親は甘いと感じるのはどのようなことからなのか。「あなたの家族の顔を思い浮かべてください。どんな表情をしていますか」という問と「あなたの家族の人は、あなたに対して甘いほうだと思いますか」という問と

図 1-10



のクロス集計を図 1-10に示す。

父親を「たいへん、まあまあ」甘いと回答したものが、表情を「笑顔」と回答したもののうち56%、「やさしい顔」では64%、「怒った顔、心配した顔、疲れた顔」では40%、「わからない」では45%の中学生が父親を甘いと思っている。母親では、「笑顔」の場合50%、「やさしい顔」では55%、「怒った顔、心配した顔、疲れた顔」では36%、「わからない」では38%の中学生が母親を甘いと思っている。

「あなたは、家族の人にきびしくしかられたり、注意されたりするのはどのようなことですか」という問とのクロスでは、お父さんのことを甘いと回答したものが、「勉強や成績のこと」で叱られたり、注意されたりすると回答したもののうち44%、「きょうだいケンカ等、家業や家事の手伝い」と回答したものでは50%、「テレビの見過ぎ、食べ物の好き嫌い、むだ使いやお金のこと」など生活習慣に関するものと回答したものでは46%、「ことばづかい」では45%、「特にない」では68%であった。同様にお母さんでは、「勉強や成績のこと」で42%、「きょうだいケンカ等、家業や家事の手伝い」で50%、「テレビの見過ぎ、食べ物の好き嫌い、むだ使いやお金のこと」で50%、「ことばづかい」で42%、「特にない」では56%であった。厳しく叱られることがない子どもほど、親のことを甘いと思っている。特に父親は、子どもとの交流時間が短いため、厳しく叱ることが少なくなり、子どもからは甘いと思われている。

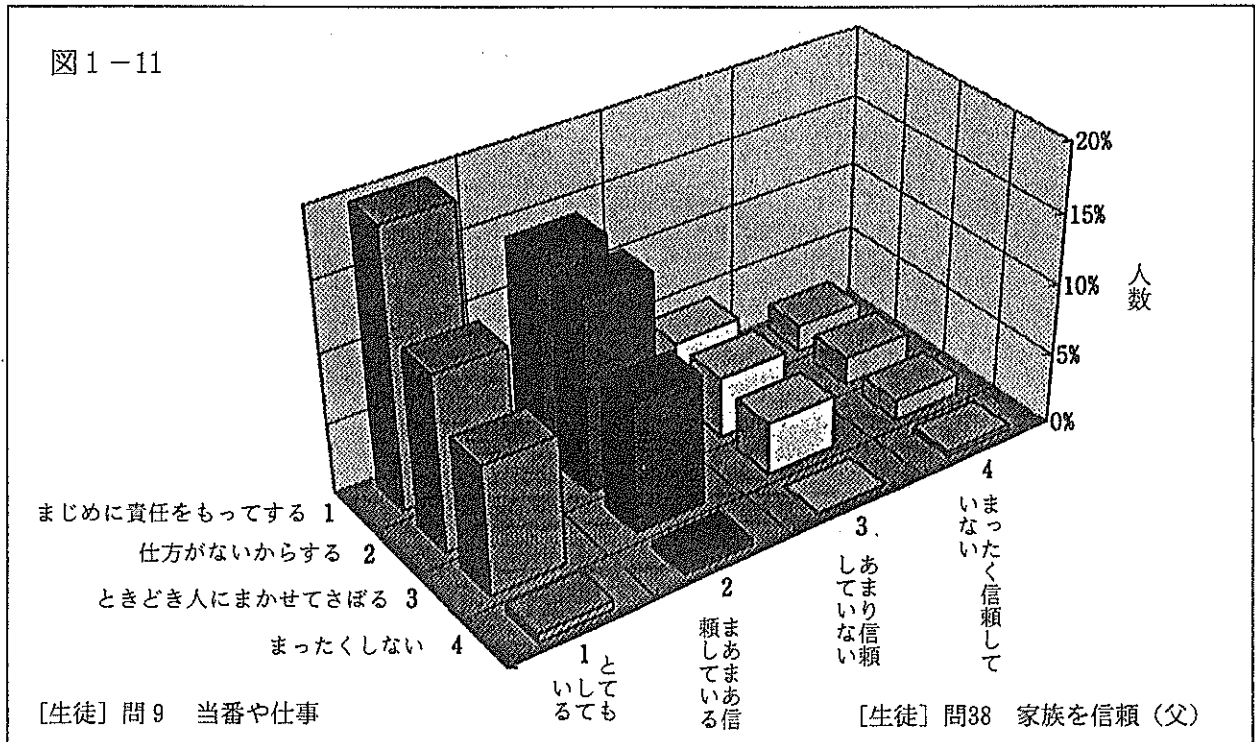
子どもたちは、分かっていることで叱られるのではなく、自分のしたことや自分自身のことでもっと厳しい親を求めているようだ。

(11) 親を信頼することは、子どもをどのように変えるか？

「あなたは、掃除当番やクラスの決められた仕事をどのようにしていますか」という問と「あなたは、家族のことをどう思っていますか」という問のクロス集計を図 1-11に示す。

父親を「信頼している」と回答したもののうち、「掃除当番やクラスの仕事をやる」と回答し

図1-11



たものは76%、母親の場合は76%で、「信頼していない」ものでの父親71%、母親69%より多い。親子の信頼関係が学校の当番や仕事に反映されるという結果が出ている。

「あなたは、どこにいる時に楽しいと感じることが多いですか」という問とのクロスでは、父親を「信頼している」と回答したもののうち、楽しい場所を「家庭」とあげたものは24%、母親の場合も24%であった。逆に、父親を「信頼していない」と回答したものの場合で楽しい場所を「家庭」とあげたものは13%、母親の場合はわずか8%となっており、親を信頼することで家庭が楽しい場所となる。

「あなたは、家庭生活に満足していますか」という問とのクロスでは、父親を「信頼している」と回答したもののうち、「家庭に満足している」と回答したものが85%、母親の場合では83%であった。一方、「信頼していないもの」では、「家庭に満足している」と回答したものは父親で47%、母親で43%であった。

「あなたは、友だちがあなたのことをどう思っているか気にしますか」という問とのクロスでは、父親を「信頼している」と回答したもののうち、友だちの目を「気にする」と回答したものが69%、母親の場合も69%であった。信頼していない場合はそれぞれ68%、62%で、母親でその差が見られる。

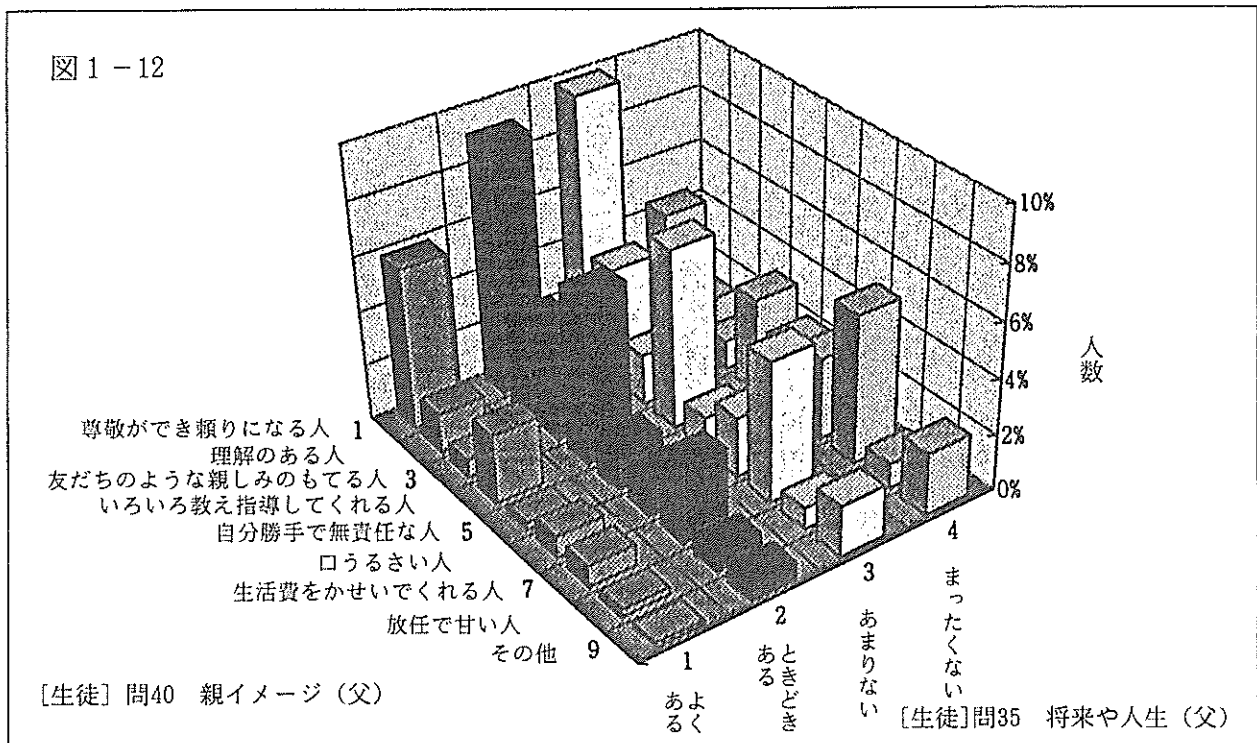
親子の信頼関係は、子どもの家庭生活のみならず学校生活にも影響を及ぼす。親子の信頼関係ができている子どもほど、友だちの目を気にするという結果が出た。親子の信頼関係は、友だちが自分のことをどう思っているか他人からの評価にかかわって、自分を問い直す生き方にも通じることがわかる。

(12) 親のイメージは、どのように形成されていくか？

中学生は、自分の親をどのように思い、そのイメージはどのように形成されていくのだろうか。「あなたにとって、家族の人はどのような存在ですか」という親のイメージについての問と「あ

あなたは、家の手伝いをしていますか」という問とのクロス集計では、「手伝いをする」と回答したもののうち、父親を「尊敬でき、頼りになる人。理解のある人。友だちのように親しみのもてる人。いろいろ教え指導してくれる人」とプラスイメージをもっているものが69%、「自分勝手に無責任な人。口うるさい人。生活費を稼いでくれる人。放任で甘い人」とマイナスイメージしているものが25%であった。母親の場合では、プラスイメージをもっているものが78%、マイナスイメージしているものが18%となっている。家の手伝いをする中学生のほうが、親に対して肯定的な見方をしていることがわかる。

次に、「あなたは、家族の人と将来や人生のことについて話すことがありますか」という問とのクロス集計を図1-12に示す。



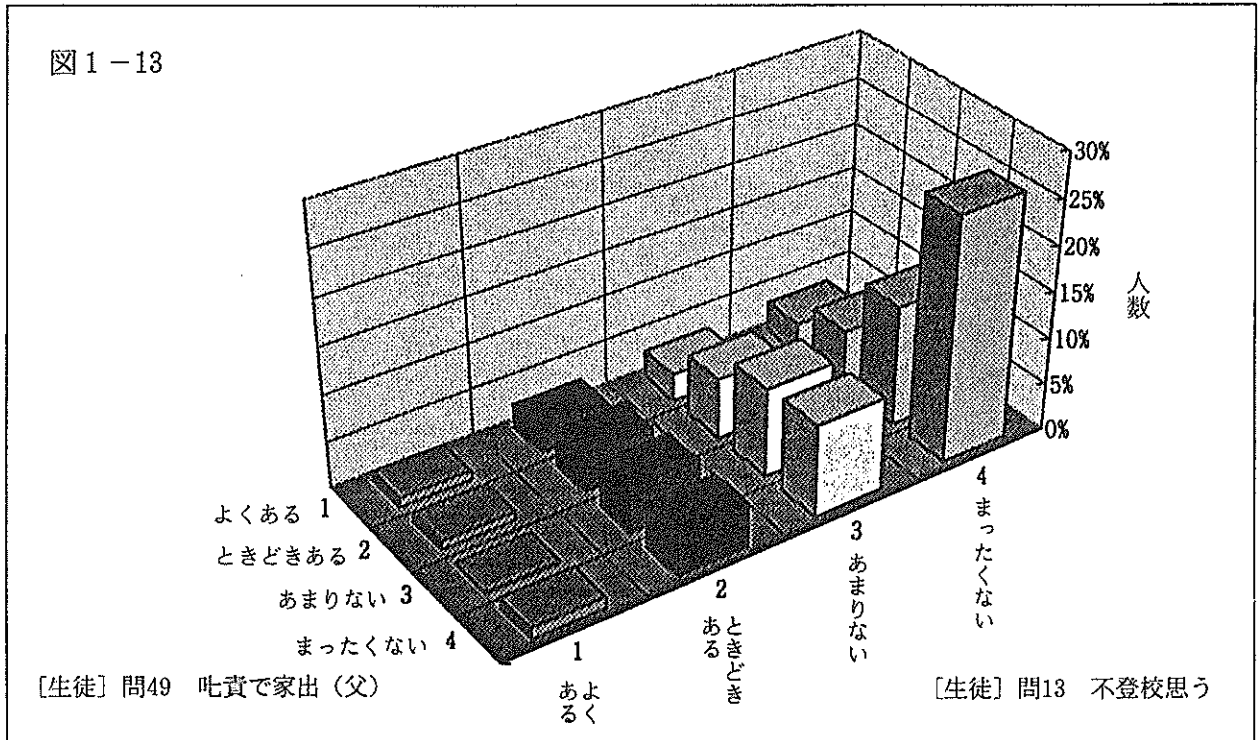
父親に対してプラスイメージをもつものが、「将来や人生のことについて話すことがある」と回答したもののうち76%、マイナスイメージをもつものが21%であった。同様に母親の場合では、プラスイメージをもつものが85%、マイナスイメージをもつものが14%であった。子どもと将来や人生のことについて話すことで、子どもは親のことをよく思う。自分のことを親身になって考えてくれているという思いを子どもに伝えることが大切である。

「あなたは、家族の人にしかられて家を出てしまおうと思ったことがありますか」という問とのクロスでは、家を出てしまおうと「思ったことがない」と回答したものでは、父親にプラスイメージをもっているものが71%、マイナスイメージしているものが27%、母親にプラスイメージを持つもので80%、マイナスイメージのもので17%であった。子どもに家出を考えさせるような叱り方は、親のイメージにとってよくない。

(13) 子どもに家を出たいと思わせる誘因は、どういうものなのか？

「あなたは、家族の人にしかられて家を出てしまおうと思ったことがありますか」という問と「あなたは、最近『明日からもう学校に行かない』と思うことがありますか」という問とのクロ

図1-13



ス集計を図1-13に示す。

父親に「しかられて家を出てしまおうと思ったことがある」と回答したものが、学校に行かないと（不登校を）「思う」と回答したもののうち45%で、思わないものでは23%であった。母親に叱られた場合では、家出を思うものは、不登校を思うものの55%、思わないものの28%であった。不登校を思う子は、親から厳しく叱られて家を出てしまおうと考えがちである。

「あなたは、おたがいに理解し、心を打ち明けて話せる『親友』がいますか」という問とのクロスでは、父親から「しかられて家出を思う」中学生が、「親友がいる」と回答したもののうち30%、「親友がいない」では25%であった。母親から叱られた場合「家出を思う」が、親友がいると35%、いないと29%であった。親友がいると家出するときの不安が軽減されるようである。

「あなたは、学校の勉強についてどう感じていますか」というやる気についての問とのクロスでは、父親から「しかられて家出を思う」ものが「やる気がある」と回答したもののうち25%、「やる気がない」場合は35%と多い。母親から叱られた場合に「家出を思う」ものが、やる気があると30%、やる気がないと40%と多い。勉強のやる気があれば、親から叱られて家出を思うようなことは少ないことがわかる。

「あなたにとって、家族の人はどのような存在ですか」という親のイメージに関する問とのクロスでは、父親から「しかられて家出を思う」ものが父親に対して「プラスイメージをもつ」もののうち24%、母親の場合は28%で、「マイナスイメージ」の父親の場合の39%、母親45%より低くなっている。子どもにとって親が尊敬の対象になっていれば、厳しく叱られたとしても家を出たいという意識を持つことは少ない。

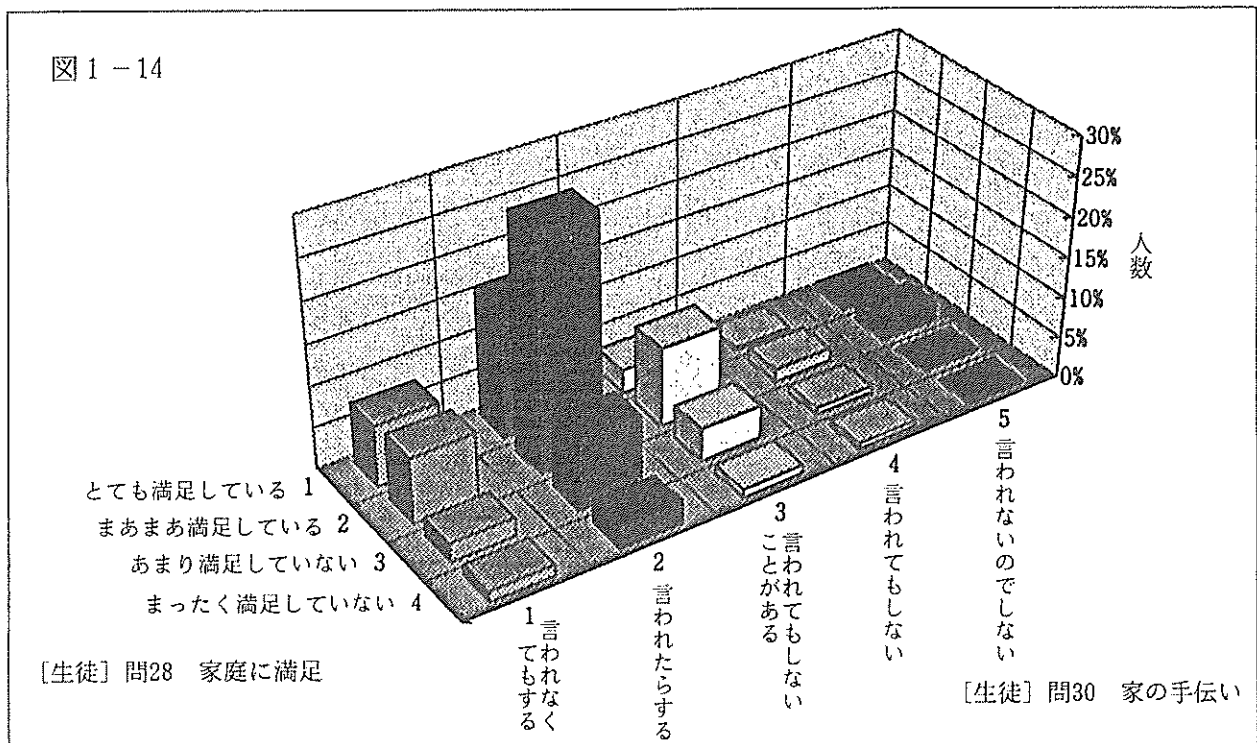
3. 家庭生活

子どもたちにとって家庭とは、基本的な生活習慣を学ぶ場であり、精神的な安定を得る場でもある。この節では、中学生の家庭生活についての状況をクロス集計した結果をもとに述べる。

(14) 家庭生活への満足は、どういう暮らしから得られるか？

中学生になると親から手伝いや勉強などに干渉されることを嫌い、そんな家庭は居心地が悪いと思っているだろうと考えている親が一般的である。そこで、家庭生活への満足度と手伝い、叱責、親の甘さ等がどのような関係があるのかを、調査結果から見てみたい。

「あなたは、家庭生活に満足していますか」の問と「あなたは、家の手伝いをしていますか」の問とのクロス集計を図1-14に示す。



個別集計についてみると、中学生の19%が「言われなくても」家の手伝いをしており、56%が「言われたら」する、21%が「言われても」手伝いをしない。家庭については78%が満足している。クロス集計についてみると、家庭に満足していると回答したものが「言われなくてもする」と回答したもののうち83%、「言われたらする」では79%、「言われてもしない」では68%であった。やはり、家の手伝いをする中学生ほど家庭に対する満足度が高い。

「あなたは、家族の人とテレビのことやスポーツのことなどについて話すことがありますか」という問とのクロスでは、家庭に「満足している」と回答したものが父親と「話すことがある」と答えたもののうち86%、母親の場合は84%で「話すことがない」場合より20ポイント以上大きい。

「あなたが家族の人に厳しくしかられたり、注意されたりするのはどのようなことですか」という問とのクロスでは、「家庭に満足している」と回答したものが父親から「勉強や成績のこと」で叱られると回答したもののうち77%、「兄弟姉妹げんか・家業や家の手伝い」と回答したものでは88%、「テレビの見すぎ・食べ物の好き嫌い・むだ使いやお金のこと」と回答したものでは

79%、「ことばづかい」と回答したものでは82%、「特にない」と回答したものでは82%となっている。母親の場合と比べてみると、「兄弟姉妹げんか・家業や家の手伝い」と回答したもので「家庭に満足している」と回答したものは80%で「テレビの見すぎ・食べ物の好き嫌い・むだ使いやお金のこと」と回答したものでは87%であった。家庭内の生活について叱る場合は、父親よりも母親のほうが説得力があるのだろう。また、「ことばづかい」と回答したものでは67%となっており、これは母親よりも父親のほうがよいようだ。

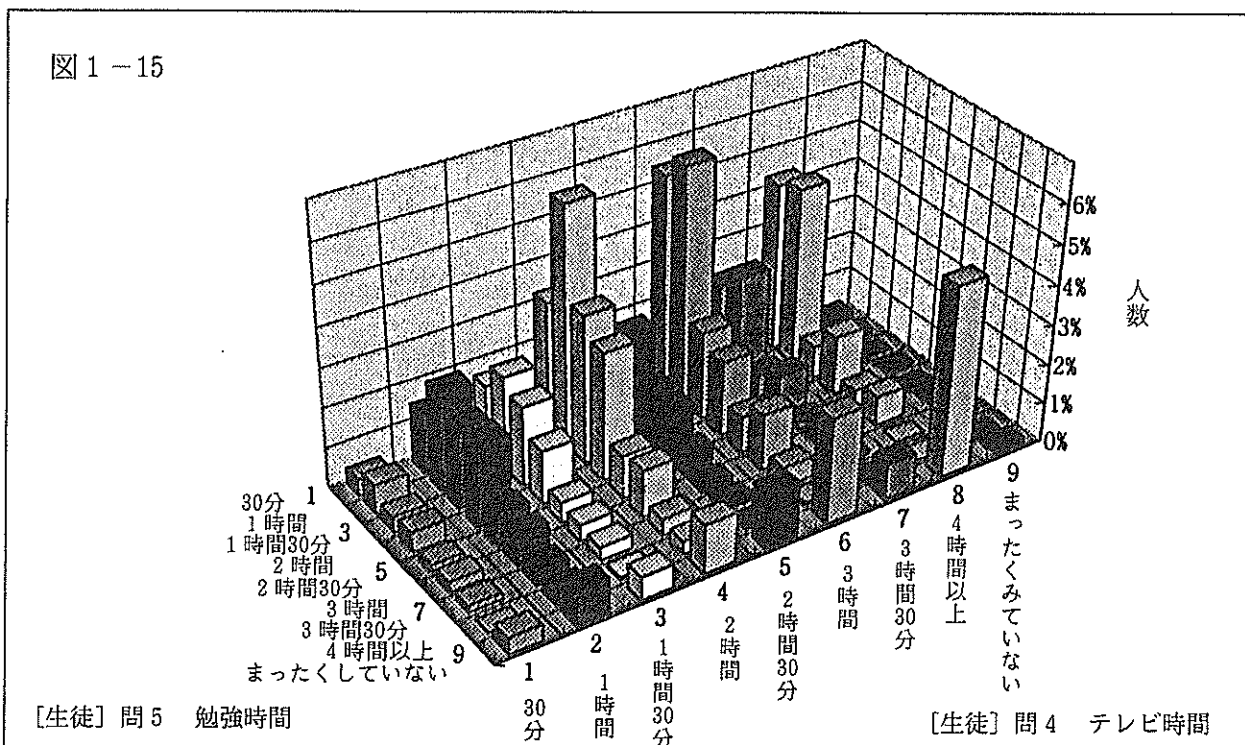
「あなたの家族の人は、あなたに対して甘いほうだと思いますか」の問とのクロスでは、家庭に「満足している」と回答したものは父親を「甘い」と回答したもののうち82%、母親を「甘い」と回答したものの場合は80%で「甘くない親」と思っているもののうちで「家庭に満足している」ものは、両親とも75%であった。家族は甘いと感じている中学生ほど家庭に満足している割合が高い。

(15) 勉強時間のやりくりは、どのようになされているか？

中学生にとって勉強は、大きな関心事である。中学生は勉強時間のやりくりをどのようにしているだろうか。ここでは、勉強時間がテレビ、塾や家庭教師、間違い直し等とどのような関係があるかを、中学生のアンケート結果から見てみたい。

「あなたは、ふだん家庭で平均して1日どのくらい勉強していますか」の勉強時間の問と「あなたは、平均してテレビを1日どのくらいみていますか」というテレビ視聴時間の問とのクロス集計を図1-15に示す。

個別集計では、中学生のテレビ視聴時間は、3時間程度の30%、2時間程度の30%、4時間程度の26%、1時間程度の14%であった。クロス集計について、テレビ視聴を2時間程度より以下と以上の2つに分けて勉強時間をみると、テレビの時間が「2時間以下」と回答したものの勉強時間は、「1時間30分～2時間程度」37%、「1時間程度」29%、「30分程度」16%であった。テ



テレビ視聴が「2時間30分以上」と回答したものでは、「1時間程度」が最も多く31%、「30分程度」23%、「1時間30分～2時間程度」19%、「まったくしていない」19%とテレビを長く見ている中学生ほど勉強時間が短い。

「あなたは、今学習塾に通ったり家庭教師についたりしていますか」の問とのクロスでは、「学習塾に通っている」と回答したものの勉強時間は、「1時間30分～2時間程度」29%、「1時間程度」24%、「30分程度」19%である。「学習塾、家庭教師どちらもしていない」と回答したものでは、「1時間程度」28%、「30分程度」24%、「1時間30分～2時間程度」24%であった。学習塾に通っているもののほうが、勉強時間が長い。

「あなたは、試験で間違えたところを後でやり直してみますか」の問とのクロスでは、「間違い直しをしている」中学生のほうが勉強時間も多し。また、間違い直しをしない中学生は、全く勉強しない中学生に多いという結果が出ている。

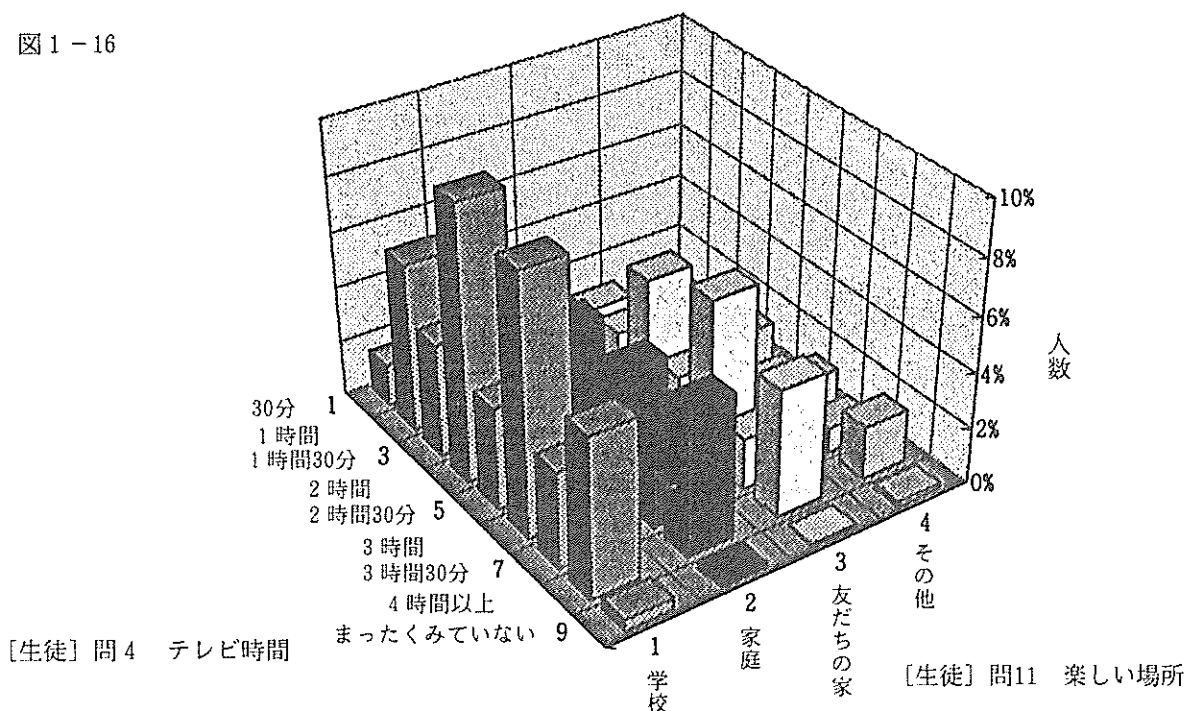
(16) テレビをつい見てしまうということは、どういうことか？

中学生にとってテレビは、興味ある話題や流行を得る情報源であり、日常生活の一部になっている。中学生はテレビとどんな付き合いをしているのだろうか。ここでは、テレビが楽しい場所、番組、流行等とどのような関係があるかを、中学生のアンケート結果からみてみたい。

「あなたは、平均してテレビを1日どのくらいみていますか。(日曜日や休日はのぞく)」のテレビの時間の問と「あなたは、どこにいる時に楽しいと感じることが多いですか」の楽しい場所の問とのクロス集計を図1-16に示す。

個別集計では、中学生のテレビの視聴時間は、「2時間程度」が30%、「3時間程度」が30%で最も多かった。また、楽しい場所としては、学校44%、家庭23%、友だちの家が25%であった。クロス集計では、楽しい場所を「学校」と回答したもののテレビ視聴時間は、「1時間30分、2時間程度」が最も多く33%、次に「2時間30分、3時間程度」が30%であった。楽しい場所を「家

図1-16



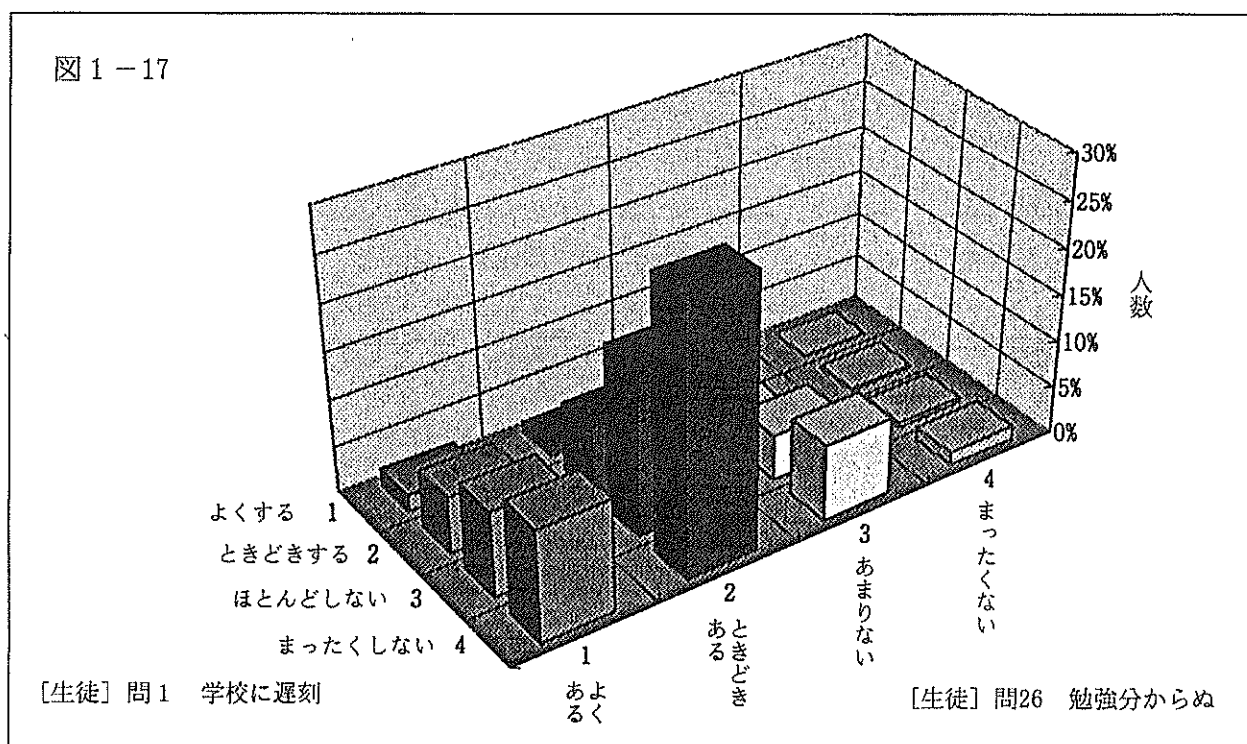
庭」と回答したものでは、「2時間30分、3時間程度」が32%、「3時間30分、4時間以上」が32%であった。「友だちの家」としたものは、「2時間30分、3時間程度」が32%、「1時間30分、2時間程度」「3時間30分、4時間以上」がそれぞれ28%であった。学校が楽しい場所となっている中学生は、他に比べテレビの時間が短くなっており、家庭が一番楽しい場となっている中学生はテレビをよく見ている。

「あなたの友だちの中で、よく話題になるのは何ですか」の問とのクロスでは、テレビの時間を2時間までと2時間30分以上に分けてみると、テレビの時間が2時間30分以上のものが、友だちとの話題を「部活動や学級の出来事」としたもので40%、「芸能やスポーツ、服装や髪型のこと」が86%、他は60%弱となっている。服装や髪型、学校外の情報を話題の主としているものは、テレビの視聴時間が長い。

(17) 遅刻をしてしまうということは、どういうことか？

中学生になると少しずつ親の管理の枠から離れ、自分で判断した結果として行動しようとするようになる。そこで、遅刻が勉強の理解度・勉強のやる気、明日への期待度等と、どのような関係があるのかを、中学生のアンケート結果からみて見たい。

「あなたは、学校に遅刻しますか」という問と「あなたは、学校の勉強でわからないことがありますか」の問とのクロス集計を図1-17に示す。



学校の勉強でわからないことが「よく・ときどき」と回答したもののうち、学校に遅刻を「よく・ときどき」するものが19%であった。逆に、「わからないことがない」と回答したもののうち遅刻を「よく・ときどき」するものは7%であった。

「あなたは、学校の勉強についてどう感じていますか」という勉強のやる気とのクロスでは、遅刻を「よく・ときどき」するものが、「やる気がある」と回答したもののうち13%、「やる気がない」と回答したもののうちでは30%であった。

勉強がわからない面白くない、やる気もない子どもにとっては、登校することがつらく遅刻しがちになることが多い。

「あなたは、最近夜眠りにつくときに明日のことを考えて、朝起きることが楽しいと感じることがありますか」の問とのクロスでは、遅刻を「よく・ときどき」するものが、明日のことを考えて、朝起きることが「楽しいと感じる」と回答したもののうち14%、「楽しみでない」と回答したもので24%、「何とも思わない」ものでは18%であった。明日への期待度が高い中学生は、遅刻も少ない。

遅刻をし始めたら、中学生の気持ちのどこかに隙間ができていると思うことが必要である。毎日の生活の充実感、行動にも反映される。明日も頑張るぞという気持ちや、明日こそはという期待感をもって生活することも大切である。

4. 地域生活

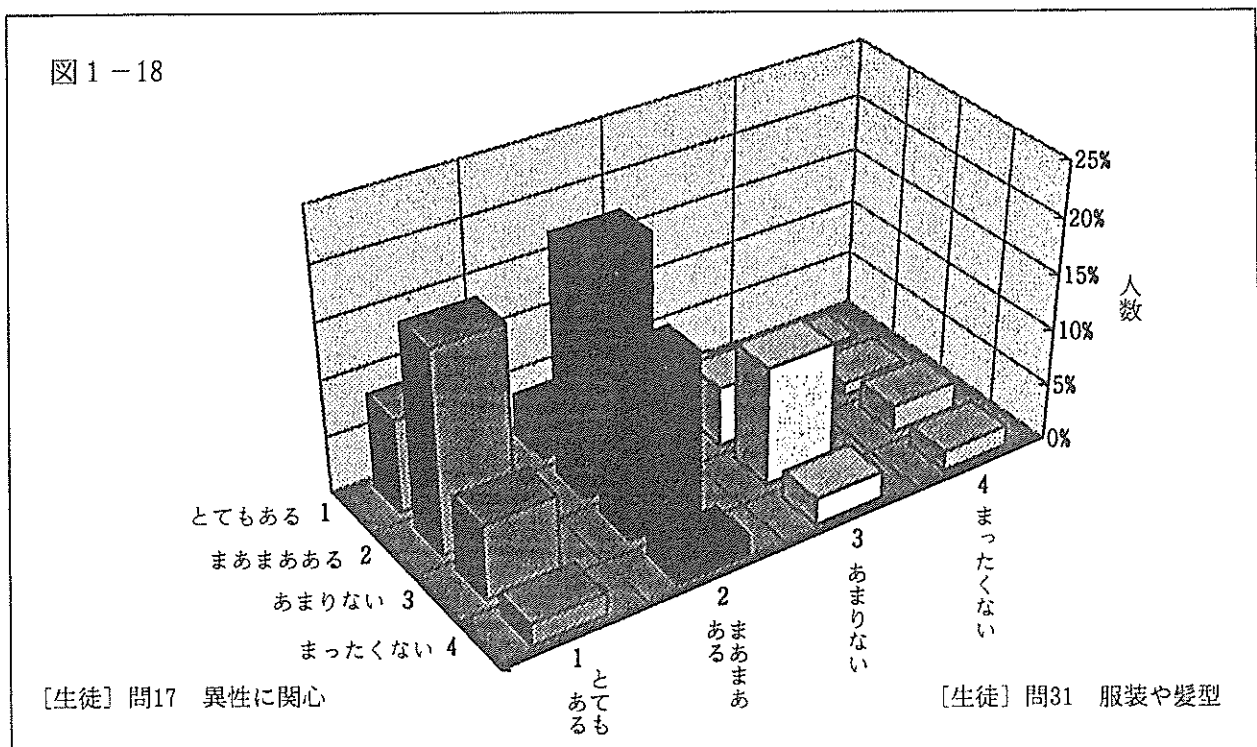
この節では、異性への関心、明日への期待、楽しい場所等の状況をクロス集計した結果について述べる。

(10) 異性への関心は、どういう場面に現れるか？

中学生になると、異性への関心は学年が上がるにつれて高くなるのは当然である。そこで、異性への関心が服装・髪型、流行、異性の友人、性への関心、悩み、テレビ番組等とどのような関係があるかを、中学生のアンケート結果から見てみたい。

「あなたは、異性に関心がありますか」の問と「あなたは、服装や髪型などファッションに関心がありますか」の問のクロス集計を図1-18に示す。

異性に関心が「とても、まあまあ」ある中学生は、服装や髪型などファッションに関心が「とても、まあまあある」と回答したもののうち67%、ファッションへの関心が「あまり、まったく」



ないと回答したものでは30%であった。ファッションへの関心が高い中学生のほうが、異性への関心度が高いことがうかがえる。

「あなたは、性について関心がありますか」の問とのクロスでは、「異性に関心がある」と回答したものは、性について関心が「とても、まあまあ」と答えた中学生のうち88%で、「性について関心がない」と答えたもので31%であった。性について関心がある中学生は、異性についても関心を持つものが多い。

「あなたは、流行を気にするほうですか」の問とのクロスでは、「異性に関心がある」と回答したものは、「流行を気にする」中学生で68%、「流行を気にしない」と回答したものでは43%で、流行を気にする中学生のほうが異性に関心があるという結果が出ている。

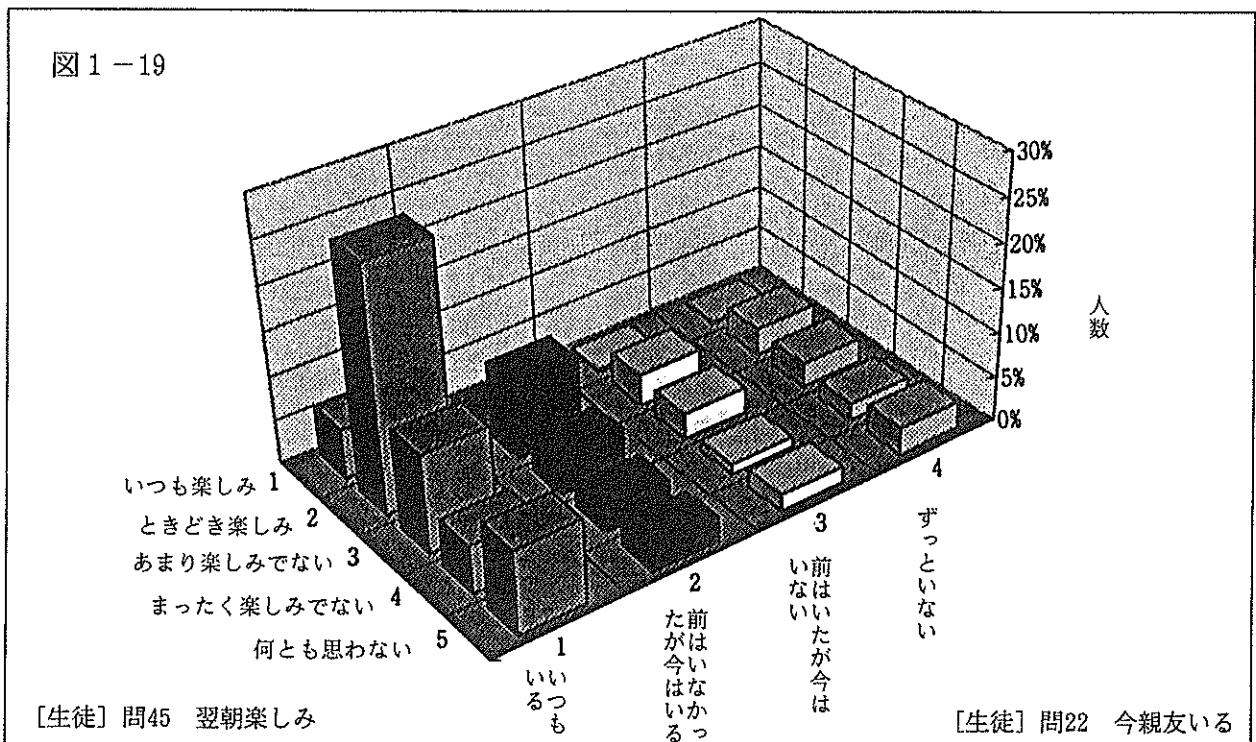
「あなたは、どんなテレビ番組を見ますか」の問では、よく見る番組が、「ドラマ」34%、「クイズバラエティ」23%、「歌謡、アニメーション」19%の順になっている。これを異性への関心度とクロスしてみると、異性に関心のある中学生は、よく見る番組がドラマと回答したもののうち73%、クイズバラエティでは52%、歌謡、アニメーションでは45%であった。

テレビドラマは、恋愛ものが多い。そのためか、圧倒的にテレビドラマを見る中学生は、異性への関心度が高い。

(19) 明日への期待は、どういう状況から生まれるか？

子どもにとって、翌日に楽しいことをひかえていることは、興奮を覚え生きがいにつながることになる。そこで、明日への期待が親友の有無、異性への関心、楽しい場所等と、どのような関係があるのかを、中学生のアンケート結果から見てみたい。

「あなたは、最近眠りにつくときに明日のことを考えて、朝起きることが楽しいと感じることがありますか」の問と「あなたは、おたがいに理解し、心をうちあけて話せる親友がいますか」の問とのクロス集計を図1-19に示す。



個別集計では、79%の中学生に親友がいる。クロス集計では、明日のことを考えて朝起きることが「楽しみ」と回答したものは、親友がいる中学生のうち55%、「楽しみでない」が29%、「何とも思わない」が16%であった。「親友がいない」と回答したものでは、「楽しみ」と回答したものは33%、「楽しみでない」が43%、「何とも思わない」が24%であった。やはり、親友がいる中学生のほうが明日への期待度は高く、親友がいない中学生は、何とも思わない無味乾燥な日々を送っているものの割合が高い。

「あなたは、どこにいる時に楽しいと感じることが多いですか」の問とのクロスでは、朝起きることが楽しみと回答したものは楽しい場所を「学校」と回答したものが63%、「家庭」と回答したものが44%、「友だちの家」は40%であった。

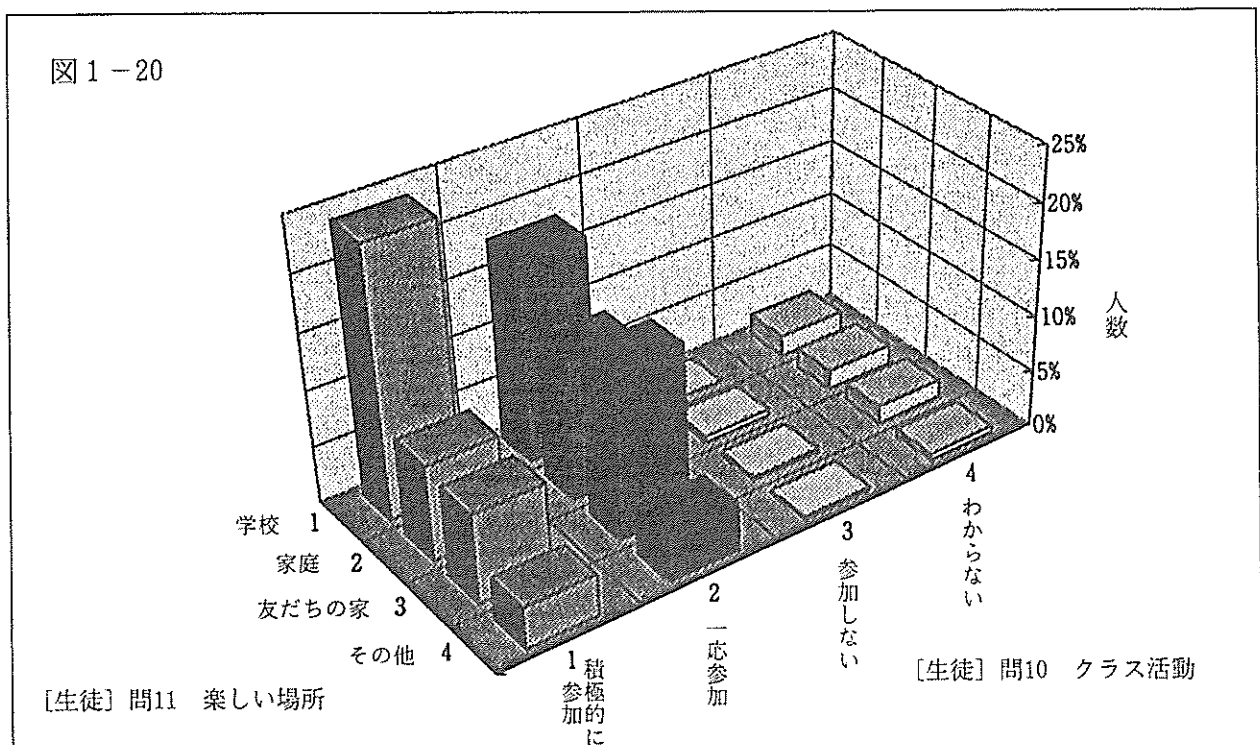
「あなたは、異性に興味がありますか」の問とのクロスでは、「朝起きることが楽しみ」と回答したものは、異性に興味があると回答したもののうち56%、「楽しみでない」31%、「何とも思わない」14%であった。逆に、異性に「関心がない」と回答したものの場合、「楽しみ」と回答したものは43%、「楽しみでない」35%、「何とも思わない」23%であった。

明日への期待は、友だちを始め充実した学校生活を送っているかいないかで大きく変わってくる。

② 学校が楽しいということは、どういうことか？

中学生にとって学校は、勉強の場であるとともに仲間との楽しい生活の場でなければならない。そこで、学校が楽しいということが安心できる場、クラス活動の参加、親友の有無、異性への関心、勉強の理解度等とどのような関係があるかを、中学生のアンケート結果から見てみたい。

「あなたは、どこにいる時に楽しいと感じることが多いですか」の問に対して、「学校」が44%、「家庭」が23%、「友だちの家」が25%、「その他」が9%と、学校が楽しいと答えた中学生が圧倒的に多い。



「あなたは、体育祭・クラスマッチ・文化祭などクラス全体で何か活動するとき、どのような態度をとりますか」というクラス活動の問とのクロス集計を図1-20に示す。

個別集計では、「積極的にクラス活動に参加する」と回答したものは44%、「一応参加する」が49%であった。クロス集計では、楽しい場所を「学校」と回答したものは、「積極的に参加する」と回答したもののうち55%であった。「一応参加する」と回答したものでは37%で、クラスの活動への参加態度で学校が楽しい場所になる・ならないが変わってくる。

「あなたは、おたがいに理解し、心をうちあけて話せる親友がいますか」の問とのクロスでは「親友がいる」と答えたもののうち、楽しい場所を「学校」と回答したものは47%、「家庭」21%、「友だちの家」24%であった。「親友がいない」と答えたものの場合、「学校」と回答したものは29%、「家庭」29%、「友だちの家」29%であった。

「あなたは、異性に関心がありますか」の問とのクロスでは、「異性に関心がある」と回答したもののうち、楽しい場所を「学校」と回答したものは48%、「家庭」19%、「友だちの家」26%であった。「関心がない」と答えたものの場合、「学校」と回答したものは38%、「家庭」30%、「友だちの家」23%であった。友だちがいて、関心ある異性がいて、クラス活動も充実していれば、学校が楽しい場所になる。

5. 自己評価

中学生という時期は、自分が気になる年ごろである。しかし、まだ経験が乏しいので、客観的に正しく自分を把握することができない。自分に関することにとっても敏感で、些細なことで怒りを爆発させたり、単純に有頂天になったりする面がある。

試験の結果に一喜一憂し、成績がちょっと下がっただけで世の中が真っ暗になったように感じたり、親友に裏切られて絶望感に陥ったりするのもこのころである。

ここでは、中学生の「自己評価」や「悩み」等についての課題を明らかにすることを目標とする。

(2) 自主性・積極性・忍耐力は、どういうことから身につくか？

自主性に関して「あなたは、自分で判断し行動しようとしていますか」という問に対し、「いつも、ときどき」していると答えた中学生は81%であったが、「あなたは、掃除当番やクラスの決められた仕事をどのようにしていますか」という問とのクロス集計を図1-21に示す。

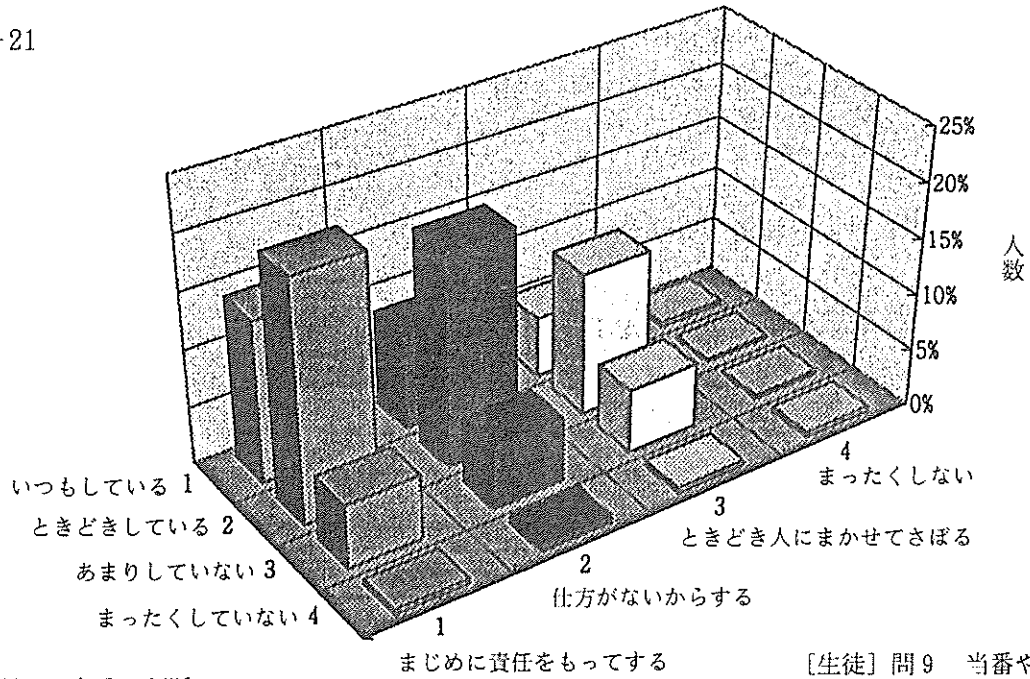
「自分で判断し行動しようとしている」と回答したものは、当番や仕事を「まじめに責任をもってする」と回答したもののうち85%、「仕方がないからする」と回答したもので79%、「ときどき人にまかせてさぼる」では75%であった。

「あなたは、体育祭、クラスマッチ、文化祭などクラス全体で何か活動するとき、どのような態度をとりますか」という問とのクロスでは、「自分で判断し行動しようとしている」と回答したものは、「積極的に参加する」と回答したもののうち89%、「一応参加する」と回答したものでは78%であった。

クラスの当番や仕事に責任をもち、クラスの活動にも積極的に参加する中学生は、自主性が身についているといえる。

また、「あなたは、家の手伝いをしていますか」という問とのクロスでは、「自分で判断し行動しようとしている」と回答したものは「手伝いを言われなくてもする」と回答したもののうち89

図 1-21



[生徒] 問14 自分で判断

[生徒] 問9 当番や仕事

、「言われたらする」では81%、「言われてもしないことがある」では76%であった。家の手伝いを進んでする中学生のほうが、自主性がある。

積極性は、どういうことから身につくか？

「あなたは、自分から進んで物事に取り組もうとしていますか」という積極性に関する問と「あなたは、学校に遅刻をしますか」という問とのクロスでは、「進んで取り組もうとしている」ものは、「学校に遅刻をする」と答えた中学生のうち56%、「遅刻しない」と答えたものでは70%で、遅刻をしない中学生のほうが積極性がある。

「あなたが、ふだん勉強するのはどうしてですか」という勉強の目的に関する問とのクロスでは、「進んで取り組もうとしているもの」は、「よい成績をとりたい、希望する学校や会社に入りたい、人や社会の役に立ちたい、いろいろなことを知りたい」等の積極的な目的意識をもっているもののうち71%、「学校でみんなについて行けないと困る、学校に行っているから、親やまわりの人が勉強しろというから、なんとなく」等の消極的な目的意識をもつもので60%であった。はっきりとした目的を持つことにより、積極性が身についてくる。

「あなたは、掃除当番やクラスの決められた仕事をどのようにしていますか」という問とのクロスでは、「進んで取り組もうとしているもの」は、「当番や仕事をまじめに責任をもってする」と回答したもののうち81%、「仕方がないからする」と回答したもので62%であった。

「あなたは、学校の勉強でわからないことがありますか」という問とのクロスでは、「進んで取り組もうとしているもの」は、「わからないことがある」と回答したもののうち67%、「ない」と回答したものでは77%であった。勉強の理解度は行動にあらわれ、積極性に関係している。

忍耐力は、どういうことから身につくか？

「あなたは、掃除当番やクラスの決められた仕事をどのようにしていますか」という問とのクロスでは、「がまんしようとしている」ものは、「当番や仕事をまじめに責任をもってする」と回答したもののうち90%、「仕方がないからする」と回答したもので82%、「ときどき人にまかせて

さぼる」と回答したものでは79%であった。

学校に遅刻することがなかったり、当番や仕事、クラス全体での活動にまじめに積極的に参加する中学生は、忍耐力が身につけているといえる。

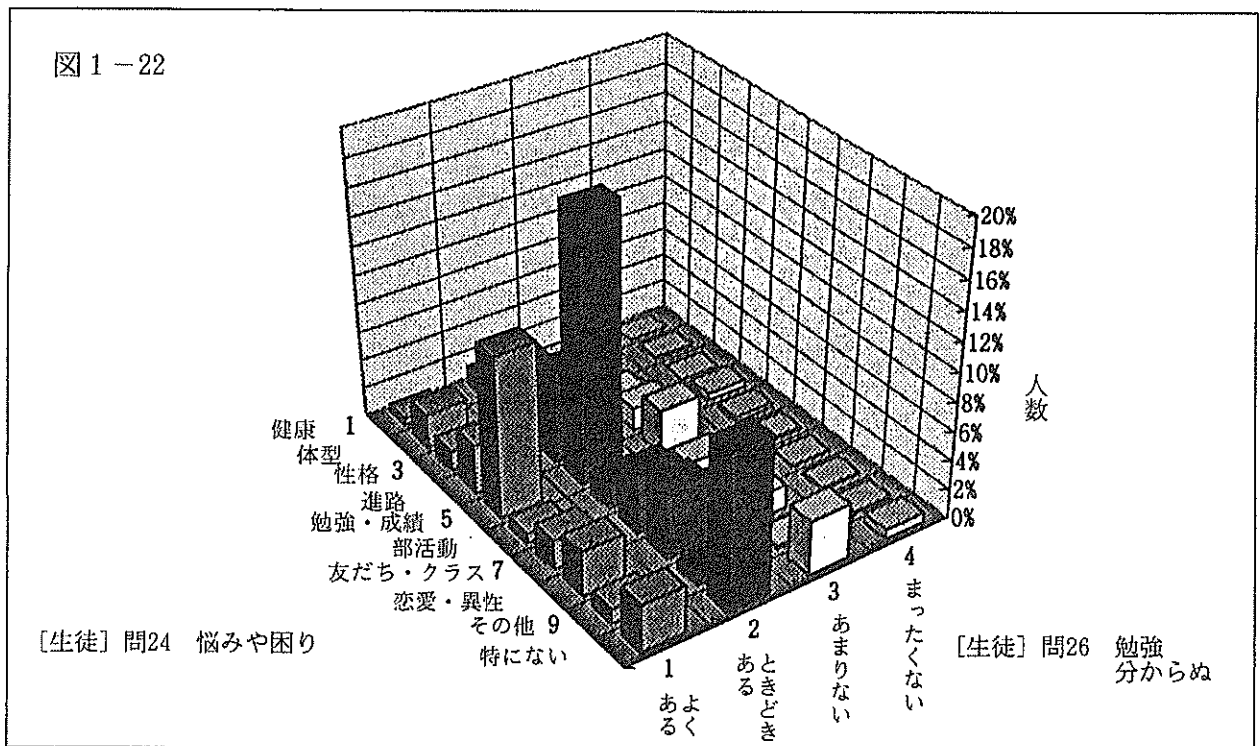
「あなたは、家や学校で手伝いをして、『ありがとう』といわれたことがありますか」という問とのクロスでは、「がまんしようとしている」と回答したものが、「いつも言われる」と回答したもののうち91%、「ときどき言われる」と回答したものでは86%、「あまり言われたい」では74%であった。

また、父母との信頼に関する問とのクロスでは、父親、母親どちらに対しても信頼していると答えた中学生のほうが、がまんしようとしている結果が出た。

(2) 悩みは、どういうことから生まれるか？

前でも述べたように、中学生は自分に関することに敏感である。たいしたことでないことに優越感をもったり、必要のないことに劣等感を抱いて悩むというようなことがよくある。ここでは、悩みはどういうことから生まれるかについて考えてみた。

「あなたが、今もっとも悩んでいること、困っていること」への問と「あなたは学校の勉強でわからないことがありますか」という問のクロス集計を図1-22に示す。



勉強でわからないことが「よく、ときどき」と回答したもののうち、「勉強・成績」を悩んだり困ったりしていることあげたものは35%、悩んだり困ったりしていることが「特にない」が17%、勉強でわからないことが「ない」と回答したもので、「勉強・成績」をあげたものは19%、「特にない」が31%であった。やはり、勉強の理解は中学生にとって悩みの種の一つとなっていることがわかる。

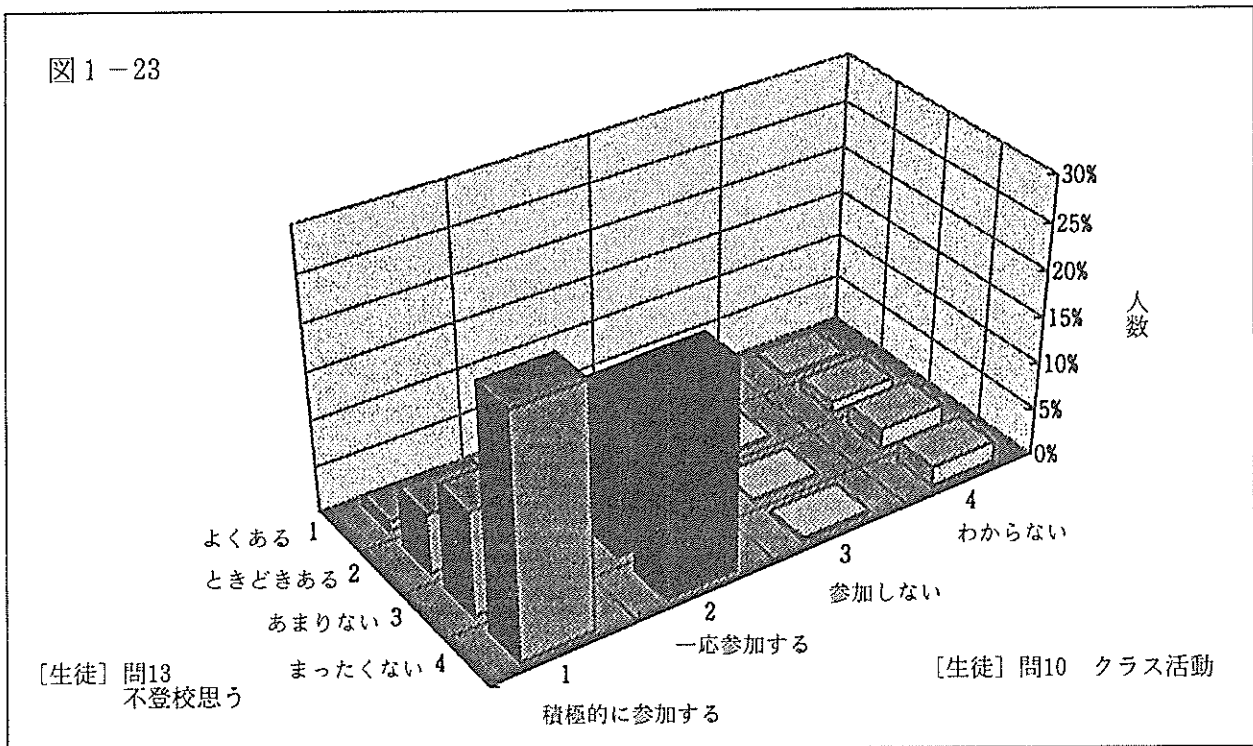
「あなたは、異性に関心がありますか」という問とのクロスでは、「異性に関心がある」と回答したもののうち、悩んだり困ったりしていることに「恋愛・異性」をあげたものが15%、「特に

ない」が14%であった。「異性に興味がない」と回答したもののうち、「恋愛・異性」をあげたものは3%、「特にない」が26%と、恋愛・異性も中学生の悩みの原因になっている。

「あなたは、家庭生活に満足していますか」という問とのクロスでは、「満足している」と回答したもののうち、悩んだり困ったりしていることが「特にない」と回答したものは21%、「満足していない」と回答したもので、「特にない」と回答したものは15%であった。家庭生活に満足していれば、悩んだり困ったりすることの割合が低くなることがわかる。

(23) 不登校に誘うような要因は、どこに潜んでいるか？

「あなたは、最近『明日からもう学校に行かない』と思うことがありますか」という問に対し、2割程度はあると答えている。この不登校の意識の問と「あなたは、体育祭、クラスマッチ、文化祭などクラス全体で何か活動するとき、どのような態度をとりますか」という問とのクロス集計を図1-23に示す。



「学校に行かないと思うことがある」と回答したものが、クラス全体の活動に「積極的に参加する」と回答したもののうち16%、「一応参加する」と回答したもののうち22%で、クラス活動に積極的な中学生のほうが不登校を思わない。

「あなたは学校の勉強でわからないことがありますか」という問のクロスでは、学校に行かないと思うことがあると回答したものが、勉強で「わからないことがある」と回答したもののうち21%、「わからないことがない」と回答したもので12%であった。勉強が分からないから学校に行きたくないと思っている中学生も割合としては高いことがわかる。

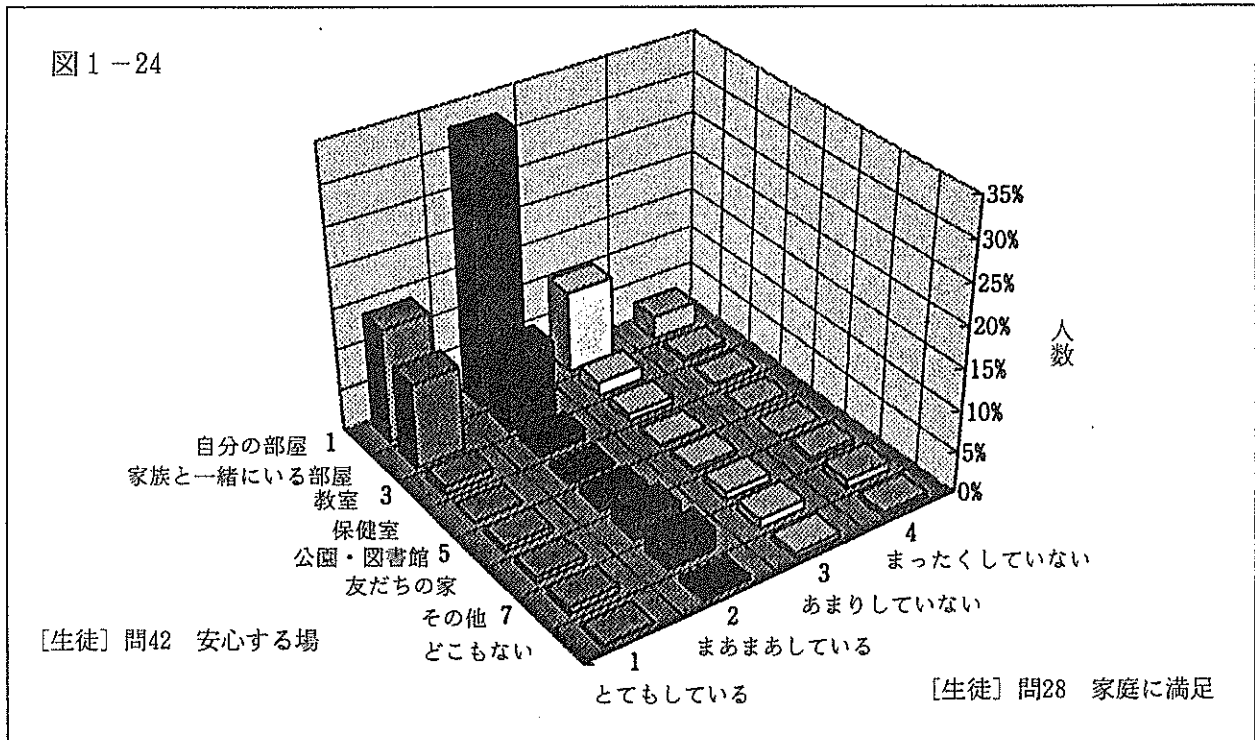
「あなたは、家庭生活に満足していますか」という問とのクロスでは、「学校に行かないと思うことがある」と回答したものが、「満足している」と回答したもののうち18%、「満足していない」と回答したもので33%であった。

これらのことから、学校に行きたくないと思わせる要因は、学校生活や家庭生活の満足度や活

動や行動に対する意識と関係し、不満や意欲のなさが不登校に誘う要因として考えられる。

(24) 安心する場は、どのように選ばれているか？

「あなたが一番ほっとすることができる場所は、どこですか」という問の結果は、「自分の部屋」が60%、「家族と一緒にいる部屋」が22%、「どこにもない」が2%であった。この問と「あなたは、家庭生活に満足していますか」という問とのクロス集計を図1-24に示す。



「家庭に満足している」と答えた中学生のうち、安心する場所として、「自分の部屋」が61%、「家族と一緒にいる部屋」が25%であった。逆に、「満足していない」と答えた中学生では、「自分の部屋」54%、「家族と一緒にいる部屋」13%であった。家庭に満足していなければ、家族と一緒にいる部屋は安心できる場所とはなりにくい。

「あなたは家族のことをどう思っていますか」という問とクロスでは、「父親を信頼している」と答えた中学生では安心する場所として、「自分の部屋」60%、「家族と一緒にいる部屋」26%、「信頼していない」と答えた中学生では、「自分の部屋」69%、「家族と一緒にいる部屋」6%となっている。母親の場合もほぼ同じ結果となった。

家庭に満足感を感じ、父母を信頼できるような関係であれば家族と一緒にいる部屋も安心できる場所となる。

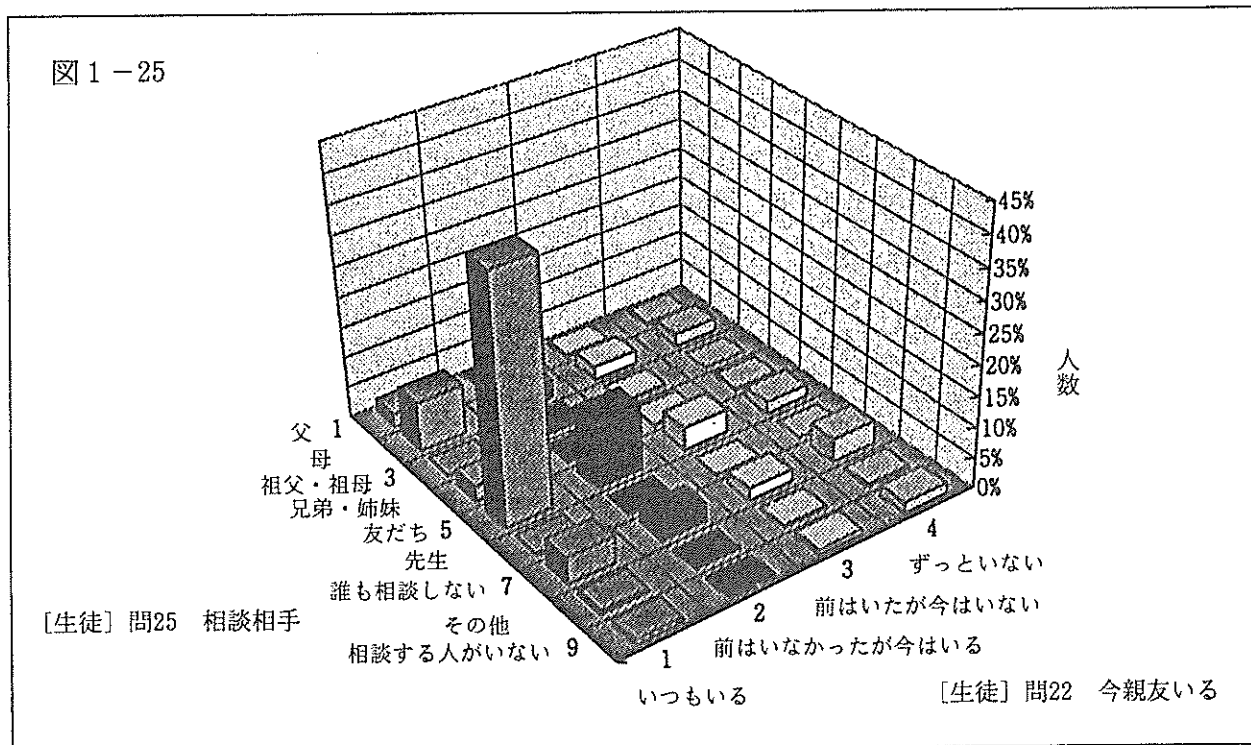
「あなたが、今もっとも悩んでいること、困っていること」の問とのクロスでは、「進路」をあげたものでは、「自分の部屋」64%、「家族と一緒にいる部屋」18%、「勉強・成績」をあげたものでは、「自分の部屋」64%、「家族と一緒にいる部屋」21%、「恋愛・異性」をあげたものでは、「自分の部屋」67%、「家族と一緒にいる部屋」22%、「悩み等が特にない」と回答したものでは、「自分の部屋」58%、「家族と一緒にいる部屋」26%となっている。

「悩みを誰に相談するか」という問とのクロスでは、相談する人が「母親」の場合、「自分の部屋」53%、「家族と一緒にいる部屋」40%、「誰にも相談しない」もの場合、「自分の部屋」62

%、「家族と一緒にいる部屋」15%となっている。

25) 相談相手は、どのように選ばれているか？

悩みの相談相手について「あなたは、困っていることや悩みをだれに相談しますか」という問に対しての結果は、「もっとも相談する人」については「友だち」が57%、「母親」が16%、「誰にも相談しない」が13%、「相談する人がいない」が4%で「友だち」が大きな割合を占めていた。この問と「あなたは、おたがいに理解し、心をうちあけて話せる『親友』がいますか」という問とのクロス集計を図1-25に示す。



「親友がいる」と回答したもののうち、相談相手を「母親」と答えたものは15%、「友だち」と答えたものは67%、「誰にも相談しない」と答えたものは9%であった。「親友がいない」と回答したもののうち、相談相手を「母親」と答えたものは20%、「友だち」と答えたものは30%、「誰にも相談しない」と答えたものは30%であった。親友がいない中学生では、相談するひとがなく一人で悩みを抱え込んでいる。

「あなたが、今もっとも悩んでいること、困っていること」の問とのクロスでは、「進路、勉強・成績」と回答したもののうち、相談相手を「母親」と答えたものは19%、「友だち」と答えたものは60%、「誰にも相談しない」と答えたものは12%であった。「友だち・クラス、恋愛・異性」と回答したものでは、「母親」7%、「友だち」80%、「誰にも相談しない」7%であった。悩んでいることが「特にない」と回答したものでは、「母親」16%、「友だち」47%、「誰にも相談しない」16%であった。友だち・クラス、恋愛・異性のことは友だちに相談し、進路、勉強・成績のことは友だち以外に相談することが多い。

「あなたは家族のことをどう思っていますか」という問とクロスでは、「母親を信頼している」と答えた中学生では、相談相手を「母親」と答えたものは18%、「友だち」と答えたものは58%、「誰にも相談しない」と答えたものは12%であった。「母親を信頼していない」と答えた中学生で

は、相談相手を「母親」と答えたものは0%、「友だち」と答えたものは80%、「誰にも相談しない」と答えたものは20%であった。

6. ま と め

中学生期は、生理的にも心理的にも少年期から青年期への移行期にある。しかし、からだの発達は一挙に大人に近づくのに対して、心理的な発達は必ずしも同じ速さで達成されるとは限らない。知・徳・体における青年期への移行が必ずしも同時に進行せず、多くの中学生が、身体的な成熟とそれについていけない心の悩みに直面する。そこで親は、子どもを理解した適切なアドバイスや養育をほどこすことができなければならない。「中学生になると扱いにくい」、「どう対処してよいかわからない」と戸惑うことなく、自信を持った子育てが必要である。大人は皆、この時期を体験して育ってきている。忘れてしまった中学生の生活について、今一度調査結果を基に考えてみる。

いうまでもなく、学校は子ども達が一日の大半の時間を過ごしている場である。中学生の生活の中心である「学校」が楽しい場所となっているものは、全体の43.7%である。これは、10年前の調査に比べると、15.9ポイントも減少している。中学生にとって学校が楽しい場所でなくなっている。学校生活の最大の関心事は、親も子も勉強であろう。学校だけでなく、帰宅後も塾に通っている中学生が4割近くいる。勉強に対して、その目的や長期的展望にたった進路について具体的なイメージを持って取り組んでいる中学生は、意欲的に勉強に取り組んでいる。また、このような自分自身のことを話せる家庭や友達を持っているかいないかで、勉強に対する姿勢が随分と変わってくる。ただ闇雲に受験体制の中で流され、自分自身の考えを持たなければ、同じ勉強をしても身に付くものが限られてくるのは当然の結果である。親は、勉強の督促だけでなく、時には子どもの悩みや将来のことを真剣に話す場を持つことが大切である。

中学生では一緒に遊ぶだけでなく、親に言えない悩みを打ち明けたり、自分の将来や夢について相談できる心の友を強く求めるようになってくる。また、自分の行ったことについて友だちの目をととても気にする。友だちが自分意識のうで大きく影響を及ぼす。ところが、成績や進路等を思い悩みまわりをライバル視しては、親友と呼べる友人関係はできない。また、親も友だちを勉強という物差しで評価し、子どもに接することがないようにしなければならない。心の友は、何物にもかえがたい財産である。

親子の信頼関係は、子どもの成長にとってとても重要な要素である。子どもから信頼される親になるには、子どもの要求をすべて満たしてやることではない。子ども自身が、親が自分のことを考えてくれていると感じることができなければ、親の努力も徒労に終わってしまう。子どもは、自分のことについてある程度理解している。自分の行いで悪いと思っていることを叱られることにより、自分自身で確認したいという気持ちもある。子どもといろいろな話をするおりに、子ども自身の話も認めた上で親の気持ちを伝えるとよい。父親に対して「自分勝手に無責任な人、口うるさい人、生活費を稼いでくれる人、放任で甘い人」とマイナスイメージしているものが25%、母親では18%で、父親の家庭での存在自体が問題となっている。家庭内の粗大ゴミ扱いされる父親に対して、子どもがよいイメージを持つはずがない。夫婦の信頼関係が親子の信頼関係に反映し、子育てに関わってくることはいうまでもないことである。ここで親のイメージに大きく関わるのが、子どもの吐き方である。子どもが叱られて家を出てしまおうと思うような吐き方は、望ましいものではない。親子の信頼関係は、家庭生活のみならず学校生活にも影響を及ぼし、自己形成に大きな役割を果たす

ことが、今回の調査からも明らかになった。

今日の生活環境は複雑多様化し、家庭の教育力の低下等が問題視されている。中学生にとっても家庭での触れ合いの時間が減少し、自分の場を家庭の中に作りにくくなっている。家庭生活に対して78%の中学生が満足しているが、家庭が自分を生かせる場、存在感のある場となっているかが大切である。親は子どもが勉強をしていれば安心し、学校に遅刻しないように起こし、忘れ物をしないように注意し、不満を抱かないように世話をするようなかかわり方は、決して子どものためになってはいないことを自覚しなければならない。遅刻するということは、学校へ行きたくないという意識の表れであり、明日への意欲と関係している。毎日が充実し、明日への期待度も高い中学生は、遅刻が少ないという結果が出ている。遅刻をし始めたら、子どもの気持ちのどこかに隙間ができていると思うことが必要である。

勉強時間は、テレビ視聴時間と関係している。中学生が自由になる時間の多くは、テレビの時間と睡眠時間であろう。テレビは中学生にとっての情報源であり、友だちとの会話の共通の話題を得る場でもある。しかし、テレビを長くみている中学生ほど勉強時間が短い。調査結果からテレビ視聴時間は、2時間が一つの目安となるであろう。

中学生は異性への関心を通して、男である自分、女である自分を認識する。学年が進むにつれてその割合は増加し、女子の方が15%ほど関心が高い。異性への関心は、明日への期待とも関係している。明日のことを考えて朝起きることが楽しいと感じることは、友だちを始め学校生活の満足度に関係してくる。

中学生になると自分を客観的に評価できるようになってくる。しかし、その自己評価は、不完全で自分自身も不安を持っており、揺れ動いている。自主性、積極性、忍耐力は、学校生活や家庭生活のあり方、勉強や父母との信頼関係と結び付いている。子どもの自己評価と親の評価には、若干のずれがある。どちらかという親は学習上のことから子どもを見るのに対して、子どもは生活上のことから考えている。子どもの努力している姿や不十分な結果であっても、まず、認めてやる必要がある。結果だけで判断せず、家庭が子どもにとって心休まる場でなければならない。また、親に言えない悩みなどを相談できる友だちを持つことも、子どもが成長するうえで必要である。

第Ⅱ章 父親・母親の養育態度・行動の実態

第Ⅱ章 父親・母親の養育態度・行動の実態

子育てにおいて、親の養育態度・行動が重要であることは明確である。しかし、忘れてはならないことは、親自身が無意識で行っていることも、子どもに大きく影響を与えていることである。したがって、親のすべての態度・行動が子どもに強く影響することを、親が十分に理解する必要がある。そのために、この章では、特に親が無意識に行っている養育態度・行動についての実態から、中学生を持つ親の意識傾向や問題点を探り出していくことにする。

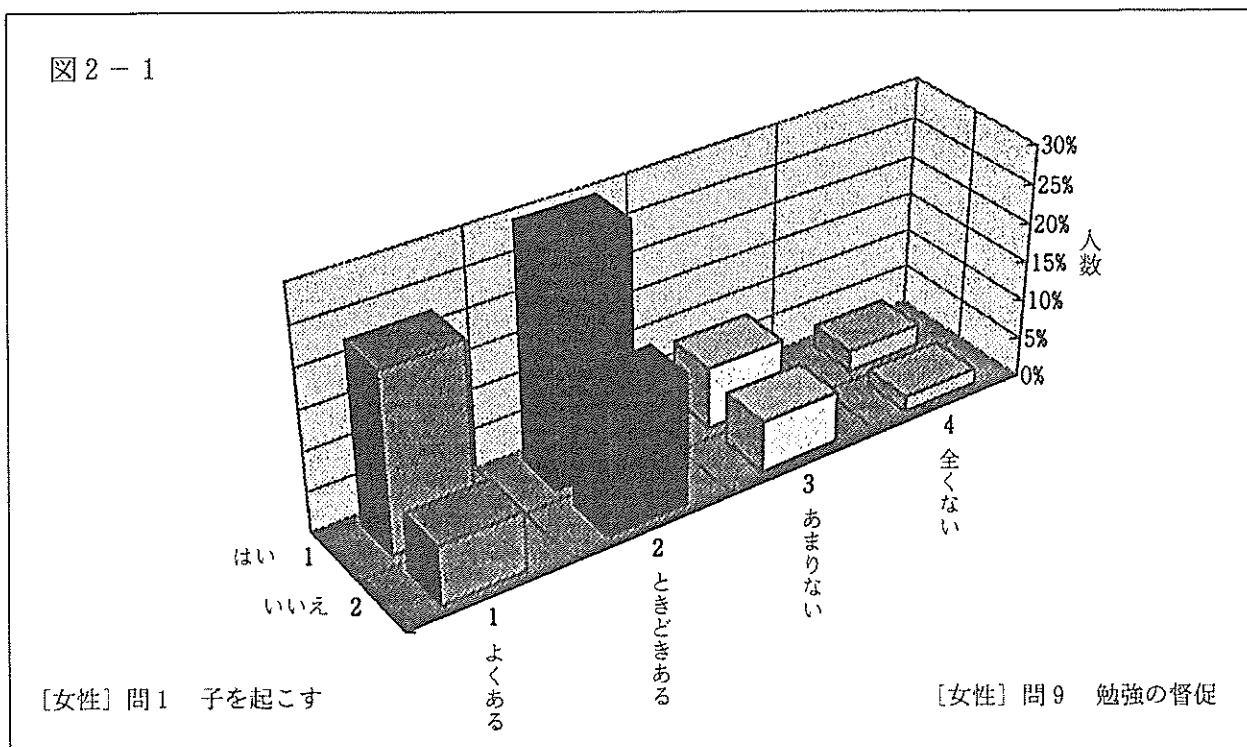
1. 養育行動

この節では、親の養育態度・行動の集計結果を父親・母親に分け、キーワードとなる設問の間でクロス集計を行い、一つの養育態度にからむいろいろな行動やその背景、親の意識傾向を探り出し、考察していきたい。

(1) 起こさないためには、どういうことが必要か？

家庭教育が保護から自立への過程だと考えると、子どもに基本的生活習慣をつけることは、家庭教育の最も重要な項目とすることができる。しかし、中学生でも基本的生活習慣が十分に身に付いていない傾向があることが指摘されている。端的な例として、個別集計の「あなたは、今朝お子さんを起こしましたか」の結果を見ると、父親の21%、母親の66%が「はい」と答えている。さらに、親の意識、問題を探るために、この設問に「あなたはお子さんが遊んだりテレビをみたりしているとき、『勉強は済んだか』と注意することがありますか」という設問とのクロス集計をした。その母親での結果を図2-1に示す。

母親全体の80%が勉強の督促を「よくある」「ときどきある」と回答しており、さらにそのうちの69%が「子を起こす」と回答している。父親の場合は、子を起こすことは母親に任せている



のか「子を起こす」のは少ないが、父親全体の73%が勉強の督促を「よくある」「ときどきある」と回答している。この結果から「早く起きなさい」「勉強は済んだの」と慌ただしく指示されている中学生の状況が目につく。

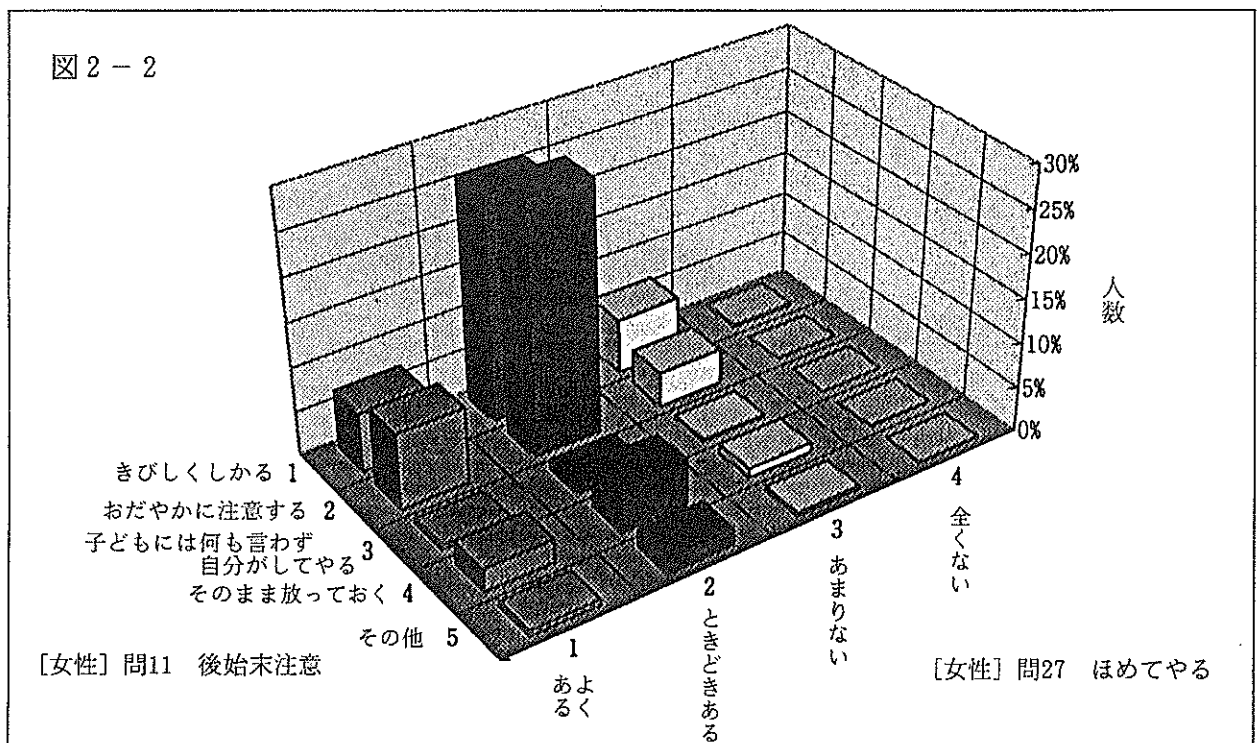
ところが、「子を起こす」と「お子さんに自主性（自分で判断し行動する）があると思いますか」とのクロス集計では意外な結果となっている。母親の66%が子どもを起こしているにもかかわらず、その66%は自主性が「大いにある」「まあまあある」と回答している。「子どもに積極性（自ら進んで行動する）があると思いますか」という設問でも同様な回答傾向が見られる。

中学生にとって自分で起き、自ら学習するということは自主性、積極性の表れである。ところが親の方にはその認識がなく、親の督促、催促、干渉のもとで中学生は生活しているにもかかわらず、自主性、積極性があると考えている。この原因には、日頃からの親の子どもへの関わり方が問題として考えられる。すなわち、本来、正常な発達段階としてもっと小さいうちに身に付けていなければならない基本的な生活習慣が、親の督促、催促、干渉によって身に付かず成長してしまい、指示されるのが当たり前になってしまっているのである。そんな中でも、中学生なりに自ら行動することもある。その行動を親は過大に評価し、自主性、積極性の表れととらえているのであろう。親はもう一度養育態度・行動を見直し、本来の意味の自主性、積極性を身に付けることができるような家庭環境を考える必要がある。

(2) 後始末の注意をするためには、どういうことが必要か？

中学生時代は反抗期の真っ只中である。自分の行動を注意されるのを極端に嫌い、素直に注意を聞けない年代である。親としても注意が難しい時期といえる。中には子どもにいたずらに気を使い、注意できない親もいるという話もある。

そこで、「あなたは、お子さんが自分の使った物の後始末をしなかった場合、どのように対応



していますか」という設問と「あなたはお子さんをほめてやることがありますか」という設問とのクロス集計をした。その母親の結果を図2-2に示す。

母親全体の87%がほめてやることが「よく」「ときどき」と回答した。さらにその40%が「きびしくしかる」と答え、46%が「おだやかに注意する」と回答している。ところが、ほめてやることが「あまり」「全く」ない母親の場合、後始末の注意を「きびしく」する比率が55%にも及んでいる。一方、「後始末の注意」と「子どもに自主性があるか」という設問とのクロス集計によると、母親の場合、子どもに自主性があると回答したもののうち、後始末の注意を「きびしく」行うものは40%にすぎないが、自主性が「あまり」「全く」ないと回答した母親の場合、後始末の注意を「きびしく」行うのは46%となった。「社会の出来事を話すことがあるか」という設問と「後始末の注意」との設問とのクロス集計によると父親の場合、社会の出来事を話すことが「よく」「ときどき」あるもののうち後始末の注意を「きびしく」行うものは40%で、社会の出来事を「あまり」「全く」話さないもののうち後始末の注意を「きびしく」するものは31%であった。ところが母親の場合、それが逆転し、社会のことを「よく」「ときどき」話すもののうち後始末の注意を「きびしく」するものは42%、社会のことを「あまり」「全く」話さないで後始末の注意を「きびしく」するものは44%となっている。

「挨拶の注意」や「規則的な生活を行っているか」との設問と「後始末の注意」という設問とのクロス集計では、そのまま相関関係があり、規則的な生活を行っている親は後始末の注意もきちんとしているし、挨拶の注意を行っている親は、後始末の注意もきちんとしていることが分かった。

これらのことから、後始末の注意をするためには、親自身が規則的な生活をし、機会があるたびに認めほめてやること、社会の出来事などを積極的に話し、挨拶などの他の注意もきちんとしていくことが必要だと考えられる。

(3) 言葉遣いの注意はどういうことと相関しているか？

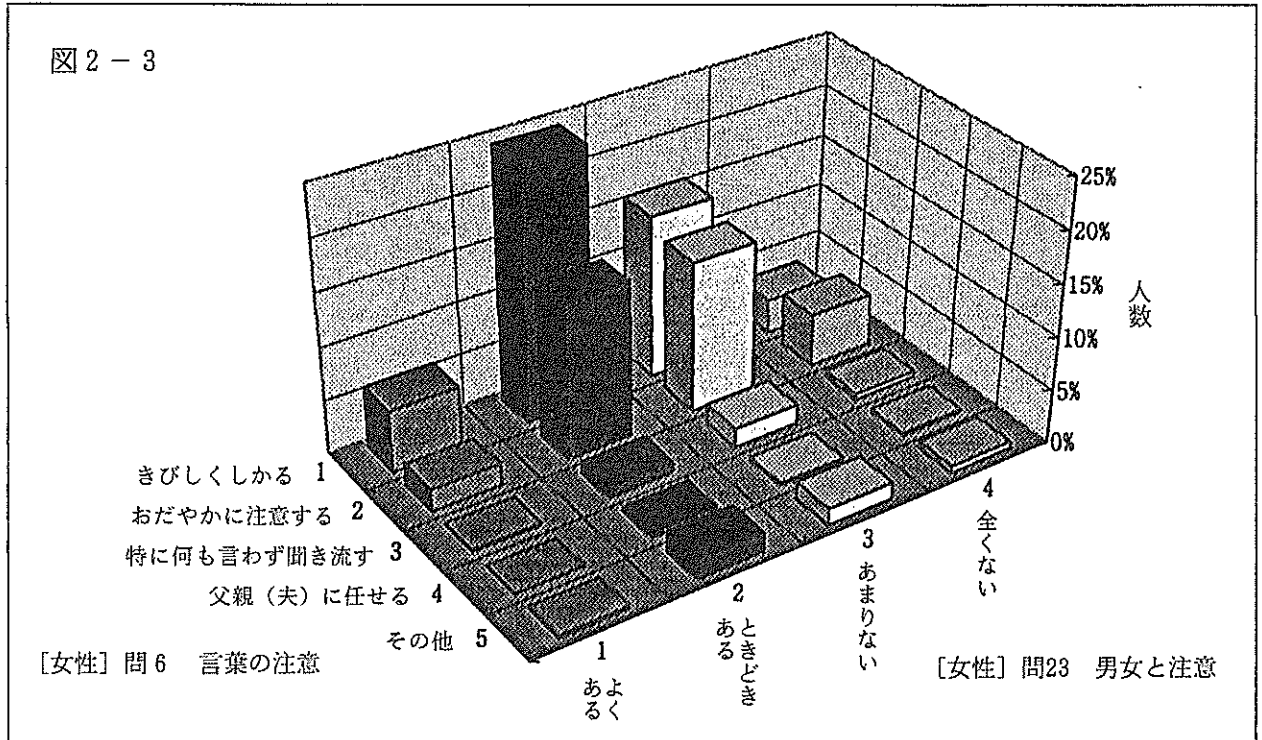
子どもの言葉遣いの乱れや、マスコミによるはやり言葉の乱造など数々の言葉の乱れが指摘されて久しい。それにともない親の言葉遣いに関する注意もなされている。その注意は、どういうことに相関しているのだろうか。

そこで、「あなたは、お子さんのあなたに対する言葉遣いが乱暴であったとき、どのように対応をしていますか」という設問と他の設問とをクロス集計してみた。そのうち、「あなたは、お子さんを『男の子だから』『女の子だから』と注意することがありますか」という設問の母親の回答結果を図2-3に示す。

この結果、「男だから」「女だから」という注意を「よく」「ときどき」している母親は全体の54%で、そのうち言葉遣いの注意を「きびしく」する母親は60%である。ところが、男女の性による注意を「あまり」「全く」しない母親の場合、言葉遣いの注意を「きびしく」するのは43%に過ぎない。これは父親ではより顕著で、男女の性による注意をする父親のうち言葉の注意を「きびしく」するものは65%、男女の性による注意をしない父親のうち言葉の注意を「きびしく」するものは36%である。つまり、言葉遣いの注意は男女の性に相関して行われているといえる。

「言葉の注意」と「乱暴な言い方をした場合」とのクロス結果、「後始末をしなかった場合」のクロス結果をそれぞれ見てみると、そのまま相関があった。つまり、乱暴な言い方をした場合必

図 2 - 3



ず注意する親は、言葉遣いの注意もしているし、後始末をしなかった場合厳しく叱る親は、言葉遣いの注意も厳しくしている。

「テレビや映画やスポーツのことを話すことがあるか」という設問とのクロス集計では、特に相関は見られなかった。テレビなどの話題をよくする親も、そうでない親も同じくらいの比率で言葉の注意を行っている。

では、注意する親の感情はどうなっているのでしょうか。「あなたはお子さんに対して腹が立ち、殴りたいと思うことがありますか」という設問とのクロスによると、44%の母親が「いつも」「ときどき」そう思い、その68%が、言葉についても「きびしくしかる」ことが分かる。ところが、子どもを殴りたいとは「あまり」「全く」思わない母親の場合、「きびしくしかる」のは41%に過ぎない。父親でも同様な結果になった。言葉遣いの注意は、親の感情と相関関係がある。子どもの忍耐力について尋ねた設問と言葉の注意とのクロス結果では、父母とも子どもに忍耐力が「あまり」「全く」ないと思っている親の方が言葉遣いの注意を厳しく行っていることが分かる。

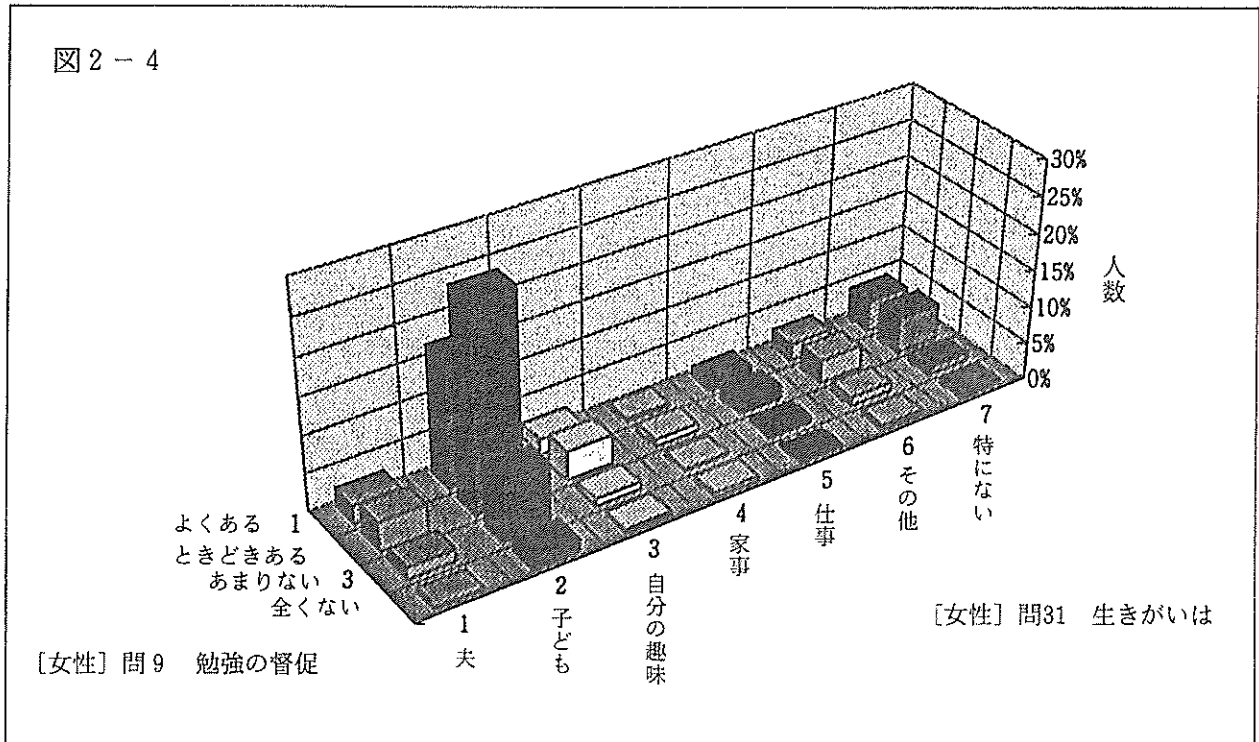
(4) 勉強へ駆り立てるとはどういうことか？

中学校における業者テストが廃止され、高校入試のための偏差値重視の教育が見直されようとしている。しかし、中学生やその親は、急激な変化のためどう対応しているのかわからず、子どもを学習塾へ通わせる親も少なくない。偏差値重視だった頃より、よけい子どもを学習に駆り立てる親も現れていると聞く。そこで、勉強へ駆り立てる親の意識や行動を探ってみた。

「あなたは、お子さんが遊んだりテレビをみたりしているとき、『勉強は済んだか』と注意することがありますか」という設問と他の設問とをクロス集計してみた。そのうち、「あなたのいきがいの対象は何ですか」という設問とのクロス集計の母親の回答結果を図 2 - 4 に示す。

母親全体の58%がいきがいは「子ども」と回答している。このクロス集計の結果、さらにそのうち82%が勉強の督促を「よく」「ときどき」していることが分かる。父親の場合も同様の結果

図2-4



となった。また「あなたは、お子さんと、お子さんの将来や人生について話すことがありますか（どんな仕事につくか、どんな生き方をするかなど、受験以外のことで）」とのクロス集計結果をみると母親の81%が将来の話を「よく」「ときどき」と回答し、そのうち81%が「よく」「ときどき」勉強の督促を行っている。また、将来の話を「あまり」「まったく」しない母親のうち88%が勉強の督促を行っている。勉強の督促は、将来や人生の話をしない母親の方が多く行っていることが分かる。

これらの結果から、子どもをいきがいと考え、子どもの人生に何らかの期待を持つ親の心理が考察できる。よりよい人生だと親が考える古い学力観による価値観を親は子どもに押し付けようとしている。その結果として、「子について悩んでいること」という設問で40%が「成績・進学のこと」と回答し、そのうち87%が勉強の督促を「よく」「ときどき」することになる。また、「お子さんをきょうだいやよその子を引き合いに出して、注意したりしかったりすることがありますか」という設問では母親全体の46%が「よく」「ときどき」と答え、その89%が勉強の督促を「よく」「ときどき」することになる。しかし、きょうだいやよその子との比較をしない母親では、勉強の督促を行っているのは73%に過ぎない。

では、子どもの積極性については、親はどう考えているのだろうか。「あなたは、お子さんに積極性（自分から進んで物事に取組む）があると思いますか」という設問では、全体の59%の母親が「大いに」「まあまあ」と考えている。自分の子どもに積極性があると考えのなら勉強の督促も不要ではないかと考えられるが、実際はその77%が督促を行っている。

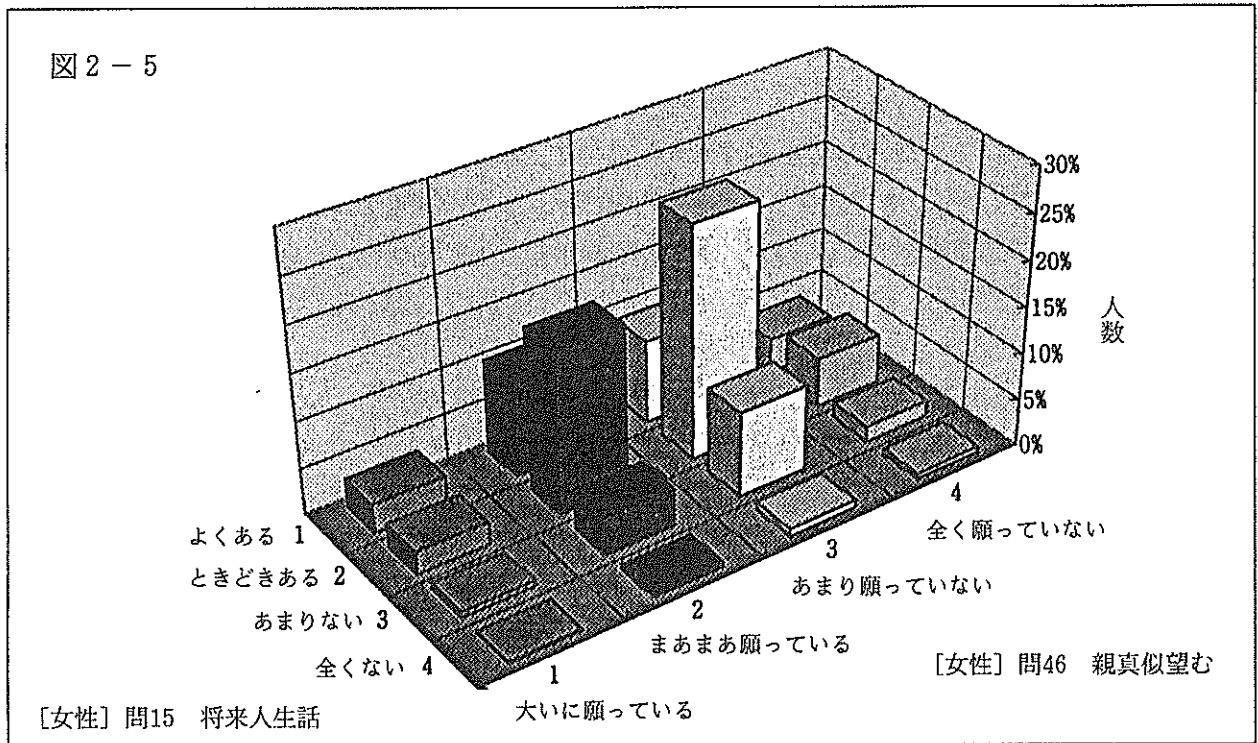
本来、勉強は子ども自身が将来の目標を見定めながら、自分にあった勉強の意義や方法を知り積極的に取り組んでいくものである。そして、親による暖かい励ましや人生の先輩としての助言が高い学習意欲につながる。現在多くの親が、子どもを勉強へ駆り立てているが、これは子どものためではなく、親の焦りと自己満足の現れだといえる。親の価値観だけを子どもに押し付けるのではなく、親も子どもともに学びあう家庭を築くことが大切である。

2. 親子交流

今、親子の交流のあり方が、あらためて問い直されている。そこで、親子交流にかかわる親の養育態度・行動の状況をクロス集計しながら、以下の3項目について考察していきたい。なお、考察の観点として、各項目での親子の特徴と望ましいあり方を考えてみたい。

(5) 将来の話、人生の話をする準備として、日常対話が活かされているか？

中学生の時期は、大人への準備期間である。自分自身の容姿が気になり交遊関係や異性、成績、進学、将来などにも思い悩む時期である。こういう時期に、親が自分の経験や生き方などを話し、子どもを正しく導くことが大切である。ところが、急に人生や将来の話などできるものではない。そこには日常対話からの積み上げが必要になってくる。そこで、「あなたは、お子さんと、お子さんの将来や人生について話すことがありますか（どんな仕事につくか、どんな生き方をするかなど、受験以外で）」という設問に目を向けてみる。この設問と「あなたは、お子さんがあなたの生き方をまねてくれることを願っていますか」という設問とのクロス集計をした。その母親での結果を図2-5に示す。



親の生き方を「大いに」「まあまあ」まねてもらいたいと回答している母親は全体の41%、父親でも37%に過ぎない。親は自分の人生を満足していないのであろうか、あるいは子どもを一人の人格ととらえ親の生き方を押し付けようとしていない結果かもしれない。子どもにまねしてもらいたい母親のうち将来や人生について「よく」「ときどき」話すのは87%にも達している。一方、親のまねを「あまり」「全く」願っていない59%の母親では、77%が将来や人生について「よく」「ときどき」話すと回答している。つまり、親は自分の人生の経験から、子どもの人生に対する強い願いがあると考えられる。これは生きがいを「子ども」と回答した親が高い比率だったことから裏付けられる。では、日常の対話はどうなっているのであろうか。「言葉遣いが乱暴だったとき」「あいさつをしなかったとき」の対応と「将来や人生の話をすることがあるか」

とのクロス集計を見ると、それぞれ言葉やあいさつの注意をすると回答した者の方が、将来の話をする事が多かった。言葉遣いやあいさつは社会に出るための不可欠なもので、親の子どもの人生への思いから、指導にも力が入るのであろう。また、「社会の出来事」を「よく」「ときどき」話す母親は全体の82%であり、その86%は将来や人生についてもよく話している。一方、「社会の出来事」を「あまり」「全く」話さない母親の場合、将来や人生の話をするのは59%に過ぎない。社会のことを話さない母親は将来や人生のことも話さない傾向があることが分かる。

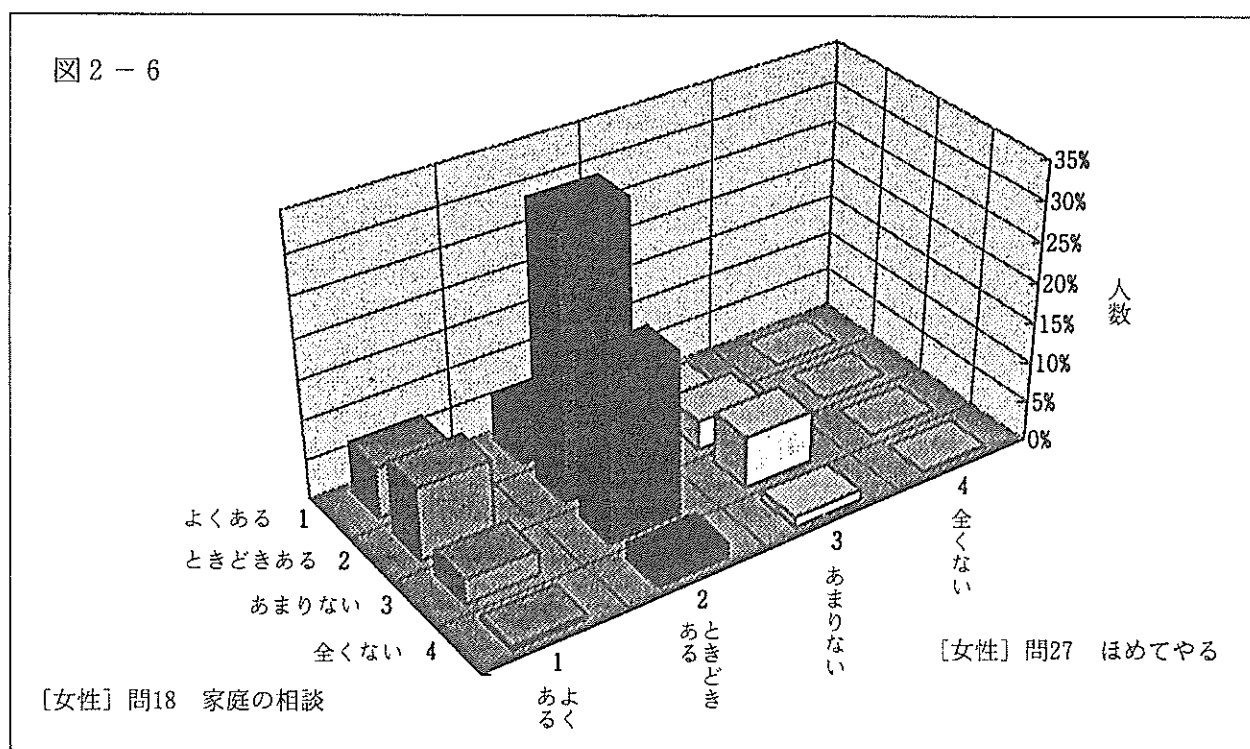
親は自分の人生を踏まえて、子どもの人生に強い思いがある。中学生は、人生に対しての多少の不安や悩みがある時期である。また、将来への夢を育てる時期でもある。そういう時に、親の考えや経験を社会の出来事と関連付けて話すと、子どもは社会の出来事を知り、広い視野でものごとを見たり考えたりすることができるようになり、人生への不安や悩みも解消するかもしれない。将来の夢の実現のための示唆を得るかもしれない。

これらのことから、現在多くの家庭でなされているように、親は、将来や人生の話に入る準備として、日常対話の中に社会の出来事をたくさん取り入れながら、いべきこと指導すべきことを日常的に語りかけることが大切である。

(6) 家の相談を持ちかけるためには、どういうことが必要か？

中学生になると、家庭の問題や大人の会話の中に自分から進んで入ろうとするようになる。これは、大人として認められたいという、いわば子どもからの脱皮とでもいえる行動である。では、この子どもからの脱皮を親はどう扱っているだろうか。そこで、「あなたは、お子さんに家庭のことで意見を聞いたり、相談したりすることがありますか」という設問に注目してみる。

この設問で「よく」「ときどき」と回答した父親は39%、母親は64%と、父親と母親では若干傾向が異なった。父親は家庭の問題を子どもに相談することなしに決定してしまうのか、あるいは仕事で忙しく家庭のことは母親に任せてしまっているのか、父親の方が子どもに相談する比率



が低かった。また、母親の方は相談相手として子どもを認めている傾向が強かった。この設問と他の設問とのクロス集計で最も相関があったのが「あなたは、お子さんをほめてやることありますか」という設問である。その母親での結果を図2-6に示す。

ほめることが「よく」「ときどき」ある母親は全体の87%であり、そのうち「よく」「ときどき」家のことで相談するのは68%である。しかし、ほめることが「あまり」「全く」ない母親の場合、家のことで相談するのは36%に過ぎない。父親の場合もほめる機会が多く、家の相談も多いのは46%。ほめることが少なく家の相談をするのは13%のみであった。ほめる機会があり家族関係が円滑なら相談ごともしやすいと考えられる。また、「社会の出来事を話しますか」という設問とのクロスでは、母親の82%が「よく」「ときどき」話し、うち69%が家庭の相談もしている。「あまり」「全く」社会の出来事を話さない母親では、わずか38%しか家の相談をしていない。父親の場合は67%が社会の出来事を話し、その49%が家庭の相談をしている。社会の出来事を話さないで家の相談をしているのは、わずか18%に過ぎない。「後始末の注意」とのクロスでは、母親の85%が「きびしく」「おだやかに」注意し、そのうち64%が家庭の相談を行っている。後始末の注意をしないで家の相談をしている母親は67%である。しかし、父親の場合は全体の84%が後始末の注意をし、そのうち家庭のことを相談するのはその47%。後始末の注意をしないで家庭の相談をするのは36%である。後始末については、現象としてとらえ叱ったり、注意したりするのではなく、「部屋のスペースが少なくなって困っているんだけどどうすればいいと思う？」などの相談をすることはできないだろうか。

「しつけに自信がありますか」という設問では、父親、母親とも約60%が自信があると回答した。自信がある母親の71%が子どもに家庭のことを相談し、自信がない母親の53%が家庭のことを相談している。父親も同様で、自信のある父親の48%が家庭のことを相談しているが、自信のない父親は24%しか相談していない。

中学生にとってほめられることと、一人前の大人として認められることは同じことである。日頃からほめ、対話を多くして、社会の出来事を話して聞かせ、円滑な家庭環境を築き上げることが大切である。そして、親が親なりに考えを持っていても、家族の一員として日頃から接し、何よりも自信をもって子どもにも相談していくことが、大切ではないだろうか。

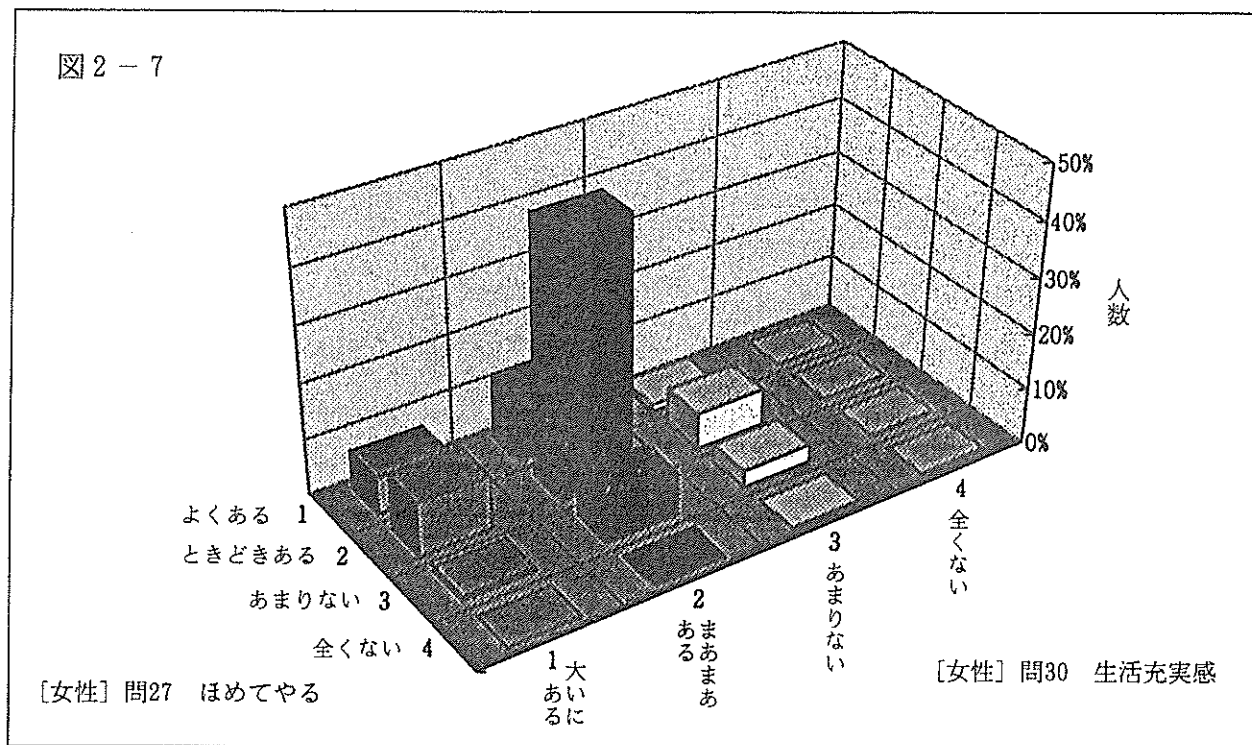
(7) 子どもをほめることができるためにはどういうことが必要か？

中学生になってもほめられるのは嬉しいものである。ほめられることによって、認められた喜びが生まれ、自分自身の中で次の行動への動機づけや意欲となっていく。

「あなたはお子さんをほめてやることありますか」という設問に、もっとも相関を示した設問は「あなたは、毎日の生活に充実感がありますか」という設問だった。その母親でのクロス集計結果を図2-7に示す。

母親全体の88%が「大いに」「まあまあ」生活に充実感を感じ、その89%が「よく」「ときどき」ほめてやると回答した。父親の場合でも84%が充実した生活を送り、その83%がほめている。生活に充実感を感じてない母親の場合、ほめるのは73%に過ぎず、充実感を感じていない父親では、ほめるのは71%しかない。似たような傾向を示したのが「社会の出来事について話すことありますか」という設問とのクロス結果だった。やはり、母親全体の82%が「よく」「ときどき」話し、その90%がほめている。社会のことを話さないでほめるのは75%しかない。父親の場合でも、

図 2 - 7



全体の67%が社会の出来事を話しているが、その90%がほめている。社会のことを話さないでほめる父親は64%しかいない。

一方、「手伝いの回数」とのクロス結果では、手伝いの回数が多いほどほめるという結果になった。また、「しつけに自信」という設問とのクロスでは、やはり「自信がある」と回答した方が、ほめる機会が多かった。

これらのことから、子どもをほめるための条件として決定的なものは親のゆとりだといえる。子どものささいな進歩、変化にも目を向け、それを正しく評価してやるためには親の精神的なゆとりが必要である。そのゆとりが、社会の出来事に目を向けさせたり、しつけの自信にもつながるのである。

親自身、生活に充実感を持ち、子どもをよく観察して、正しく評価するという姿勢が必要である。

3. 子ども評価

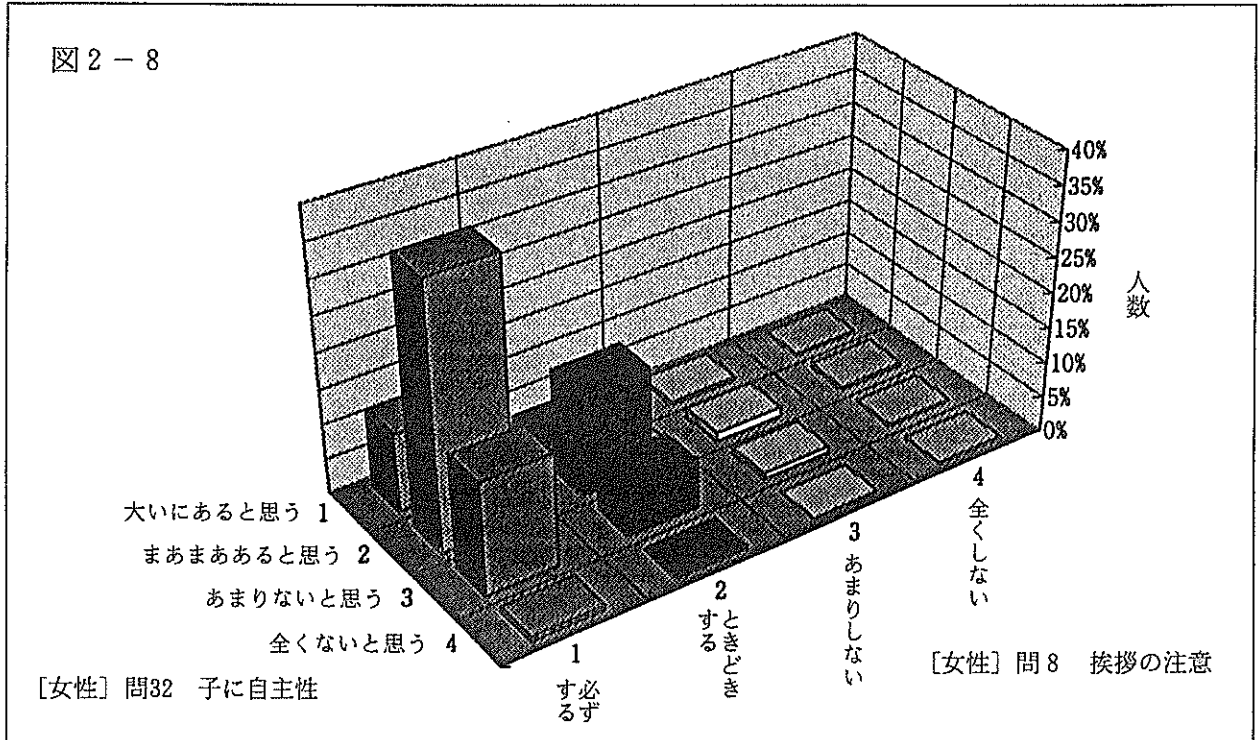
親は子どものどんな様子を見て評価しているのだろうか。挨拶や後片付け、言葉遣いなど外見で評価しているのだろうか。それとも、自主性や積極性、忍耐力などの内面を見て評価しているのだろうか。

ここでは、子どもへの評価についての課題を明らかにしていきたい。

(8) 子どもの自主性は、どのように見えてくるのか？

中学生になると突然、ものごとに興味が湧き、自主的に興味のあることに取り組むようになる。「あなたは、お子さんに自主性（自分で判断し行動する）があると思いますか」という設問と「しつけに自信がありますか」という設問とのクロス結果によると、自信があるのは父母とも61%で、そのうち、父親の79%、母親の82%が子どもに自主性があると回答している。親は子ども

図 2 - 8



のどういう面から自主性がある、ないと判断しているのでしょうか。

「お子さんに自主性があると思いますか」という設問と、「挨拶をしなかったら、注意しますか」という設問とのクロス集計結果を図 2 - 8 に示す。

母親全体の70%があいさつをしなかった時に「必ず」注意をするが、そのうち74%が子どもの自主性を認めている。あいさつの注意を「ときどき」する母親で子どもの自主性を認めているのは71%で大差ない。ところが、「勉強の督促」では勉強の督促をする母親の72%が自主性を認めているのに、督促をしないで自主性を認めている母親は78%にもなった。つまり、督促をしないと子どもの自主性が見えてくるといえる。同様に他の設問とのクロス集計でも、「後始末の注意」では注意をしないほうが自主性を認める率が高いし、「持ち物の注意」でも注意をしないほうが自主性を認めている。

親の方の感情では、「子どもを殴りたくなる」と思わない親のほうが子どもの自主性を認めているし、「きょうだいや他の子と比較する」ことが少ない親ほど自主性を認めている。さらには、「しつけに自信がある」親のほうが自主性を認めているという結果が出た。

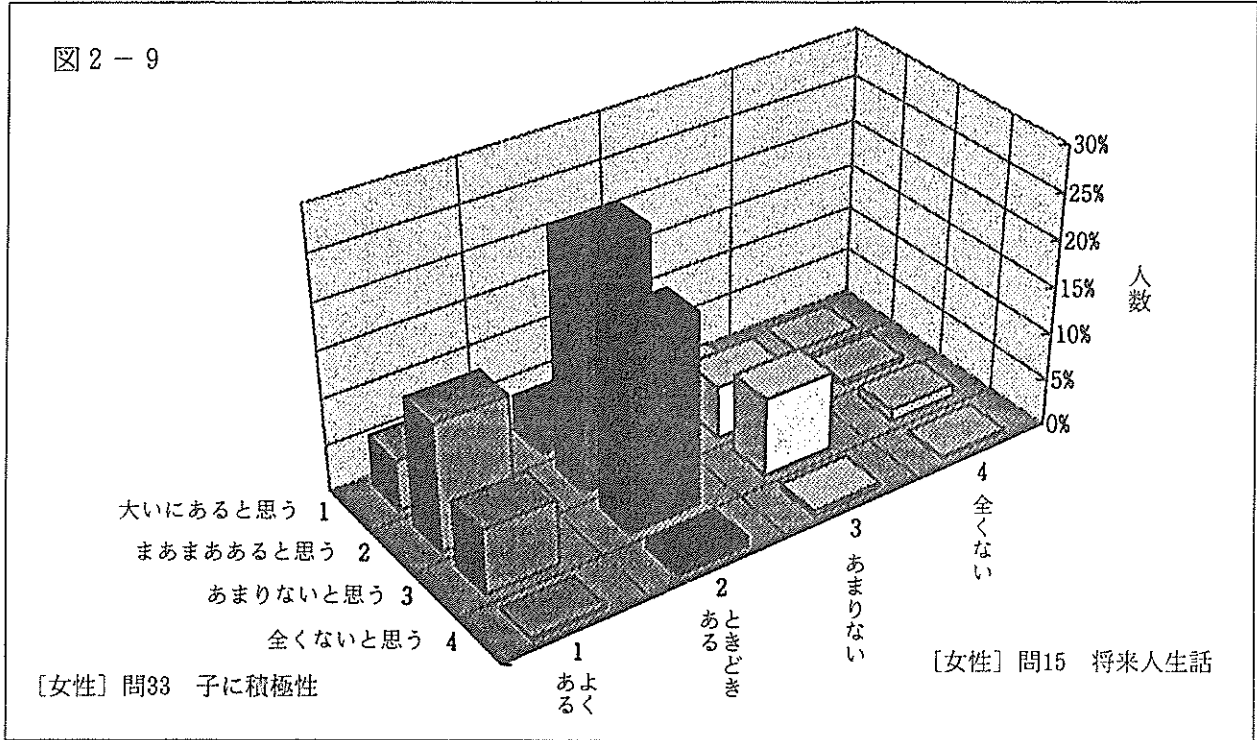
現在、多くの親が家庭で行っているように、親が子の自主性を認め、子どもの行動を待ち、正しく評価することが大切である。

(9) 子どもの積極性は、どのように見えてくるのか？

中学生は興味がある分野では急に積極性が出たり、逆に分野によっては消極的になったりすることもある。

「あなたは、お子さんに積極性（自分から進んでものごとに取り組む）があると思いますか」という設問と「しつけに自信がありますか」という設問とのクロス結果を見ると、自信がある父母は61%で、父母ともその70%程が子どもに積極性があると回答している。親にとって、子どもの積極性とはどういうことであろうか。

図 2 - 9



「お子さんに積極性があると思いますか」という設問と、「将来や人生について話すことがありますか」という設問とのクロス集計結果を図 2 - 9 に示す。

母親全体の81%が「よく」「ときどき」将来や人生について話しをし、そのうち64%が子どもの積極性を認めている。将来や人生の話「あまり」「全く」しない母親の場合は、積極性を認めているのは44%に過ぎない。同じ傾向が「学校生活について話すことがありますか」「家庭のことで意見を聞いたり、相談したりすることがありますか」などの設問とのクロス結果からも出ている。また、これは父親でも同じ結果である。また、「自分の使ったものの後始末をしなかったとき」という設問とのクロスでは、「きびしくしかる」と回答した母親のうち56%が積極性を認めており、「おだやかに注意する」と回答した母親の自主性認知率61%を下回っている。

「しつけの自信」とのクロス結果では、しつけに自信があるもののうち子の積極性を認めている母親は70%であるが、しつけに自信がない母親の場合、子の自主性を認めているのは42%に過ぎない。

中学生は興味のある分野では極めて積極的になる。それは小学生の比ではない。親は「将来や人生の話」「学校生活の話」「家庭での相談」などから成長し自分なりに考えをいう子どもの姿を見て、しつけに自信を持ち、積極的な子ととらえているのであろう。

後片付けなどは中学生は興味が沸かず、積極的になりにくい分野であり、そのため、親からの注意も多くなると考えられるが、それもおだやかな注意が多いようである。

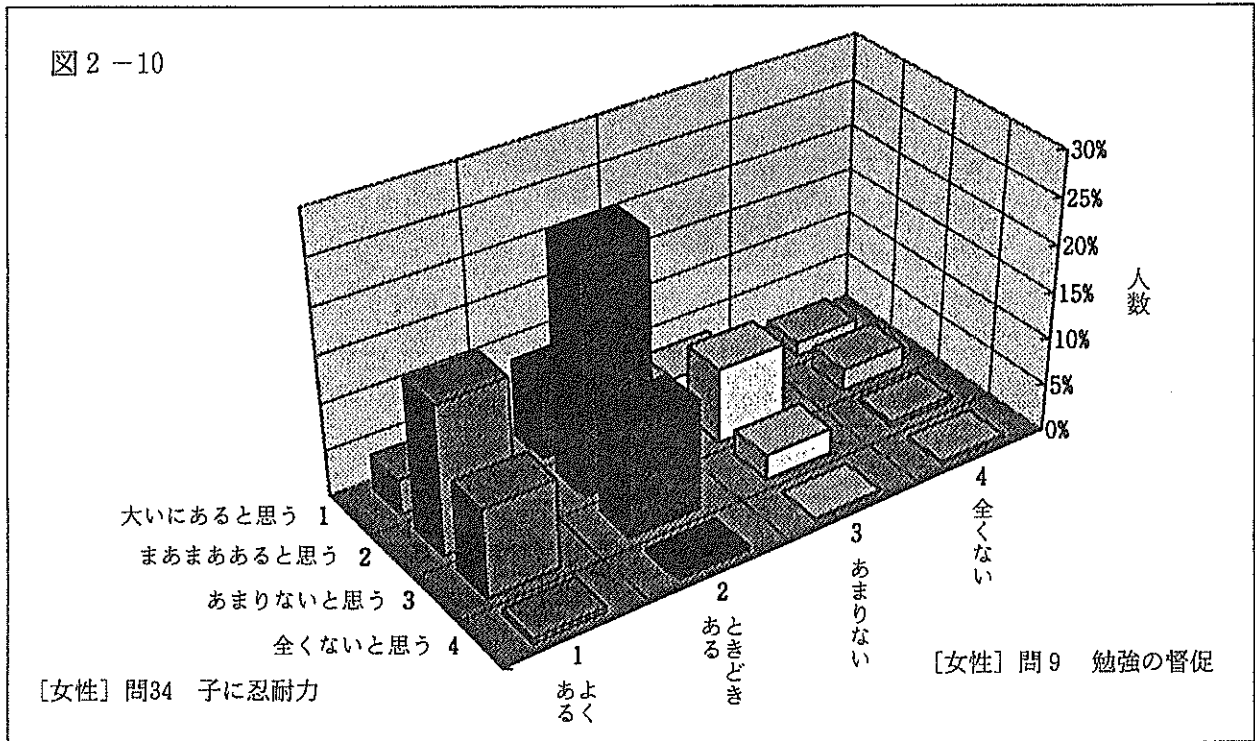
これらのことから、現在の中学生の保護者の家庭教育における積極性の認知と指導は望ましい方向にあるといえる。

(10) 子どもの忍耐力は、どのように見えてくるのか？

中学生になるとぐっと粘り強くものごとに取り組むことができるようになる反面、すぐに他のものに興味が移るようなこともある。

「あなたは、お子さんに忍耐力（がまんすべきときはがまんする）があると思いますか」という設問と「しつげに自信がありますか」という設問とのクロス結果を見ると、自信がある父母のうち父親の77%、母親の84%が子どもに忍耐力があると回答している。一方、しつげに自信がない父親では53%しか忍耐力を認めていないし、母親でも54%しか忍耐力を認めていない。親にとって、子どもの忍耐力はどういうふうに見えるのであろうか。

「お子さんに忍耐力があると思いますか」という設問と、「お子さんが遊んだりテレビを見たりしているとき、『勉強は済んだか』と注意することがありますか」という設問とのクロス集計を図2-10に示す。



「よく」「ときどき」勉強の督促をする母親のうち71%が子どもの忍耐力を認めている。しかし、勉強の督促をしない母親では82%が子どもの忍耐力を認めている。「言葉の注意」「後始末の注意」「男女に関する注意」「きょうだいや他の子との比較」などでもすべて「しない」親のほうが子の忍耐力を認めている。「あなたはお子さんに対して腹が立ち、殴りたいと思うことがありますか」という設問とのクロス集計でも、「あまり」「全く」思わない親のほうが子の忍耐力を認めている。

これらのことから、親自身の忍耐力がなく、子どもにさまざまな注意をしがちな親ほど子どもの忍耐力を認めない傾向があることが分かる。逆に言うと、勉強や後始末、男だから女だからなどの注意、他の子との比較などをせず、自信を持って子育てをしている親には、子どもの忍耐力が見え、そうでない親には忍耐力が見えにくいということが言える。

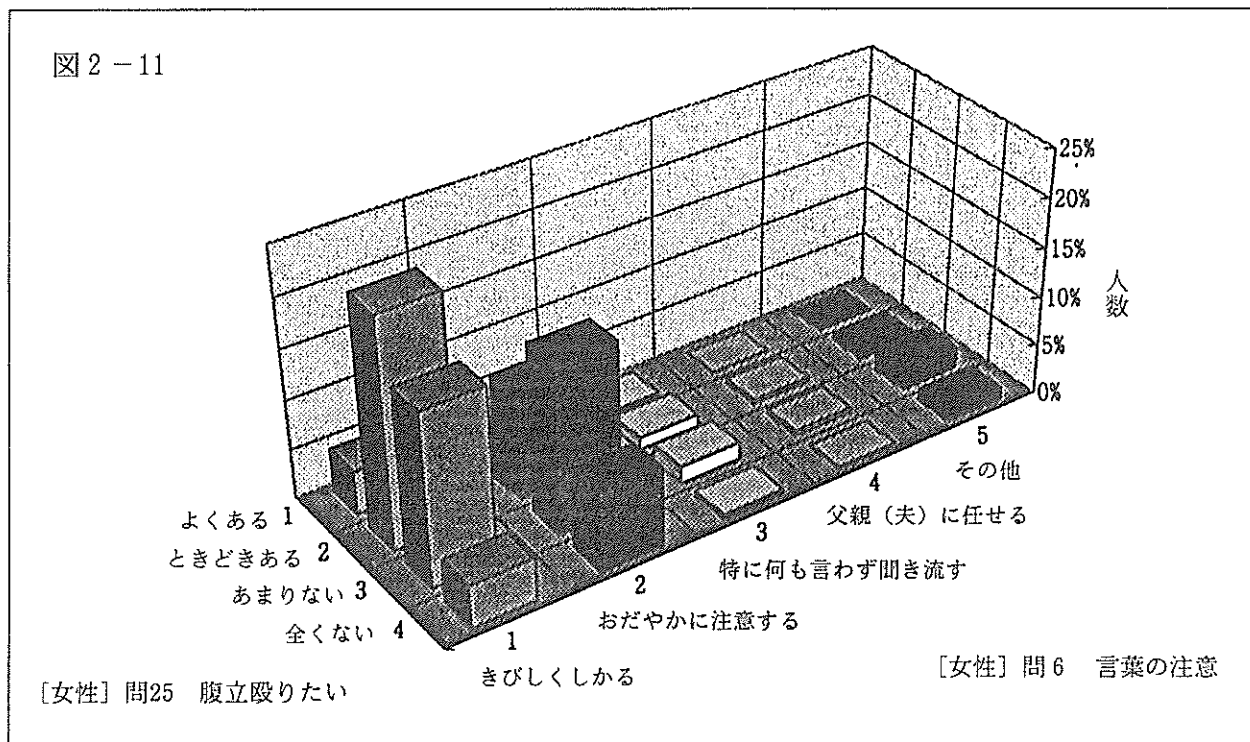
(11) 殴りたくなるのは、どういうことと関連しているか？

今まで述べてきたように、40%もの父母が「子どもに対して腹が立ち、殴りたい」と「よく」「ときどき」思っている。それはどういうことから生まれた感情であろうか。

「あなたはお子さんに対して腹が立ち、殴りたいと思うことがありますか」という設問と「しつげに自信がありますか」という設問とのクロス結果を見ると、自信がある母親のうち35%が殴

りたいと「よく」「ときどき」思うと回答した。自信がない母親では55%がそう思うと回答している。したがって殴りたい原因は、しつけの自信と関係がある。

その他の設問とのクロス結果を見てみると、「お子さんの言葉遣いが乱暴であったときの対応」「後始末の注意」「服装の注意」などで同じ傾向の結果が出た。代表として、「言葉遣いへの対応」とのクロス結果を図2-11として次に示す。



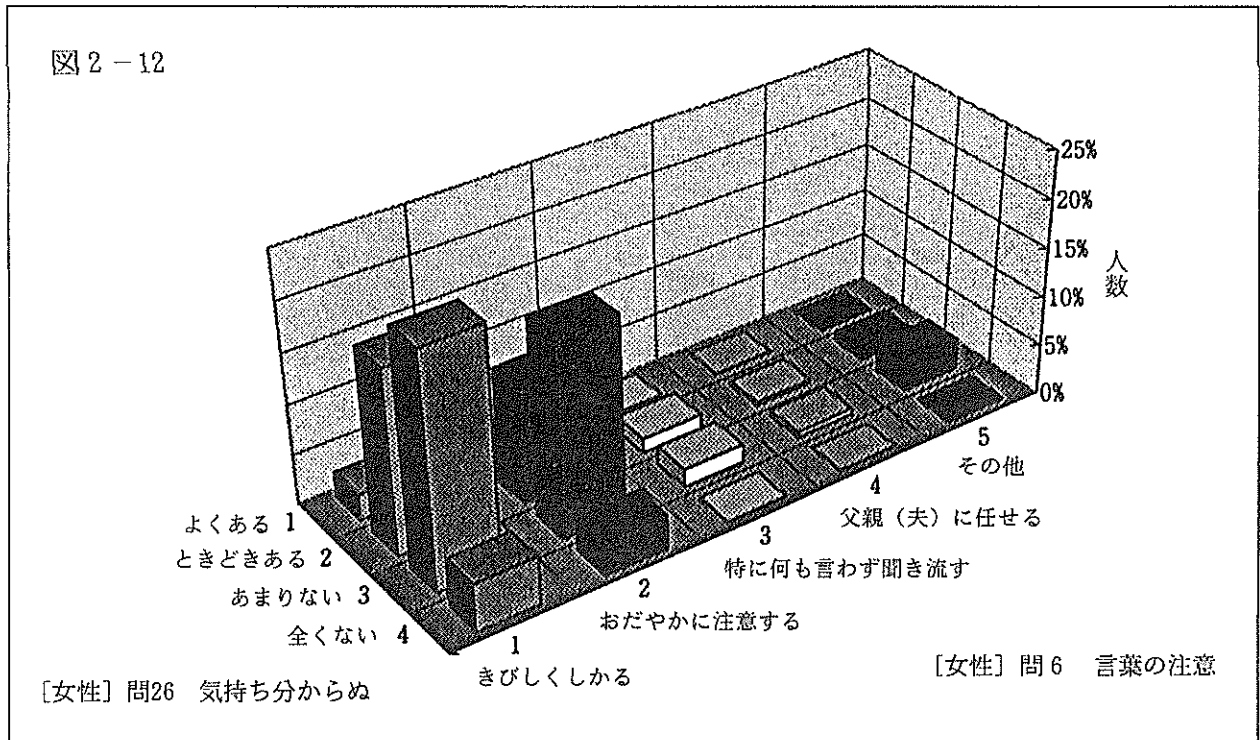
「きびしく」言葉の注意をする母親の56%が「殴りたい」と思っており、「おだやかに」注意する母親の場合は31%しかそう思っていない。「後始末の注意」「服装の注意」「男だから女だからという注意」などでも同様な結果となった。では、言葉や、服装や、後始末が原因であろうか。「子への悩み」という設問では、父親の32%、母親の40%が「成績・進学」のことで悩み、そのうち父親の55%、母親の53%が子どもを殴りたいと思うことがあると回答した。「成績・進学」のことで悩んでいない父親では殴りたいと回答したのは26%、母親で28%しかなかった。また、「きょうだいやよその子を引き合いにして注意することがありますか」という設問では、「よく」「ときどき」あると回答した父親のうち65%、母親の61%が殴りたいと思うことがあるといっている。

これらのことから、殴りたくなる原因の最も大きなものは、親の受験進学に対する焦りだといえることができる。親は親なりに子どもの受験進学を気にしている。しかし、子どもが思ったように勉強してくれなかったり、意に反する行動を取ったりすると我慢できなくなるのであろう。だから、しつけに自信がなくなり、表面に見える言葉や服装や、後始末を理由に注意することになるし、他の子と比べて注意することになるのである。

⑫ 子どもの気持ちが分からなくなるのはどうしてか？

中学校時代は、何にでも興味を示し始めると同時に反抗期にもあたり、素直に人の注意を聞けなかったり、自分を素直に表現できなかったりする。親にしてみると、子どもの気持ちがかめ

ずにとまどうようなことも出てくる。「あなたは、お子さんが何を考えているのか、その気持ちがわからずとまどうことがありますか」という設問に、父母とも約40%が「よく」「ときどき」と回答した。この設問と他の設問とのクロス集計により、その原因をさぐってみた。いくつかの設問とのクロス結果を見てみると、「言葉遣いが乱暴であったときの対応」「あいさつの注意」「服装の注意」「きょうだいや他の子との比較」などで同じ傾向の結果が出た。代表として、「言葉の注意」とのクロス結果を図2-12として次に示す。

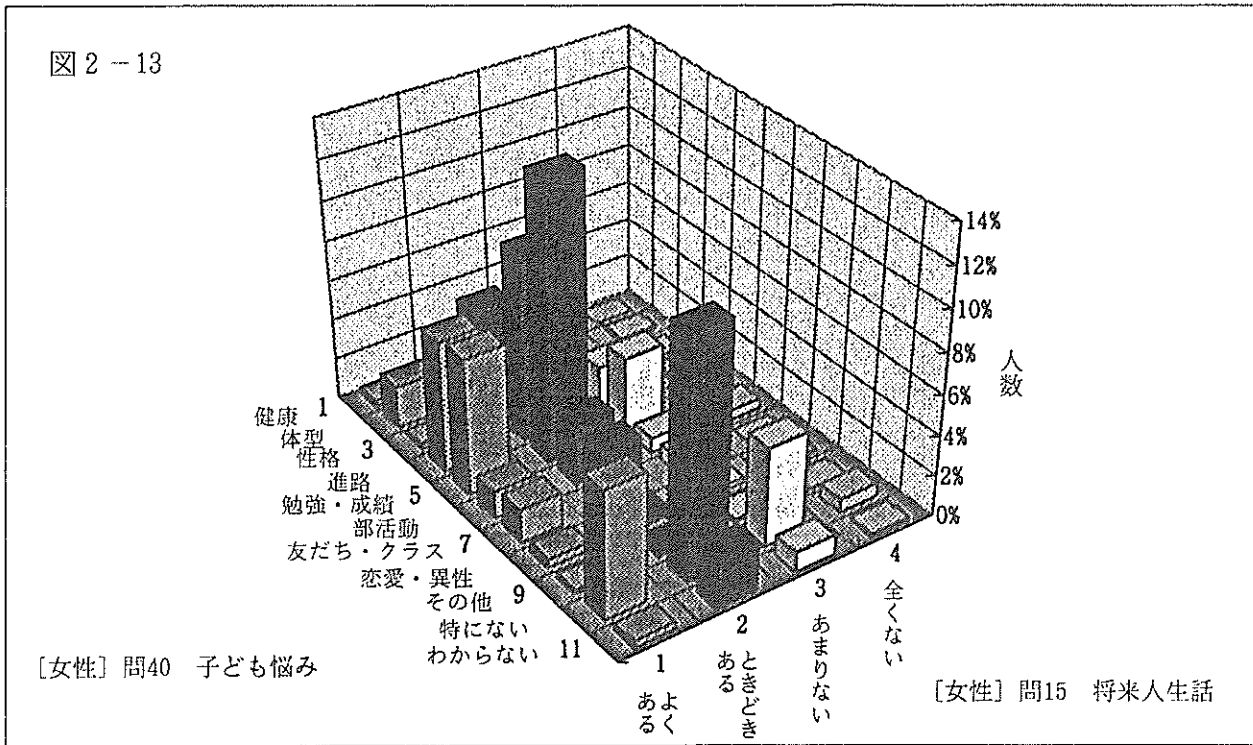


言葉遣いについて「きびしくしかる」母親の43%が「子どもの気持ちが分からないことがある」と回答したが、「おだやかに注意する」母親では、「子どもの気持ちが分からない」のは33%に過ぎない。同様に「あいさつの注意」「服装の注意」でも厳しい注意をする親の方が、子どもの気持ちが分からないことが多い。その他、子どもの気持ちが分からないという回答との相関があるのは、「きょうだいやよその子を引き合いに出して注意することがある」親、「子への悩み」で「進学・受験」と回答した親、「しつげに自信がない」親、「学校生活の話」をしない親であった。

子どもと小学校の時期は比較的行動を共にしていた親も、子どもが中学生になるとなかなか接する機会がとれなくなる。そのため、いつも子どもと接し、学校生活のことなどを話し、子どもの服装、言葉、あいさつ、態度に気をつけておだやかに注意ができる親は子どもの気持ちが分からないということが少ない。しつげに自信を持ち、子どもを一人前の個性ととらえ、よその子と比較などしない。そういう親は子どもの気持ちが分かる。逆にいうと、いつも心の中で子どもの進学や受験のことを考え、よその子と比較している親は子どもの気持ちが分からなくなる。そのため子どもも親と接することを避けるようになり学校生活の話もしなくなる。それが親のしつげの自信を失わせることになる。そういうことを親はもう一度考えてみる必要がある。

(13) 子どもの悩みはどのようにして感じ取られているか？

中学生になると、交遊関係も広がり、異性に興味が出てきたり、クラブや勉強で忙しくなったり、あるいは自分自身を認識し始め、体型や性格や容姿が気に掛かったり、ささいなことでも心を痛めたりするようになる。そういう中学生の悩みを親はどうとらえているのだろうか。「お子さんが抱えている悩み」を選択させる設問と、他の設問とをクロス集計した。そのうち、「あなたは、お子さんの将来や人生について話すことができますか」という設問とのクロス結果を図2-13として示す。



母親全体の81%が「よく」「ときどき」将来や人生についての話をするとしているが、そのうち、49%が「進路」「勉強・成績」と回答した。これは、父親でも同じ傾向で、将来や人生のことを話す中で、子どもの「進路」「勉強・成績」の悩みを感じ取っているのだろう。「子どもの気持ちが分からないことがあるか」という設問とのクロスでは、分からないことが「よく」「ときどき」ある母親のうちの59%、父親の50%が子どもは「進路」「勉強・成績」の悩みがあると回答した。一方、子どもの気持ちが分かる親では、子どもの悩みは「進路」「勉強・成績」と回答した母親は42%、父親は40%であり、子どもの悩みが他の要因に分散している傾向がある。また、子どもの気持ちが分かる親では、子どもに悩みがないとの回答も多い。「テレビや映画やスポーツの話をするか」という設問では、「進路」「勉強・成績」の悩みも多いが、子どもの悩みが分散している傾向がある。子どもとのふれあいの多さが原因していると考えられる。「しつけに自信があるか」という設問では、自信がある親の方が、子どもの悩みが多様化しているし、悩みはないとの回答も多い。

これらのことから、親は子どもとのふれあいの度合いが強いほど、子どもの悩みを多面的につかむことができていると考えられる。「お子さんの成績に最も影響するのは」という設問の選択肢では、「本人の努力」との回答が最も多い。しかし、母親で、成績に最も影響するものを「先生」「クラス」「友だち」と回答したもので、子どもの悩みを「進路」「勉強・成績」と回答した

ものは、55%にも及んでいる。

では、子どもたちは本当に「進路」「勉強・成績」で悩んでいるのだろうか。第Ⅲ章「子どもの悩みを分かっているか？」で述べるように、子どもの悩みを的確に分かっている親は、父親の23%、母親の27%に過ぎない。「進路」「勉強・成績」以外でも子ども達は悩んでいるのである。しかし、親は日常生活の目に見える部分で子どもの悩みをつかもうとするから、「進路」「勉強・成績」という回答が多い結果となる。「進路」「勉強・成績」で一番悩んでいるのは、親自身なのかもしれない。

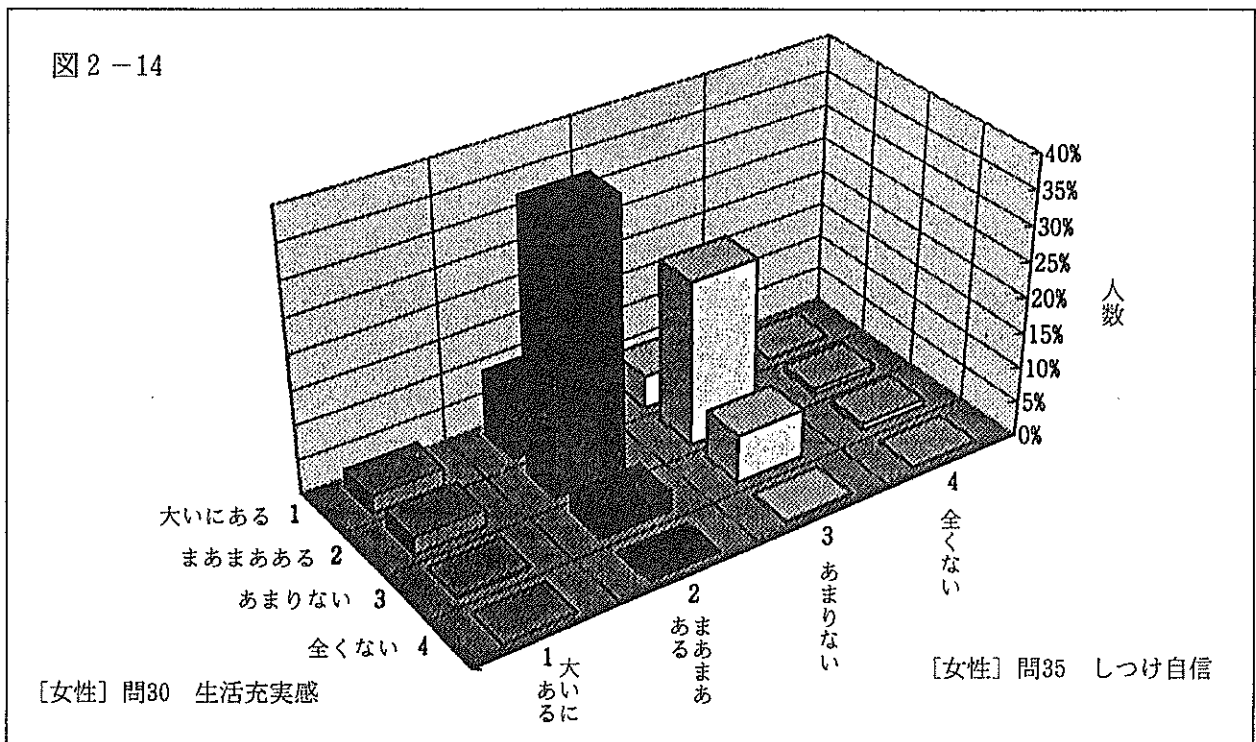
4. 養育意識

ここでは、親の養育意識を、自信、甘さ、信頼などのいくつかの観点から、多面的に据えなおし、親の養育意識の背景となっている基本的なものを明らかにしたい。

(14) 親の充実感に子どもはどのように関与しているか？

親は子どもだけを生きがいにしているのでは寂しいと、時に言われる。それでは、親自身の充実感と子どもはどのように関与しているのであろうか。

「あなたは毎日の生活に充実感がありますか」という設問と「あなたのお子さんのしつけについて自信がありますか」という設問とのクロス結果（母親）を図2-14に示す。



母親全体の61%がしつけに自信があり、その95%が生活に充実感を感じている。同様に、父親でも、全体の61%がしつけに自信を持っており、その89%が生活に充実感があると回答した。一方、しつけに自信がない母親の場合、充実感を感じるのは78%だけであり、しつけに自信がない父親では75%しか充実感を感じていない。しつけに自信があるとの回答は、そのまま親の生活の充実感につながるらしい。しつけに自信があるということは、親の期待する方向に子どもが育っているということの親側の評価である。つまり、親は子どもが期待する方向に進んでいるとき充

実感を感じるようだ。

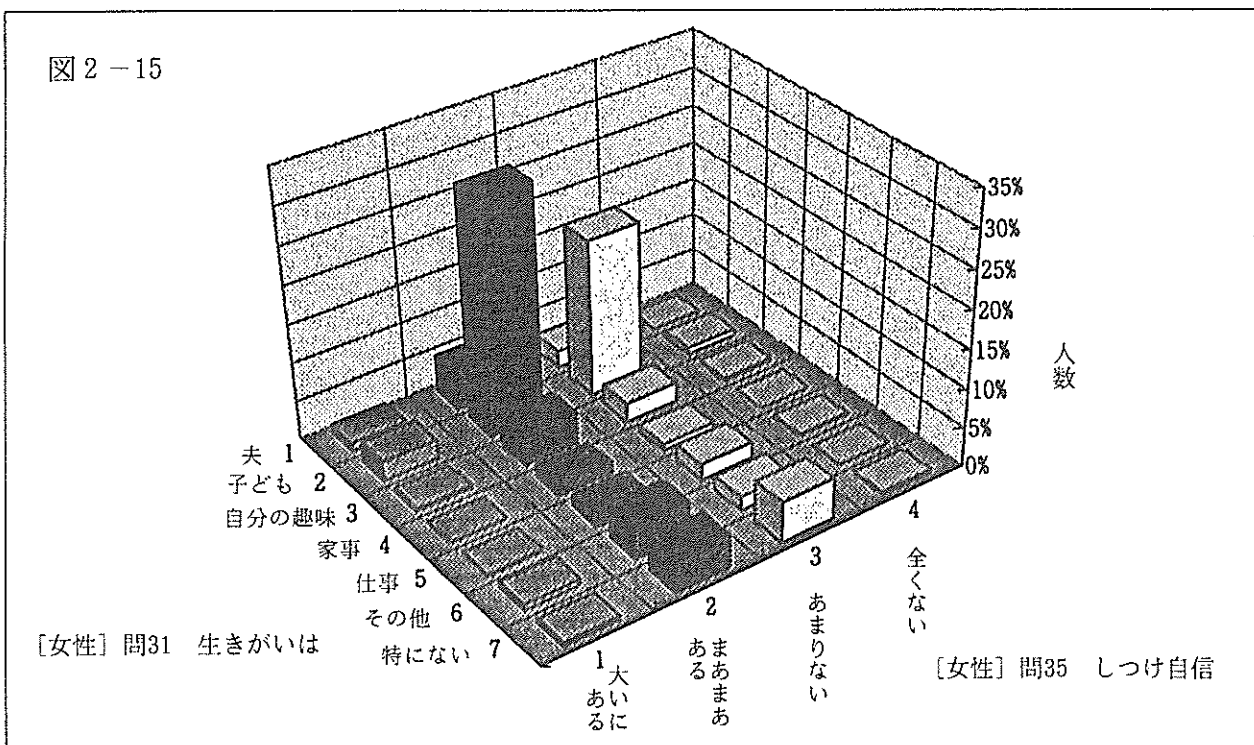
その他の設問とのクロス集計では、母親の場合、「言葉の注意」は「きびしくしかる」よりは「おたがいに注意する」方が充実感を感じており、「子は起こす」ほうが「起こさない」よりも充実感を覚えている。

父母に共通しているのは、前述の「しつけの自信」があり、「テレビの話」をする方が充実感を覚え、「子どもの気持ちが分からない」親には充実感が少ないということである。

(15) 子どもが生きがいから外れるのは、どういうことか？

親が、子どもを「生きがい」とする、あるいはしないという。それはどういうことであろうか。また、子どもが生きがいから外されるのは、どういうことであろうか。子どもを生きがいとする親は、父親43%に比べ母親58%と母親の割合が高い。

ここでは、「あなたの生きがいの対象は何ですか」という問と「お子さんのしつけに自信がありますか」という設問とのクロス集計結果を図2-15として示す。



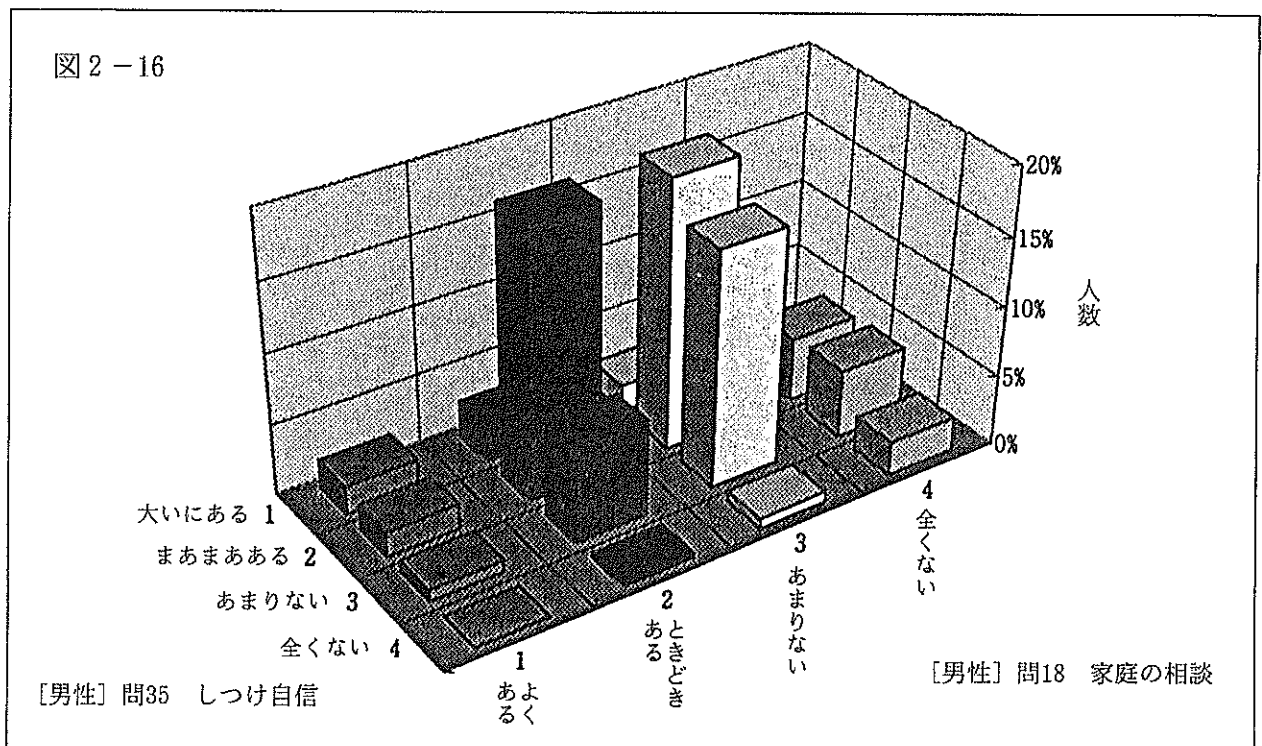
しつけに自信がある母親のうち生きがいを「子ども」と回答したものは61%であり、自信がない母親も61%が生きがいを「子ども」と回答した。父親の場合は、しつけに自信があるものうち、子どもが生きがいと回答したのは45%で、自信がない父親で子どもが生きがいないのは、39%であった。特徴的なのは、しつけに自信がない父親のうち、仕事が生きがいと回答したものが21%であり、これはしつけに自信がある父親よりも比率が高い。さらにしつけに自信がない父親で生きがいがないと回答したものが15%もいるということだ。生きがいがいない親の特徴をクロス結果から見てみると、「勉強の督促」をして、子どもに「家庭の相談」をせず、「他の子との比較」をし、「子どもに立腹し殴りたい」と思い、「子どもの気持ちがわからない」母親。「勉強の督促」「家庭の相談」「他の子との比較」をせず、そのくせ「子どもに立腹し殴りたい」と思っている父親の姿が浮かんでくる。

子どもが生きがいから外れるということは、それ以外の別の生きがいに積極的に関わっているか、何に対しても無気力になって生きがいをなくしているかということである。

(10) しつけの自信がつくのは、どういうことからか？

親が自分の子に対するしつけの自信がつくというのは、どういうことからであろうか。

特別に目立つこととしては、父親の場合、図2-16にみられるように子どもに家庭のことについて相談する場合、しつけに自信があるものが77%であり、相談しない場合53%しか自信がないようである。子どもの自立を促進していく養育意識があり、家庭問題をともに考え、それぞれ一人ひとりを尊重する問題解決的な生活態度を重視していると、しつけに自信がつくようである。母親の場合、「他の子と比較することが多い」傾向があると、しつけに自信がもてていないようである。他の子と比較する場合、55%しか自信がないのに対して、比較しない場合は65%の母親が自信を持っているのである。



腹が立って殴りたいと思う親は、しつけに自信が持てないようで、腹が立って殴りたい父親では51%、母親では49%しか自信がないのに対し、腹が立って殴りたいと思わない父親の68%、母親の69%が自信があるようである。根気強く繰り返し子どもを養育していくことができれば、自信がつくようである。

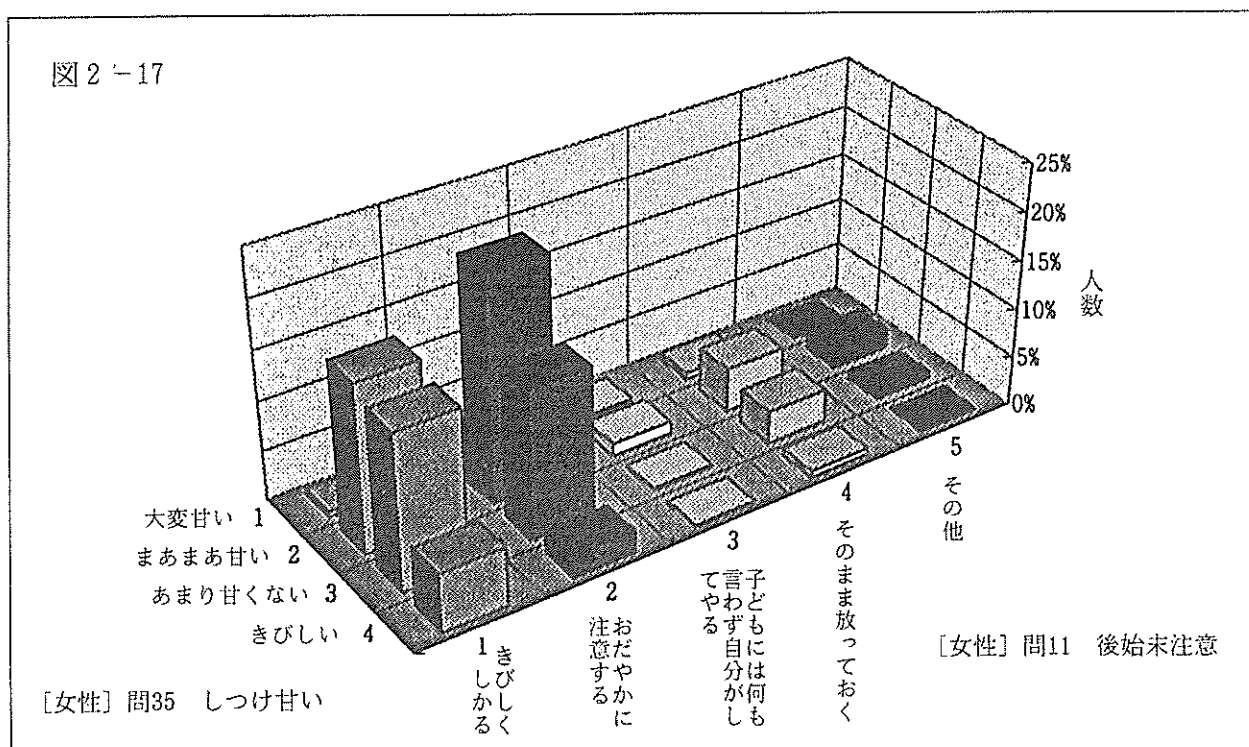
子どもの気持ちが分かる場合、しつけに自信がある母親は71%、子どもの気持ちが分からない場合45%と、しつけの自信は子どもの気持ちが理解できるかどうか大きく左右されるようである。また、生活に充実感がある母親は65%がしつけに自信があるのに対し、自分自身に充実感がない母親は27%しかしつけに自信がない。「あなたのお子さんに積極性（自分から進んで物事に取り組む）があると思いますか」という質問で子どもに積極性があると評価している母親の73%が自信があるのに対し、子どもの積極性を評価していない母親の45%しか自信がなく、子どもから信頼されていると思っている母親の66%がしつけに自信があり、子どもから信頼されていると

思っている母親の66%がしつけに自信があり、子どもから信頼されていないと思っている母親の20%しか自信がないのである。以上のように、多くの要因が母親のしつけの自信に複雑に関係しており、親が子どもに影響を与えるだけでなく、子どもも親に影響を与えるのである。

親がしつけに自信を持つためには、よいと思われることをとにかくやってみることである。うまくいけばそのまま自信につながるからである。

⑴ 甘いと分かるのは、どういうことからか？

言うまでもなく、子どものしつけについて甘いほうだと思いかどうかというのは、親のあくまで主観的な判断である。しかし、とにもかくにも自分自身で甘いという評価を下している親がどのような養育態度をとっているのか、どういうことから甘いと判断しているのかということを知ることは、その養育態度の裏にある意識の一端を知る手がかりになる。「お子さんが自分の使った物の後始末をしなかった場合、どのように対応していますか」という問と「お子さんのしつけについて甘い方だと思いますか」とのクロス集計結果を図2-17として示す。



後始末を「きびしくしかる」と答えた母親のうち44%が「しつけは甘い方だ」と回答し、「おだやかに注意する」と答えたもののうち60%が「しつけは甘い方だ」と回答した。この傾向は父親も同様だった。他の設問では、父母とも「社会の出来事を話すか」という設問とのクロス集計では、社会の出来事を話さない方がしつけに甘いと感じており、「他の子との比較」では比較しない方が甘いと感じている。しつけの自信は「あまり」「全く」ないと回答したほうが甘いと答え、「親の生き方の真似」は望まないほうが甘いと思っている。「子を起こす」という設問では、母親は「起こす」方が甘いと感じ、父親は「起こさない」方が甘いと感じている。「勉強の督促」では、「よく」督促をする母親の52%が甘いと感じており、「ときどき」督促をする母親の56%が甘いと言っている。「あまり」「全く」督促をしない母親では53%が甘いと感じている。

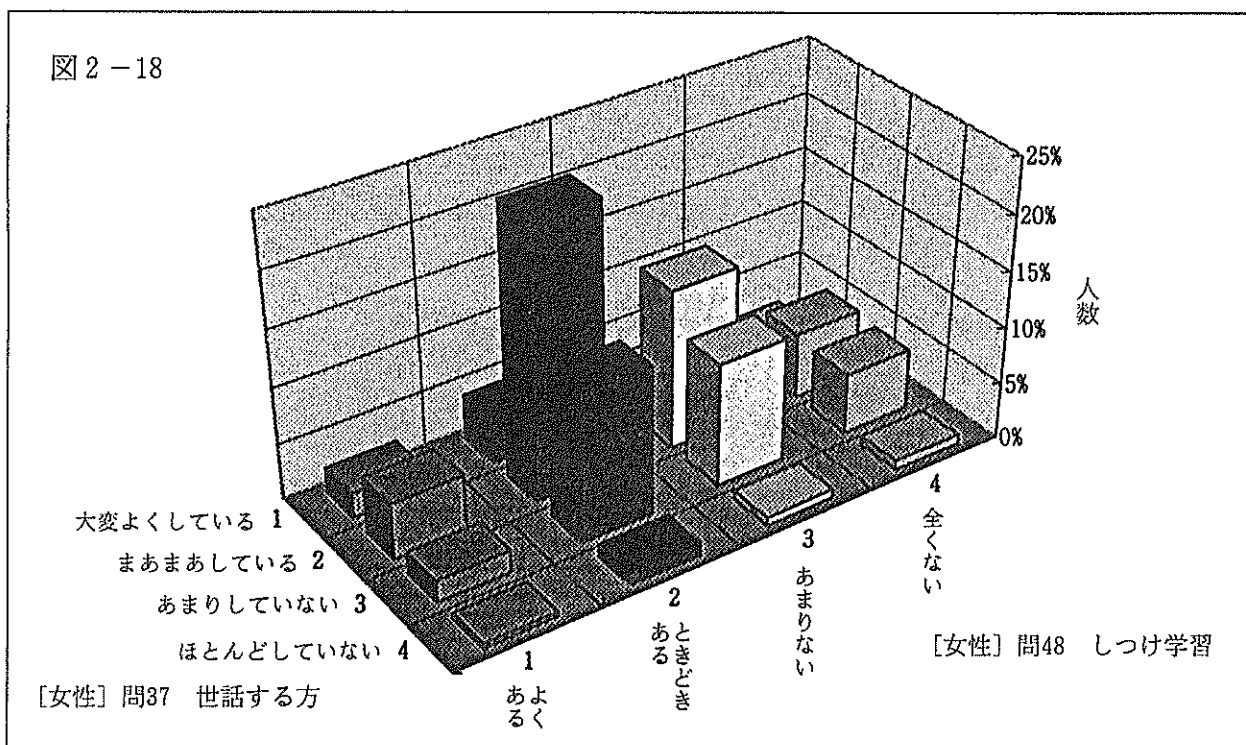
これらのことから、ことの是非は別として、親は子どもに積極的に関わっていない場合、しつ

けは甘いという自己判断を下すようである。

(18) 世話をしている方と思うのは、どういうことからか？

親への「あなたは、お子さんの世話をしているほうだと思いますか」という質問での子どもの世話をしていることと、他の質問との関連をみてみよう。

「しつけについて本を読んだりテレビ番組をみたり講演会にいったりすることがありますか」という設問と「子どもの世話をしているほうだと思うか」という設問とのクロス結果を図2-18として次に示す。



「よく」「ときどき」しつけに関する学習をする母親のうちの96%が「世話をするほう」と回答した。「あまり」「全く」学習をしない母親の場合、57%しか「世話をするほう」とは回答しなかった。「他の子との比較」でも、「よく」「ときどき」比較する母親の67%は「世話をする」と意識しており、「あまり」「全く」比較しない母親の場合は58%しか「世話をする」意識を持っていなかった。「子どもを起こす」という設問では、起こす方が「世話をしている」と思っている。「休日に子どもと過ごしたいか」という設問では、「大いに」思っている母親の76%、「まあまあ」思ってる母親の61%、「あまり」「全く」思っていない母親の47%が、「世話をする方だ」と回答した。

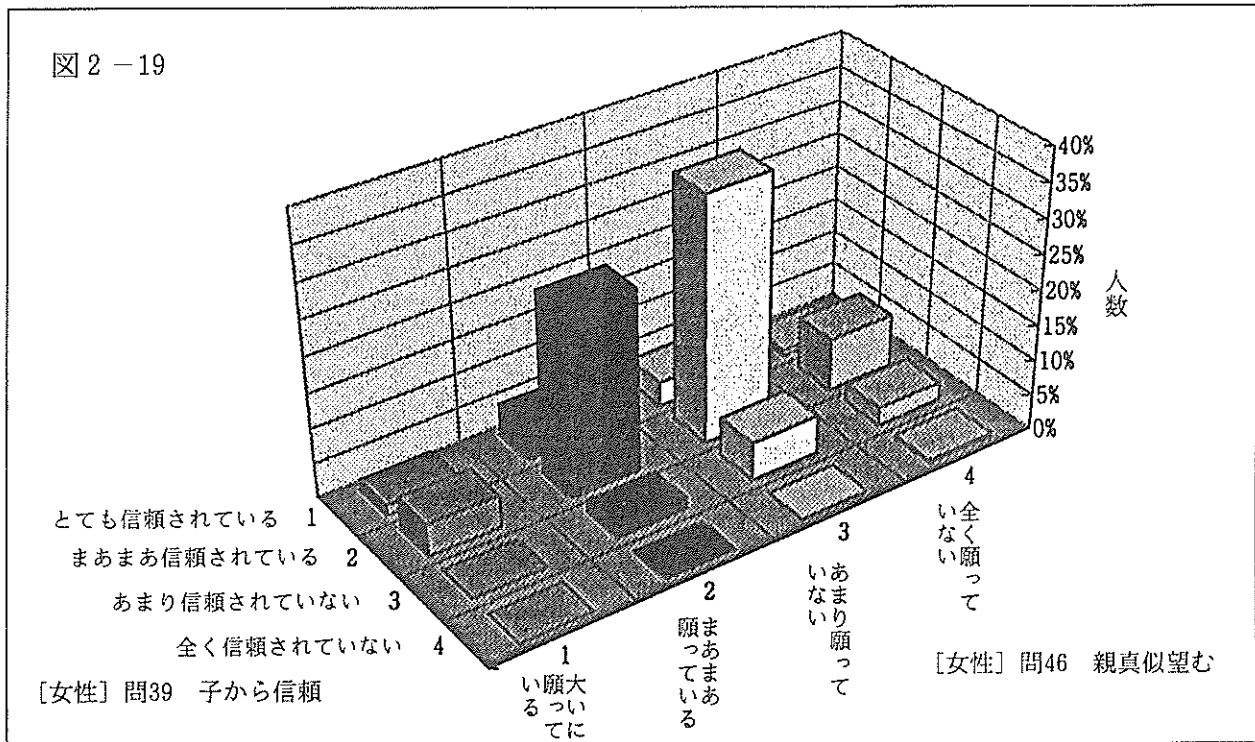
これらのことから、親が積極的に子どもに関わっている場合、「世話をしている」という意識を持つ傾向があることが分かる。

(19) 信頼されていると思えるのは、どういうことからか？

親への「あなたは、お子さんからどのように思われていると思いますか」という質問があるが、子どもに信頼されると思えるのは、いったいどういうことからであろうか。

「あなたは、お子さんからどのように思われていると思いますか」という設問と「あなたの生

図 2 - 19



き方をまねてくれることを願っていますか」という設問とのクロス集計結果を図 2 - 19として次に示す。

「親のまねを望む」母親のうち95%が子どもから「とても」「まあまあ」信頼されていると思っている。それに比べて、「親のまねを望まない」母親のうち信頼されていると思っているのは85%に過ぎない。「しつけの自信」についても同様で、自信がある母親の97%は「信頼されている」と思っているが、自信がない母親の場合、78%しか信頼を感じていない。

これらの要因が親の意識の中にあり、子どもの信頼に結び付くと考えられる。親の生き方を子どもがまねしてほしいほど自分の生き方に自信があり、それがしつけの自信にまでつながっているのであろう。その自信が子どもの信頼につながると考えられる。

その他の設問とのクロス結果によると、子どもの信頼を感じている親は、「あいさつの注意」を「必ず」し、「勉強の督促」は「ときどき」、「後始末の注意」は「おだやかに」行き、「乱暴な言葉遣い」には「必ず」注意をし、「子どもの気持ちが分らなくなること」がなく、「子どもにもお礼をいう」ことができる親である。

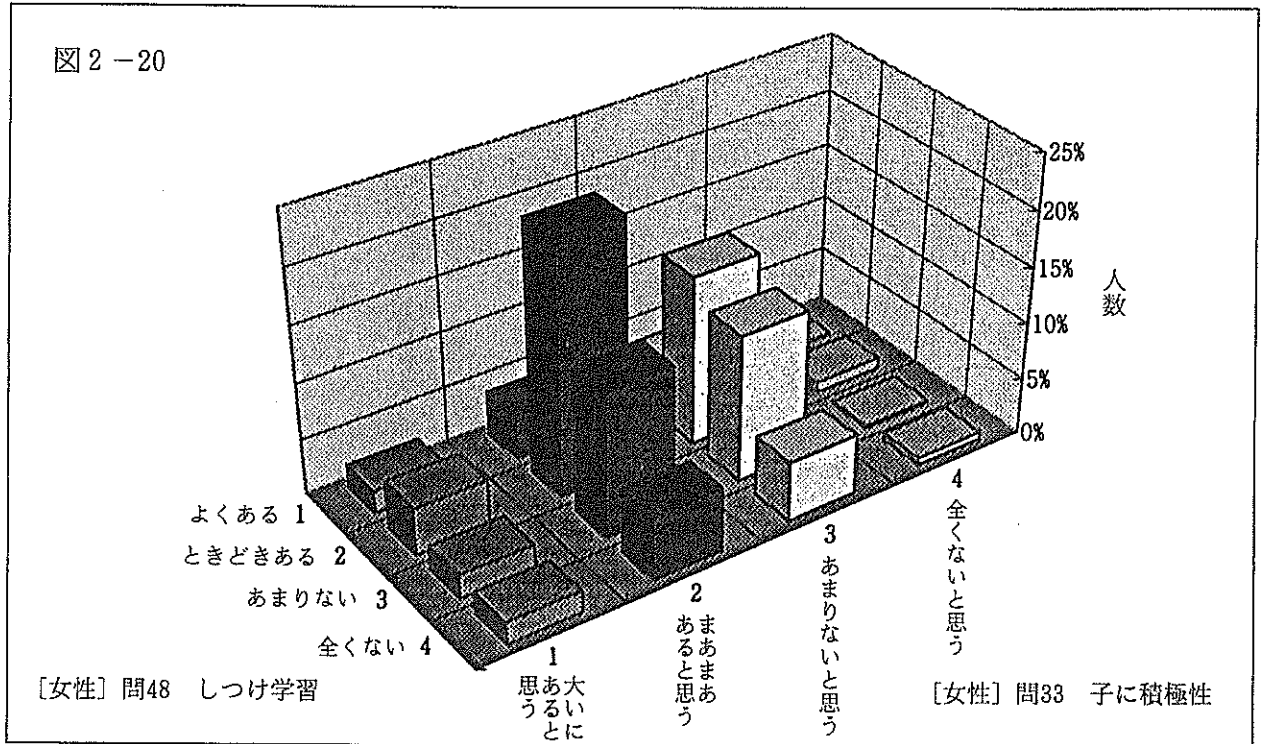
20) しつけを学ぶ気にさせるのは、どういうことか？

親が、しつけを学ぶ気になるのは、どういうことと関連があるのだろうか。

「お子さんに積極性があると思いますか」という設問と「しつけについて本を読んだりテレビ番組をみたり講演会にいたりすることがありますか」とのクロス結果を図 2 - 20として示す。

「子どもの積極性」を認めている母親のうち、「しつけに関する学習」を「よく」「ときどき」する母親は59%であるが、子の積極性を認めていない母親の場合50%しかない。同じように、「親のまね」を望む母親のうち、「しつけについて学習」するものは62%であるのに対し、親のまねを望まない母親の場合、しつけの学習をするものは52%に過ぎない。「子どもの気持ちが分らないこと」が「よく」「ときどき」ある母親の中でしつけの学習をするものは57%、「子どもの気

図 2 - 20



持ちが分からないこと」がない母親の場合は54%である。「子どもに立腹し殴りたいと思うことがある」母親でしつけの学習をするものは54%、「殴りたいとは思わない」母親で、57%である。

これらのことから、二つの母親像が浮かび上がる。

一つは、子育てについて積極的に学ぼうという母親である。こういう母親は、自分の生き方に自信があり、子どもに親の生き方を真似してほしいと願っている。また、こういう積極的な親の学習行動は、子どもの積極性を誘発するともいえる。

もう一つは、子育てに自信がなく、子どもの気持ちが分からなくなったり、殴りたいと思うことがある母親である。何か学習することで、現在の子どもをめぐる問題を解決しようとする母親である。

いずれにせよ、親がしつけを学ぶ原動力になるのは、子どもの姿だといえる。

5. まとめ

父親・母親の養育態度・行動の実態を、養育行動、親子交流、子ども評価、養育意識の観点から述べてきたが、養育行動については、親の子どもとのかかわりの在り方が明らかになった。「朝、起こす」「後始末の注意をする」「言葉遣いの注意をする」「勉強の督促をする」等、日常的に子どもに対して行っている行動であるが、家庭教育が保護から自立への過程だとすると、家庭や個人の実態、子どもの発達段階を踏まえた適切な行動が望まれる。

「起こす」という行動は、子どもを学校に行かせる、あるいは子どもを次の行動へ駆り立てる行動であるが、中学生の発達段階を考えると、その日の行動や予定を意識して自分で起きるのが普通であろう。また、親もそれを知っているため、養育意識の項では、「起こす」方が「しつけが甘い」とらえている母親の割合が多い。しかし、親は自分自身が忙しい上、子どもを学校に行かせないと成績・進学にさしさわるという意識も働き、「起こす」結果になるのであろう。待つことも、ひとつの養育行動である。

「後始末の注意」に関しては、中学生が素直に注意を聞けない時期であるため、単に注意するだけでは効果が期待できないこともある。注意以前の親子の信頼関係や、日常的な触れ合い、厳しく叱るよりもおだやかな注意などが、後始末の注意には必要であろう。また、親自身が規則的な生活を送り、その他の注意もきちんと行うことも大切である。親の意識としてはおだやかに注意する方が、厳しく叱るよりもしつけが甘いにとらえている。これは、親自身、厳しく指導しなければという意識があり、それを押さえている姿かもしれない。

「言葉遣いの注意」では、昔から続いてきた「男の子だから、女の子だから」という視点での注意が、まだ行われていることが明らかになった。「後始末の注意」と同様に、その注意にあたっては、注意以前の円滑な親子関係が望まれる。

「勉強の督促」では、子どもの進学や学習に対する親の焦りが督促に結び付いているという結果がでた。他の子と比較したり、将来や人生の話をあまりしないで勉強の督促を行なっても、中学生にとってはあまり効果がないように思える。将来や人生の話や経験談を親が日常的に行い、他の子との比較などしないで子どもを一人の人格にとらえ、子どもに的確な目標やめあてを持たせることができれば、自主的な勉強に結び付き、督促も不要になろう。しかし、親は、勉強の督促はすべきものという意識があり、勉強の督促をしない母親の53%は自分のしつけを甘いと感じている。

親子交流では、現在の多くの家庭で行われている家庭教育が望ましい方向にあることが明らかになった。

「日常対話」は多くの家庭で、社会の出来事を中心に行われている。また、親に子どもへの強い思いがあり、自分の生き方を真似してもらいたいと思っている親ほど、将来や人生の話をよくする傾向が見られた。

「家の相談」では、父親と母親の意識が若干異なっている。父親は相談することが少なく、母親は相談相手として子どもを認めている傾向がある。また、家族の関係が稀薄では相談どころではないので、相談以前に対話を多くし、社会の出来事などを話し、家族の一員として子どもの人格を認める必要がある。父親も、自分の考えは持っていたとしても、家族の一員として子どもにも意見を聞くよう努力が必要であろう。また、しつけへの自信が、家庭のことを相談することと相関関係があった。親が自信を持って子育てをすることは重要なことである。

「子をほめるために」は、親の意識が重要な要因となることが明らかになった。親が生活に充実感を感じていなかったり、しつけに自信がないと子をほめることが少ない。親にゆとりがあると、子どものわずかな進歩にも目を向けることができ、ほめることにもつながる。そのゆとりにより、日常的な親子交流が生まれ、社会のことに目を向けさせることもできる。それがまた子どもに新しい刺激を与え、新しい活動につながり、ほめることにつながる。

子ども評価では、親は子どもとの関わりが深く、しつけに自信があるほど子どもの自主性、積極性、忍耐力を認め、子どもへのいろいろな注意をおだやかにしていることが分かった。

「子どもの自主性」では、子どもが自主的に活動できるよう過干渉せず、かといって放任もしない家庭で、子どもの自主性を認めている親が多かった。例えば、勉強の督促、後始末の注意、持ち物の注意などは注意する親の方が自主性を認めようとせず、注意しない親の方が自主性を認めている。だからといって放任というわけではなく、あいさつの注意をする親の方が自主性を認めている。子どもを殴りたいとは思わず、きょうだいや他の子とも比較しない親が自主性を認めているところからも、親の冷静な養育態度が浮かび上がってくる。

「子どもの積極性」でも子どもとの関わりの深い親ほど積極性を認めている。後始末などの注意では、穏やかに注意する親の方が、厳しく叱る親よりも積極性を認めている。つまり、「待っている」のである。中学生は得意な分野、興味のある分野ではたいへん積極的になる反面、注意を素直に聞けず反発したくなる年頃でもある。厳しい指導の結果、子どもの積極性をつぶしてしまうようなことはないだろうか。日頃からの接触が多く、子どもを認めることができる親は、子どもの積極性を伸ばすこともできている。

「子どもの忍耐力」では親の忍耐力との関わりが明確になった。子どもを殴りたくなる親は、子どもの忍耐力を認めようとせず、子どもを殴りたいとは思わない親は、子どもの忍耐力を認めている。その他、言葉、後始末、男女の性に関することなどの注意、きょうだいや他の子との比較などもしない親が、忍耐力を認めている。つまり、親の方が「待つ」ことができず、細かい注意を繰り返している家庭では、子どもの忍耐力が見えてこないということが言える。ここでも、しつけの自信があり、待つことができる親は子どもをきちんと評価していることが分かる。

「子どもを殴りたいと思う」ことについては、親の子どもに対する思いが強く、「こうなければならぬ」と思っている親ほど、現実の子どもの姿と親のイメージの子どもの姿とのギャップから、子どものささいな行動にも腹が立ち、殴りたいと思うという結果がでた。成績や進学で悩んでいる親ほど、子どもを殴りたいと思っているし、きょうだいや他の子と比較することが多い親ほど、子どもを殴りたいと思っている。つまり、成績や進学に対する親の方の焦りの結果、こういう感情が生まれてくるといえる。子どもの個性を認め、現実の子どもの姿から、焦らずゆっくり望ましい方向に導いていくことが大切である。

「子どもの気持ちがわからない」ことが多い親は、自分のイメージで作上げた子ども像と現実の子どもの姿の差から分からないようになるようだ。日常的な触れ合いが多く、いろいろな注意もおだやかにできる親、しつけに自信があり、他の子との比較などをしない親には、子どもの気持ちが分からないことがあまりない。親は子ども理解を心掛けるのと同様に、子の親理解をさせるよう、日常的に触れ合うことが大切である。また、このことはしつけの自信にもつながるし、親を信頼する子どもにもつながってくる。

「子どもの悩み」を、親は目に見える日常生活の中からしかつかむ機会がない。子どもとの関わりが深く、日常的な触れ合いが多い家庭では、子どもの悩みを多様にとらえることができ、触れ合いが少ない家庭では、子どもの悩みは進路・勉強・進学と決めて掛かっている傾向がある。特に、子どもの成績に影響するものを子どもの努力とせず、先生・クラス・友だちなどの環境要素とした母親では、子どもの悩みは進路・勉強・進学との回答が高い。実際、子どもは多くのことで悩んでいるのであるが、その悩みを正しくとらえている親は、父親の23%、母親の27%に過ぎない。子どもの悩みは的確につかむと、それに対するアドバイスや対処法も伝えられるが、現実には、親はまだまだ子ども理解ができていないようである。

親の養育意識を尋ねた項目では、親の養育行動の背景が明らかになった。

「親の充実感」では、子どもとの接触が多い方が充実感を感じる傾向があったが、子どもの養育に確かな方針で臨んでいる母親に充実感を感じるものが多く、父親の場合は、子どもに対して父親の威厳のようなものを示すものの方が充実感を覚えるようである。

「子どもが生きがいから外れる」親が増加している。特に生きがいがない親の場合、子どもの養育態度にもかなり問題が見られるようだ。子どもに積極的に関わろうとせず、そのくせ子どもの気

持ちが分からないので、子どもを殴りたいと思うような親などである。生きがいがあるか、あるいは別のことであるかは別として、親が生きがいを持って充実した生活を送ることが、子どもの健全な成長につながるのではないか。

「しつけの自信」はいろいろな養育行動の背景として重要なものである。その自信をつけるためには、親がよいと思われることを試行錯誤するしかない。その結果、子どもの気持ちが分かるようになったり、親子関係がより濃厚になったりする改善点が出てくれば、自信につながる。よその子と比較したり、子どもの気持ちを見失ったり、子どもに立腹して殴りたいと思う親はしつけの自信が揺らいでいる証拠である。確かなしつけの方針を親自身がもつことが大切である。

「しつけが甘い」と感じている親は、子どもとの関わりに積極性が見られないという結果が出た。また、親自身、「子を起こす」ことが甘いか、「起こさない」方が甘いのかといった意識のばらつきがある。子どもの発達段階に応じて、自立させる段階によって子どもとの関わりは変わってくるが、例えば、「もう、中学生だから、明日からは自分で起きなさい」と中学入学時に宣言し後は本人に任せているような、明確な態度を示し、それ以後起こしてやることは「甘い」とする親自身の尺度が必要であろう。

「子どもの世話をしている」という意識の背景には、親がどこまで世話をすることが必要かという課題がある。家庭教育が保護から自立への過程である以上、中学生期にはそれにふさわしい世話が必要である。しかし、ふさわしくない世話をしている親もいる。いわゆる過保護、過干渉である。そういう親が「世話をしている」という意識を持っているようだ。また、いつまでも子離れできず、子どもにまわりついてる親も「世話をしている」という意識を持っているようだ。

「親が子どもに信頼される」ためには、自分の生き方、しつけに自信があることが大切である。こういう親は、きちんとした一貫した家庭教育の方針を持ち、子どもに対してもあやふやな態度を示すことが少ない。それが信頼につながるし、しつけの自信にもつながると考えられる。

「しつけの学習」に親が参加する。その原動力になるのは子どもの姿だといえる。子育てに自信をなくし、何かを求めようとしている母親も学習に臨むし、しつけに自信があり子どもも望ましい方向に育てている母親も学習に臨んでいる。しかし、父親の場合、そういう学習態度があまり見られない。家庭で父親も母親も、そして子どもたちも学び、よりよい家庭生活を送る努力をすることが大切である。

第Ⅲ章 中学生の意識・行動と 親の養育行動の相互評価

第Ⅲ章 中学生の意識・行動と親の養育行動の相互評価

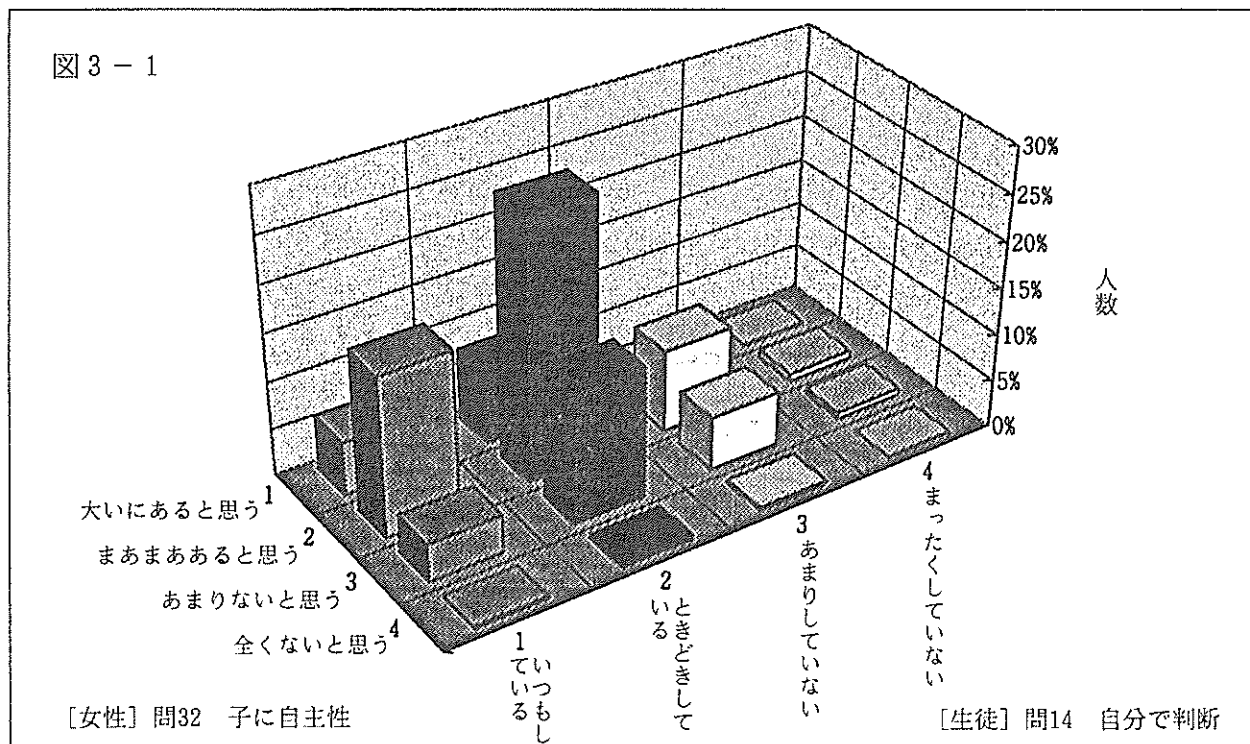
親の養育行動には過保護や放任といった傾向が見え隠れしている。明らかにそれと分かるものではなく、親にも意識されていないことが多い。親と子どもの間合いが適切に保たれていないためであると考えられる。つまり、子どもの育ちを正しく見ていないから親は一方的に思い込みから抜けられず、子どもの声を虚心に聞き取っていないから親は関心と呼び覚まされないままである。この章では、親の目と子どもの目をつきあわせることによって、養育行動に生じる隙間を見つけることにする。

1. 親子による自己評価と相互評価

この節では、自己評価と他による相互評価を親子の間でクロス集計した結果について述べる。自分が思っているように他人も見てくれるとは限らないが、そのずれの違いの程度を知っておくことは、親子関係をたたく機能させる上で大切なことである。

(1) 子どもに自主性があると思うか？

中学生になると親の手を離れて自分で考えようと自己主張し始める。自主性は育ちのバロメータの一つである。中学生には「あなたは、自分で判断し行動しようとしていますか」、一方親には「お子さんに自主性（自分で判断し行動する）があると思いますか」と質問した。そのクロス集計を図3-1に示す。

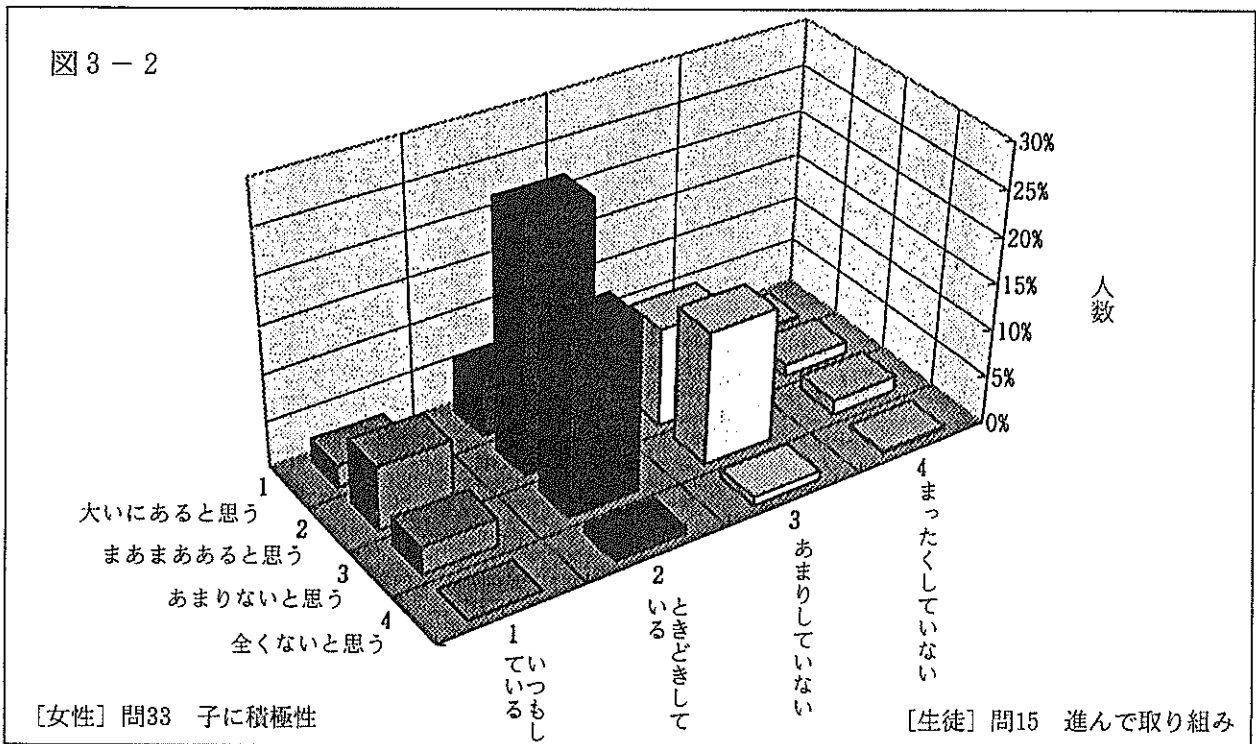


個別集計について見ると、中学生の82%が自分で判断しており、父親の69%、母親の73%が子どもの自主性を認めている。クロス集計について見ると、中学生の「いつも、ときどき」していると回答しているもののうち、「大いに、まあまあ」そう思うと回答する父親は72%、母親は76%である。また「あまり、まったく」していないという中学生に対して、親は過半数が逆の評価をしている。全体割合では自主性の有無について67%の父親、69%の母親が子どもの自己評価と

一致した評価をしている。不一致が生じるのは子どもの生活圏と親子の生活圏がずれていること、さらに何を自主的にするかという点について親と子どもの認識がずれていることによると思われる。自主性とは子どもの内面の気持ちであり外見から伺うのは難しいので、このずれを無くすためには親子が考えていることをお互いが理解しようという温かい交流が必要である。

(2) 子どもに積極性があると思うか？

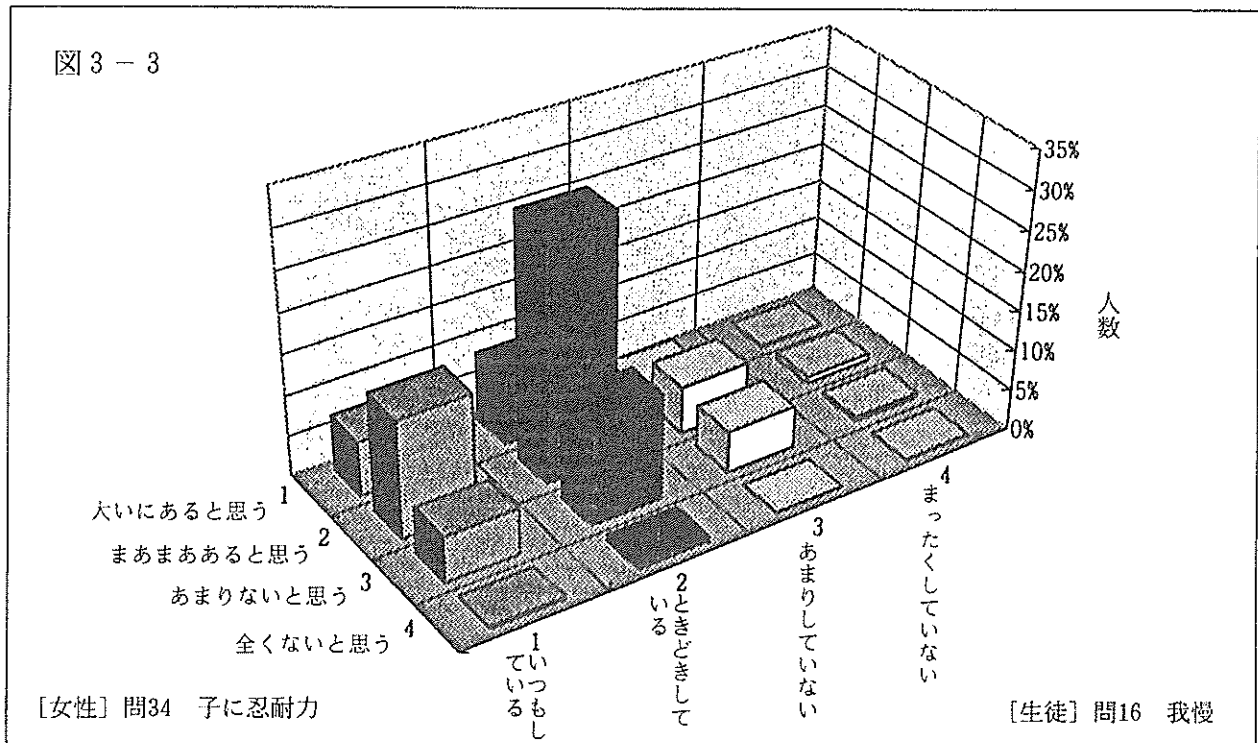
中学生になると自分の能力を試そうとする。積極性は育ちの状態を表わすバロメータの一つである。中学生には「自分から進んで物事に取り組もうとしていますか」、一方親には「お子さんに積極性（自分から進んで物事に取り組む）があると思いますか」と質問した。そのクロス集計を図3-2に示す。



個別集計について見ると、中学生の69%が進んで取り組んでおり、父親の58%、母親の59%が積極性を認めている。クロス集計について見ると、中学生の「いつも、ときどき」していると回答しているもののうち、「大いに、まあまあ」そう思うと回答する父親は64%、母親は66%である。また「あまり、まったく」していないと回答している中学生のうち、そう思うという回答をしている父親は56%、母親は53%である。全体割合では積極性の有無について、父母ともに62%の親が子どもの自己評価と一致した評価をしている。不一致がかなり多いが、これは親が期待する積極的にして欲しいことと、子どもが願って積極的にしようとしていることがずれているためであろう。例えば親はもっと勉強に積極的になって欲しいのに、子どもは好きなことに積極的になっているといったすれ違いである。親は期待する積極性にこだわるあまり、子どもが示す積極性を否定することがないようにしなければ、育ち自体を抑制することとなる。

(3) 子どもに忍耐力があると思うか？

中学生になると行動範囲が広がるだけに思い通りにならないこともあり、自分を抑えることが必要になる。忍耐力は社会生活を営むために必要な資質の一つである。中学生には「がまんすべきときはがまんしていますか」、一方親には「お子さんに忍耐力（がまんすべき時はがまんする）があると思いますか」と質問した。そのクロス集計を図3-3に示す。



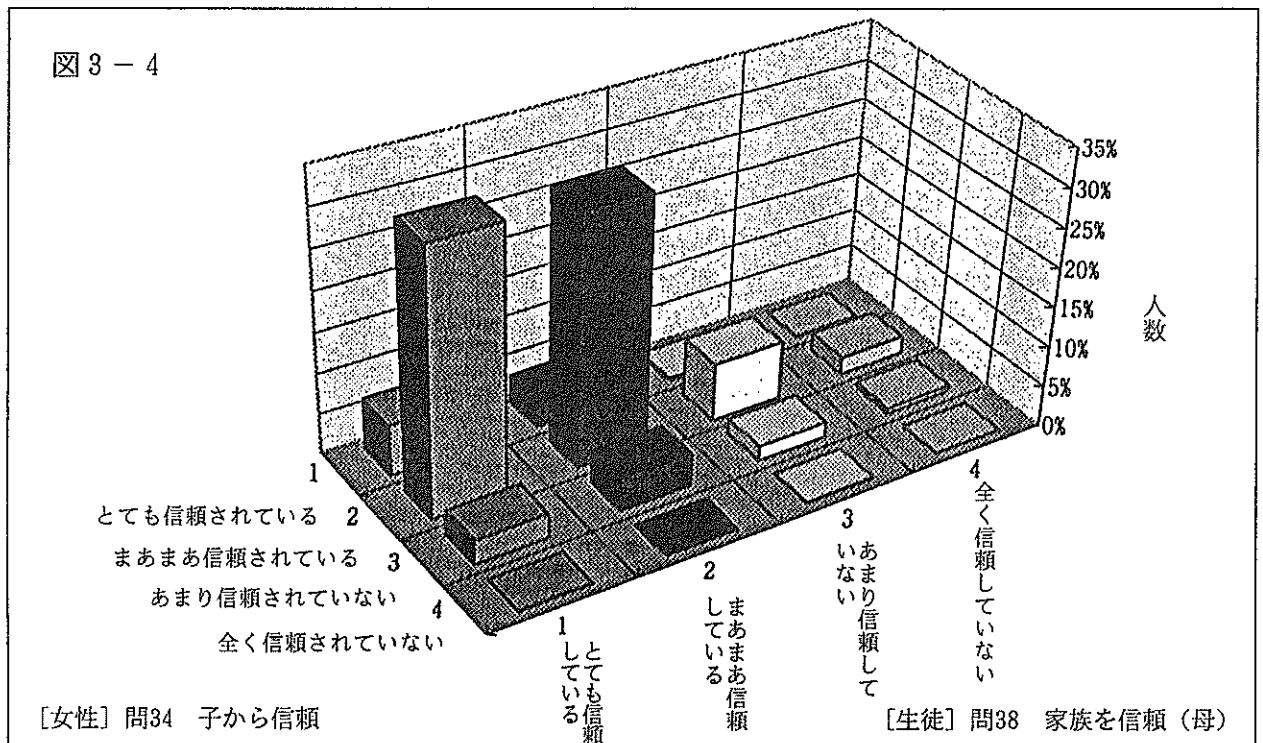
個別集計について見ると、中学生の87%ががまんしており、父親の67%、母親の73%が忍耐力を認めている。クロス集計についてみると、中学生の「いつも、ときどき」しているものうち、「大いに、まあまあ」そう思うと回答する父親は69%、母親は75%である。また「あまり、まったく」していないと回答している中学生に対して、逆に忍耐力があると評価する父親は58%、母親は62%である。全体割合では忍耐力の有無について、65%の父親、70%の母親が子どもの自己評価と一致した評価をしている。不一致になる要因の一つとして、子どもはがまんさせられていて自分からがまんしようとはしていないのに、親の方はがまんしていると認めてしまう場合が考えられる。がまんさせられているのか、がまんしようとしているのか、その違いを見分けるためには親は少し抑制を緩めてみる必要がある。

(4) 子どもに信頼されていると思うか？

中学生になると親から離れようとする。まるで親を必要としないように見えることがある。しかし、この巣立ちは親との信頼関係があるからできることである。中学生には「家族のことをどう思っていますか」という質問に対して父母別に信頼しているかを、一方親には「お子さんからどのように思われていると思いますか」という質問によって信頼されているかどうかを回答してもらった。そのクロス集計を図3-4に示す。

個別集計については、父子関係で中学生の87%が父を信頼しており、父親の80%が信頼されていると思ひ、母子関係では中学生の86%が母を信頼しており、母親の88%が信頼されていると思っ

図 3 - 4



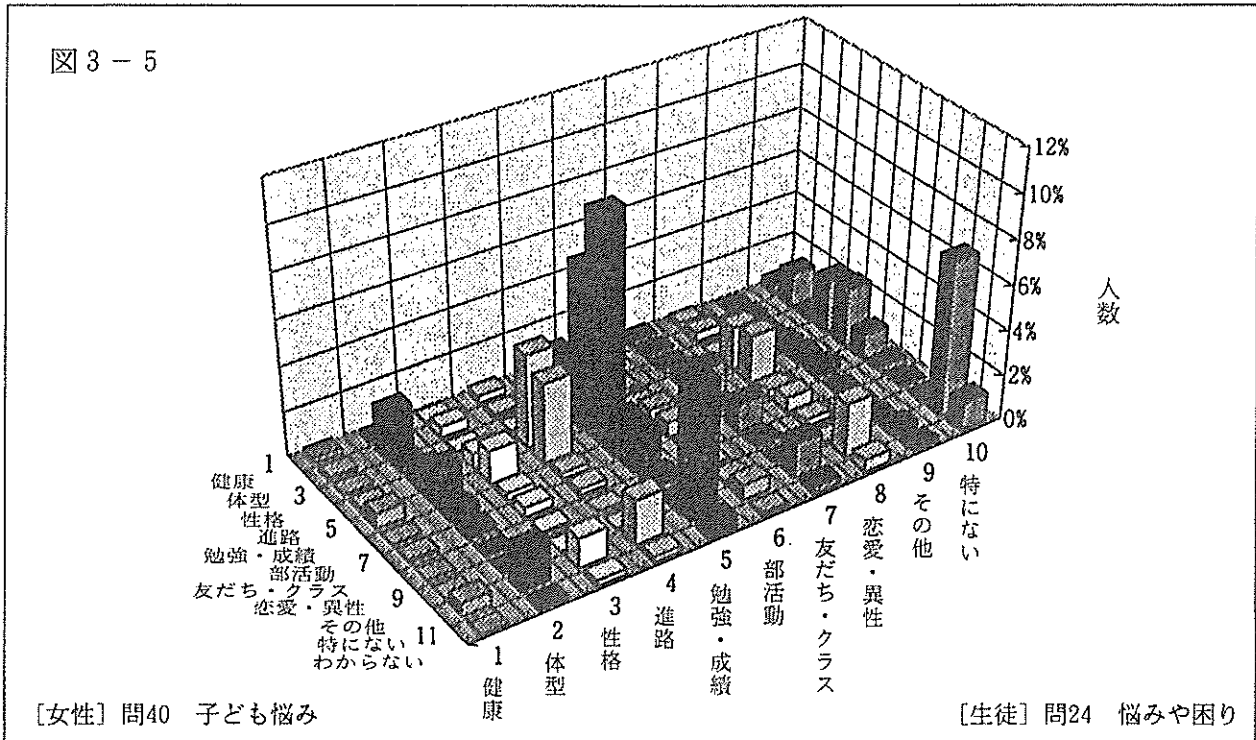
ている。クロス集計について見ると、中学生の「とても、まあまあ」信頼していると回答しているもののうち、「とても、まあまあ」信頼されていると思うと回答する父親は80%、母親は90%である。母親の自信が伺える。全体割合では信頼の有無について74%の父親、81%の母親が子どもの自己評価に一致した評価を下している。信頼が親子関係のベースであるとみなせば、子どもは信頼しているのに親の方は信頼されていないと思ったり、その逆のことがあるのは、割合は少ないとはいえ要注意である。また、子どもが親をととても信頼しているのに、親の方はまあまあ信頼されていると控えめに思っている所がある。この控えめさが過保護や過干渉への抑制と反省に寄与すれば良いが、放任への兆候であるなら気をつけておかねばならない。

(5) 子どもの悩みが分かっているか？

中学生になると自分と他人との関係、社会との関係の中でいろいろな矛盾に遭遇し、それが自分に跳ね返るとき悩みになって自覚される。その悩みを親にはなかなか打ち明けようとはしない。中学生には「今もっとも悩んでいること、困っていることを選んで下さい」、一方親には「お子さんが今抱えている悩みはどれだと思いますか、を選んで下さい」と質問し、それぞれ同じ選択肢から選んでもらった。そのクロス集計を図3-5に示す。

個別の集計について見ると、中学生の45%が「進路、勉強・成績」を選び、父親の41%、母親の46%がそう思っている。クロス集計について見ると、中学生の「進路、勉強・成績」と回答しているもののうち、そう思っている父親は51%、母親は60%である。また中学生が何かに悩んでいるのに、悩みを持っていないと思う父親が16%、母親が18%いる。悩んでいるかどうか分からないというのは父親に多い。恋愛異性問題で悩む中学生が9%いるが、それを分かっている親は皆無である。全体割合では、子どもの悩みを的確に分かっている親は、父親で23%、母親で27%に過ぎない。悩みといった子どもの内面に届くような交流が実現できていないことが、中学生時期の養育を困難にしている最大の要因である。悩みを吸い上げる道を、親子関係以外の所にも作っ

図 3 - 5



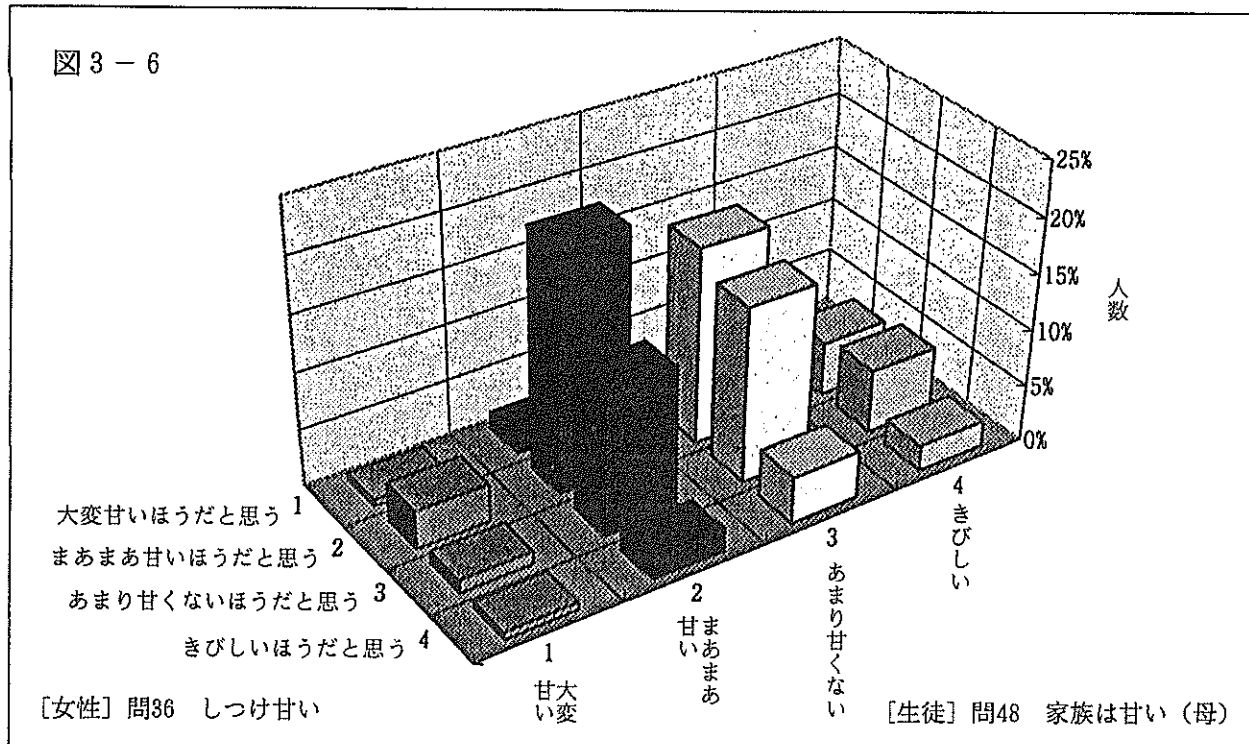
ておくことが課題である。

(6) 親のしつけは甘いのか？

中学生になると親の自分への言動に暗に込められている意図を知り尽くしている。小さいころからのつきあいだから当然であろう。親を分かってしまったという気持ちが、親を見くびるようになりかねない。中学生には「あなたの家族の人は、あなたに対して甘い方だと思いますか」と父母別に質問し、一方親にはそれぞれ自分と連れ合いのしつけについて「お子さんのしつけについて甘い方だと思いますか」と質問した。そのクロス集計を図 3 - 6 に示す。

個別集計では、中学生の52%及び母親の13%が父を甘いと思い、父親の61%が自分は甘いと思っていて、一方中学生の47%及び父親の53%が母を甘いと思い、母親の53%が自分は甘いと思っている。クロス集計について見ると、自分は「大変、まあまあ」甘いと思っても「たいへん、まあまあ」甘いと思う中学生は59%であり、甘いと思う母親に対してそう思う中学生は53%である。また9割近くの母親が父のしつけは「あまり甘くない、きびしい」と思っているが、中学生の48%は父が甘いと思っている。一方半数近くの父親が母のしつけを甘いと見ているが、中学生の52%が「あまり甘くない、きびしい」と思っている。全体割合では、しつけが甘いか否かについての親の自己評価は、父親の59%、母親の57%が子どもの評価と一致している。かなりすれ違っているが、これは親が思うしつけの甘さと子どもが思う甘さの基準が違っているからである。親が甘いつもりでも子どもにはしつける立場の親に対する緊張が感じられるし、他方親はしつけるつもりで厳しくしても子どもの方は案外慣れっこになってさらっとかわしていたりということがありそうである。

図 3 - 6

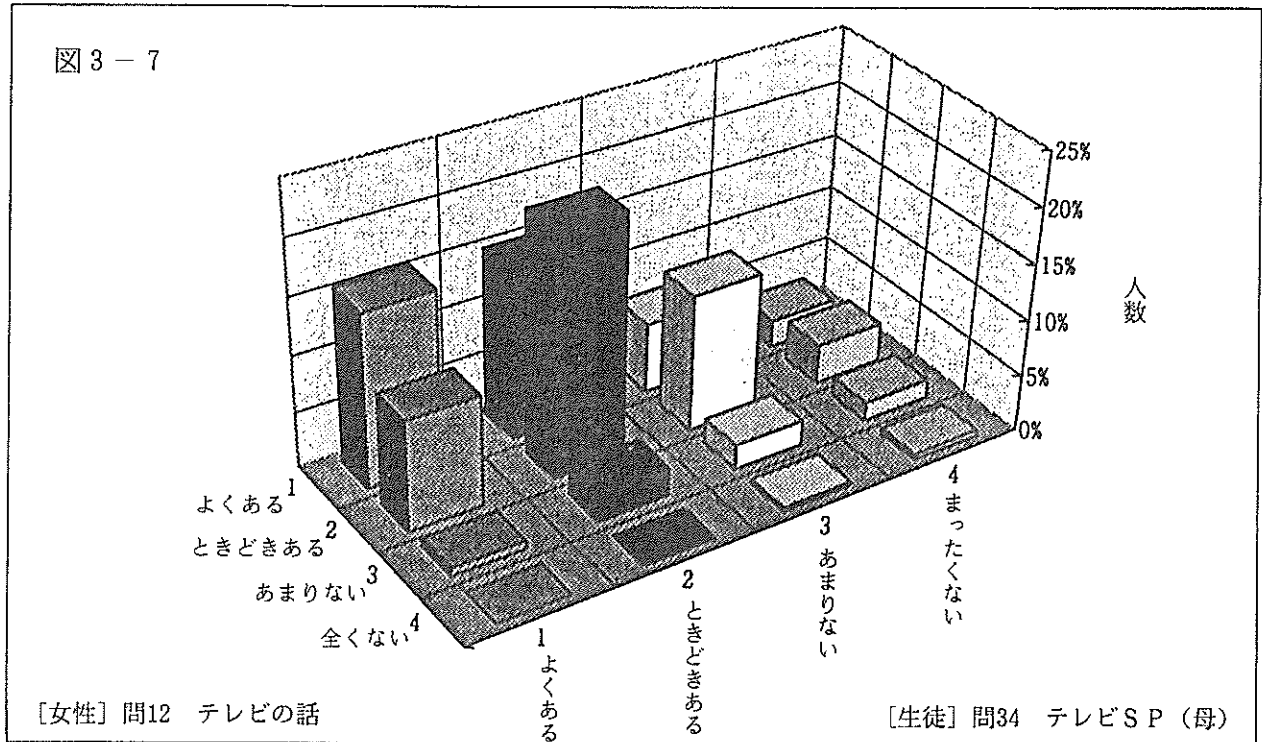


(7) テレビのことなどについて話しているか？

中学生になると流通している情報を理解できるようになるため、かなりの情報通を自認する。したがって親の持つ経験的な情報を受け取る必要を感じなくなる。中学生には「家族の人とテレビのことやスポーツのことなどについて話すことがありますか」、一方親には「お子さんとテレビや映画やスポーツのことなどについて話すことがありますか」と質問した。そのクロス集計を図3-7に示す。

個別集計については、父子関係で59%の中学生が父と話していて、父親の81%が話している。一方、母子関係では69%の中学生が母と話していて、母親の92%が話していると回答している。親子の間でかなりの開きが見られる。クロス集計で見ると、「よく、ときどき」話しているという父親に対して「よく、ときどき」話すという中学生は66%で、話しているという母親に対してはそう思う中学生は73%である。全体割合では、話しているか否かの親の自己評価は、父親の65%、母親の73%が子どもの評価と一致している。親の方は話しているつもりになっているが、子どもには必ずしもそうは思えないことがあるようである。親は話の終わりに、例えば「だからあなたはしっかりしなければ」といった余計な一言を追加してしつけようとしているのかもしれない。話は楽しくが原則である。

図 3 - 7

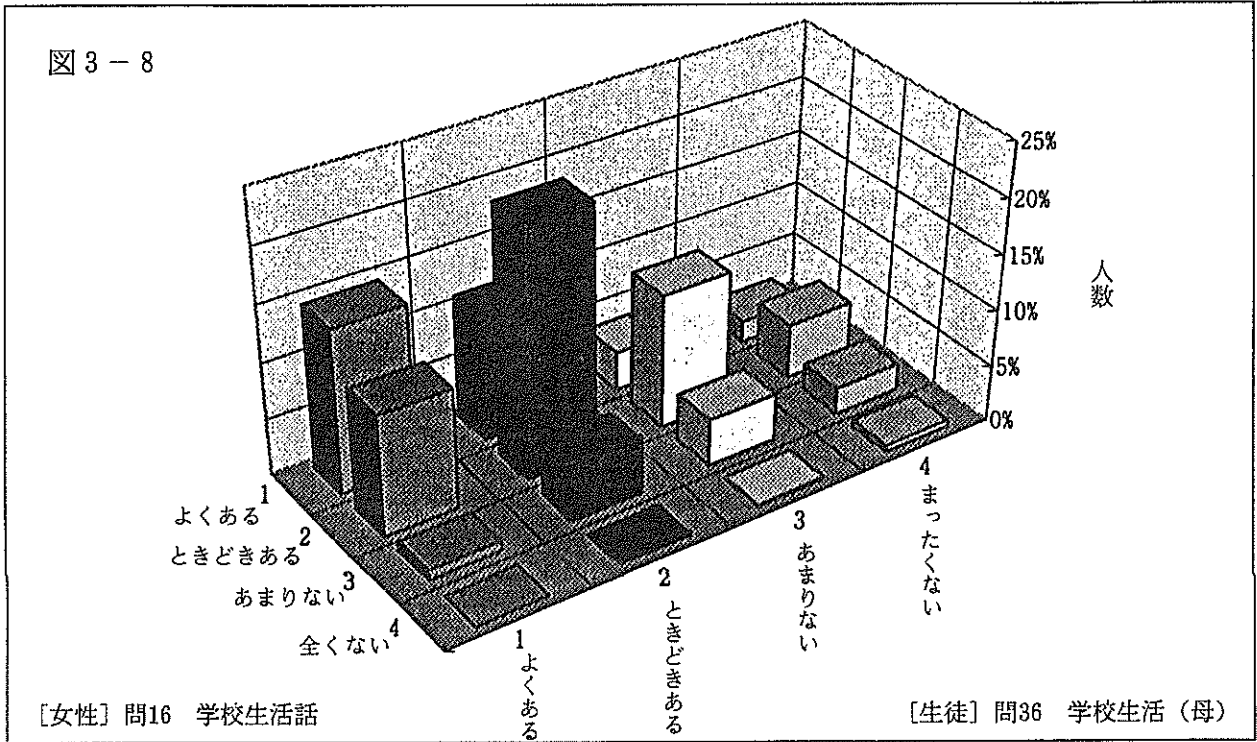


(8) 学校生活のことについて話しているか？

中学生になると学校が主な生活の場になる。学校では勉強面だけではなく、生きていくために必要な多くの学びをする。中学生には「家族の人と学校生活のことについて話すことがありますか」、一方親には「お子さんと、お子さんの学校生活について話すことがありますか」と質問した。そのクロス集計を図 3 - 8 に示す。

個別集計については、父子関係では40%の中学生が父と話していて、父親の59%が話している一方、母子関係において68%の中学生が母と話をし、母親の86%が話していると回答している。ここでも親子の間に開きがある。クロス集計で見ると、「よく、ときどき」話しているという父親に対して「よく、ときどき」あると答えた中学生は51%で、母親に対しては話していると認めた中学生は73%である。全体割合では話しているかどうかの親の自己評価が子どもの評価と一致している割合は、父親で61%、母親で70%である。父親は話しているつもりでも子どもの方は話しているとは思えないようである。父の話し方がどうしてもたずねる形になって、子どもにすれば話させられているように思えるのであろう。母親についてはかなり自分の話を聞いてくれていると感じられるようである。

図 3 - 8

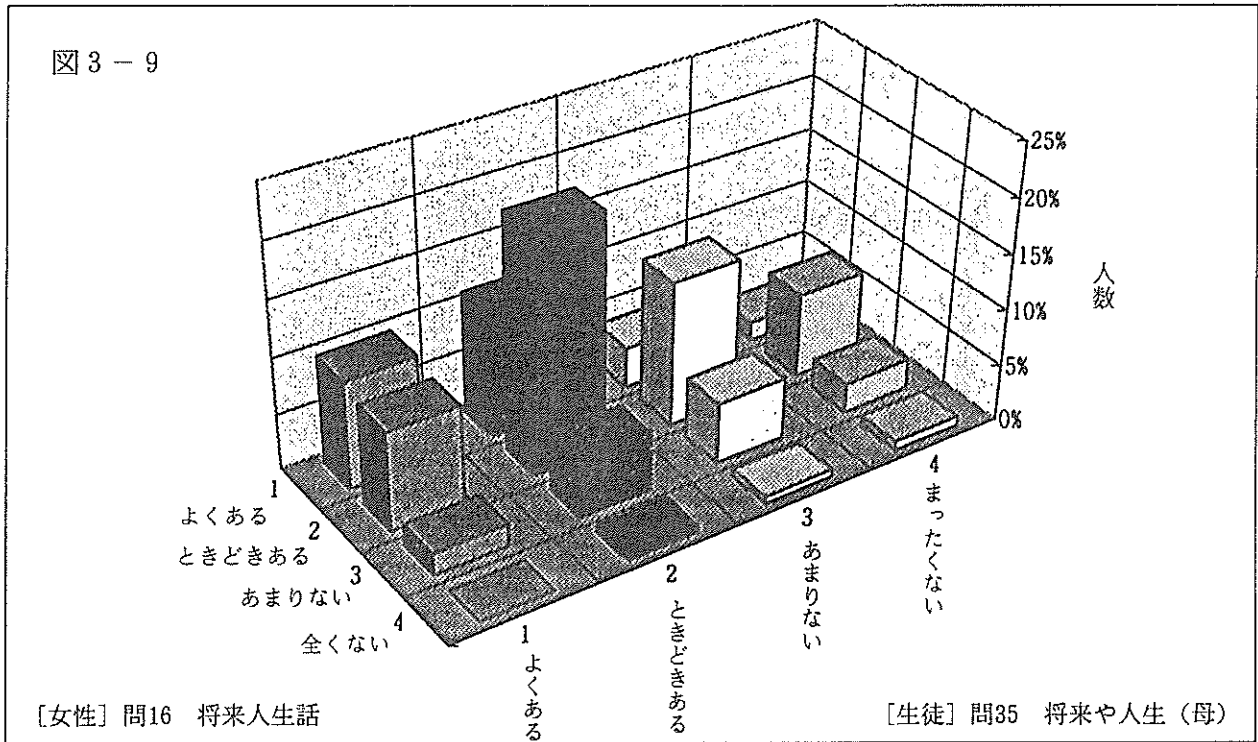


(9) 将来や人生のことについて話しているか？

中学生になると、もう子どもではないという気持ちが出てくるが、そのことは同時に大人であるための責任を負うということの意味する。大人とはどういうものかを知りたくないという思いも秘めている。中学生には「家族の人と将来や人生のことについて話すことがありますか（受験以外のことで）」、一方親には「お子さんと、お子さんの将来や人生について話すことがありますか（受験以外のことで）」と質問した。そのクロス集計を図3-9に示す。

個別集計では、父子関係において42%の中学生が父と話し、父親の64%が話しており、母子関係では62%の中学生が母と話し、母親の82%が話していると回答している。クロス集計で見ると、「よく、ときどき」話しているという父親に対して「よく、ときどき」と答えた中学生は48%、話しているという母親に対してそれを認める中学生は65%である。全体割合では、話しているか否かについての親の自己評価が子どもによる評価と一致している割合は、父親で57%、母親で65%である。学校生活の場合に比べると将来に関する親子の会話は低調である。子どもにとっての将来とは数年先までのこと、親にとっては子どもの将来は就職までといった風潮の中で、もっと人生を長い目で見れば親子というよりも共に生きる仲間としての話ができるはずである。人生を語るといえはとかく将来のために今何をしておくべきかという備えだけに終始するが、それよりも今を含めた人生をどう生きるかということ語る方が大切である。そこから語らいを楽しく印象づける味わいが生まれる。

図3-9

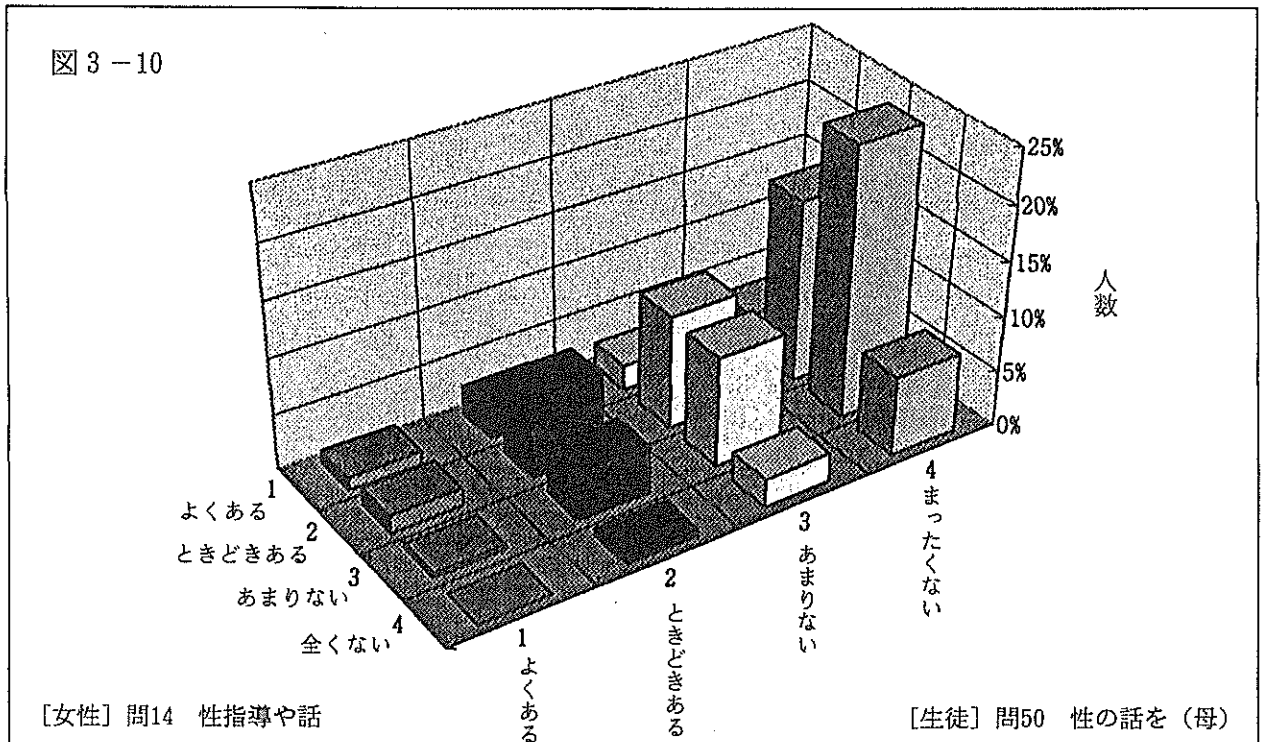


(10) 性のことについて話しているか？

中学生になると、性へ直面し戸惑いや不安が現れる。自分の中にある生命の動きによって自分という存在の意味を問いかけることになる。中学生には「家族の人は、あなたの性のことについて話してくれることがありますか」、一方親には「お子さんに性のことについて教えたり、指導したり、話したりすることがありますか」と質問した。そのクロス集計を図3-10に示す。

個別集計について見ると、父子関係で7%の中学生が父と話しており、父親の22%が話している、母子関係では19%の中学生が母と話し、母親の48%が話していると回答している。親子の間、父母の間で大きな差がある。クロス集計で見ると、「よく、ときどき」話しているという父親に対して中学生の12%が、また母親に対して29%の中学生が「よく、ときどき」話していると答えている。全体集計では、性のことについて話しているか否かの親の自己評価が子どもの評価と一致している割合は、父親で76%、母親で62%である。性については父親が話しにくいということを反映して、父も話さない、子どもも話さないという割合が大きい。また性を広く考えるか狭く考えるかというイメージ領域の違いも、数字の背景にはあるものと思われる。例えば親は性の話の積もりでも、子どもはそう受け取っていないというずれ違いもある。人が男として女として生きるという目覚めが生命を自覚する機会になるように、話を深める努力が求められる。

図 3-10



2. 子どもによる親の評価

この節では、親の姿を子どもの目を通して見ることにする。親の養育は子どもへの関わりの全体を通して行われる。親の何げない一言が子どもには思いもしない影響を与えることがある。子どもにとって良かれと思ってすることが、かえって逆効果になることもある。子どもが親の態度や行動にどのように振り回されているのかを熟知していなければ、効果的な養育はできない。このことは予想できない効果子どもに与えないようにするためにも役立つはずである。子どもが親をどう見ているかを探ることによって、親のイメージアップへの手掛かりを得ることを試みる。なお分析にあたっては、選択肢「とても、よく、必ず」と「まあまあ、ときどき」を合計した割合を主として用いることにする。

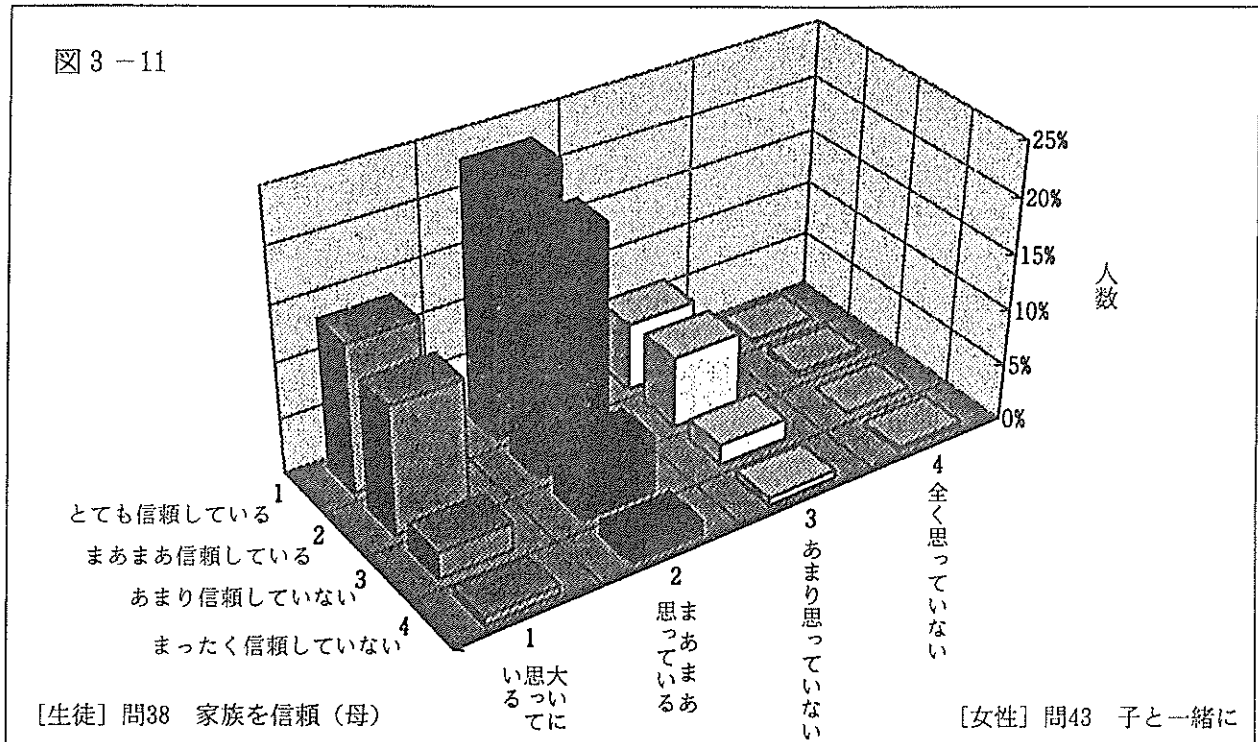
(1) どういう親が子どもに信頼されているか？

中学生との親の関係は優しいだけでは済まなくなってくる。時には厳しさも必要になる。そのとき子どもと険悪な関係に陥るかどうかは信頼関係があるかどうかによるであろう。信頼関係が壊れることを恐れ、つい言わなければならないことを言わずに済ますこともあるかもしれない。子どもに信頼されている親はどういう親なのであろうか。

親の態度や意識が子どもの信頼にどの程度効いているのかを見るために、中学生への「家族のことをどう思っているか(信頼しているか)」という質問と、以下に述べる親への質問とのクロス集計を行った。その例を図3-11に示す。

まず「休みの日にお子さんといっしょに過ごしたいと思っっていますか」という親への質問とのクロス集計では、「思っている」という親を信頼するという中学生は、父親で84%、母親で87%、「思っていない」という親への信頼は父親で75%、母親で75%である。いっしょに過ごしたいとは思われていなくても子どもは親を信頼していることを、親はよく分かってやるのが大切であ

図 3 - 11



ろう。

親への「あなたに対する言葉遣いが乱暴であったとき、どのように対応をしていますか」という質問については、「厳しく注意する」親の場合、中学生は父親を83%、母親を86%信頼し、「穏やかに注意する」親の場合、父親を85%、母親を86%信頼し、「注意をしない」親を信頼する中学生は78%で、穏やかに注意する父親に比べて7%少ない。注意をしないとかえって信頼を失うことになりそうである。

「お子さんの将来や人生について話すことがありますか」という親への質問については、「話をする」親の場合、中学生は父親を87%、母親を87%信頼し、「話をしない」親の場合、父親を77%で、母親を94%信頼している。父親は話す方が10%多く、母親は話す方が7%少ない。父親は将来について話をする方が、母親は将来について話さない方が子どもの期待に添えるようで、今を大事にすることが望まれている。

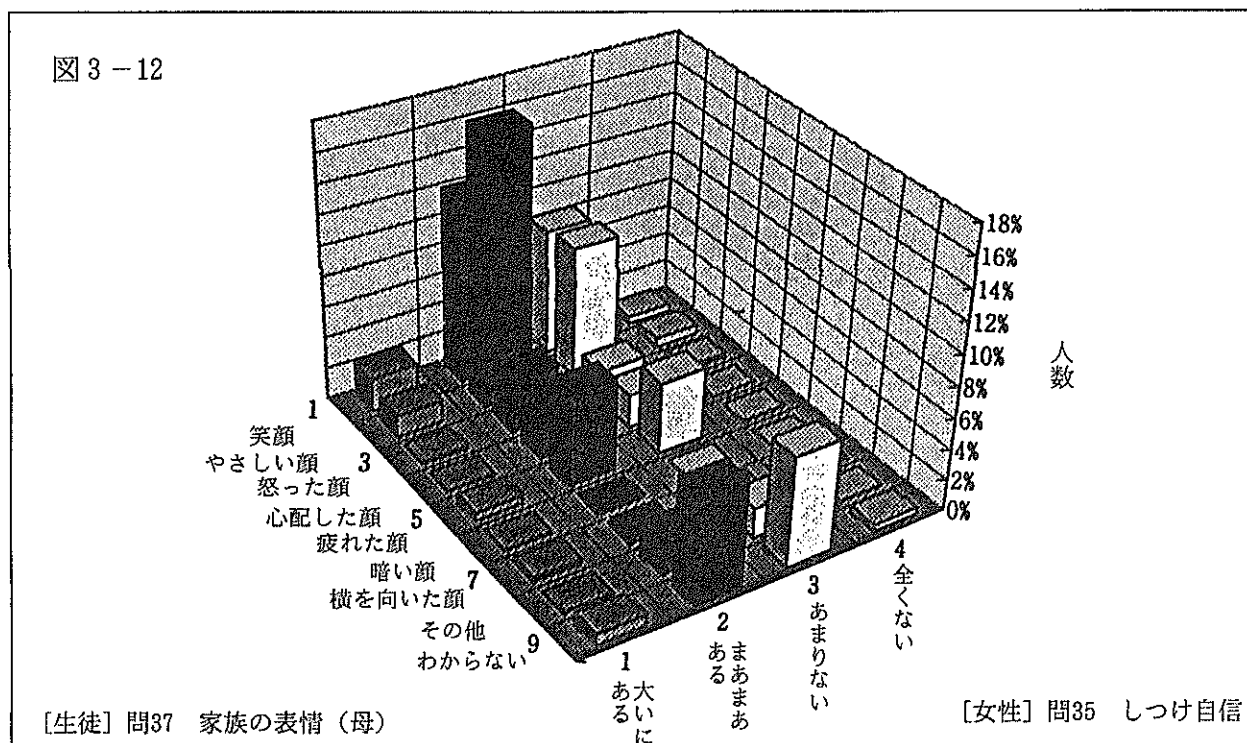
「お子さんが近所の人や友達に会ってもあいさつしなかったら注意しますか」という親への質問については、注意をする親の方が信頼されている。中学生もあいさつの大切さは分かっているから注意を受け入れている。

「お子さんが遊んだりテレビをみたりしているとき、勉強は済んだかと注意することがありますか」という親への質問については、勉強の督促は日常的に定着しており、信頼には関係しないようである。

「お子さんが何を考えているのか、その気持ちが分からず戸惑うことがありますか」という親への質問については、子どもの気持ちが分かる親の方が信頼されやすいようである。子どもにとっては、分かってもらえることが信頼関係の基本になっている。

⑫ どういう親が、子どもにどんな顔を見せているのか？

子どもは親の言葉だけでなく、行動、表情からも自分への親のメッセージを読み解こうとしている。驚くほど鋭敏な感覚を持っている。したがって、優しい言葉かけをしても顔がこわばっていると子どもは簡単に親の気持ちを見抜いてしまう。親を信じようとすると言葉と表情のどちらが信じられるものか分からなくなり、親を離れていくことも起こる。親の顔の表情がどう見えているかを探るために、中学生に「家族の顔を思い浮かべてください。どんな表情をしていますか」と質問し、親への質問とクロス集計をとった。その結果の例を図3-12に示す。



まず親への「お子さんのしつけについて自信がありますか」という質問とのクロス集計では、中学生が思い浮かべる親の表情は、「自信がある」父親と「自信がない」父親とで比べると、「優しい顔」がそれぞれ28%と21%である。「自信がある」母親と「自信がない」母親とでは、それぞれ「優しい顔」が34%と27%、「分からない」が14%と19%である。しつけに自信を持つことと子どもへの優しさが関係があることを示している。自信とは子どものことがすべて分かっているということではなく、子どもを受け止める覚悟ができているということである。

「お子さんとテレビや映画やスポーツのことなどについて話すことがありますか」という質問については、「話す」父親と「話さない」父親を比べると、「笑顔」がそれぞれ19%と13%、「優しい顔」が28%と20%、「疲れた顔・暗い顔」が17%と13%、「分からない」が19%と27%である。「話す」母親と「話さない」母親では、それぞれ「笑顔」が26%と13%、「優しい顔」が30%と6%である。テレビなどの話題は親子の間を和ませ、コミュニケーションを良くするようである。特に父親では話しないと「分からない」が多くなることに注意を向けるべきである。

親への「あなたに対する言葉遣いが乱暴であったとき、どのように対応していますか」という質問とのクロス集計では、言葉の注意をする父親は子どもには厳しく見えているが、母親の方は注意をしないとかえって子どもには顔が見えなくなるようである。

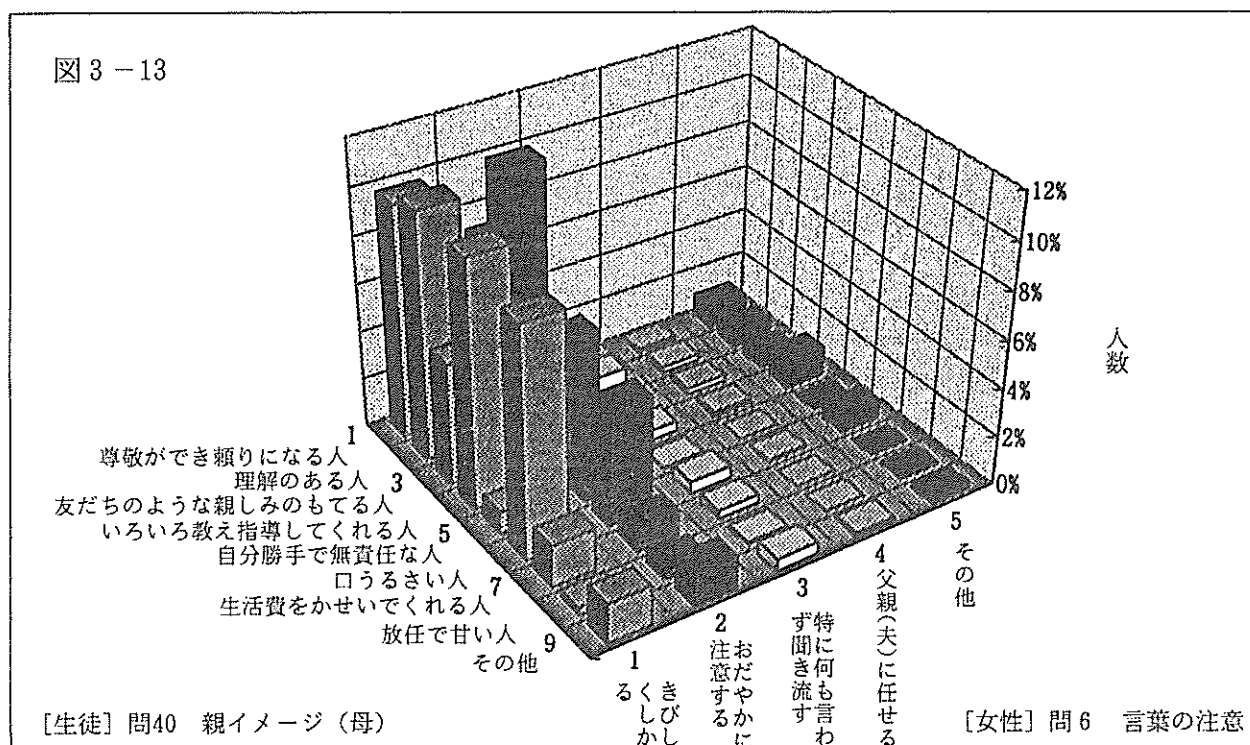
「お子さんに対して腹が立ち、殴りたいと思うことがありますか」という質問については、殴

りたいと思っていると、父親は表情に出すが、母親は表情を固く閉ざしてしまうようである。

子どもにとっては、父親と母親はやはり違って見えるようで、父親は緊張感のある存在、母親は安心して寄り添える存在ということが出来る。そのようなイメージから現実の親がはみ出すと子どもは親を見失う。少なくとも親の態度の一貫性があれば子どもなりのイメージの修正ができて、親の姿が消えることは防げるだろう。

(13) どういう親が子どもにどうイメージされているのか？

中学生になると親を親としてだけ意識するのではなく、大人として見つめ始める。自分にとってどういう役割を果たしてくれる存在なのかという視点から、親を見直すようになる。その過程を経て、人を見る目を養っていく。中学生への「あなたにとって家族の人はどのような存在ですか」という質問と、いくつかの親への質問とのクロス集計を行った。その結果の例を図3-13に示す。



親への「お子さんのあなたに対する言葉遣いが乱暴であったとき、どのように対応をしていますか」という質問については、「厳しく叱る、穏やかに注意する」親と「何もいわない、妻(夫)に任せる」親とで比べると、中学生に「尊敬ができ頼りになる人」と思われる割合は父親に対してそれぞれ33%と24%、母親に対して20%と11%である。違いについて見ると、厳しく叱るか穏やかに注意する父親の方が中学生に「尊敬ができ頼りになる人」と思われる割合が9%多く、穏やかに注意する父親は「自分勝手、口うるさい人」と思われる割合が4%少なくなっている。厳しく叱る父親は注意しない父親より「稼いでくれる人」という割合が4%少ない。一方、注意をする母親は注意しない母親に比べて「尊敬ができ頼りになる人」の割合が9%多く、「教え指導してくれる人」の割合も9%多いが、「自分勝手、口うるさい人」が9%多くなっている。穏やかに注意する母親は「理解のある、親しみのもてる人」という割合が12%多くなる。中学生にとって父親は厳しいから尊敬ができ、母親は穏やかだから理解があるというイメージがあるようで、

いずれにしても注意をしてくれることで親の存在を確かめている。ただ母親の注意は少しばかりしつこくなるとかえって逆効果になり、口うるさいと思われることがある。親は自分の言葉遣いも気をつけねば、しつけにならなくなる。

「お子さんが自分の使った物を後始末をしなかった場合、どのように対応していますか」という質問については、総じて「注意をする」父親がプラスのイメージを得ているが、「注意をしない」父親は「稼いでくれる人」の割合が多くなる。母親については、「厳しく叱る」母親は「自分勝手、口うるさい人」の割合が多くなる。母親には厳しさは似合わないと思われる。

「お子さんに対して腹が立ち殴りたいと思うことがありますか」という質問については、「殴りたいと思う」父親は、「尊敬ができ頼りになる人」と思われる割合は減り、「自分勝手、口うるさい人」は増える。「殴りたいと思う」母親についても同じである。殴りたいと思うことは子どもと対決する姿勢を取ることであり、子どもの方も身構えて親を拒否しようとする。そのためお互いに相手の思いをくみ取ることができなくなる。殴りたいと思うから子どもに親の勝手と思われるってしまうと考えるよりも、子どもに親の勝手を見破られて反発されるから親が殴りたくないと考えた方が理に適っているのかもしれない。

「お子さんが何を考えているのか、その気持ちが分からず戸惑うことがありますか」という質問については、子どもの気持ちが分からないと子どもとの応対が不自然になり、父親は関係を疎遠にして稼ぐ人になりきり、母親は一方的に自分を押し出すようになってしまう。子どもは親が消えていくような思いを感じるであろう。親は子どもの気持ちを分かろうとするより、子どもを丸ごと受け入れてさえいれば良いと大きな心を子どもに開いておいてほしいものである。

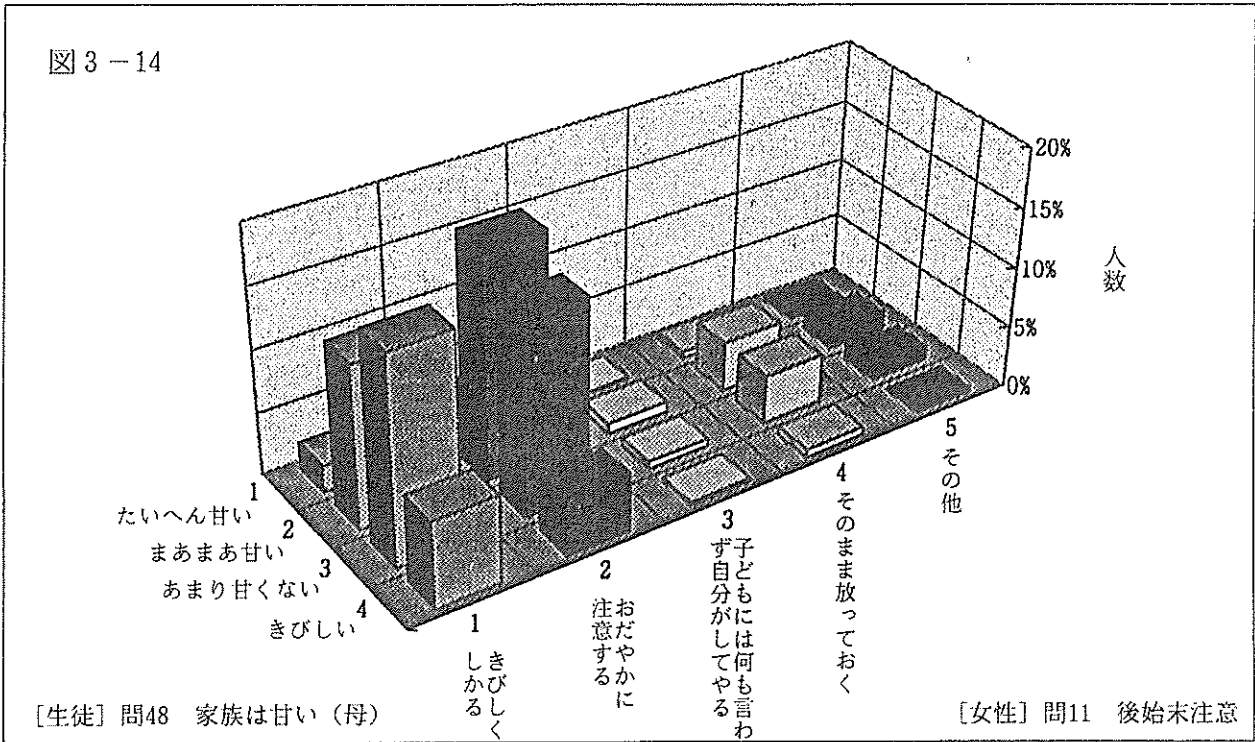
(14) どういう親が子どもに甘いと思われるのか？

中学生は親に対してはまだ子どもであるという意識から完全には脱却してはいない。気持ちの底で甘えている。一方で育ちの段階として親離れをしようともしている。自分に対する親を客観的に見る力を備えており、自分の中にある甘えを満たしてくれている親に安心しつつも、一方で自分に対する親の甘さを冷ややかに辞退したい衝動に駆られることがある。中学生への「あなたの家族はあなたに対して甘い方だと思いますか」という質問と、親への質問とのクロス集計を行い、その結果の例を図3-14に示す。

親への「お子さんが自分の使った物の後始末をしなかった場合、どのように対応していますか」という質問とのクロス集計では、中学生に「甘い」と思われる割合は「厳しく叱る」父親の42%よりも「穏やかに注意する」父親の59%方が17%多く、「注意しない」父親の64%が22%多くなっている。「厳しく叱る」母親の39%に対しては「穏やかに注意する」母親の50%の割合が11%多く、「注意しない」母親の「甘い」割合46%が7%多くなっている。父親については注意することが当然と思われるから注意しないと甘いと思われ、母親については後始末を厳しく叱られることが当たり前になっていて穏やかに注意されるとかえって甘く感じてしまうようである。

「お子さんのしつけについて甘い方だと思いますか」という質問については、「甘いと思う」父親に対して中学生も「甘いと思う」という割合59%は「甘いと思わない」父親の39%よりも20%多い。一方「甘いと思う」母親に対する甘いという中学生の割合の52%は「甘いと思わない」母親を甘いと思う割合38%よりも14%多くなっている。この甘さがべたべたの甘さではなく、塩味の隠し味を含んだものであれば良いのだが、そのためには父親の役割が大きな期待を向けられている。

図3-14



15) どういう親が子どもに家を出たいと思わせているか？

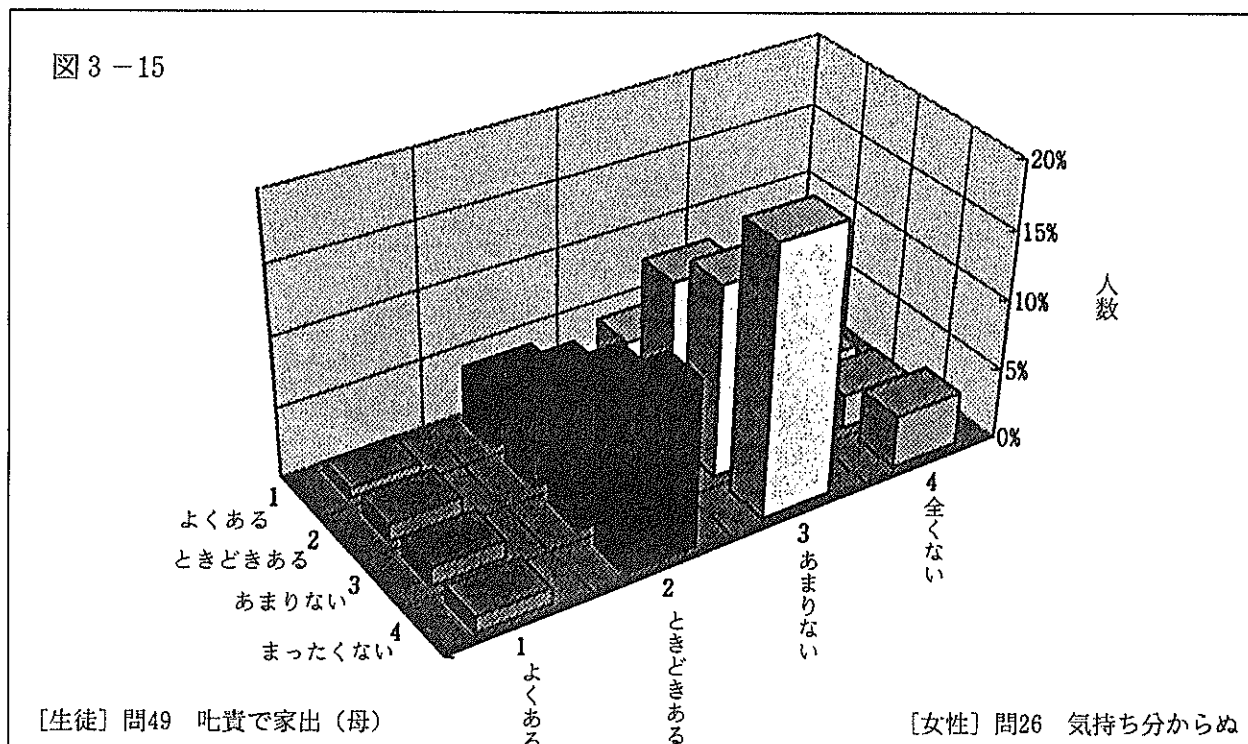
中学生になると家から巣立つ準備を進めるために、生活能力を確実に身につけていかなければならない。自分一人で暮らせるようになりたいと思うのが自然の成長だろう。しかし、そういう日がいつかはやってくると覚悟はしながらも、まだその時期ではないと思っているだろう。ただ今の場所が自分の居場所ではなくなったと感じられたら、見切り発車をしてしまうこともあり得る。中学生への「家族の人に叱られて家を出てしまおうと思ったことがありますか」という質問と、親への質問とのクロス集計を行い、その結果を図3-15に示す。

親への「お子さんが何を考えているのか、その気持ちが分からず戸惑うことがありますか」という質問とのクロス集計では、「戸惑うことがある」父親に対する38%が、「ない」父親に対する25%より13%多く、「戸惑うことがある」母親についてはそれぞれ36%と32%であるから4%多く、家を出たいと子どもに思わせている。分かってくれないということは子どもには逃げ出したいほど辛いことなのであろうか、それとも家を出て親に心配させることで分かってもらおうと思っているのかもしれない。

「お子さんのあなたに対する言葉遣いが乱暴であったとき、どのように対応をしていますか」という質問とのクロス集計では、「家を出てしまおうと思ったことがある」という中学生の割合は、「厳しく叱る」父親に対する32%の方が、「注意しない」父親に対する13%より19%多い。「厳しく叱る」母親の場合は39%で「穏やかに注意する」母親の28%より11%、「注意しない」母親の22%よりも17%多く、中学生に家を出ようと思わせている。厳しさは必要であるが子どもには劇薬になるのでさじ加減が求められる。特に父母ともに厳しいとダブルパンチになって子どもには耐えられなくなる。母親の厳しさの方が子どもには余計にこたえるようである。

「お子さんが自分が使った物の後始末をしなかった場合、どのように対応していますか」という質問については、「厳しく叱る」父親が「注意しない」父親より家を出たいと中学生に思わせ

図 3 - 15



ている。一方、「厳しく叱る」母親は「穏やかに注意する」母親より家を出ようと思わせるようである。父母とも穏やかに注意をすることが最も割合が少ないことを特記しておく。

「お子さんのしつけについて甘い方だと思いますか」という質問については、家を出たいと思わせている割合は、「甘くない」親と「甘い」親とでは、父親に対しそれぞれ33%と27%で、母親に対してそれぞれ36%と28%である。甘くなければそう思うのは自然の感情であろう。中学生の甘えたいという子どもの心の残滓であろう。

「休みの日にお子さんといっしょに過ごしたいと思っていますか」という質問については、「そう思う」父親に対する29%の方が「思わない」父親への19%よりも10%多く、子どもに家を出たいと思わせているが、母親ではそういう傾向はない。子どもにとって父親はうっとうしく、母親はいっしょにいるのが当たり前と育ててきたようである。

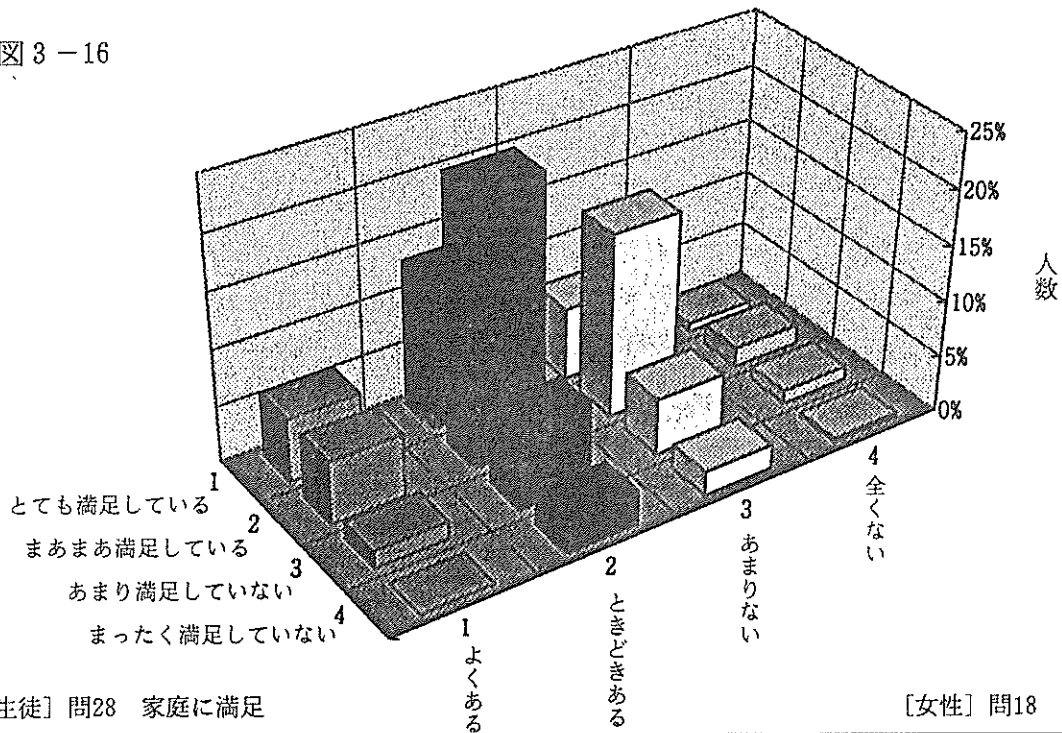
親として子どもに厳しくあるいは子どもには嫌なことをしつけなければならない。子どもではなくても嫌なものは嫌なのであり、そういう場から逃げようと思うのは当たり前である。そう思われることを過度に恐れる必要はないが、手加減を忘れないように心掛けておく必要はある。父親が厳しく叱れば、母親は控えておくといったこと、厳しくしつけるところと多少緩めるところのバランスを取るなどが考えられる。

10) どういう親が子どもに家庭生活の満足を与えているか？

中学生になると日常の暮らしの面で親の手を煩わすことはほとんど無い。いわゆる食べさせて学校に行かせていれば放っておいても支障はないという状況にある。中学生には家庭生活はいつでも良いことなのであろうか。中学生への「あなたは家庭生活に満足していますか」という質問と、親への質問とのクロス集計の結果を図 3 - 16に示す。

まず親への「お子さんに家庭のことで意見を聞いたり相談したりすることがありますか」という質問とのクロス集計では、「満足している」中学生の割合は、「相談する」親と「相談しない」

図 3-16



親とで比べると、父親で79%と75%、母親で82%と76%であり、「相談する」親の方が、生活の満足に多くの割合を引き出している。家庭生活の満足とは仲間として受け入れられる、自分の考える力を認めてくれるということから生まれるようである。

「お子さんが自分の使った物の後始末をしなかった場合、どのように対応していますか」という質問については、「穏やかに注意する」母親の場合83%、「厳しく叱る」母親の場合77%、「注意しない」母親の場合69%が、それぞれ中学生の生活の満足をもたらしている。穏やかに注意を受けることはおもしろくないといった程度だが、注意を受けないということは家庭の中の存在を認められていないことにつながり、満足感は得られなくなるようである。

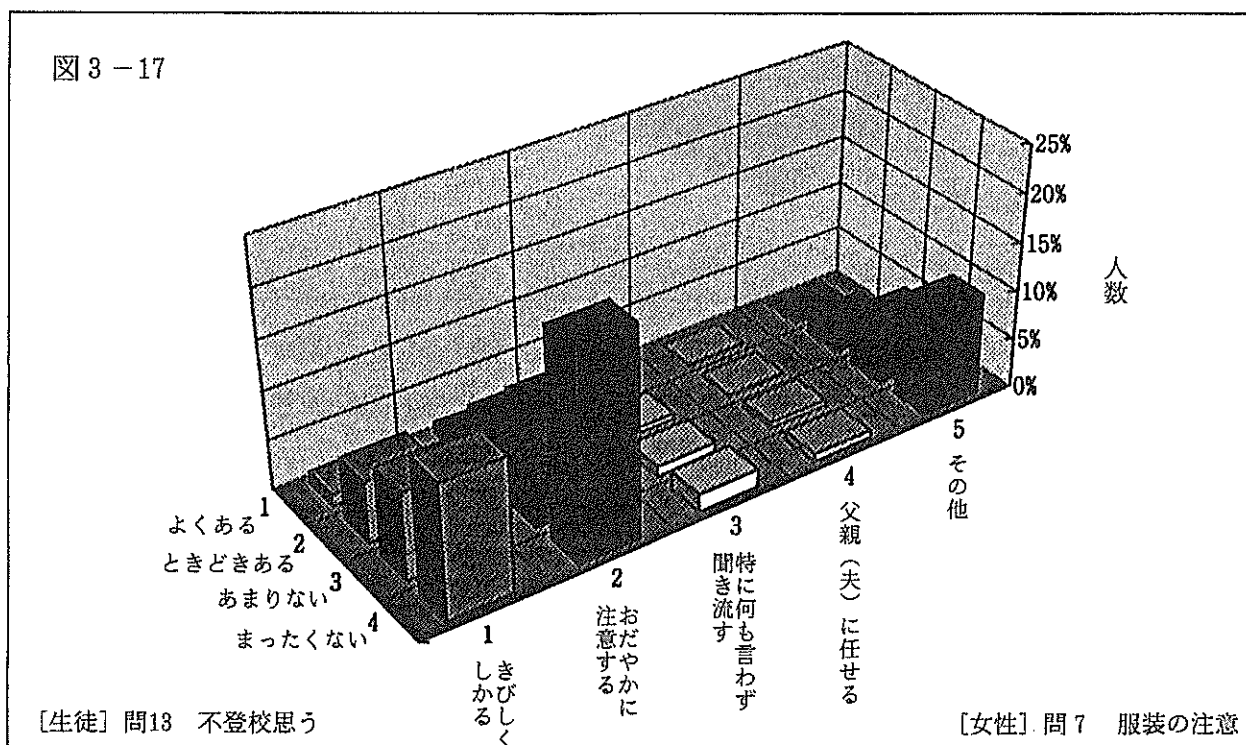
「お子さんがあなたや連れ合いや目上の人に対して友達同士のような乱暴な言い方をした場合、注意しますか」という質問については、中学生が生活に満足するという割合は、「必ず注意する」親、「時々注意する」親、「注意しない」親に対して、それぞれ父親では82%、79%、75%であり、母親については79%、74%、66%と順番に少なくなっている。乱暴な言い方をきちんと注意してくれる親がいるということが、生活の中身を充実させることにつながると分かっているようである。

「お子さんが何を考えているのか、その気持ちが分からず戸惑うことがありますか」という質問については、「気持ちが分かる」親と「分からない」親とで比べると、中学生に生活の満足を与える割合はそれぞれ、父親では80%と69%、母親では84%と68%である。気持ちの通じ合いが生活を満たすための必要条件なのである。親子であるからといって努力なしに気持ちが通じるわけではない。

子どもにとって家庭の見えないつながりは、育ちの仕上げとして大切な役目を受け持っている。子離れしたからと単純に子どもを切り離すのではなく、生活を共同するものとして側についていることが「中学生の養育」になる。

(17) どんな親が子どもに学校に行かないと思わせるのか？

中学生にとって学校は大きな存在である。家庭から社会に巣立つ道筋に学校という関所が控えているような重みを感じているかもしれない。自分のための学校というより、学校のための自分という、小さな自分が大きな学校に飲み込まれているような思いがあるだろう。それは社会の中の大人とて同じである。そこを一度は乗り越えることで、人は一段と成長ができる。ただそのハードルを無理な高さに引き上げるようなことはしてはならない。中学生には相応のハードルがある。一方で少なくとも乗り越えようとしている子どもの足を引きずり降ろすことはしないように注意すべきである。中学生に対する「最近、明日からもう学校には行かないと思うことがありますか」という質問と、親へのいくつかの質問とのクロス集計を行った。その一例を図3-17に示す。



まず親への「お子さんが校則に違反した服装や髪型をしている場合、どのように対応をしますか」という質問とのクロス集計では、中学生が「学校に行かないと思う」割合は、「注意をする」母親に対する21%の方が「注意をしない」母親に対する13%よりも8%多くなっている。父親についてはいずれも19%で違いはない。服装や髪型といった個性を主張する手段を封じられることは、中学生にとっては重い束縛に感じられるのであろう。学校とどちらが大事なのかという親の声も聞こえそうだが、中学生には自己主張の方が大事であろう。大人と子どもで真剣に考えてみるべき事柄である。

「お子さんが近所の人や友達に会ってもあいさつしなかったら、注意しますか」という質問については、「注意する」父親と「注意しない」父親に対して、「学校に行かないと思う」中学生の割合は、それぞれ18%と25%である。親が注意してあいさつをさせるようにしつけなければ、学校のような集団的な世界には入りづらくなりがちである。人との交わりはあいさつから入るから、あいさつができないと交わりがもてなくなる。

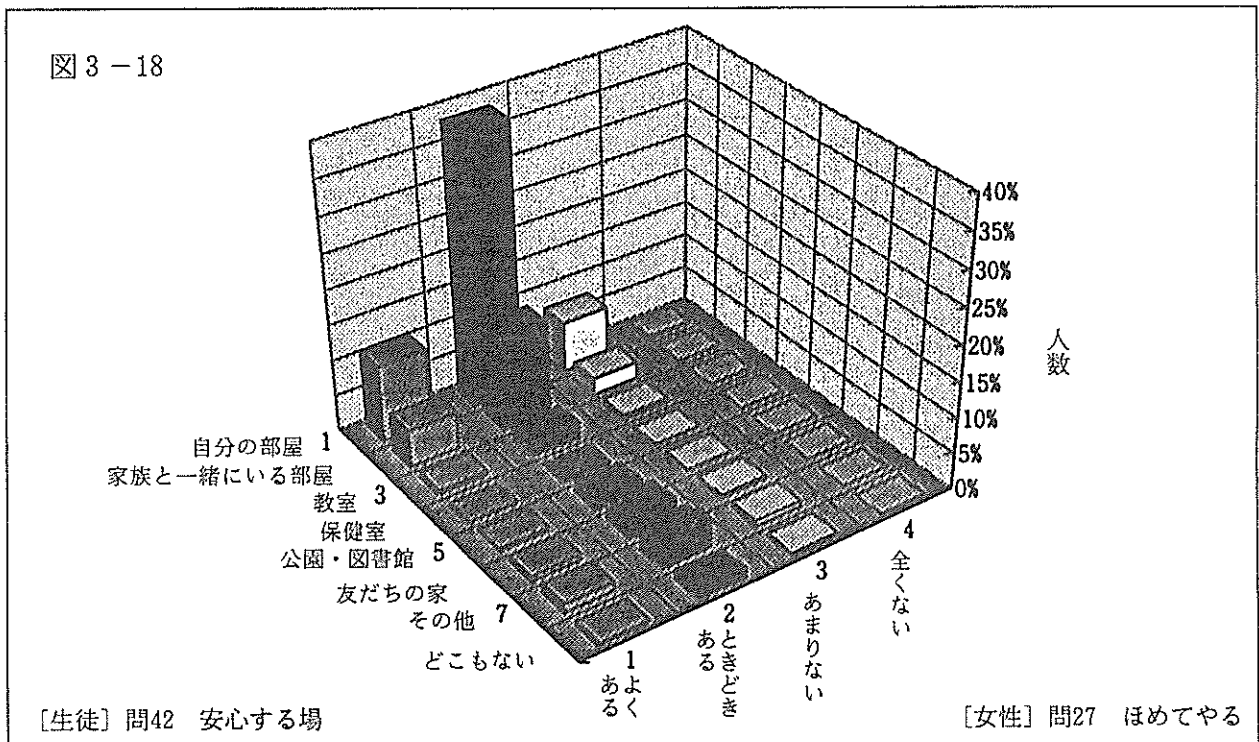
「お子さんが遊んだりテレビを見たりしているとき、勉強は済んだかと注意することがありますか」という質問については、勉強を注意する親の方が子どもを学校嫌いになっている。家でも勉

強勉強と言われたら、学校は余計に嫌になるであろう。学校で勉強ができるためには、勉強を忘れることができる時間と空間がなければならない。家その場である。

中学生にとっては学校は社会である。そこには緊張がある。中学生は今学校という場でしか生活をしていない。友人関係は学校での仲間がすべてである。おまけに家でも勉強と言われる。学校以外の場がほとんど無いと言ってよい。これでは息が抜けないし、参ってしまう。学校を好きになるには、学校以外の生活をする事である。家庭、地域、学校という三つの場があってはじめて、学校の存在の意味が分かるはずである。

(18) どんな親が子どもの安心の場を決めているか？

中学生は心をリラックスさせる場を持つことで、育ちへの挑戦のエネルギーを蓄えている。常に走り続けることは不可能である。どういう風に安心の場を得ているのであろうか。中学生への「あなたが一番ほっとすることができる場所はどこですか」という質問と親へのいくつかの質問とのクロス集計を行った。その結果の例を図3-18に示す。



まず親への「お子さんをほめてやることがありますか」という質問とのクロス集計では、「自分の部屋」と答えた中学生に対し、「ほめる」親と「ほめない」親の割合は、それぞれ父親で60%と65%、母親で60%と58%であり、父親ではほめない親の方が5%多いが、母親では差はない。「家族と一緒にいる部屋」という中学生に対しては、それぞれ父親で21%と12%、母親で22%と17%である。ほめない自分の部屋に引きこもり、ほめると家族と一緒にいたいと思うようである。ほめる目は温かいということであろう。

親への「今朝お子さんが学校に出掛ける前に、持ち物について注意しましたか」という質問では、「自分の部屋」と回答をした中学生に対して、「持ち物の注意をした」親と「注意しない」親を比べると、それぞれ父親で50%と61%、母親では54%と62%である。一方「家族と一緒にいる部屋」という中学生に対しては、それぞれ父親で25%と21%、母親で27%と21%である。注意し

ないと自分の部屋、注意すると一緒の部屋という関係が見られる。

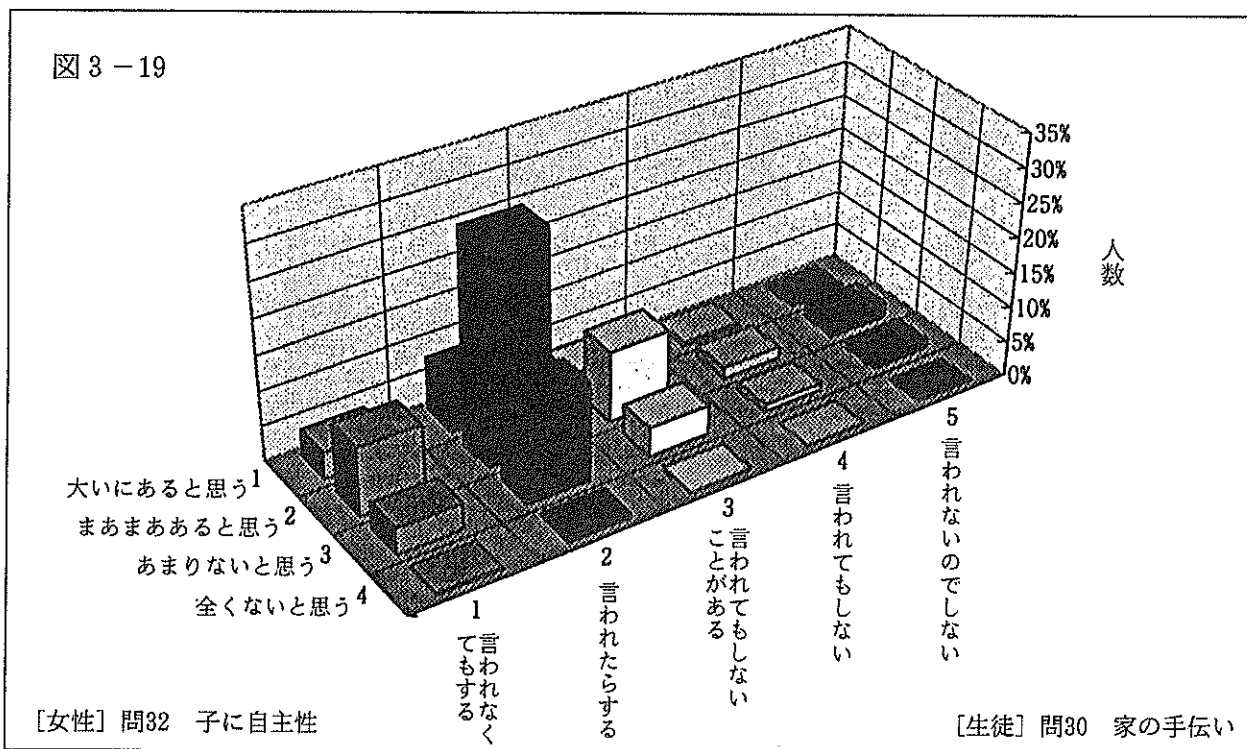
「あなたの生きがいの対象は何ですか」という親への質問については、「自分の部屋」と回答した中学生に対して、生きがいを「子ども」と「仕事」という父親ではそれぞれ57%と63%、「子ども」と「特にない」という母親で58%と64%である。一方「家族と一緒の部屋」と回答した中学生に対して、生きがいを「子ども」と「仕事」という父親ではそれぞれ24%と19%、「子ども」と「特にない」という母親で24%と18%である。親にとって子どもが生きがいにならないと子どもは部屋に居場所を作り、子どもが生きがいであれば子どもは親と一緒にいる方が安心している。

3. 親による子どもの評価

この節では、子どもの姿を親の目を通して見ることにする。親による養育は子どもの姿から読み取れる情報によって適切な対応が可能である。子どもが見えなくなったら、あるいは見ているつもりであっても解釈が間違えば、子どもとの間合いが取れなくなる。親は子どものどういうところを見ているのだろうか。おそらく自覚することはないであろうが、経験的に鋭い視線を持っていることは確実である。その知恵ある目を探ることができれば、多くの親にとって養育の向上に寄与するであろう。

(19) どういう子どもが自主性があると思われるのか？

中学生になると大人としての資質はほとんど備えるようになる。自分で判断して行動する能力と意欲もその一つである。それを自主性と読んで、中学生に自己評価してもらった。81%の中学生が自分に自主性があると評価している。ところが親による評価では父親が69%で母親が73%と厳しくなっている。親は子どものどういうところを見ているのであろうか。親への「お子さんに自主性（自分で判断し行動する）があると思いますか」という質問と中学生への質問とのクロス集計を行った。その結果の例を図3-19に示す。



まず中学生への「あなたがふだん勉強するのはどうしてですか」という質問とのクロス集計について見る。選択肢を「よい成績、希望の入学、社会貢献、知る欲求」という「目的型」と「皆についていく、学校に行っている、言われるから、なんとなく」という「追従型」に分けたとき、それぞれに対する自主性があるという親の評価の割合は、父親で71%と67%、母親で76%と70%である。「目的型」の方が親による自主性の評価は高い。

「あなたは休日をどのように過ごしていますか」という質問については、親が自主性があると思う割合は、父親では「読書やマンガ、勉強や塾」という「文字型」が最も多く、「スポーツなど外で」という「運動型」が少ない。母親では「運動型」が少ない。運動型は親の目に触れないところであるので、見えていないと言った方がよいだろう。

「あなたは最近『明日からもう学校に行かない』と思うことがありますか」という質問については、「学校に行かないと思う」中学生と「思わない」中学生に対して、自主性があると思う親の割合はそれぞれ、父親で63%と70%、母親で67%と75%であり、いずれも「思わない」中学生の方が大きくなっている。学校に行きたくないという子どもの思いを親は自主性がないと思うようである。この点には最大の関心を払うべきである。

「あなたは家の手伝いをしていますか」という質問については、親が自主性を見る割合は、「言われなくてもする」、「言われたらする」、「言われても、言われたいからしない」という中学生の三つの回答に対してそれぞれ、父親で75%、69%、60%であり、母親では78%、74%、74%である。言われなくてもすることが自主的と両親は認めている。父親は言われたらすることも自主性への一歩と認めているが、母親は言われなくてもすることだけが自主性と認め、言われたらする、あるいはしないのは同列に見ているようである。

「あなたは服装や髪型などファッションに関心がありますか」という質問については、両親とも「服装など関心を持つ」中学生の方に多少の自主性を見ている。ただ現実の場面では子どもに対してはその関心を持たないように願っているかもしれない。

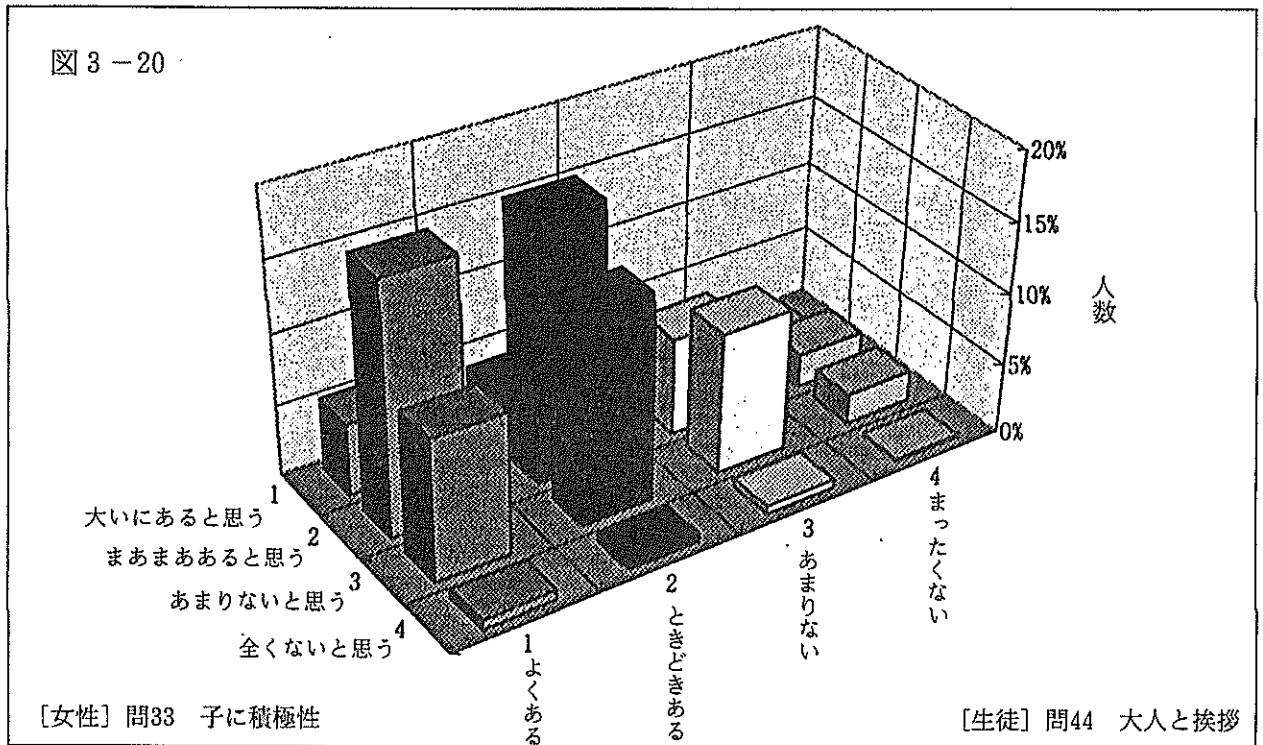
「あなたは友達があなたのことをどう思っているか気にしますか」という質問については、父親だけが「気にする」中学生を自主的と見ている。父親の社会的な状況判断の必要性に対する経験が、自主性の背後にある他人の目を持つことの大事さを表しているようである。この目がなければ自主性は単なるわがままに迷い込むからである。

②0) どういう子どもが積極性があると思われるのか？

中学生の育ちの基本は自分を外に向かって放出することである。自分から進んで物事に取り組もうとすること、それは積極性と呼ぶべきものである。いろんなことに興味を示し、かじってみて、失敗しながら育っていく。赤ちゃんの好奇心とは違って、自分の力のある程度上手にコントロールする経験を蓄えていくのである。中学生に積極性を自己評価してもらくと、67%の中学生が積極的であると答えたが、親の評価では、父親が58%、母親が59%であり、多少厳しい評価であった。親は子どものどういうところを見ているのであろうか。親への「あなたはお子さんに積極性（自分から進んで物事に取り組む）があると思いますか」という質問と中学生への質問との間でクロス集計を行った。その結果の例を図3-20に示す。

まず中学生への「あなたは隣近所の大人の人たちとあいさつしたり、話をしたりすることがありますか」という質問とのクロス集計については、「することがある」中学生と「することがな

図 3 - 20



い」中学生に対して、積極性があると思う親の割合はそれぞれ、父親で60%と48%、母親で63%と43%である。大人とつきあうということは非常に大切な積極性である。親はそのことをよく知っている。この認識が地域ネットワークに関与する親自身の積極性に発展することが望まれる。

中学生への「あなたがふだん勉強するのはどうしてですか」という質問とのクロス集計について見る。傾向を明らかにするため選択肢を「よい成績、希望の入学、社会貢献、知る欲求」という「目的型」と「皆についていく、学校に行っている、言われるから、なんとなく」という「追従型」に分けたとき、「目的型」の方がどちらかと言えば積極的であると見なされている。目的を持つことが自分を引き出す最も正当なやり方である。

「あなたはどこにいるときに楽しいと感じることが多いですか」という質問については、「学校」、「家庭」、「友達の家」という中学生に対し、両親とも「学校」が楽しいという中学生に積極性をみている。

「あなたは最近『明日から学校に行かない』と思うことがありますか」という質問については、「学校に行かないと思う」中学生と「思わない」中学生に対して、「学校に行かないとは思わない」中学生を積極的と思っている。積極的であってほしいあまり、無理に学校に行かせようとしてだけすることがないように注意したい。

「あなたにはお互いに理解し心を打ち明けて話せる親友がいますか」という質問については、親友がいる中学生のほうが行動に自信があふれているのか、親には積極的に見えている。

「あなたは学校の勉強についてどう感じていますか」とやる気を問う質問については、やる気があれば積極的に勉強に取り組めて、親にもそれが見えるようである。特に親は勉強のやる気には敏感なのかもしれない。

「あなたは家の手伝いをしていますか」という質問については、「言われなくてもする」、「言われたらする」、「しない」という中学生に対して、それぞれ積極性があるという割合は、父親で69%、57%、50%であり、母親で65%、59%、57%である。自主性のときの傾向と同じで、父親

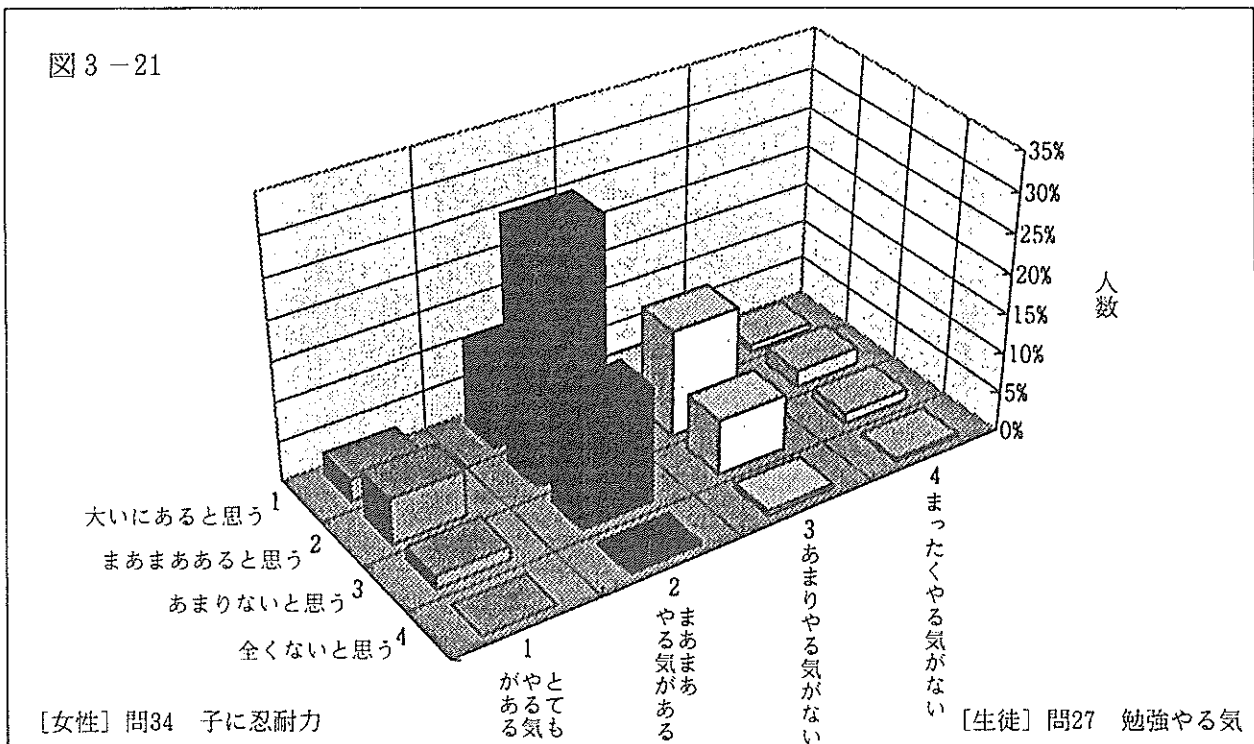
は「言われたらする」中学生も多少の積極性を認めているが、母親は「しない」中学生と同じ評価を与えている。もちろん「言われなくてもする」中学生に積極性を見るのは当然である。

「あなたは最近夜眠りにつくときに明日のことを考えて、朝起きることが楽しいと感じることがありますか」という質問については、「楽しみである」中学生と「楽しみではない」中学生に対して、積極性の割合は父親母親ともに64%と54%である。積極性を生み出す源は明日への楽しみである。何かを追いかけていると言い換えてもよい。親子が共通に明日を楽しみに暮らすことが望ましい養育になるであろう。

「あなたは試験で間違えたところを後でやり直してみますか」という質問については、「やり直す」中学生と「やり直さない」中学生に対して、積極性があるという親の割合はそれぞれ、父親で62%と53%、母親で64%と53%である。積極性は何でもやりっ放しにすることではならない。自分の行為の責任を自分で取っていくことによって力を身につけていけるからである。親の目は見るべきところをきちんと見ているといえる。

(2) どういう子どもが忍耐力があると思われるのか？

中学生の身体的な力は成人に劣らない。もし力の制御と抑えを外すと大きな間違いを起こしかねない。力の発揮には勧められるものと許されないものがある。勧められるものは積極的に取り組めばよいが、許されないものは抑制しなければならない。我慢すべきこと、我慢すべきとき、我慢すべきところでは我慢できなければならない。我慢できないと社会生活が保てなくなるだけでなく、育ちのプロセスを停止することにつながる。我慢する、すなわち忍耐力は積極性の基礎である。進んで取り組むと必ず挫折がある。それをじっと我慢できたとき成長のステップを上げることができるのである。養育は子どもに我慢を強いる場合もある。我慢できる限度を知ることが大切である。親への「あなたはお子さんに忍耐力（我慢すべきときは我慢する）がありますか」という質問と中学生への質問とのクロス集計を行った。その結果の例を図3-21に示す。



中学生への「あなたは学校の勉強についてどう感じていますか」とやる気をたずねた質問とのクロス集計を見ると、「勉強やる気がある」中学生と「やる気がない」中学生に対して、忍耐力があると思う親の割合はそれぞれ、父親で70%と64%、母親で75%と67%である。親はやる気がある、つまり積極的な中学生の方に忍耐力を感じ取っている。忍耐力があってこそそのやる気ということをよく知っていると言える。

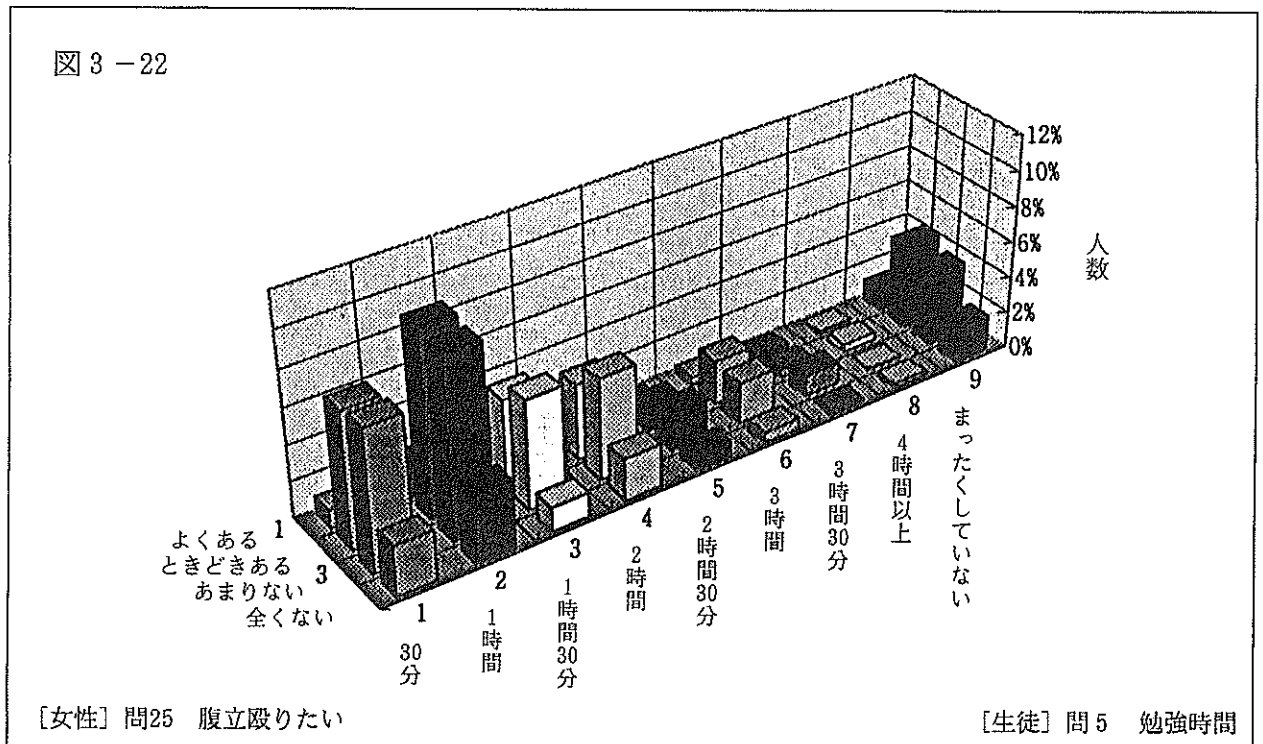
「あなたはどこにいるときに楽しいと感じることが多いですか」という質問については、親は学校が楽しいという中学生に忍耐力を感じている。忍耐力が備わっているから、多少の緊張がある学校を楽しみと思えるのであろう。

「あなたは家の手伝いをしていますか」という質問については、親が忍耐力を見る割合は、「言われなくてもする」、「言われたらする」、「言われても、言われたいからしない」という中学生の三つの回答に対してそれぞれ、父親で73%、70%、61%であり、母親では81%、74%、65%である。言われなくてもすることが忍耐力を備えていると両親は認めている。また親は言われたらすることも忍耐力のひとつと認めている。

② どういう子どもが殴りたいと思われるのか？

中学生の示す自己主張が親の養育上の意図とぶつかることがある。こうしてほしい、こうあってくれたら、こうすべきなのという親の思いは子どもには通じにくい。これ程言っても分からないのかとつい激昂する。親の願いは子どものためではなく親自身の願いではないかという指摘もされる。親は子どもにどうあってほしいのか、どうあれば殴りたくなくなってしまうのであろうか。親への「あなたはお子さんに対して腹が立ち殴りたいと思うことがありますか」という質問と中学生への質問とのクロス集計をとった。その例を図3-22に示す。

中学生への「あなたはふだん家庭で平均して一日どのくらい勉強していますか」という質問とのクロス集計については、時間枠を「0時間」、「0.5時間」、「1時間」、「2時間」、「2時間以上」



にとると、親が殴りたいと思う割合はそれぞれ、父親で45%、41%、38%、39%、33%であり、母親では50%、42%、48%、36%、23%である。親は子どもが2時間かそれ以上勉強すべきであると考えている。それ以下になると殴りたくなくなるほどイライラしてくるようである。

中学生への「あなたは平均してテレビを一日どのくらい見えていますか（日曜日や休日は除く）」という質問については、時間枠を「1.5時間」、「2.5時間」、「3.5時間」、「4時間以上」という4つにまとめてみると、親が殴りたいと思う割合はそれぞれ、父親で38%、38%、42%、43%であり、母親で45%、41%、43%、50%である。父親の場合には子どものテレビ視聴が3時間を超えると、母親の場合は4時間を超えると殴りたくなくなるようである。

「あなたがふだん勉強するのはどうしてですか」という勉強の目的を尋ねた質問については、母親は「ついていく、学校にいつてるから、言われるから、なんとなく」という追従型は許せないようである。

「あなたはどこにいるときに楽しいと感じることが多いですか」という質問については、「学校」、「家庭」、「友達の家」と答える中学生に対して、親が殴りたいと思う割合はそれぞれ、父親で37%、42%、45%であり、母親については41%、38%、55%である。「友達の家」と答える中学生は家庭では親と良好な関係が持てないようで、親のほうも殴りたくなくなる割合が大きい。父親は学校が楽しい子どもを、母親は家庭が楽しい子どもを好きな傾向がある。

「あなたは最近『明日からもう学校に行かない』と思うことがありますか」という質問については、学校に行きたくない中学生に対して親は殴りたくなくなる割合が他の場合に比べて特に大きい。子どもを学校に行かせることが親の責任のように思い込んでいる。最近の世情を見るとき、この点は考えるべき事柄である。

「あなたは家の手伝いをしていますか」という質問については、母親では、言わないとしないことが腹立たしいが、しないことは殴りたくなくなるほどである。また言われなくてもするという中学生に対してもかなりの殴りたい場合になっているが、しかたなしにしているといった様子が子どもの態度に感じられることもあるだろう。

「あなたは隣近所の大人たちとあいさつしたり、話をしたりすることがありますか」という質問については、父親は近所の大人とつきあいができている中学生の方が殴りたいと思う割合が大きい。

親はあまり意識していないかもしれないが、子どもに学校へのストレスを多様な形で与えているようである。たとえ口には出さなくても、殴りたくなくなる気持ちは態度や表情に現れる。子どもは親の言葉より表情に敏感に親の心情を読み取る。親の期待に応えようとする健気な子ども心をもっと楽にすることを考えよう。それは親でなければできないことである。

4. まとめ

親による養育行動は、親子関係という特別な関係を通して行われる。親子だからというお互いの甘えが基盤にある。他人なら許されない言動でも親子だから許される。しかし親の子離れや子どもの親離れを始める中学生の時期には、親子関係は絶対的なものから相対化してくる。親子であると同時に、独立した人格を持つ者の関係が色濃くなる。

親子の相互評価がどの程度一致しているかを表3-1に示す。ここで数字は肯定と否定のそれぞれの一致している割合(%)の和である。

表3-1：評価の一致割合（％）

	父子の間	母子の間
1. 子の自主性	67	69
2. 子の積極性	62	62
3. 子の忍耐力	65	70
4. 親への信頼	74	81
5. 子の悩み	23	27
6. しつけ甘さ	59	57
7. テレビの話	65	69
8. 学校生活話	61	70
9. 将来の話	57	65
10. 性の話	76	62

相互の評価が最も一致しているのは親への信頼であった。子どもからの信頼という親子関係の基盤に関しては、親も敏感である。

他方、相互の評価が最も不一致であるのは子どもの悩みである。これについては選択肢が多かったという点を考慮に入れたとしても、一致した部分が父親23%、母親27%と少ないことは注目しておくべきことである。子どもからすれば親は何も分かっていないと言いたくなるであろう。中学生になると悩みをストレートに親にぶつけてくることはしなくなるので、一概に親の不明を責められない。ただ、親はわが子の悩みを分かってはいないという自覚を持つことが必要である。

しつけの甘さについての親子の不一致が見られるが、これは10年前の調査で指摘されている無意識の過保護という傾向がまだ底流にあることを示唆している。すなわち親は子どもにとって甘いかどうかを考えなければならないのに、自分のしつけが自分が考えているものに比べて甘いかどうかを評価している。子どもの目を失っていることが無意識であることなのである。

全体的に親子の相互評価は、おおむね「6割の一致」とみなしておけば良いようである。特に母親はわが子のことは完全に分かっていると思い込んでいるところがあるが、中学生が相手では6割しか分かり合えていないことを知るべきである。

親は毎日暮らしの中で子どもに「言葉」をかけている。言葉には思いが込められる。しかし言葉を受け取る方はその思いも正しく受け止めるとは限らない。なぜなら思いは個人的なものだからである。親の思いと子どもの思いは違うということである。

子どもとテレビを見ながら語らうと、親はただのおしゃべりをしているつもりでも、子どもには親の笑顔や優しい顔が印象づけられ、親の顔を思い出してもらおうとそういう顔を思い浮かべている。笑顔とは人を受け入れる気持ちの表現である。親の顔が笑顔であれば、素直に親の胸に入り込めるような安心感がある。親はいつでも待っているということを伝えなければ笑顔を忘れないことである。そうすれば子どもの一言が親の心にきちんと聞こえる。

親が子どもの気持ちを分かると、子どもは家庭生活に満足していると思うようになる。自分が受け入れられているからである。親が子どもの気持ちを分からないとき、子どもは親を自分勝手に口うるさい人と思っている。自分が親に受け入れられている存在ではないと直感して、自衛的に親を拒否しようとしている。

親はしつけをする役割を意識しているから、いろんなことについて「注意」の言葉をかける。子どもが近所の人や友達にあいさつをしなかったら注意をする。注意をされた子どもはむくれてしまう。素直でないと親は思うかもしれない。しかしあいさつの注意をする親は子どもの信頼を得ている。基本的なことをきちんと注意できることが大事なことであり、子どもも分かるからである。親は子どもの心に言葉を届けばよい。

親は自分に対する子どもの言葉遣いが乱暴であったら注意をする。父親の場合には親を尊敬し頼りになる人と思うきっかけになる。ところが厳しく叱ると、子どもは家を出ようかと思うこともある。子どもは親子の間でそこまで言わなくても思うのかもしれない。一方母親の場合には、注意されると教え指導してくれていると思うが、自分勝手に口うるさいと思う子どももいる。厳しく叱ると家を出ようと思わせることは母親の場合にもある。

暮らしには後始末が付き物である。後始末できるかどうかは生活能力のバロメータの一つである。ところで子どもに後始末をするように注意をしないと、子どもは親を甘いと思うようになる。しかし注意をすると口うるさいと思うようである。子どもは勝手である。その勝手さを砕かない限り、子どもに素直に生活を楽しむ心を植え付けることはできない。養育は子どもの心がまとっている甘えを取り去るプロセスである。そのためには後始末のしつけはよい教材である。

言葉には注意のための言葉だけではなく、認めたりほめたりする言葉もある。子どもに対してほめる言葉を使えば、子どもは家族と一緒にいることに安心する。決して自分の部屋に籠もることはしない。子どもを親の側から引き離すためにはまず安心感をしっかりと与えておく必要がある。注意する言葉だけでは子どもは不安だけを受け取り、育つ意欲を失い、閉じこもってしまうだろう。育てるとは抑えることではなく、引き出すことである。ほめる言葉が育ての言葉なのである。

親は期待像を持って子どもの養育に臨んでいる。現実の場面で大事なことは、期待像に親が振り回されないことである。もし振り回されることがあれば、それは過期待、過干渉になる。この行き過ぎを避ける方法は、あくまでも子どもの姿を見つめていることである。期待像に合わない子どもを駄目な子どもと思ったら、それが子どもを見失う発端になる。親は常に子どもの味方であって、決して審判者ではないからである。

学校に行きたくなさそうにしている子どもを見て、親は子どもに自主性が無い、積極性に欠けると判断し、殴りたくなるほどの思いを募らせている。学校に喜んでいく子どもという期待像に縛られ、子どもが少しでも渋ると子どものほうを責めるようになる。子どもは親の期待像を感じ取っているから、そうではない自分とのギャップを親には隠そうとする。そうしなければ親との絆が壊れそうな不安がある。子どもの気持ちをまずくみ取ることが親に与えられた義務であろう。子どものいろいろな不安が慢性化して心の底に沈み込んでしまうと、取り返しがつかなくなる。

家の手伝いを親に言われなくてもすることは、自主的で積極的で忍耐力のある子どもである。逆に言われてもしなかったり、言われたいからしないという子どもは、家族意識の欠落が見えるので、養育以前の親子関係の修復が必要である。ここで注目しておきたいことは、手伝いを親に言われたらするという子どもに対する親の評価である。言われたらするのは言われたいとしないのだから、しないことと同じと自主性も積極性も認めないのが母親である。ところが父親は、たとえ言われてするのでもしているのに違いは無いので、しないことよりするほうを選んだところに多少の自主性、積極性を認めている。子どもを評価するとき0点か100点かではなく、60点を与えられるとき、子どもが見えている評価になる。100点でなければ0点と同じ、これが母親の過期待である。

友達が自分のことをどう思っているか気にする子どもは、自主的と言えるだろうか。母親は明確な評価をしていない。ところが父親は、気にする子どもの方が自主的であると見る傾向がある。社会生活の中で100%の自主性を発揮することは、わがままにつながる。もちろん他人の目を意識して0%の自主性では生きていけない。ここでも自主性の発揮は例えば60%が妥当であろう。40%のマイナスは他人の思いを受け入れるための余裕である。わがまは常に出ようとしているから、身につけるべき資質は自分の思いにブレーキをかける他人の目である。そのときわがまは自主性にポイントを切り替えることができる。父親は大人の養育視点を持っている。これが父親の出番である。

第IV章 まとめと今後の課題

第Ⅳ章 まとめと今後の課題

平成5年度に家庭教育充実事業が行った「福岡県における中学生の意識・行動と父親・母親の養育態度・行動の実態調査」の中間報告から主な結果を抜粋すると、次のような傾向があげられる。

《中学生について》

- ①自分は自主的であると思っているが、自分に関することだけに限られている。
- ②父母や友人との関係は良好だが、その網目から漏れている者もいる。
- ③学習への意欲はありそうだが、積極的な目標を持ってないでいる者も少なくない。
- ④学校という世界に閉じ込められ、受験という壁に将来への展望を遮られている。
- ⑤甘い親と厳しい親に評価が分かれ、親に求めるイメージと現実の親との乖離がある。
- ⑥学年が進むにつれて暮らしの幅が狭まり、孤独に追い込まれている。
- ⑦男子は表面を明るく、悩みは隠し、女子は現実に素直に直面しようとしている。
- ⑧父親は離れたところに、母親は身近にという印象を持っている。
- ⑨家庭が居心地の良いものであり過ぎて、学習の場という機能を失っている。
- ⑩積極性の支えである自信をどうすれば獲得できるのか迷っている。

《親について》

- ①子どもの自主性を認めているが、自尊心を育て忘れている。
- ②世話を手控え、用事を依頼したりして子どもの成長を認めているが、生活の一員としてみていない。
- ③言葉遣いのしつけは低調で、会話も共感できる深さに届いていない。
- ④気持ちの余裕がしつけの甘さに現れ、しつけを比較や性差の尺度に頼っている。
- ⑤成績向上への積極性を期待するが、急がせることに終始している。
- ⑥父母とも子どもを生きがいにしているが、子どもの成長とともに生きがいの対象が変わっている。
- ⑦父親は子どもとの積極的な関わりが薄い、尊敬の対象である。
- ⑧母親は優しく厳しく関わり過ぎて、子どもを受け身の立場に追い詰めている。
- ⑨男子には勉強・成績を、女子には生活習慣を主にしつけようとしている。
- ⑩親と子どもの評価にはお互いに1～2割の厳しい方へのずれが見られる。

以上のまとめを見る限りでは、親子関係は問題点ばかりのようである。しかし親子の関係は基本的には望ましいものであった。10年前の平均点を70点とすれば、今回の調査では65点といったところであろう。高くなった点もあるが、低くなった点もあり、低下している所が上に述べた傾向として見えている。特に親の養育については「スリム化した養育行動」とであると特徴づけられる。つまり必要最小限に養育を限定していて、十分な養育をしていない。子どもが生きるに必要な栄養だけを与え、育ちに十分な栄養を提供していないということである。心身ともに急激な成長をする中学生には十分な養育がなされなければならない。何が十分ではないのか、それを探るために、本年度は調査のクロス分析を行った。分析の結果の詳細は昨年度の中間報告の形式にならって前章までに述べられている。ここではまとめを提供することにする。

1. 中学生の特徴

(1) 学校生活

中学生の学校生活においては、勉強と友人関係が大きな関心事であろう。前向きな勉強の目標を持ち、1.5時間以上勉強し、試験の間違いもやり直している中学生は、勉強のやる気に満ち、したがって勉強も分かっている。父母と将来や人生の話をする方が勉強への前向きな目標を得やすくしている。

異性や性に関心があれば、流行を気にしながら異性の友人も持つようになる。また学校が楽しい場であれば親友も得られるが、勉強や進学に悩むと親友はいなくなる傾向がある。親友がかえってライバルになってしまうことがあるのであろう。

(2) 親子関係

養育は信頼関係を前提にしているが、その信頼は単に親子であるということだけでは得られない。日常のつきあいから醸し出されるものである。将来や人生について話し合ったり、たとえば言われてでも手伝いをしている中学生の方が親を信頼している。また親は叱ることが親子の間にヒビをいれることになるかもしれないと心配しているかもしれないが、中学生は叱られることで信頼をなくしてはいない。かえって自分を思ってくれていると受け止めている。ただ父親による言葉遣いへの注意は、父親には似あわないと思っているふしがある。

信頼されている親は、中学生には優しい笑顔の表情が印象に残り、尊敬する人、教えてくれる人といった良いイメージを持たれている。ただ甘いと思われてしまう面があるので、要注意である。

家族を信頼している中学生は、学校での当番にきちんと取り組むなどの積極性が出ている。一方信頼していないと、学校や家庭よりも友達の家へ逃げ込みたくなるようである。

養育上、親は叱らねばならないこともある。ただ叱られるだけならよいが、それに別の要件が重なると、中学生はいっそ家を出てしまおうかという気になる。「何もかもいやになった」という心境がこわい。中学生が勉強のやる気を失っていたり、学校に行きたくないと思っていたり、服装髪形に関心が強かったりする場合や、親が自分勝手に口うるさかったり、稼ぐだけの人でかまってくれないと思われている場合には、家出の方に中学生を追い込むようである。特に母親による言葉遣いの注意は、中学生に家にいたくないと思わせているので留意すべきである。

(3) 家庭生活

家庭は親による養育の場であると同時に、中学生には安息の場である。テレビやスポーツなどの会話が弾み、言われながらも手伝いをしている中学生は、家庭生活に満足している。ただここでも母親による言葉遣いの注意は、満足にかなり水を差すことになるようである。

中学生の家庭での生活時間は、勉強とテレビ視聴に大部分占められるであろう。テレビを視聴する時間が2時間以下の中学生は2時間かそれ以上の勉強をしており、2.5時間以上テレビを視聴している中学生では勉強時間は1時間程度に減少している。また塾に通っていたり、試験の間違いをやり直している中学生の方が、2時間以上の勉強をしている。

テレビを視聴する時間は、ドラマを好きな中学生で3時間程度に長くなっている。また学校が楽しいという中学生よりも、家庭が楽しいという中学生の方が視聴時間が長く3時間以上になっている。

家庭と学校という生活の場の切り替えは、気持ちの上では朝に起こる。学校に行く時間に自分

自身を追い立てなければならない。遅刻をする中学生は、勉強が分からなくてやる気が持てず、朝が来るのが楽しみではないようである。勉強が好きになれなくてもせめて苦にならないように、あるいは学校に勉強のつらさを越える楽しみを見つけてほしい。

(4) 地域生活

中学生になると家庭の外での生活が、時間的にも意識の上でも大きなものになる。最も主要なものが学校生活である。その学校生活が楽しければ、中学生も幸せであろう。クラス活動に参加しようとし、親友もいて、異性への関心も持っている中学生は、勉強が分かるとか分からないとかに関係なく、学校が楽しいと思っている。

異性への関心は性への関心と直結しており、流行や服装などへの関心を高め、異性の友人を持つようになり、テレビ番組もドラマを好むようになる。ただ体型を気にし、恋愛の悩みが付きまとうことは避けられない。

幸せは明日が楽しみという気持ちによって実感できる。学校が楽しいと明日が楽しみであるが、家庭や友人の家の方が楽しいと思っている中学生は明日が楽しみとは思えないようである。今日一日を楽しむだけといった兆候が見えている。また異性への関心があったり、親友がいるという中学生も明日への期待を持っている。明日が楽しみであるということに対しては、大勢として勉強が分かるか分からないかは関係しないようである。ただし勉強が分からないと明日への楽しみが閉ざされがちに、分かると明日のことなど意に介さないクールさに片寄ることがある。

(5) 自己評価

中学生に求められる資質は多いが、自主性、積極性、忍耐力もその一部である。当番にまじめに取り組み、クラス活動にも進んで参加することで自主的、積極的に忍耐力を持って行動ができている。その際仕方なくすることは忍耐力ではあるが、自主的、積極的ではないと中学生は思っている。親友がいて、友達のことを気にする中学生の方が、自主的、積極的になれるようである。学校に遅刻しないようにすることで、積極性や忍耐力が養われている。勉強が分からないと足を引っ張るようであるが、試験の間違い直しをすることで十分に積極性や忍耐力を培うことができている。家族との信頼関係が基盤として重要であることはもちろんである。

中学生にとって大きな悩みの種は勉強である。勉強の目標を持ってはいるが勉強が分からない、支え合う親友もいないとなると、出口が見えず悩んでしまっている。異性に関心を持ったり異性の友人がいると、恋愛の悩みが現れて来る。悩みの相談相手は親友が圧倒的である。ただ優しい顔が思い浮かべられる母親には相談しやすく、母親が信頼されていないと友達の方にいくか、誰にも相談しない方に追いやってしまっている。

学校に行きたくないと思うことがある中学生は、勉強が分からないという理由もあるが、当番やクラス活動に仕方なしに関わっていて、学校生活が楽しくないようである。ここで特に留意しておくことは、学校に行きたくない中学生は家庭生活にも満足していないということである。家庭にいたいから学校が嫌なのではなく、学校も嫌、家庭も嫌という八方ふさがりに追い込まれているようである。生きていることを見失わないように十分な気配りが望まれる。

中学生は家庭に安心できる場を求めている。中学生は自立しようとしているから、家族と一緒に部屋よりも自分の部屋の方が落ち着くであろう。悩みを抱え友達に相談する中学生は自分の部屋の方が安心できるが、母親に相談する中学生は家族と一緒に部屋で安心できている。家族を信頼していないと、自分の部屋に閉じこもるようである。

2. 親の特徴

(1) 養育行動

親が子どもを朝起こすことは過保護の例として取り上げられるが、親はそれを当然のことと
思っているふしがある。確かに子どもに自主性があると思う親も、ないと思う親も、同じように
子どもを起こしている。起きることは子どもの資質ではなく、親が起こすべきであるという思い
込みが強い。勉強を督促したり、よその子と比較したりする親のほうが起こさねばと思っている
ようである。起こすことも子どもを駆り立てるムチのつもりである。

親は中学生の仕事は勉強であると思っている。宿題を忘れないように注意する親、子どもの成
績に悩む親、よその子どもとの比較をする親は、もっと勉強させようと督促している。そうする
背後には、子どもに積極性がないからという思いがある。父親では子どもと将来や人生の話をする
親のほうが督促するのに対して、母親では将来の話をしな親のほうが督促をしている。父親
との違いが現れている。

養育は言葉を通じて行われることが多い。そのとき言葉遣いのしつけも同時に行われる。親へ
の言葉遣いが悪かったり、乱暴な言葉遣いをしたときの注意は一貫している。男女を意識してい
る親、腹が立ち殴りたいと思うことがある親、子どもに忍耐力がないと思う親は、親への言葉遣
いの注意が穏やかにできず厳しくなりがちである。親の活券こびんがのぞいている。

自分のことは自分で始末するのが自立の必要条件である。後始末はその一つである。挨拶の注
意を厳しくする親は、後始末の注意も厳しくしている。いずれも社会生活上の資質であるという
意識が働いているためであろう。また規則的な生活をしている親は後始末というしつけをきちん
とできている。特に社会の出来事を話している父親は、後始末にも厳しくなっている。また子ど
もに自主性がないと思う親の方が厳しく、あると思う親は穏やかに注意していることから、後始
末できるかどうかは自主性のバロメーターになっている。

(2) 親子交流

中学生の親は保護者という役割を減らして、大人のモデルという役割を求められるようになる。
子どもに将来や人生への目を開かせる養育の時期である。何のために勉強するのかといったこと
も親が教えなければならない。日常の対話で社会の出来事について話している親、挨拶の注意を
きちんとしている親は、将来や人生の話に入りやすい、また子どもをほめている親ほど将来の話
ができている。子どもが自分に似てくることを願っている親でなければ、将来や人生の話は明る
くならない。子どもにとって親から聞かされる愚痴や後悔は、将来を暗くするだけである。

中学生に成長したわが子を子ども扱いしないためには、対等な関係を持つことが必要である。
家庭が大人の仮免許を与える場所である。例えば家のことを相談することも考えられる。そのた
めには親が社会の出来事を話題にして情報を与え、子どもをほめようとする温かい目を持ち、し
つけの自信を持つことが必要である。特に父親では後始末を厳しく注意する親の方が、一方で子
どもに相談できている。

中学生が身につけた能力を伸ばすにはほめることである。叱るのは芽を摘む行為である。親が
子どもをほめられるためには、親は自分の生活が充実していると感じ、しつけの自信を持つこと
が必要である。また社会の出来事を話題にすることによって判断の基準が現実的なものに落ち着
くので、ほめやすくなる。親が子どもはこうあるべきという原則的基準を抜けれないと、子ど
もをほめることはできない。

(3) 子ども評価

対人関係の印象は鏡に似ていることがある。こちらが明るい気持ちであれば相手も明るく見える。親子関係も同じである。子どもがどう見えるかは、親の方の気持ちにも影響されている。よその子と比較したり、勉強に駆り立てようとしたり、殴りたいと思うほど従わせようとしたり、自信を持たない親は、子どもの自主性や忍耐力が見えにくくなっている。親の焦りが目を曇らせている。

子どもを正しく知るには、それに^{ふさわ}相応しい方法がある。見ようとすれば見えるはずである。親が子どもの学校生活の話をよく聞いたり、将来や人生の話をしたり、家の相談を持ちかけたり、しつけの自信のある親は、子どもの積極性が見えている。

親は子どもが可愛いはずである。ところが腹が立ち殴りたいと思うこともあるようである。親への言葉遣いや、服装髪形、あるいは後始末の注意を厳しくしている親は、なかなか素直に聴かない子どもの気持ちが分からずに腹が立つことがある。これはよくあることで問題ではない。気になるのは、男女差を意識したり、よその子と比較したり、成績を悩んだりしている親の方が、親心をつかろうとしない子どもに腹が立ち殴りたくなっていることである。またしつけの自信がないという親も、殴りたくなる衝動に駆られている。親に焦りは似合わない。親心と子どもの気持ちはいつもすれ違いなのである。

子どもの悩みは親にとって気になるものである。子どもの悩みを的確に把握しているかどうかは別にして、親の悩みレーダーは歪みがあるかもしれない。将来や人生の話をしている親は、子どもが進学に悩んでいると見てしまいやすい、子どもの気持ちが分からないと思っている親は、勉強や成績に悩んでいるはずと思い、他方気持ちが分かると思う親、あるいはしつけの自信がある親は、子どもに悩みがないと見ている。子どもの成績に最も影響するのは本人の努力であると多くの親が思っている。しかし、先生の教え方、クラスの雰囲気、友達が最も影響すると思っている親は、子どもの悩みを進学に見ている。

(4) 養育意識

夫婦は子どもができて父母になり、自分を新たな親という存在として意識する。特に子どもは母親の心に変化をもたらす。子どもを起こしたり、テレビやスポーツの話をすることで家族の触れ合いを得ている。またしつけの自信を持つと、母親としての充実感を楽しんでいる。一方で子どもの気持ちが分からないと充実感にかけりが見えるが、よその子と比較したり勉強に駆り立てたりする親としての焦りは、親自身の充実感にはさほどマイナス要因にはなっていない。

子どもが成長し子離れの時期を迎えると、親としての生きる張り合いを奪われる。勉強の督促をしたり、よその子と比較をしている親は、一方ではまだまだ親がついていなければという思いがあって子どもを生きがいにしているが、他方一部の母親は生きがいを失っている。家の相談を持ちかけたり、しつけの自信があって、腹を立てて殴りたくなることのない父親は、母親とは違って、子どもが生きがいになっている。父親としての意識が高まっている。

親としての役割はしつけである。しつけの自信を持つにはいくつかの条件が満たされなければならない。挨拶をしなかったり乱暴な言葉遣いをしたときは必ず注意をすること、テレビやスポーツなどの話をよくして子どもの気持ちを上手に聞き出すこと、子どもに先に挨拶の言葉をかけたり、家の相談を持ちかけたり、きちんと礼を言うことで常に対等に付き合うこと、勉強の督促はほどほどで子どもの積極性を信頼すること、そして学習を通じて自分のしつけをチェックするこ

と、これらが自信のある親の姿である。

親はわが子にどうしても甘くなる傾向があり、薄々自分でも気が付いている。子どもに対しては後始末を厳しく注意できずに穏やかに注意するとか、社会の出来事についてあまり話すことがないとか、また一方で親自身についてはしつけの自信が今一つとか、自分にはあまり似てほしくないといったことが、甘いという評価になって現れている。子どもを朝起こすとか、勉強の督促をするとか、よその子と比較をするといったことは、母親には甘いという評価とは無縁である。

親が子どもの世話をするのは自然なことである。子どもと一緒にいたいと思う親ほど世話をしている。ただ朝起こしたり、よその子と比較する母親の方が世話をしていると思うのは、子どもにとっては大きなお世話になりかねない。しつけの学習をしている親の方が世話をしていると思うのも子どもが可愛いあまりであろうが、肝心の子離れの学習を忘れていようである。

親としての信頼を支えるものは、二つの側面がある。子どもが自分に似ることを望み、しつけの自信を持つという親自身が信頼を受けるに値するということ、一方で子どもの気持ちが分かり言葉遣いなどをきちんと注意しているという責任を果たすことである。どちらが欠けても信頼は損なわれている。

少子化の趨勢^{すうせい}の中で親は養育の経験のないままにわが子を育てている。大変な気苦労があるはずである。しつけについても分からないことが多いと推察されるが、中学生の親になるとここまで育て上げたという実績がある。子どもの気持ちが分からず戸惑うことがあるとか、腹が立ち殴りたくなることがあるといった親の方が、しつけに悩み学びたいと思うのではないと思われるが、現実には必ずしもしつけについて学ぼうとはしていない。一方で親に似て欲しいと願っている親の方が、しつけの学習をしている。自分の生き方に自信を持っている親は子どもをしつけるハウツーを知りたいと思うが、子どもが見えなくて手掛かりを失っている親は学ぶ意欲さえ失っている。学びは余裕がないとできないようである。

3. 親子関係の特徴

(1) 親子の相互評価

親が思っている子どもと、子ども自身が思っている子どもとは違って当たり前である。自分で判断し行動していると思っているわが子をその子どもの親がすべて自主性があると思っているわけではなく、一方でそうではないと思っているわが子をその親の半数は自主性があると思っている。親が自主的であって欲しいと思うことがらが子どもの思いとずれていて、自主性の有無について親と子ども自身の評価の一致程度は7割弱である。

自分から進んで物事に取り組もうとしているわが子を、その親の3人に2人が積極性があると思っているが、一方でそうはしていないというわが子でもその親の過半数が積極性を見ている。評価の一致は6割である。また我慢すべきときに我慢しているというわが子を、忍耐力があるという母親は4人中3人で父親より多めであり、我慢はしていないというわが子をその子どもの6割の親が我慢していると見ている。忍耐している、していないという評価が親子で一致している割合は7割弱である。

大部分の親を信頼しているというわが子に対して、自分は信頼されていると思っている親は父親で8割、母親で9割に及ぶ。ところがわが子の悩みを的確に掴んでいる親は2割強に過ぎない。これでは信頼されているといっても、子どもの力にはなれない。表面的な信頼関係に止まってい

るような不安が感じられる。

親がしつけをしているつもりでも、必ずしも子どもの方ではしつけられているとは思えないこと、あるいはその逆のことが有り得る。親が自分のしつけは甘いと思っている、そう思うというわが子は5割から6割である。しつけの甘さ厳しさの評価が一致している親子のペアは6割弱である。

親がテレビやスポーツのことについて話しているつもりで、確かにそう思うという子どもは7割、一致の程度は7割弱である。親が学校のことについて話していると思っても、母親とは7割、父親とは5割の子どもが話していると思っていない。さらに親が将来や人生について話してみても、母親で6割強、父親では5割弱の子どもしかそう思っていない。親からは話にくい性の話題については、話していると親が思っている、父親とは1割、母親とは3割弱の子どもしか性の話をしていると思っていない。親からの話は上からの言い渡し型になりがちで、子どもには話しているというよりも聞かされているという思いが強く感じられているようである。

全体的に親子の相互評価は、おおむね「6割の一致」とみなしておけば良いようである。特に母親はわが子のことは完全に分かっていると思込んでいるかもしれないが、中学生が相手では親子相互で6割しか分かり合えていないことを知るべきである。

(2) 子どもの目

親の養育行動は複合的に子どもに影響を与えている。親心によるしつけであっても、子どもにはそうは思えないこともある。将来や人生について話をする父親の方が信頼されるが、母親はどちらかと言えばしない方が信頼されやすい。挨拶をしなかったり乱暴な言葉を言ったときに注意する親は信頼されている。また子どもと一緒にいたいと思っている親はわが子に胸を開いているために子どもに信頼されやすい。

子どもは親の顔をじっと見て覚え込んでいる。テレビやスポーツなどの話をしている親は笑顔や優しい顔が、腹が立ち殴りたくなることがある父親は笑顔が減って怒った顔や疲れた顔が覚えられている。子どもの気持ちが分からないという母親は、優しい顔が消えて暗い顔であったり顔が見えなくなっている。しつけの自信がある親は優しくなるようである。親はわが子がどんな親の顔を思い浮かべてくれるか一度考えてみてほしい。

言葉の注意をしてくれる父親は尊敬でき頼りになる人であるが、後始末の注意をする父親は教えてくれる人か勝手に口うるさい人かにイメージが分かれる。また腹が立ち殴りたいと思う父親は尊敬できる人か勝手に口うるさい人に、子どもの気持ちが分からない父親は尊敬できる人か稼ぐだけの人と思われる。言葉の注意や後始末の注意をしてくれる母親は、親しみのある人、教えてくれる人というプラスイメージか、勝手に口うるさい人というマイナスイメージに分かれている。さらに腹が立ち殴りたい、気持ちが分からないという母親は、勝手に口うるさいというイメージしか持たれていない。子どもは親をどうイメージしていいのか迷っているようでもあるし、親心に疑いを持っているのかもしれない。

子どもがしつけから逃れようとするとき、しつけの場である家をいっそ出たおもうかと思ふかもしれない。親が言葉遣いや後始末を厳しく注意すると、子どもは家を出たいと思うことがある。ただし乱暴な言葉を注意されても、素直に受け入れ、そうは思わないようである。子どもと一緒にいたいと思っていたり、子どもの気持ちが分からないという父親は、わが子にとって家を居心地の悪いものにしていく。一方で母親では服装髪形の厳しい注意が、子どもには応えるよう

である。もちろんしつけが甘い親では子どもを家を出ようとまで追い詰めることはないが、逆に家を出たいと思わせることを恐れて甘くなっているとしたら親の務めが果たせない。時にはそう思われても親子の絆が強ければ問題にはならないはずである。

子どもに家庭生活の満足を与えるのも親の務めである。親が乱暴な言葉の注意や勉強の督促をしてくれたり、気持ちを分かってくれていると子どもは安心している。また母親が後始末の注意をしてくれるような生活に、子どもは結構満足しているようである。

子どもが学校に行きたくないと思うのは、必ずしも学校が嫌なのではない。それ以前に学校に行く気になれないということも重なっている。父親が乱暴な言葉を厳しく注意したり勉強の督促はするが、挨拶の注意といった基本的なしつけをしてくれないとき、また母親が服装髪形の注意にうるさいとき、子どもは学校に行くことを躊躇している。親が後ろ楯になって自信を持たせてくれない不安が学校への足を重くしている。

親はわが子の気持ちを安心させなければならない。わが子をほめようとする親、わが子を生きがいとし一緒にいたいと思っている親であれば、子どもは親と一緒にいる方が安心する。しかし仕事を生きがいとする父親、生きがいのないという母親であれば、子どもは自分の部屋に閉じこもろうとしやすい。

子どもの目はしつけの厳しさの中に、親がわが子である自分のことをどれほど思ってくれているかという印を見逃すまいとして彷徨っている。親はしつけをすることに熱中するあまり、わが子に不安ばかりを与えているかもしれない。

(3) 親の目

親は子どもの態度や目の輝きなどから、わが子の気持ちのありようを掴んでいる。積極的な勉強の目的を持っていたり、学校に行きたくないとは思っていないとか、あるいは服装髪形に関心を持っているようなわが子を、親は自主的であると見なしている。さらに父親は友の目を気にしているわが子が、母親は勉強のやる気を持っているわが子が自主的に見えている。特に目を引くのは、手伝いを言われずにするのはもちろんだが、言われてするわが子を父親はそれなりに自主的と見ているが、母親は言われなければしないということから自主的であるとは思えないようである。

子どもが自分のエネルギーを外部に向かって放出することが親に見える育ちの証しである。親に積極的であると見なされている子どもは、親友がいる、学校が楽しい、勉強のやる気がある、服装髪形にも関心を持つ、大人への挨拶をしている子どもである。さらに明日を楽しみにして、試験の間違いもやり直すといった未来志向も積極性の要件である。手伝いについては、言われて手伝いをするわが子に父親はある程度の積極性を見ているが、母親の目は厳しい。

子どもが自分の甘えにブレーキをかけることが、忍耐力という社会性の一つの資質である。勉強のやる気があり、楽しいところは学校というわが子を親は忍耐力があると見なしている。手伝いを言われてするわが子に父親母親共に忍耐力を認めているが、言われず手伝いをするわが子を母親はもっと忍耐力があると思っている。母親の目には、言われずにするわが子の手伝いは、進んでしている積極性というよりも、親に言われるのが嫌で我慢して先回りをしているように見えているようである。

親子関係にしつけという要素が絡むと、親は自分の期待からはみ出すわが子に気分を害され、つい手を上げたくなることもあるだろう。父親の余裕の限度にかかってしまう子どもは、テレビ

を3.5時間以上見る、勉強時間が2時間以下、学校に行きたくないと思うことがあるわが子である。一方母親では、テレビを4時間以上見る、勉強時間が1時間以下、仕方なく勉強する、友達の家が楽しい、学校に行きたくないと思うことがある、進んで手伝いをしない子である。

親の目はおおむね父親母親共に子どもについて見るべき所を見ている。また父の目と母の目は微妙にずれているが、このことは養育上望ましいことである。中学生時期の養育に父親の参加が求められているが、それはまさしく父親の開眼なのである。

4. 今後の課題

まとめから明らかになった特徴を列挙してみよう。

- ①子どもに勉強を分からせるためには、親は将来や人生の楽しい話をした方がよい。
- ②親子の信頼関係はあらゆる成長の基本的な滋養になっている。
- ③細かな注意が日常的に重なることは、親の心を子どもに対して閉ざすことになる。
- ④学校には何より仲間と一緒に明日を目指す喜びを分かち合うことが託される。
- ⑤親子関係の揺れは子どもの心を不安定にし、ひいては学校を遠ざけてしまう。
- ⑥親の世話やしつけは詰まるところ勉強に向かってなびき、養育が片寄っている。
- ⑦父親は自分の生活観に、母親は子どもへの期待観に基づいてしつけている。
- ⑧中学生には社会や将来に関する話題が出せるような親子交流が必要である。
- ⑨親がしつけに焦るほど子どもが見えなくなり、気持ちがすれ違っている。
- ⑩わが子の成長につれて親離れが進むとき、親は親意識の変革に直面する。
- ⑪子を親のしつけの鏡として自己チェックすることがしつけを学ぶ課題である。
- ⑫親は子どもの悩みについてほとんど分かっていないことを自覚していない。
- ⑬子どもは親の温かい心を探しているが、しつけの嵐に遮られている。
- ⑭父の目と母の目に視差が現れるが、親の目としては一長一短がある。

中学生の親に求められる養育はしつけの仕上げである。仕上げにはかなりの力量を問われる。つまり親は大人としての自分の力量を十分に発揮させられる。初期のしつけはこうすればこうなるといった単純さがあるが、ある程度の成長を遂げたわが子では思わぬ所にしつけのつぼが潜んでいる。例えば勉強への誘導は厳しく督促することではなく、将来を楽しく語り合い、後始末のしつけの一環として試験の間違いをきちんとやり直すといった一連のプロセスを必要とする。ただ塾に通わせていけば済むことではなく、家庭が温かくなければどんな意欲も湧くことはない。生活のあらゆることにつながっているのである。「スリム化した養育」とは、例えば学校に行きたくないと思う中学生を勉強が分からないからだと考えただけで、行かないと余計に分からなくなると追い立てることである。忘れられていることは、友達がいれば学校は楽しくなるし、また家庭生活に満足していれば学校に行こうという気持ちにもなるということである。そういう風に子どもを全体としてとらえる養育がそぎ落とされている。学校教育が受験教育に片寄っているとされることがあるが、その指摘は中学生の家庭教育にも当てはまっている。中学生の人格を育てる養育は総合的な生活の営みであり、親の人格がそのまま関わるべきものである。世話を主体にする親意識から共に育つ親意識への変革に直面するのは、親自身の人格に目を向けなければ養育ができないということを示している。何よりもそれを子どもが求めている。

教育するには子ども自身にまず意欲がなければならない。意欲がなければ、どんなすばらしい教育の中身を用意したとしてもそれを子ども自身が手にとろうとはしないであろう。そこには教育は成立しない。だから意欲を生み出すための前提的行動が必要となってくる。親はこんな学習をしてみたいという気持ちを子ども自身におこさせるような環境整備から始めるべきである。

子どもをよく見て適切な関わりをもつことによって意欲を育て、望ましい行動が現れるのを待っていればよい。太陽と北風の話は、養育においても有効である。本報告書でも子どもを育てる太陽のあり方を探って来たつもりである。

今後の養育が向かうべき課題は、総合的な養育観を構築することである。そうしなければ養育のスリム化はますます進行して、子どもはひ弱になってしまう。過去に指摘された若者の三無主義、モラトリアム、指示待ち人間などの特徴は、自分はこれだけしていればよいという「自分のスリム化」である。そこには思いやりやボランティア精神の入り込める余地はない。心の豊かさは自分の温かさを周りにあふれさせることである。養育が豊かにならなければならない。それには親は、これだけしていればよい、これだけはしておかねば、といった養育行動の限定をやめなければならない。親子関係はしつけの関係ではなく、人間関係なのである。

資 料

クロス集計表

1-1 [生徒] 問27 勉強やる気

[生徒]問8 勉強の目的		1	2	3	4	合計
	1	2%	14%	5%	1%	22%
	2	5%	25%	7%	1%	38%
	3	1%	1%	0%	0%	2%
	4	1%	4%	1%	0%	5%
	5	1%	7%	4%	0%	11%
	6	0%	1%	2%	0%	4%
	7	0%	2%	2%	1%	6%
	8	0%	5%	4%	1%	10%
	9	0%	1%	1%	0%	2%
	合計	11%	59%	25%	5%	100%

1-2 [生徒] 問26 勉強分からぬ

[生徒]問46 間違え直し		1	2	3	4	合計
	1	1%	7%	3%	1%	14%
	2	11%	25%	7%	0%	43%
	3	9%	17%	3%	0%	30%
	4	7%	5%	1%	1%	14%
合計	29%	55%	14%	2%	100%	

1-3 [生徒] 問8 勉強の目的

[生徒]問35 将来や人生(母)		1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計
	1	4	11%	1%	1%	2%	0%	1%	1%	0%	22%
	2	9%	15%	0%	2%	5%	1%	2%	4%	0%	40%
	3	6%	7%	0%	1%	3%	1%	1%	3%	1%	24%
	4	3%	4%	0%	0%	2%	1%	1%	2%	1%	14%
	合計	22%	38%	2%	5%	11%	4%	5%	10%	2%	99%

1-4 [生徒] 問41 友の目気に

[生徒]問9 当番や仕事		1	2	3	4	合計
	1	14%	15%	9%	3%	41%
	2	9%	13%	9%	1%	33%
	3	6%	9%	6%	2%	24%
	4	0%	0%	0%	0%	1%
合計	30%	38%	25%	7%	100%	

1-5 [生徒] 問31 服装や髪型

[生徒]問22 今親友いる		1	2	3	4	合計
	1	24%	23%	10%	2%	60%
	2	7%	9%	3%	1%	19%
	3	2%	5%	2%	1%	10%
	4	2%	4%	3%	2%	11%
合計	34%	41%	19%	6%	100%	

1-6 [生徒] 問22 今親友いる

[生徒] 問24
悩みや困り

	1	2	3	4	合計
1	2%	0%	0%	0%	2%
2	5%	1%	1%	1%	8%
3	2%	2%	0%	1%	5%
4	7%	2%	1%	1%	12%
5	18%	7%	4%	4%	33%
6	2%	0%	0%	0%	3%
7	3%	1%	1%	1%	7%
8	6%	2%	1%	0%	10%
9	1%	1%	0%	1%	2%
10	13%	2%	1%	2%	18%
合計	60%	19%	10%	11%	100%

1-7 [生徒] 問23 異性の友人

[生徒] 問17
異性に関心

	1	2	3	4	合計
1	4%	1%	3%	4%	13%
2	10%	7%	9%	19%	45%
3	5%	3%	5%	21%	34%
4	1%	0%	2%	5%	8%
合計	20%	12%	19%	49%	100%

1-8 [生徒] 問38 家族を信頼 (父)

[生徒] 問30
家の手伝い

	1	2	3	4	合計
1	9%	7%	2%	1%	18%
2	24%	22%	6%	3%	55%
3	6%	7%	3%	1%	17%
4	1%	1%	1%	1%	3%
5	2%	1%	1%	0%	4%
合計	42%	37%	12%	6%	97%

1-10 [生徒] 問48 家族は甘い (父)

[生徒] 問37
家族の表情 (父)

	1	2	3	4	合計
1	2%	8%	6%	2%	18%
2	4%	12%	7%	2%	25%
3	1%	2%	2%	4%	9%
4	0%	0%	1%	0%	2%
5	2%	5%	6%	2%	14%
6	0%	0%	0%	0%	1%
7	0%	1%	1%	0%	2%
8	1%	2%	2%	1%	6%
9	2%	7%	8%	3%	20%
合計	13%	38%	33%	15%	98%

1-9 [生徒] 問37 家族の表情 (父)

[生徒] 問38
家族を信頼 (父)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計
1	10%	16%	2%	1%	6%	0%	0%	1%	5%	42%
2	6%	8%	3%	1%	6%	0%	1%	3%	9%	37%
3	1%	1%	2%	0%	2%	1%	0%	1%	4%	12%
4	0%	0%	1%	0%	0%	0%	0%	1%	2%	6%
合計	18%	25%	9%	2%	14%	1%	2%	6%	20%	97%

1-11 [生徒] 問9 当番や仕事

	1	2	3	4	合計
1	20%	12%	9%	1%	42%
2	14%	14%	9%	0%	37%
3	4%	4%	4%	0%	12%
4	2%	2%	1%	0%	6%
合計	40%	33%	23%	1%	97%

〔生徒〕問38 家族を信頼(父)

1-13 [生徒] 問49 叱責で家で(父)

	1	2	3	4	合計
1	1%	1%	0%	1%	3%
2	3%	4%	5%	5%	16%
3	3%	6%	10%	10%	29%
4	3%	6%	13%	26%	49%
合計	10%	18%	27%	42%	97%

〔生徒〕問13 不登校思う

1-12 [生徒] 問40 親のイメージ(父)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計
1	6%	1%	1%	2%	0%	1%	1%	0%	0%	13%
2	9%	3%	1%	6%	1%	1%	3%	1%	1%	27%
3	10%	4%	2%	7%	1%	2%	5%	1%	2%	33%
4	4%	2%	1%	3%	3%	3%	5%	1%	2%	25%
合計	29%	11%	5%	19%	6%	7%	14%	3%	5%	97%

〔生徒〕問35 将来や人生(父)

1-14 [生徒] 問28 家庭に満足

	1	2	3	4	合計
1	7%	8%	2%	1%	19%
2	16%	29%	9%	3%	56%
3	3%	10%	4%	1%	18%
4	0%	2%	1%	1%	3%
5	1%	2%	0%	0%	4%
合計	28%	50%	16%	6%	100%

〔生徒〕問30 家の手伝い

1-17 [生徒] 問1 学校に遅刻

	1	2	3	4	合計
1	2%	6%	9%	12%	29%
2	1%	7%	18%	29%	55%
3	0%	1%	5%	8%	14%
4	0%	0%	0%	1%	2%
合計	3%	15%	32%	50%	100%

〔生徒〕問26 勉強分からね

1-15 [生徒] 問5 勉強時間

「生徒」問4
テレビ時間

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計
1	0%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	3%
2	1%	2%	2%	2%	1%	1%	0%	0%	1%	11%
3	2%	2%	2%	1%	0%	0%	0%	0%	1%	9%
4	3%	6%	4%	3%	1%	1%	0%	0%	1%	20%
5	1%	2%	1%	1%	0%	0%	0%	0%	1%	8%
6	5%	6%	2%	2%	1%	1%	0%	0%	3%	21%
7	2%	3%	1%	1%	0%	1%	0%	0%	1%	8%
8	4%	5%	1%	1%	0%	1%	0%	0%	5%	17%
9	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1%
合計	20%	27%	13%	13%	5%	6%	2%	1%	13%	100%

1-16 [生徒] 問4 テレビ時間

「生徒」問11
楽しい場所

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計
1	1%	6%	4%	10%	4%	9%	3%	6%	0%	44%
2	0%	2%	2%	4%	2%	5%	2%	5%	0%	23%
3	1%	2%	2%	5%	2%	6%	2%	5%	0%	24%
4	0%	1%	1%	2%	1%	2%	1%	2%	0%	9%
合計	3%	11%	9%	20%	8%	21%	8%	17%	1%	100%

1-18 [生徒] 問17 異性に関心

「生徒」問31
服装や髪型

	1	2	3	4	合計
1	8%	18%	7%	2%	34%
2	4%	21%	14%	2%	41%
3	1%	5%	10%	2%	19%
4	0%	1%	2%	2%	6%
合計	13%	45%	34%	8%	100%

1-19 [生徒] 問36 しつけ甘い

「生徒」問48
家族は甘い
(母)

	1	2	3	4	合計
1	1%	3%	1%	1%	6%
2	1%	21%	13%	2%	38%
3	1%	17%	16%	4%	38%
4	0%	5%	6%	2%	13%
合計	3%	47%	35%	9%	94%

1-20 [生徒] 問11 楽しい場所

〔生徒〕 問10 クラス活動		1	2	3	4	合計
	1	24%	8%	8%	4%	44%
	2	18%	12%	15%	4%	49%
	3	0%	0%	0%	0%	1%
	4	2%	2%	2%	1%	6%
合計	44%	23%	24%	9%	100%	

1-21 [生徒] 問14 自分で判断

〔生徒〕 問9 当番や仕事		1	2	3	4	合計
	1	14%	21%	6%	0%	41%
	2	8%	19%	6%	1%	33%
	3	5%	13%	6%	0%	24%
	4	0%	0%	0%	0%	1%
合計	28%	53%	17%	2%	100%	

1-22 [生徒] 問24 悩みや困り

〔生徒〕 問26 勉強分からね		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	合計
	1	0%	2%	1%	3%	11%	1%	2%	3%	1%	3%	29%
	2	1%	4%	3%	6%	18%	2%	4%	5%	1%	11%	55%
	3	0%	1%	1%	2%	3%	1%	1%	2%	0%	4%	14%
	4	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	2%
合計	2%	8%	5%	12%	33%	3%	7%	10%	2%	18%	100%	

1-23 [生徒] 問13 不登校に思う

〔生徒〕 問10 クラス活動		1	2	3	4	合計
	1	1%	6%	11%	25%	44%
	2	2%	9%	16%	22%	49%
	3	0%	0%	0%	0%	1%
	4	0%	1%	2%	2%	6%
合計	3%	17%	30%	50%	100%	

1-24 [生徒] 問42 安心する場

〔生徒〕 問28 家庭に満足		1	2	3	4	5	6	7	8	合計
	1	14%	10%	1%	0%	1%	1%	1%	0%	28%
	2	33%	9%	1%	0%	1%	2%	3%	0%	50%
	3	10%	2%	1%	0%	1%	1%	1%	1%	16%
	4	3%	1%	0%	0%	0%	1%	1%	1%	6%
合計	60%	22%	3%	1%	2%	4%	6%	2%	100%	

1-25 [生徒] 問25 相談相手

[生徒] 問22 今親友いる		1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計
	1	2%	8%	0%	2%	40%	0%	4%	1%	1%	60%
	2	1%	3%	0%	0%	11%	0%	3%	0%	0%	19%
	3	0%	2%	0%	0%	4%	0%	2%	0%	1%	10%
	4	1%	2%	0%	0%	2%	0%	4%	0%	2%	11%
	合計	4%	16%	1%	3%	57%	1%	13%	1%	4%	100%

2-1 [女性] 問1 子を起こす

[女性] 問9 勉強の督促		1	2	合計
	1	22%	7%	30%
	2	30%	16%	46%
	3	8%	6%	14%
	4	3%	2%	5%
	合計	62%	32%	94%

2-2 [女性] 問11 後始末注意

[女性] 問27 ほめてやる		1	2	3	4	5	合計
	1	7%	9%	0%	3%	1%	19%
	2	26%	29%	1%	5%	2%	63%
	3	6%	4%	0%	1%	0%	12%
	4	0%	0%	0%	0%	0%	0%
	合計	39%	41%	2%	9%	3%	94%

2-3 [女性] 問6 言葉の注意

[女性] 問23 男女と注意		1	2	3	4	5	合計
	1	6%	2%	0%	0%	0%	8%
	2	24%	15%	1%	0%	2%	42%
	3	16%	14%	2%	0%	2%	34%
	4	3%	5%	1%	0%	1%	10%
	合計	49%	36%	4%	1%	4%	94%

2-4 [女性] 問9 勉強の督促

[女性] 問31 生きがいは		1	2	3	4	合計
	1	2%	4%	2%	0%	8%
	2	17%	28%	8%	2%	55%
	3	2%	4%	1%	0%	7%
	4	0%	1%	0%	1%	2%
	5	1%	2%	1%	0%	4%
	6	2%	3%	1%	1%	7%
	7	4%	5%	1%	0%	11%
	合計	30%	46%	14%	5%	94%

2-5 [女性] 問15 将来人生話

[女性] 問46 親真似望む		1	2	3	4	合計
	1	3%	2%	1%	0%	6%
	2	10%	17%	4%	0%	32%
	3	9%	25%	9%	1%	44%
	4	4%	5%	2%	1%	11%
	合計	26%	50%	16%	2%	94%

2-6 [女性] 問18 家庭の相談

	1	2	3	4	合計
1	6%	9%	3%	0%	19%
2	6%	34%	21%	2%	63%
3	0%	4%	6%	1%	12%
4	0%	0%	0%	0%	0%
合計	13%	47%	30%	4%	94%

「女性」問27
ほめてやる

2-7 [女性] 問27 ほめてやる

	1	2	3	4	合計
1	7%	10%	1%	0%	17%
2	11%	46%	8%	0%	65%
3	1%	7%	3%	0%	11%
4	0%	0%	0%	0%	1%
合計	19%	63%	12%	0%	94%

「女性」問30
生活充実感

2-8 [女性] 問32 子に自主性

	1	2	3	4	合計
1	11%	38%	16%	1%	66%
2	2%	15%	7%	0%	25%
3	0%	1%	1%	0%	3%
4	0%	0%	0%	0%	1%
合計	15%	54%	24%	1%	94%

「女性」問8
挨拶の注意

2-9 [女性] 問33 子に積極性

	1	2	3	4	合計
1	5%	14%	7%	0%	26%
2	4%	26%	20%	1%	51%
3	1%	6%	8%	0%	16%
4	0%	0%	1%	0%	2%
合計	10%	45%	37%	2%	94%

「女性」問15
将来人生話

2-10 [女性] 問34 子に忍耐力

	1	2	3	4	合計
1	4%	16%	10%	0%	30%
2	8%	26%	12%	0%	46%
3	3%	8%	3%	0%	14%
4	1%	2%	0%	0%	5%
合計	17%	52%	25%	1%	94%

「女性」問9
勉強の督促

2-11 [女性] 問25 腹立殴りたい

	1	2	3	4	合計
1	4%	23%	17%	4%	49%
2	1%	10%	17%	8%	36%
3	0%	1%	2%	0%	4%
4	0%	0%	0%	0%	1%
5	0%	1%	2%	1%	4%
合計	5%	36%	39%	14%	94%

「女性」問6
言葉の注意

2-12 [女性] 問26 気持ち分からね

	1	2	3	4	合計
1	3%	18%	23%	5%	49%
2	1%	11%	20%	4%	36%
3	0%	1%	2%	0%	4%
4	0%	0%	1%	0%	1%
5	0%	1%	3%	0%	4%
合計	4%	33%	48%	9%	94%

「女性」問6
言葉の注意

2-14 [女性] 問30 生活充実感

	1	2	3	4	合計
1	3%	2%	0%	0%	5%
2	10%	39%	3%	0%	51%
3	5%	23%	7%	0%	35%
4	0%	1%	1%	0%	2%
合計	17%	66%	11%	1%	94%

「女性」問35
しつけ自信

2-13 [女性] 問40 子ども悩み

「女性」問15
将来人生話

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	合計
1	0%	2%	0%	6%	7%	1%	2%	0%	0%	6%	0%	26%
2	2%	4%	0%	9%	14%	3%	3%	0%	0%	12%	2%	51%
3	1%	1%	0%	2%	4%	1%	1%	0%	0%	5%	1%	16%
4	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	0%	2%
合計	3%	7%	1%	18%	25%	6%	5%	1%	0%	24%	4%	94%

2-15 [女性] 問31 生きがいは

「女性」問35
しつけ自信

	1	2	3	4	5	6	7	合計
1	1%	2%	0%	0%	0%	1%	0%	5%
2	5%	31%	4%	1%	1%	4%	4%	51%
3	2%	21%	2%	1%	2%	2%	5%	35%
4	0%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	2%
合計	8%	55%	7%	2%	4%	7%	11%	94%

2-16 [男性] 問35 しつけ自信

「男性」問18
家庭の相談

	1	2	3	4	合計
1	2%	2%	1%	0%	5%
2	3%	19%	7%	0%	29%
3	2%	19%	17%	1%	39%
4	2%	5%	5%	2%	13%
合計	8%	45%	29%	4%	86%

2-17 [女性] 問36 しつけ甘い

「女性」問11
後始末注意

	1	2	3	4	合計
1	0%	17%	16%	6%	39%
2	2%	23%	15%	2%	41%
3	0%	1%	0%	0%	2%
4	1%	4%	3%	1%	9%
5	0%	2%	1%	0%	3%
合計	3%	47%	35%	9%	94%

2-18 [女性] 問37 世話する方

「女性」問48
しつけ学習

	1	2	3	4	合計
1	2%	5%	2%	0%	10%
2	4%	24%	13%	1%	43%
3	2%	14%	11%	1%	28%
4	2%	6%	5%	1%	14%
合計	10%	49%	32%	3%	94%

2-19 [女性] 問39 子から信頼

「女性」問46
親真似望む

	1	2	3	4	合計
1	1%	5%	0%	0%	6%
2	5%	26%	2%	0%	32%
3	3%	35%	5%	0%	44%
4	1%	7%	3%	0%	11%
合計	10%	73%	10%	0%	94%

2-20 [女性] 問48 しつけ学習

〔女性〕問33
子に積極性

	1	2	3	4	合計
1	2%	4%	2%	2%	10%
2	4%	23%	13%	6%	45%
3	3%	15%	13%	5%	37%
4	0%	1%	0%	1%	2%
合計	10%	43%	28%	14%	94%

3-1 [女性] 問32 子に自主性

〔女性〕問14
自分で判断

	1	2	3	4	合計
1	6%	17%	4%	0%	27%
2	7%	28%	14%	0%	50%
3	1%	9%	6%	0%	16%
4	0%	1%	1%	0%	2%
合計	15%	54%	24%	1%	94%

3-2 [女性] 問33 子に積極性

〔生徒〕問15
進んで取り組み

	1	2	3	4	合計
1	2%	7%	3%	0%	12%
2	6%	27%	18%	1%	52%
3	2%	10%	14%	1%	27%
4	0%	1%	1%	0%	3%
合計	10%	45%	37%	2%	94%

3-3 [女性] 問34 子に忍耐力

〔生徒〕問16
我慢しよう

	1	2	3	4	合計
1	7%	15%	6%	0%	28%
2	8%	31%	13%	1%	53%
3	1%	6%	5%	0%	12%
4	0%	1%	0%	0%	2%
合計	17%	52%	25%	1%	94%

3-4 [女性] 問39 子から信頼

〔生徒〕問38
家族を信頼(母)

	1	2	3	4	合計
1	6%	33%	3%	0%	42%
2	3%	31%	4%	0%	39%
3	0%	7%	2%	0%	10%
4	0%	2%	1%	0%	3%
合計	10%	73%	10%	1%	94%

3-7 [女性] 問12 テレビの話

〔生徒〕問34
テレビSP(母)

	1	2	3	4	合計
1	15%	10%	1%	0%	26%
2	15%	21%	3%	0%	39%
3	6%	12%	2%	0%	21%
4	2%	3%	2%	0%	8%
合計	39%	47%	7%	1%	94%

3-5 [女性] 問40 子ども悩み

〔生徒〕問24
悩みや困り

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	合計
1	0%	0%	0%	0%	1%	0%	0%	0%	0%	1%	0%	2%
2	0%	2%	0%	1%	2%	0%	0%	0%	0%	2%	0%	8%
3	0%	0%	0%	1%	1%	0%	0%	0%	0%	1%	0%	5%
4	0%	0%	0%	4%	4%	0%	0%	0%	0%	2%	0%	11%
5	1%	2%	0%	7%	10%	2%	2%	0%	0%	6%	1%	31%
6	0%	0%	0%	0%	1%	1%	0%	0%	0%	1%	0%	3%
7	0%	0%	0%	1%	1%	0%	1%	0%	0%	2%	1%	6%
8	0%	0%	0%	2%	2%	0%	1%	0%	0%	2%	1%	9%
9	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	2%
10	0%	2%	0%	2%	3%	1%	0%	0%	0%	7%	1%	17%
合計	3%	7%	1%	18%	25%	6%	5%	1%	0%	24%	4%	94%

3-6 [生徒] 問45 翌朝楽しみ

〔生徒〕問22
今親友いる

	1	2	3	4	5	合計
1	6%	28%	11%	5%	10%	60%
2	1%	9%	4%	3%	3%	19%
3	0%	4%	3%	1%	2%	10%
4	0%	3%	3%	2%	3%	11%
合計	7%	43%	21%	11%	17%	100%

3-8 [女性] 問16 学校生活話

〔生徒〕問36
学校生活(母)

	1	2	3	4	合計
1	15%	11%	1%	0%	26%
2	11%	22%	5%	0%	38%
3	3%	12%	4%	0%	20%
4	2%	5%	2%	1%	10%
合計	31%	50%	12%	1%	94%

3-9 [女性] 問15 将来人生話

〔生徒〕問35
将来や人生(母)

	1	2	3	4	合計
1	10%	9%	2%	0%	21%
2	11%	21%	5%	1%	38%
3	4%	13%	5%	1%	23%
4	2%	8%	3%	1%	13%
合計	26%	51%	15%	2%	94%

3-10 [女性] 問14 性指導や話

[生徒] 問50 性の話を(母)

	1	2	3	4	合計
1	1%	2%	0%	0%	3%
2	3%	7%	4%	1%	15%
3	2%	10%	10%	3%	25%
4	3%	17%	25%	7%	51%
合計	9%	36%	39%	10%	94%

3-11 [生徒] 問38 家族を信頼(母)

[女性] 問43 子と一緒に

	1	2	3	4	合計
1	13%	11%	2%	1%	28%
2	23%	21%	5%	1%	50%
3	6%	6%	2%	1%	15%
4	0%	0%	0%	0%	1%
合計	43%	39%	10%	3%	94%

3-12 [生徒] 問37 家族の表情(母)

[女性] 問35 しつけ自信

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計
1	2%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	5%
2	12%	18%	3%	2%	6%	0%	0%	2%	7%	51%
3	8%	9%	2%	2%	5%	0%	0%	2%	7%	35%
4	0%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	2%
合計	23%	28%	6%	5%	11%	0%	1%	4%	15%	94%

3-13 [生徒] 問40 親のイメージ(母)

[女性] 問6 言葉の注意

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	合計
1	10%	10%	5%	10%	1%	9%	2%	0%	2%	49%
2	7%	11%	4%	6%	1%	5%	1%	0%	1%	36%
3	0%	1%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	4%
4	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1%
5	1%	1%	0%	1%	0%	1%	0%	0%	0%	4%
合計	18%	23%	10%	17%	2%	16%	3%	1%	4%	94%

3-14 [生徒] 問48 家族は甘い(母)

[女性] 問11 後始末注意

	1	2	3	4	合計
1	2%	13%	17%	7%	39%
2	3%	18%	16%	5%	41%
3	0%	1%	1%	0%	2%
4	0%	4%	4%	1%	9%
5	0%	1%	1%	0%	3%
合計	6%	38%	38%	13%	94%

3-15 [生徒] 問49 叱責で家出(母)

[女性] 問26 気持ち分からぬ

	1	2	3	4	合計
1	1%	1%	1%	1%	4%
2	4%	7%	10%	12%	32%
3	4%	11%	14%	19%	48%
4	1%	2%	2%	4%	9%
合計	10%	21%	27%	36%	94%

3-16 [生徒] 問28 家庭に満足

〔女性〕 問18 家庭の相談		1	2	3	4	合計
	1	6%	6%	2%	0%	13%
	2	13%	24%	7%	3%	47%
	3	6%	17%	5%	2%	30%
	4	1%	2%	1%	0%	4%
	合計	26%	48%	15%	6%	94%

3-17 [生徒] 問13 不登校思う

〔女性〕 問7 服装の注意		1	2	3	4	合計
	1	1%	6%	9%	14%	30%
	2	1%	7%	12%	21%	41%
	3	0%	1%	1%	2%	3%
	4	0%	0%	1%	1%	2%
	5	0%	2%	6%	10%	19%
合計	3%	16%	28%	48%	94%	

3-18 [生徒] 問42 安心する場

〔女性〕 問27 ほめてやる		1	2	3	4	5	6	7	8	合計
	1	11%	5%	0%	0%	0%	1%	1%	0%	19%
	2	38%	13%	2%	0%	1%	3%	3%	1%	63%
	3	7%	2%	1%	0%	0%	0%	1%	0%	12%
	4	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
	合計	56%	21%	3%	0%	2%	4%	5%	2%	94%

3-19 [女性] 問32 子に自主性

〔生徒〕 問30 家の手伝い		1	2	3	4	合計
	1	4%	10%	4%	0%	18%
	2	8%	31%	14%	1%	53%
	3	2%	10%	4%	0%	17%
	4	1%	2%	1%	0%	3%
	5	0%	2%	1%	0%	4%
合計	15%	54%	24%	1%	94%	

3-20 [女性] 問33 子に積極性

〔生徒〕 問44 大人と挨拶		1	2	3	4	合計
	1	5%	18%	10%	1%	33%
	2	4%	18%	15%	1%	37%
	3	1%	7%	10%	1%	18%
	4	0%	2%	2%	0%	5%
	合計	10%	45%	37%	2%	94%

3-21 [女性] 問34 子に忍耐力

〔生徒〕 問27 勉強やる気		1	2	3	4	合計
	1	3%	6%	2%	0%	10%
	2	11%	31%	15%	0%	57%
	3	2%	13%	7%	1%	23%
	4	1%	2%	1%	0%	5%
	合計	17%	52%	25%	1%	94%

3-22 [女性] 問25 腹立殿りたい

〔生徒〕問5
勉強時間

	1	2	3	4	合計
1	1%	7%	8%	3%	19%
2	2%	10%	10%	4%	25%
3	0%	5%	6%	1%	13%
4	0%	4%	6%	2%	12%
5	0%	1%	2%	1%	4%
6	0%	2%	2%	1%	6%
7	0%	0%	1%	0%	2%
8	0%	0%	0%	0%	1%
9	1%	5%	4%	2%	12%
合計	5%	36%	39%	14%	94%

平成6年度
家庭教育充実事業報告書
平成7年3月発行

福岡県立社会教育総合センター
福岡県粕屋郡篠栗町大字金出3350-2
☎ (092) 947-3512 (事業課)
F A X (092) 947-8029